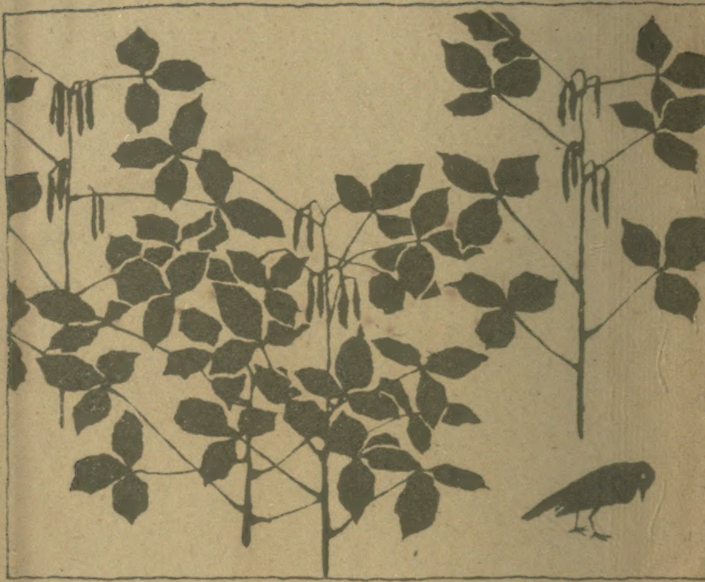




大正三年一月七日印刷
大正三年一月十日發行

有朋堂文庫
中江藤樹文集（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　野村宗十郎

印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

中江藤樹文集索引　終

り

レ

セ

サ

コ

中江藤樹文集索引

（主要の語句思想を採りて發音に依り五十音順に排列す）

藤樹先生書簡一卷。或人從浪華携來矣。元良小川子。得之示余。而余見之。浪華碩菴老人之所輯錄。而篇次不與吾黨之所傳之書同。間亦附己意所論許多也。故與二三之同志。相共繕寫。而備校考云。

元文四巳未年穐七月望日　　石河定源書

藤樹先生書簡雜著終

事也、大洲藩中に此の疑有りしなるべし

ちと—暫時は逗留すべしとの義

レ願外、無二他事一候。

三月五日

右は織部様へ懸二御目一可レ申間、私御暇の義申上旨趣を、具に小左殿への文に仕書附候へとの、小左殿御指圖に御座候故、此書にて小左殿へ渡し申候。定めて織部様へ御上げ候はんと存じ候。此趣御心得被レ成、治左殿と御談合なされ、其上様子能く相調申様に、隨分被レ入二御精一可レ被レ下候。此度の義に候間、偏に賴み存候。飛脚下し可レ申と小左殿へ談合申候へば、無用の由に御座候故、無二其儀一候。作右様より參候飛脚、其元にちと逗留仕筈に御座候由に候。何とぞ御才覺被レ成、此飛脚の使に、被二仰出一を承り候様に被レ成可レ被レ下候。

三月九日

四人迄—藤樹先生は實父歸農の爲に、祖父吉長に養はれて伊豫大洲藩に仕へられし也

かり言—僞りて致仕の口實を説く

はやとし罷寄、又は病者に御座候て、里の内をも自由にありき申事不罷成體に御座候。其上女の義に御座候へば、古郷をはなれ遠國へ參る事、たとへ飢え死仕候共、成り申間敷旨申候故、不及是非すて置罷歸り候。私義はやしなひ親共に、四人迄御座候へども、三人には幼少にてはなれ申し、今母一人殘り申候。母一人子一人の事に御座候。其上母存生の内も、今八九年の體に御座候條、御暇申請古郷へ罷歸り、母存命の間は如何樣のわざを成共仕りて養ひ申し、母相果候はゞ罷歸り、貴樣を賴存じ、めしかへされ被下候はゞ、御奉公仕度覺悟に御座候。此外聊存ずる子細も無御座候。私の義に御座候條、左樣には思召間敷候へ共、若右申上處當座のかり事にて、眞實は身上をもかせぎ可申望にて申上るかと、御推量被成事も御座らんと存じ、此中も度々申上如く、左樣の所存少々にても御座候はゞ、立所に天道の冥罰を被蒙、母に二度あひ申間敷候。か樣になげき申所、御聞屆被成候て、不便に思召候はゞ、能き樣に御つくろひ被成、かり言に言上仕るなどときこしめしあやまりの無御座候樣被仰上、御暇被下候樣に奉る

持循―從ひ守りて失はざる也

致仕―先生伊豫大洲を辭せらるゝ折の上書と見ゆ

を以て應事接物の準則となし、この適莫をすてては持循すべき所なしと思ひて、更に本然固有の天則ある事を知らず。故に聖人、始にその準則とするところ眞の準則にあらず、却つてこれ君子心上なき所の病痛なりと指點し、次に適莫の見をからずして、固有の天則照々として、往として道を去る所なく、入として自得せざる所なきの本體を掲出して、君子安心立命の實地を示したまふ。

乞二致仕一書

今度私御暇の義、言上被二成下一候へと奉レ願候について、傳左殿助右殿御同心被レ成、種々御異見の段、忝く奉レ存候。此中も如二申上一、一つには何れも如二御存知一、二三年以前より病者に被レ成候て、次第に人なみの御奉公相つとめがたき體、迷惑に奉レ存候。一つには古郷の母、十年以來ひとり住を仕り罷在候。私の外、別に母をはごくみ可レ申子も無二御座一、又はよすがに賴可レ存ほどの親類も無二御座一候故、四五年以前より、漸々飢寒に及ぶ體に御座候間、此地へつれこし可レ申と奉レ存、去々年御理り申上、むかひ參り候處に、も

血また活きて、本來の體に復り、痛ある事なくして快活安穩なり。されば心の體は、本おのづから四を絕てり。たゞ意必固我、一たび吾心の癰疽となりてより、長戚々の患出來て、大小となく親疎となく、百物萬事さはりて痛まざるはなし。若よく學びて時にこれを習ひ、聖門の神藥を用ひて治療したる時は、凡心の膿出、その瘡痕も留らずして、絕四の本體遂に復り、神氣ふたたび活潑流行す。さきの痛む所は今の快き所なり。中ごろの長戚々たるは、その初の坦蕩々となりぬ。心を盡さゞるべけんや。學者凡心の厭ふべく、本體を求むべき事を知るといへども、用功下手の實地を知らず。故に孔門の賢者、夫子の心體を擧げて凡心の病根を指點し、克己の實地を開示する事かくの如し。

長戚々―論語述而篇に、君子は坦として蕩々たり、小人は長に戚々たり

君子之於二天下一章主意。

義之與比は心の本然、人々の固有する所、所謂隨身の規矩なり。この規矩をよくたもつて失はざるを君子とす。惑うてこの規矩を失ふ者を小人とす。しかるに學者、往々たゞ力を先聖賢の形迹に用ひ、世間の萬事萬境に於て、あらかじめ適莫の見を定めて、これ

君子云々―論語里仁篇に出づ

欲界色界無色界を三界とす、是を超したる境涯を指す

絶四—意なく必なく固なく我なきをいふ、論語子罕篇に出でたる語

癰疽—悪しき腫物をいふ

ぶべき終もなし。生死は浮雲にて、これは太虚の常也。天地萬物一體の仁といひたるも、たゞ此心にぞあなる。されば道の要、學の則といふも他にはあらず。此心を認め得て之れを充し養ふにこそあれ。路の外にまた何を求めむ。

子絶〻四章主意。

凡心の惑、萬同じからずといへども、其根すべて此四の者にあり。四の者さへなければ、習も汚す事あたはず、名利酒食も溺らす事あたはず。故に百端千條、欲生じて止る事なきは、皆この根よりなりき。然るに四の者、おの〳〵その界をなすにあらず、畢竟たゞ一病なり。いはゆる意に始つて必に遂げ、固に留りて我になれば、我また意を生じて循環なし、心知凝滯して意必固我となるは、氣塞り血留つて癰疽となるが如し。人の體、本來快活にして病なき者なれども、もし癰發し疽生ずるときは、其うづき自らたへがたし。物すこし是にさはる事あれば、其はしる事又いかんともすべからず。こゝに於て針灸膏湯、その宜きに隨つて施し、膿汁潰出て瘡口尋で歛ることを得ぬれば、氣また行り

餼羊―生牲の羊をいふ、事に害なくんば虛禮も是とする義、論語八佾篇參照

切但―切怛の誤か

超出三界―

あらず。たゞかの懿德を好める誠、やむ事なき者の然るのみ。是卽良知の體、聖人の本、吾人安心立命の地、是をすてて更に工夫の本領なければ、僕が答ふべきにも、是をすてまた一言の出す所なし。たゞ吾丈の默識して、此實體に融會せん事をねがふのみ。和歌はわきてわが拙なきわざなれど、吟詠の中、もしくは提撕の一助ともなるべきかと、良知一貫のおもむきを腰折につゞりて、いさゝか切但の情をあらはすといふ。

先生中川氏に贈る所の歌、十八首あり。今とりて、これをあつめ序でて一文とする事、左のごとし。

われに昧からぬ心あり、明德といひ、良知ともよべり。これ赤子の誠にて、聖人の本也。たゞ此心に打任せて意なく必なければ、かゝる人は、順境も自在、逆境も自由にて、その樂み眞に樂し。其飮食に至りて美く、其男女は極めて和げり。天下の利その富に似たるものなく、天下の名その貴きに如くはなし。仙は不老不死といふ、これは吾が不老不死なり。佛は超出三界と說く、これは吾が超出三界也。これは生れたる始なければ、滅

り。かく惑へるが中に、中川子の僕を視るや、父を同じうするが如くにして、いはゆる連枝の本然なるものくらからず。僕つねにその愛敬の心に應ずる事のおろそかなるを愧ぢぬ。その心を乗るや篤實にして、重きを任へる力の強き事は、僕が如きの及ばざる所あれども、文才のおとりて、經意を見る事の僕にだにしかざるを以て、われを誤りて先學の友とす。是も又道を求むる心切なるによりて、たとへば空谷の足音なるべし。文王在さゞる世に興りて、習俗にひかれず、外議をおそれず、其志まことに豪傑なる哉。先覺の敬ひ、僕が安んぜざる所なれども、萬一中流の瓠ともなり、且は師友の餼羊ともなるべきかと思へば、しひて辭する事をもせずして、相長するの益を求めてき。其志專らなれば、神明の助あるにや、君のめぐみも他に異なり。よりて非常の暇を賜りて、またわが陋巷に來り、大學の道を講明すること三たび月を閲て、すでに鄕に歸りなんとす。別に臨みてかさねて工夫の本領を問ふ。余がいはく、路難おそれず長途いとはず、遠く來りて僕に同胞の愛あり。これ何の心ぞや。名にあらず利にあらず、また君父の命にも

とあり、兄弟相爭ふをいふ

空谷の足音—寂しき處に人の尋ね來りし喜をいふ、莊子徐無鬼篇に出づ

中流の瓠—鶡冠子に、中流に船を失へば一壺も千金とあるより來る、壺は瓠也

にの窒碍する所あらんや。故に學者の德に入り難きは、たゞ信の篤からざるなり。もし神舍裏面に一毫の攙雜あれば、すでに信にあらず。よく水止れば月現じ、心靜なれば道存す。間思雜慮石を投げ、邪念妄想堤を崩して、この本心の水を擾亂する事なかれ。その工夫は時に自ら定むるのみ。いはゆる存養は靜時の省察、省察は動時の存養、本體卽工夫、工夫卽本體なりき。

外に向つて戒め愼める人は、影をおそれて走るにこそあれ。されば十目の嚴他にあらずして、吾人裏面に照々たり。こゝを見ること分明ならば、聖賢戒愼愼獨の功、なんぞ勉强に入ることを患へんや。

送二中川子一

萬物同じく此大本より生じたれば、四海の人は悉皆連枝なり。然れども人の世に處るや、身あれば私なき事あたはずして、物の我と相形るゝを見るより、墻に鬩のまどひ忽に生じ、同胞の兄弟すら顚連して、路人にひとしきにも至れば、其他はいふべきにもあらざ

影をおそれて走る―莊子に見ゆ、徒に物の累する所と爲るをいふ

墻に鬩ぐ―詩經に、兄弟墻に鬩ぐ

銕を轉じて金となすー傳習錄に見ゆ、前人の語を活用する稱

萬劫ー佛家にいふ、劫を幾萬となく重ねたる義也

く放下しがたし。いはゆる銕を轉じて金となすの術也。學者深く思ひて早く辨ふべし。性に復るは鄕に歸るがごとし、久しく客となりて今歸らんとす。そのいまだ鄕里に至らざるうち、夢も覺もたゞ故鄕を念じ、勞すれば歸思をまし、難にあへばいよ／＼歸思をまして、一息猶存すれば、此心懈る事あたはず。百年の故鄕すらなほかくの如し。況んや道德は萬劫不壞の家山なるをや。

凡夫は名利を以て安心立命の地とすれば、事として名利の謀にあらざるはなし。されば名利の爲に身命を惜まざる事塵芥のごとし。たゞ此心を道にうつしぬれば、所謂眞志なり。其一たび立つときは、德に入ること難きにあらず。故に志立而學半といへり。むかし商丘開、信ずる所に非るを信じて、水を踏む溺れず、火を踏む焦れず。此事或は怪誕不經とし、或は寓言を以て印證するに足らずと。然れども達觀は事の有無に泥まず、たゞ理の是非を見るのみ。是をしるすもの、よく至信の神妙ある事を發明し得たり。彼さへかくの如し。況んや聖賢眞實の道を學び、吾人具足の性に復るに於て、四極八遠な

を窺ふとあるに出づ、見る所の小なるをいふ

膏粱―肥えたる肉と美しき穀と

顰に倣ふ。歌の道は、やつがれがまだ手習はぬ事なれば、そのさま觀るべきにはあらねど、此の道學べらん上には、唱ふるにたより有りおぼゆるに易くて、千が一の助ともなりなんやとて、相爲に謀るなるも、いはゆる愚者の慮にこそ。もし此意をすてたまはで、あるはかの筌の如く、その蹄にもなりなば、大いなる幸ならんといふ。

先生戸田子に贈る所の歌六首、幷說あり。其說すでに明備、また簡切なれば、其心を求るもの、此に於てみづから足り、歌あるをまたず。故に今歌を略し、說を存する事左の如し。

我に膏粱あり、味かたるべからず。我に文繡あり、美いふべからず。金銀あり、珠玉あり、其貴重世にたぐひなし。人の欲する所盡くありて、是を取るに禁めなく、これを用ひて竭せず、月あり花あり絲竹あり、興はつねに佳興、景はつねに勝景也。吾が樂土は澤野千里にして、水旱のうれへある事なし。何を苦しみてまた外に願はん。これ欲を以て欲根を拔き去るの對算、艾灸の病勢を治するが如し。この見底に徹せざれば、外欲全

對症の方—病に應じて藥を與ふるといふに同じ

區々—藤樹先生自から卑下して言はるゝ也

管見—莊子秋水篇に、管を用ゞ天

あはゞ、此時に當つて又かの省察克治の功を用ふべし。支撐に入れば提撕警覺してその躁妄を禁め、頑空にいればまた提撕警覺してその昏惰を止るのみ。かの善念能慮の如きは、卽ち良知本色の現るゝ所なれば、その起る起らざるに意をつけずして、自然の天機に隨ふべし。よく此義を體察し氣象を認ず、工夫受用を忘れずば、また何の二病かあらんや。

右兩條、今同志中對症の方也。豫州歸省の自忠に告げて、互にこれを切磋琢磨したまはん事、一體の志願ならんか。

送二戸田子一

戸田子道に志あるによりて、一體の意廣く通ひ、誤りて區々を以て先覺に比べなし、海陸の路難を憚ずしてこの陋巷を來り訪ふ。先學の訪僕が當るべき所にあらざるなれど、此友の逢ひがたきに、其情もまた切なれば、固陋かへりみるに不ㇾ及、遂に管見の一斑を語りて、相長ずるの益を求めぬ。別に臨んで功夫の本領を和歌に綴り、聊言を贈るの

將帥—孟子に、志は氣の帥

稼穡—種うるを稼とし、收むるを穡とす、農家の勤勞也

座にひとし、無事靜座の時にても、思慮ある時は省察克治の功、應接の時に異ならず。但其分數多少あるのみ。陽明夫子の、存養は靜座の省察、省察は動時の存養と言へるも、此惑を解かんとするにこそ。蓋此志を立て、良知を以て安心立命の地と定むれば、氣に將帥ありて、おのづからよく節制する故に、昏昧懶惰なく、亦躁進妄爲なかるべし。躁進なければ支撐の病生ずべからず。昏惰なければ頑空患を爲すべからざる也。然るに此志を立て、良知を以て安心立命の地と定むるは、徒にこれを守著するにはあらず。必ずこれに繼ぐに、物を格し知に致るを以て一心の主とすべし。たとへば農夫の稼穡を以て一心の主とするが如し。所謂必有事焉もの是のみ。格致を以て常々の事とすれば、心是によりて存し、性是によりて養はる。存養といへるも此格致にして、外に更に存養の功なし。常々如此存養すれば、良知の志漸く純一に向ひて、支撐頑空多きは寡きに至り、寡きは無きに至ること、おのづからその中にあり。然れども、愈るに難うして發るに易きものは病なり。故にすでに如此しても、若は靜座もしは應接の境、此二病いで來るに

命を捐てて心の徳を全うする義

支撐―支も撐も共に支ふるなり、障碍を謂ふ

頑空―頑然として何等の感覺をも起し來らざるもの、羅大經の語中に見ゆ

の功始めて實落あり。困勉變じて易簡和平となりぬ、豈心を盡さゞらんや。又曰く、初學の時は嚴密武毅の力を用ふといへども、時として墮落する事あるに免れ難し。こゝに於て必ず其の墮落を咎むべからず。たゞ每々提撕度々警覺して、成德の日至るを待つべし。また一默の正助の念を起すべからず。是卽初學の門、よろしく體察明辨受用すべし。

岡村子問うて曰く、應接の時、良知辨へ易く、省察克治の功手を下し難からず。無事靜座の時には、良知の本體認め難き故に、守らんとすれば支撐に入り、支撐を離れんとして、守らざればまた頑空に入て、着實下手の圖方なきは如何。

答て曰、これも又初學の通病、まことに切なる問なり。支撐は玄妙高遠を好み、氣象意味を認めて守る病也。頑空は本心の往いていまだ復らず、隱れていまだ見れず、知覺なく念慮なき時也。是いはゆる正助と忘との二病也。此病たゞ靜座思慮なき時の妨害をなすのみならず、應接の境に祟をなすも又此病魔なり。おほよそ應接有事の時と、無事靜座の時と、其工夫二樣なし。如何となれば、應接の境にても、思慮なき時は存養の功靜

瑟僴―詩經に、瑟たり僴たり赫たり喧たりとあるに出づ、大學に恂慄なりと釋せり

殺身成仁―論語衞靈公篇に出づ、

ある事は、顏子といへども能はざる所也。況んや其下なる者をや。よろしく反り求むべし。大學誠意の傳、瑟僴を以て切磋の眼目とし、中庸に人を百を以て換骨の靈方を示したまふ。これを農業に譬ふるに、困勉百倍の功は、耕耘培灌辛勞の時なり。時習の悅は所收の收實也。この功なくてこの悅を得る事ありと思はゞ、稼穡の艱みなくて秋實を得んとはかる也、惑へるにあらずや。然りといへども、世の勉強するもの、古來いくばくにして其の德を知るに至るは多からざりき。これは又徒に、立志克己の意氣格式なる者を爲りて、己が良知に本づくる事を知らざれば也。克己せざれば欲縱橫す。立志せざれば氣流蕩す。良知に本づかざれば、立志克己は妄意强制となる故に、勞して功なきのみ。是故に初學の士、先づ良知を以て定めて安心立命の地とすべくして、堅固の志を立て勇猛己に克つて、一毫も艱難苦勞の憚有るべからす。さて己に克つに當つては、身命といへどもまた顧惜する所にあらず。況んや其他の小利害をや。これ殺レ身成レ仁の義也。力を用ふること是の嚴密武毅にして、獨克去がたき人欲あらんや。人欲克ち易き時は、致知

燼に火の就く―焼木杭に火の附き易しといへる俗語也

杯水車薪―一杯水を以て一車薪の火を救ふとある孟子告子篇の語

迷惑節かたし。講義は師友臨時の所遇なれば、鍛錬磨礱いまだ底に徹せず。故に一場切磋の間、良知發見靈照燦爛する事を得れば、昏迷忽ち破れて無レ迹が如くなりといへども、根本深固の欲、實に一朝夕の能く淨く盡す所にはあらず。此根いまだ拔けざるに、かの久しく習染する所の者、相對するの境に在つて外誘したる時は、諺にいへる燼に火の就きやすき也。縁に牽かれ興に乘じて、心氣守を失へば、故態またあらはれて、終に其熟所に沈溺する事むべなり、あやしむに足らず。これ杯水車薪の尤けき也。おほよそ言語の癖あるさへ、よく心を用ひざれば其正しき所に歸り難し。況んや腹心に凝滯し、骨髓に伏藏したる者をや。いはゆる困勉百倍の功、玆を用ふること正に玆に在り。然るを吾人困勉の功を用ひずして、徒に時習の悅を希ひ、正助の利心を挾みて、進修を難事に憚り、さて得る事なければいへらく、氣質の濁駁なるが爲に文才の長ぜざるか、はた學術の眞に非るかと、妄に疑惑を生じ、その工夫の實、嚴密武毅ならざるによる事を顧みざれば、咎の己にあるをも辨へざる也。抑初學の困勉を用ひずして、頓に聖域に入るの日

間は粧飾せざる也

寧處―安然として靜居する事

他の云々―師友と交友切磋する時以外に個人として、思慮應接する時を謂ふ

てかあらん。人のかたちを受けながら、鳥となり獸ともなりなばいかに、いましめよやいましめよや。

贈岡村子

岡村子仕途に奔走して、寧處に遑あらずといへども、唯其志の篤きを以て、遠く吾が幽僻の地にきたりて、憤を發し講論する事、日もすでに累れり。その歸らんとするに及び、さきに議する所の梗概を擧げ序でて、これに贈ること左の如し。また居學の一助をねがふといふ。

岡村子問うて曰く、師に從ひ友に交りて、此道を講明するときは、觸發の心親切にして、邪妄全く放下するに似たり。他の應接の境に對しては、あるは名を見あるは利を見、我その道に搖ぎやすく奪はれやすくして、また良知に至り難きは何ぞや。

答へて曰く、これは徒に良知の觸發をたのみて、いまだ功を克己に用ひざる也。されば良知はもとより人々の有也。しかるに名利は吾人日常の熟する所にして、汚穢根ふかく

に出づ、健は強盛なり、順は從順也

物のとりやる－男女授受親から爲ざるの故禮を謂ふ也

むかし人云々－女は己を愛する者の爲に粧つくると謂へば、不在の

女は正しき道を以て夫に事へ、夫萬物を始むれば、妻はこれに從ひて子孫を生育すとぞ聞えし。一たびその夫に事へてよりは、我が身は夫なり、わが物にはあらず。されば夫の父母は我父母と同じ。いとほしく思へばつゝしみもありて、よく舅姑につかふるぞ、よく其夫につかふるにはあなる。おほよそ柔和なるが婦女の道なり。ましてその舅姑その夫に從順するをや。さらば又二つなしといふ事を知るべし、これ肝要なる處也。さはいへど外の事にもあらず、たゞ前に言ひたる一みち一つ心にてかはらざる也。さるから古き文に、男女の物のとりやる時は下に置きてわたし、あるは物にのせて渡すといひ、門を出る時は面をかくし、夜ありく時は火をともす、火なければ用ありてもありかずともいふ。むかし人は、夫餘所へゆき久しく留守する時などは、かほかたちつくる事なしとも見えたり。これらの事は、皆かの二つなき本性を養ひ、かつは人のうたがひをも免がるゝ道也。地は唯天に承けぬるが如くにて、妻の夫に從ひて二つなきは、その性素かくの如し。もしかくの如くならざれば、人にあらずとかや。人にあらずば如何なる者に

雜著

日用工程　貽二森村氏一

先止と中との二言を筌蹄とし、吾心の本體を愼思明辨し、常にこれを用ひて主人公とさだめ、無事の時は、この天則を以て意念の伏藏を搜尋退治して、鑑空衡平の體段にかへり、有事の時は、この天則を以て境にひかれて發見する意念を省察克治して、坦蕩々の體段にかへり、無事有事に意念を省察克治して、本體を存養し、常に中和にはなれざるを格致の要領とす。

止と中―止は至善に止まるなり、中は中庸の道を失はざる也

女訓

男女の道は天地の道なり。天は地の外を包み、地は天の中にあり。故に男の外を治むるは天に法る也、女の内に助くるは地に法る也。天の性は健にして萬物を始め、地の性は順にして、天の始むる所に承けて萬物を生育す。故に男女の和、男は義を以て妻を帥る、

天の性は健にして云々―此語易經

謂、意必固我皆意にて候。大學の意と論語の意と二義なし。誠は良知の本體、意必固我を格して良知の誠に復るを、誠意と申し候。王子の所謂、格物致知卽誠意の工夫、その文勢を觀るに、格知の外誠意の工夫なく候。此所明辨肝要に候。此書よく御讀み候て、其上にて中川子と議論被遊候はゞ、よく御合點まゐるべく候。

答中川貞良母

後生の事一大事におぼしめし候旨、御尤に候。後生一大事なれば、今生はなほ〳〵一大事にて御座候。いかんとなれば、今生の心迷ひぬれば、後生かならず惡趣に墮する理ある故にて候。佛の後生一大事と敎へたまふも、今生の心をあきらかにさせん爲にて御座候。大乘の法門は、皆この心得にて御座候。朝夕をはかりがたき浮世にて御座候へば、心の中の如來を拜したまはん事、何より以て大切なる事に御座候。御取入の書物の事心得存じ候。あとより下し可申候。其内善兵衞殿へも御尋ねなさるべく候。

王子云々—王陽明を指し謂へり、傳習錄參照

惡趣—惡業によりて趣くべき場所

大乘—大苦を滅し大利益を與ふる敎道也。小乘に對す

凡心にくらべては、安樂の位に候。

與₂熊澤子₁

淵子御下り候條申入候。今程途中可₂爲₂御異見₁と奉₂存候。此方何も息災に罷在候。仕途紛擾の中、御受用底如何。陰陽超脱の見を徹底し、中庸に離れざるやうに可₂被₂成事、第一義にて候。近日の議論、淵子可₂有₂御演說₁候。世事の變遷は、管城子勞すべき所にあらず候。頓首。

答₂清水十₁

御受用底放心すべきと、收斂不₂仕候に附止りがたきとの義、御尤に候。面上に申談じ候通、人外を願ふ意念を全く放下して、全體精神内に守り候はでは、工夫取入がたきものに候。朱子の所₂謂、不₂全放下₁終難₂湊泊₁も此意旨にて候。全く放下するも、事跡の上には知らず、一念入微の所に於て、意念を斷除するのみにて候。意念の精義不₂透徹₁よし、意念は心の倚るところ、天下の事に於て有₂適有₂莫、これを意と名づく。論語に所

仕途—當時熊澤蕃山備前侯に仕へたり故に言ふ

管城子—筆の異名、韓愈の毛穎傳に出づ

收斂—取り收めて放散する所無きを謂ふ

この心―良知

浮氣云々―心術の修養出來さうにて出來ず、心落着かざるを謂ふか

如くにて、何の工夫もいたづら事になるものにて候。喜怒哀樂未發の時、當下具定の良知を觀察して、この心を不ㇾ失樣に御受用なされ、さて應事接物の時、この心を失はんとせば、何のすくみ有つて如ㇾ此なるぞと、よく自反して、情欲の習染か氣質の偏かを尋ね究めて、その曲者をしたがへて、退治の工夫を勵み候へば、取入日々にはか行くものにて候。貴樣には、舊習の魔障深く相見え候まゝ、此魔をよく降伏可ㇾ被ㇾ成候。

答二淺野子一

心術取入御惑なされ候旨、御尤に候。さりながらなりさうに思召所、浮氣との義、御體認のたがひに候。いかんとなれば、本來固有の心に立復る事にて候へば、誰もなりやすき事は勿論の道にて候。惑を辨ふること底に徹し候はねば、本體呈露せざる故に、かたきやうに御覺え候。それは學問の功不ㇾ足故に候。苦のやみ候事、氣隨になされ候かとの義、これを御體認のあやまりに候。心はいままでに變り不ㇾ申候て、世間の利害得失等の道理、よく合點參り候へば、何となくつかへ苦しむ事なくなるものに候。此分にても

貴甫—今貴君といふに同じ

日月逝矣—論語陽貨篇に、日月逝けり、歳我と與ならず

至人—道を修めて至極せる人物の稱

と明らかならざるに因つて、受用底疎闊なるものにて候。今程權左在宅に候條、切々御會合なされ、習心意欲の端的をよく御明らめ、自己心上に就いて體察なされ、天性の本體を御見附被成候事、工夫の先務に候。如仰、健なる人も明日を期せざる世の習、まして拙夫貴甫などの如く、病惱身にせまるものは、須臾も獨樂を求むる工夫を急ぐべき事に候。御體認(一)功力よく聞え申し候。古人の言に、良知は生前隨身の規矩、死後隨身の資糧といへば、日月逝矣の戒めを以て觀、又生順死安のすゝめを以て觀て、片時も早く良知に至りたき事にて候。隨分御精入らるべく候。大學中庸論語の抄など御覽、御講論候はゞ、大意御合點參るべく候。如仰、面上にて遂心話申度候。御志だに切に候はゞ、時節も可有之か。至人は、金石のうちさへ往來さはりなしといふ。況んや人間をや。

答山田子

心術の御取入、はか不參候由、御尤に存じ候。兎角本體を見つけ候はでは、空鐺を烹る

日新—大學に、湯の盤銘を擧げて、苟も日に新にせば日々に新にして又日に新ならんと謂へり

憤—論語に、憤せざれば啓せずとあるに依る、憤を發して學を力むる也

舊習に御ひかれがちにて候由、如レ仰道を見る事の親切ならざる故にて候。風俗を氣の毒に思召候由、入らざる御指出事に候。氣の毒に思しめす風俗と一體なるもの、御心に伏藏して御座候につき、左樣の外による意あらはれ申し候。風俗の汚を御いとひ候はんより、心上の汚を御厭ひ候はゞ、愼獨の力出來可レ申、日新の功可レ有二御座一候。

何某の事御目論候由、御尤に存じ候。是は銀のたゝりにては有るまじく候。銀を求め過たるたゝりにて候はんか。

與二吉田子一

御志厚く罷成候由、感じ入申候。隨分御勵み可レ被レ成候。御氣色も大かたに候はゞ、御憤次第少し御上り可レ被レ成候。此生難レ得、此道難レ聞。二難の時節、可二默止一は沙汰の限に候。御憤だに深く候はゞ、御上り候御才覺は成り可レ申候。

與二吉田新一

御受用底不親切の旨、御尤に候。吾人種々の習心適莫に拘攣せらるゝ故、本體を見るこ

雲行雨施―澤を萬物に施して順を得る也

奈良茶―奈良茶粥の略なるべし、かてを加へたる茶粥

候。若こゝにて墮落なされ候はゞ、萬境皆墮落のみにて御座候はん。まづ手の下しやすき所にて、御受用御勵可ㇾ被ㇾ成候。

當地にての安樂、其元にて御座候や、境界の安樂は俗樂にて御座候。君子安樂の本體は、吾人方寸の內にある、常住不變のものにて御座候。雲行雨施雷電震動の時も、白日青天は少しも變る所は無㆓御座㆒候。人々の心裏の白日青天、安樂の本體にて候へば、いづれの境界にて喜怒哀樂する時も、中庸の本體は變りなきものにて候。此所よく御體認候はば、幸甚々々。

答㆓淵宗誠㆒　或作㆓淵源㆒

奈良茶の味、よく御のみこみ被ㇾ成候旨、左候はゞ、心法の理味もなく御のみこみ被ㇾ成候はんと、珍重に存じ候。かく申すは、たゞ一笑になるべきのみにも有るまじく候。何につけても第一等の事をと願ふにて候。

答㆓清水季格㆒　一作㆓清水子㆒

つかへ—奉仕也、父に事ふる上に支障生じ來ると也

瞽瞍—舜の父頑にして舜を殺さんとせり

へば、滿腔子皆惻隱の心にて候。是を存せん失ふまじと念を起して、此本體を主人公と定めんと工夫なされ候へば、其の一念はや意必の病と可レ成候。此所は至つて心得やすき事にて候へども、舊習の葛藤剪はらひ盡さゞる所は、百倍の功を勉めざれは、取入難レ成御座候。可レ被レ入二御精一候。

御親父樣に御つかへなされ候刻、つかへさかだち申す旨、此妄心は是非の素定、好惡の執滯によつて、親の非を見つけ候所より發する病痛にて候。此病根をよく見附け、本來是とする所なく、好む所なく惡む所なく、眞是眞非眞好眞惡は、臨時感應の心に有る事をよく辨へ、此劍にて彼曲者の根を御切捨可レ有候。孝悌論に、大舜視二瞽瞍一便是至神至聖至仁至慈的、といへる理味を、よく御のみこみ可レ被レ成候。瞽瞍は子を殺さんとする程の人なれば、萬聞えぬ事のみ可レ有候へ共、大舜は之を咎めこれを諫めたまふ事露もなく、唯ひたすらに自已心上の至極を明らかにしたまふのみ。これすなはち學術、所謂自反愼獨にて御座候。如レ仰親につかふる時節、自反愼獨の功、手のくだしやすき所にて

かりと

葛藤―入り纏れたる事情たゞ錯亂せる葛に喩へり

保養專一に存じ候。內經所謂、恬澹虛無。眞氣從之。精神內守。病安從來。飮食有節。起居有常。不妄作勞。これ保養の本領、卽大學の格物致知の工夫にて御座候。性命合一の處、よく御體認御受用所希候。

心法の御取入難成御座候旨、舊習の葛藤きびしくはびこりまとはり申す故にて御座候。當夏當地にて切瑳琢磨の功淺く、葛藤を剪はらふ鎌の刄、すきと御磨ぎたてなく候まゝ、左樣に御座候はんと、此比も御噂申出候ひき。存養の法よく合點だに參り候はゞ、本來固有の主人公につかへ申すことに候へば、易簡明白なるものにて御座候。或は頑空に入、或は格による病のみにて御暮被成候旨、存養せんと思召念をおこし、その念上にて支撑なされ候故に、御忘なき內は格により、御忘の時は頑空に入るやうに御覺え候事にて候。識仁篇に、必有事焉而正心。勿忘。勿助長。未嘗致纖毫之力。此其存之之道。若存得便合有得、の一段、よく御翫味可被成候。現在當下の心欲に不動、物に不滯、慈愛恭敬、温々惺々、坦蕩々なる心、良知の本體にて候。此本體をその儘存養なされ候

精を御もらし—精氣を洩出せしむる也

透と—すつ

おこり、とく對算見解して、體認の思案に御かへ可レ被レ成候。

一外物に奪はれやすきは、物に接はらざる前、既に心上に於て外物に適莫するの意、必ず伏藏して御座候故、物來るとそのまゝ彼すくみ發見して、物を逐げ申候。物に接りて後奪はれなさるゝと御覺え候は、疎略なる御心得にて御座候。兎角辨惑のあさき故にて御座候。

なほ〳〵、色念除きがたきとの御事、少年の通病にて御座候。不邪の色にて精を御もらしなされ候はゞ、自らのぞきやすく可レ有二御座一候。不婬戒のごとく御愼みなされ候はゞ、念やみがたく可レ有二御座一候。たゞ邪味を不レ含、邪色に交らざるを飮食男女の戒とす。精微の理よく御體察可レ被レ成候。萬事習染の是非にまよふものにて御座候。

答二中西常憐一　一作二中西子一

御病氣再發、今程透と御快氣の旨、何より以て珍重に候。不レ及レ申候へども、寒中の御

客慮—善を以て心の主人とすれば、意念は時々是に過る客の如きのみと

心の官—官は司掌する所を指す、心の司る役目

答二一尾一

善に難レ遷、悪に墮落なされやすき旨、是は意念の自欺故にて候。良知寂然不動の眞を御體認なされ、存養被レ遊候はゞ、其病痛自ら除き可レ申候。いかんとなれば、良知卽善にて、良知に至れば善常に心の主たり。意念は時々往來の客慮なる故にて候。事の上にて善惡を御定め被レ成、その適莫のすゝみより御體察なされ候故、善には難レ遷、惡には牽かれやすきと思召かと令レ察候。良知を善の本體として、良知そむくを惡の本色とする精義を、よく御辨可レ被レ成候。且又外に願ふ利害毀譽の感を、明に御辨へ被レ成候工夫專一に御座候。此惑を不レ辨うちは、意念の自欺禁止なりがたきものに御座候。

一靜座の中の意念と被レ仰候は、定めて間思雜慮の事にて御座候はん。靜座中念慮なきやうにと工夫なされ候はゞ、大なる御心得そこなひにて御座候。心の官は思ふ、思ふは聖功の本にて御座候へば、思を絶つことはならざるものにて御座候。たゞ思慮に凝滯するを意念とし、外の願を得んと思案する念慮をきらひ申し候。靜座の中に間思雜慮

格法典要―儀式作法などに拘泥するを謂へり、

未能尊顔候所、貴簡辱く拝見、別て不淺奉存候。御志の程承屆、驚入奉存候。尋常の御工夫切實に御座候段、寔に拙者など耻入奉存候。愈滲漏間斷無御座候樣に御勵、御尤に奉存候。道の本體は太虚に充塞いたし候へども、執るところの把柄は方寸隱微の上に御座候故に、こゝに於て物を格し知に至り候を、道を行ふと申し候。かりそめにも格法典要に心を御著被成間敷候。たがひに同體の道に志御座候上は、太古以來の舊相識にて御座候へば、毛頭無御隔心、御疑ども可被仰聞候。あはれ以書面遂心話、得交修之益申度奉存候。猶追々以愚札可得尊意候。

猶以、初學の習にて、堯舜の御代を願ふものにて御座候。達者より見れば、堯舜の御代には學術なくても有るべし。末代昏く迷へる世に、學術なくては叶はざる御事に候。如何となれば、堯舜の御代はおし日和の如し、楫なくても有るべし。末代は風波あらきはしり日和の如し、楫なくては舟安かるべけんや。吾丈如何とか心得たまふ。

働き也

中—中庸に、喜怒哀樂の未だ發せざる之を中と謂ふ

の本體にあらず、故に端とす。怵惕惻隱の發動は、純一無雜の心に本づく。純一無雜の心、仁の本體なり。有事の時念慮擾亂して工夫なりがたければ、無事の時體驗したるがよろしく候。中庸に喜怒哀樂未レ發謂二之中一一句、無事の時に知止に工程を指點す。無事にして喜怒哀樂未レ發時、種々の習心、種々の嗜好、種々の見解等を放下して、心源を澄まし觀察する時、純一無雜神明照々として、毫髮も倚所なきを中と名づく。此中呈露の時、萬物一體にして物我隔なし、これを止の本體とす。無事の時は中庸の工程により、有時の時は大學の工程により、工夫間斷なければ、必止を知るものなり。既に止を知る時は、一念獨知を愼み、かりそめにも此止を離れざるやうに力を勵ますを、愼獨誠意の工夫とす。一念獨知の內、止の神常に照々たり。大抵工程如レ此。しかれども俄に合點まゐりがたき物に候。其上は面談ならでは詳に心を盡しがたく候。さりながら、此小簡をよく熟讀被レ成候て、疑敷所は可レ預二再問一候。

答二一尾一　一作二一尾子一、下同

傳文―大學文のなり、書經康誥に本文あり

怵惕惻隱―恐れ憂ひ悲み傷む心の

ば、枯木死灰の如くおもひなし、事有りて感通するには、氣機の發動を認めて、明德の本體にも動く時ありと思へる惑ひ、學者の通病なり。明德喜事に感通するときは、陽氣動いて昇るによつて、其色うるはしく其聲おだやかに、其威儀のどやかなり。明德哀事に感通する時は、陰氣動いてくだるに因て、その色いたみ其の聲なやみ、其威儀せまれり。其餘の七情も亦皆如ㇾ此。形氣の發動は、明德の感通に本づくといへども、明德の本體は、少も動く所なく變る所なく、寂然不動にして神明照々たり、これを止の本體とす。無事の時には認誤り有りやすきに因て、大學に親民の心に就いて至善を指點す。傳文に如ㇾ保ニ赤子ニの一節、專ら此意を發明す。赤子を保んずる時の心をよく體認して、氣機の發動を認めず。本體の感通する所を見れば、純一無雜なり。心純一無雜なるときは、本體呈露してよく愛す。純一無雜卽ち寂然不動なり、毫髮も雜る所あれば卽動なり、寂然不動にあらず。此純一無雜の心をよく見覺るを知止とす。孟子入ㇾ井赤子を見て怵惕惻隱す。惻隱は仁之端なりと示したまひたるも此意なり。怵惕惻隱は無機の發動なり、仁

語に據れり

法語―佛教にて佛僧の語錄

天下の故―故は事なり、天下萬般の事由也

蒙疑問候。

答中村兵

知止の功、無圖方思召候旨、御尤に候。此事簡易明白に候へ共、習の弊にて明らめがたきにて候。又右方へ御下し候法語の類にては、中々取入有之事にては無御座候。用力下手の實地あらまし書附遣し候。よく御合點御體認候はゞ、可爲幸甚候。知止の功、或は無事の時、或は應事接物の時、無油斷體認觀察親切に候へば、惑の淺深に因りて遲速ありといへ共、工夫よく積りぬれば、必開悟の時節有之ものにて候。先づ志をかたく立定め、効を急がざるを工夫の第一義とす。さて意必固我の惑をよく辨へ、その根を斬り除ざれば、體認の功力弱きものにて候。夫明德の德たる、寂然不動にして、能く天下の故に通ず。無事の時は神明の德具つて寂然不動なり。有事の時も神明の德通じて寂然不動なり。有事の時も無事の時も、寂然不動の本體少しも變る所なきこと、譬へば鏡の照す時と不照時と、靈明の本位變りなきが如し。然るを無事の時寂然不動なりといへ

孟子公孫丑上篇を參照すべし

困勉ー困しんで之を學ぶとある論

に克ち去り放心を收めて、全體の精神、仁義性命の上に在るをいへり。大學に所レ謂、知レ止止二於至善一の工夫これなり。心存する時は仁自ら到るものなれば、在心は卽ち性を養ふの工夫なり。存心の外、別に養性の工夫あるにあらず。志篤からず、應接の時、省察克治嚴密武毅ならず、靜座の時不快昏懶なるは、皆放心のたゝりにて候。初學の時、此理を明かに辨へざれば、存心の功を嚴密に用ふる事なくして、効を求むる意深し。故に守る時は支撐に入り、支撐を除かんとすれば頑空に入るものにて候。只ひたすらに志をはげみ、篤く信じて自欺の意念を禁止して、其獨を愼み、毛頭効を求むべからず。功積み時到れば、安而能慮、坦蕩々にして、支撐頑空の病おのづから無きものにて候。吾人の効を求むるは、利心の面をかへたる病痛にて候。時習の悅び本體の樂ある事を聞いては、唯安樂の名に泥み、困勉の功をいとひ、悠々と日を送り候事、今程同志中の無病に候。初學の時困勉の功なくしては、堂に升り室に入る日有るべからず。陽明の、聖人にも困勉ありといへるは、此弊をすくはんとにこそ。右の趣能々御體認被レ成、重て可

胸をこがし—懊惱煩悶するを謂ふ

中—偏倚する處なき、所謂中庸の中也

存心養性—

一産業悪敷故と、これも體認のあやまりにて候。産業は境界なり、一切の境はたとへば燧なり。我心石の如くかたくすくみて角ある故に。火出で胸をこがし候。我心綿の如くやはらかに、水のごとくすくみなく候へば、天下一の燧にあたりても、火出で不レ申候。境界に順逆ありといへども碍なき事、これにて御體認被レ成、境界を咎めずたゞ心をとがめ、自反の眞水にて、邪火を御消可レ被レ成候。

一氣質故と、これ最誤にて候。氣質の偏は、中に不レ合ところありといへども、眞樂の障にはならざるものにて候。只習のたゝりにて、まどひも辨へがたく境にも移さるゝにて候。習魔を降伏する工夫は、面上に〱。

與二中村子一　一作二岩田八一

中西氏への疑問、承り屆け候。氣象に念を差候へば、支撐に入り本體を離るゝといへる工程、難二心得一との義、存養の功手に不レ入時は、この疑難レ免ものに候。存養の二字は、孟子存心養性の言を用ひ、心性の二字を略したるものに候。心を存するとは、萬欲

此等くはしく察していたく治すべし。然らざれは明徳を明にせんと欲するとも能はじ。吾人は本樂しき者なり。其苦は皆此病のなす所のみ。故に凝氷焦火の苦患に免れ、心廣體胖の安樂を受くるは、其實まさしく察して治するに、學者よく〳〵體察すべし。

答二早藤子一

心法の把柄手に入りがたき由、病根の御吟味、何も御心得そこなひにて候。左樣に御心得の惑ひ御座候故、病の根切がなりがたきとか可レ被二思召一候。良知くらみやすきは、凡人の惑を辨ふる事底に徹せざる故に候。まどひを辨ふる事底に徹するは、師に從ひ友に交り、講論して切磋琢磨するより外はなく候。

一文字なき故との御疑、御尤に御座候。師友に相隨ひ、惑だに辨へ候得ば、文字なくても不レ苦候。孔門以前の學者、皆文字すくなくて、堂にのぼり室に入る方其數を知らず。秦漢以後の學者、文字ひろしといへども、惑を辨ふること淺ければ、凡夫に劣れる方その數を知らず。これにて文字なき故との惑ひ、よく御辨可レ有レ之候。

切磋琢磨—詩に、切るが如く磋くが如く琢つが如く磨くが如し

堂に升り室に入る—論語先進篇に見ゆ

工夫日に新なるを謂ふ意必—意は私意なり、必は必ず是意を遂げんとする也、後に出せる孤琴論を參照すべし

心術病痛の御書附、得二其意一申候。意念の凝滯御座候故、令レ發る時は、意必事を用ひて支撐に入り候て、不レ發時に意必用ふる所なければ、又頑空に入る。皆初學の通病に候。見解對算を以て心地を廓清し、適莫意必の根を截斷仕り候へば、本體呈露、格致の功手を下しやすく御座候。

答二森村長一

まづ世間の相を看破して、一向に心上の工夫に眼を御著可レ被レ成候。さて境に對し事に遇うて、此心の亂れざる樣に可レ被レ成候。亂れざるは定るにて候。さて其の定りたる心にて、義理を思慮可レ被レ成候。是が格物致知の要旨にて、知定靜安慮得の微意精義にて候。よく識得可レ被レ成候。たゞし事の上にて工夫不レ被レ成候て、一命發動する處にて體察可レ被レ成候。

明德をくらくするは五病。

習心、好惡の執滯、是非の素定、名利の欲、形氣の便。

たり

丁銀―慶長年間に鑄造せる銀貨、板或は棒形にて一枚四十二匁の重量あり

火候―火加減といふに同じ

日新―大學に出でたり、修爲の

ば丁銀の内に銅鉛の渾雜して、その色をあらはさゞるが如し。境に對せざる時は、その渾雜する物、伏藏して見えざるのみ、無レ之にはあらず。されば此伏藏渾雜するもの、十分に淨く盡ざるうちは、本心の正眞とも難レ申候。然れども、此心を以て工夫の種と致し候はでは、空鐺を烹るの誤なる故に、まづこの心を認めて主とし、さて鍛錬の火候を能く心得、視聽言動、行住坐臥、茶裏飯裏、應事接物の時に習ひ、氣習情欲の銅鉛を吹きぬきたるが能く候。この工夫すなはち自反愼獨にて候。

答二森村子一

工夫間斷多く、御取入成兼申す旨、間斷は初學の習にて候へば、不レ苦候。唯實體の見附なきが、學問の病にて御座候。先書にも申す通に候如く、現在の心欲に不レ動、物に不レ滯時、愛敬底なる心を主人公と御定め、常に不レ失樣に可レ被レ成候。此工夫のまはしだによく御心得候はゞ、自ら日新の功可レ有二御座一候。兎角面上に可二申承一候。

答二森村小一

をよく蒔き候へば、書を讀む同志の講論は不ㇾ及ㇾ申、世俗にまじはるにも、皆修理となり糞となり、日々に新になるものにて候。よく御體認候はゞ幸甚々々。

與₂横山子₁

其許令₂炎燒₁候に附、源太殿家も類火に燒申す旨、驚入申候。誠に笑止千萬無₂申計₁候。乍ㇾ去、これに因つて本心を御取失ひ不ㇾ被ㇾ成樣に御用心、尤に候。若心動き候て、明德の障になり申し候はゞ、盜人におひとやらんにて候。

答₂森村子₁

心法の取入難ㇾ成候由、定めて外心に性を求むるまよひにて候はんと存じ候。吾人現在の心欲に不ㇾ動、物に不ㇾ滯時に、溫和慈愛底、恭敬惺々底なる心、卽ち本心の實體に候。此の性を見附て愼み守り、視聽言動、行往座臥、應事接物、一切の境に對して取失はず、主人公とあがめしたがふを、忠信を主とすると申し候。吾人現在如ㇾ此の心、本心の實體にて候得ども、初學の時は、此心の內に習と邪欲と、氣の濁駁渾雜して御座候。たとへ

盜人云々―盜人に追錢取らるゝといふ俗語を指せり

忠信を主とす―論語學而篇に見え

戰と御覺り候かと推量申候。この寓居の者は、貴賤ともに羇旅のあだものにて候間、盡く御追出し候て、辻堂にたとへたる方寸の内に、光明赫奕たる本尊ましまし候間、それを御さがし候て、此堂の主と御定め候はゞ、何れのものも近附申間敷候。此本尊無上の威力まします故にて候。

答二田邊一

御持病また指發申せし由、如レ仰氣のなやみより起りたる御煩にて候。湯藥ばかりにて驗氣御座有間敷候間、自反愼獨を御勵み候て、七情の滯を消化被レ成候事、第一の療治にて御座候。心術の取入は、難きやうにてやすきものにて御座候。譬ば耕作の如し。種をまき候はでは、修理も糞もみなあだ事に成申候。心術の取入も、まづ種を求めて蒔き候はでは、何の工夫も皆あだ事と罷成候て、終に徳に入事不レ能ものにて候。其種のまきやうは、現在の心欲に不レ動、物に不レ滯時に、溫和慈愛底、恭敬惺々底なる所、工夫の種にて候。此種をいつも不レ失樣に工夫可レ被レ成候。是心術の蒔やうにて候。如レ此種

七情―喜怒哀樂愛惡欲の七つを謂ふ

し可ㇾ申候。これにて又愼思明辨可ㇾ被ㇾ成候。帋餘戸田子御語被ㇾ成候はんと、不備頓首。

答二田邊子一

心法の取入難ㇾ成、善惡の合戰のみにて御暮し候由、善惡の實體を御辨なく、事上に跡をとめて、善惡を御定め候あやまりにて可ㇾ有ㇾ之候。善惡の實體は心の上に有ㇾ之、事跡にあらず。一念良知に至るを善とし、一念道にはなるゝを惡とす。しかる時は、善惡の合戰可ㇾ有理なし。如何となれば、一念良知にいたるときは、滿腔子皆善なれば、敵對すべき惡なし。一念道をはなるゝときは、腔子裏皆鬼窟となつて、退治の主人權を失つて、征伐のいきほひなし。これにて善惡の合戰の覺あやまりなる事を御辨可ㇾ有候。學術をしらず、主人公の守なき方寸を、辻堂にたとへ申し候。辻堂は主人なき故に、ある時は貴人高位も腰を掛たまひ、或時は乞食非人もねおきの宿とし、又或時は狐狸蛇蝎の栖ともなる。その如く、主人なき方寸には、往來寓居の者は、貴賤所を爭ふを、善惡の合

帋餘云々—帋は紙也、此手紙戸田氏へ托送せられしと見えたり

滿腔子—腔は骨體なり、全身といふに同じ

方寸—心を謂ふ、列子通鑑等に見えたり

圭復―くりかへし見る事　論語に孔子三復白圭
はか―抄なり
正の病―未詳

答二佃叔一

委曲なる貴札、圭復不レ斜候。戸田子御尋にて申承り候、御志厚く相見え候。其上御逗留中觸發も多く相見え、大幸不レ過レ之候。公用難レ去とて、存じ候より少し早く御歸、御殘多く存ずる事に候。

一御受用底はか不レ參との御とがめ、初學の通病と申ながら、沙汰の限に候。如何となれば、そのとがめは速なるを求むる意念、孟子のいましめらるゝ正の病にて御座候。立志の發明を能く御體認、戸田子と講論被レ遊、此まどひ御解可レ被レ成候。母上への事、圭角いまだ御座候旨、これ又惑の解ざるたゝりにて御座候。孝を忘れて孝至ると申す心を、よく體察可レ被レ遊候。俗に交りて物我のたゝり御座候は、一體の仁をしかと御見附なき故に候。何れも御受用底の病痛、今度戸田子被レ遣候送行の歌、又太良右殿被レ遣候掛物の意味を、よく御かみ覺え講論被レ遊、其上にて可レ被二仰越一候。兎角學術の合點底に不レ徹たゝりに候。大學中庸の抄、當年中に仕立可レ申と存じ候。出來次第下

して靜かならざる義
孔子云々—論語述而篇に、君子は坦に蕩々とあるを指す
楊貴妃—唐玄宗の寵妃

ば、苦痛はなはだしきものなれば、これを樂苦と名づけて樂にて苦なり。愛敬中和に心を止めて離れざれば、順境に無事はもとより樂み逆境鬧熱にも又樂むものにて候故に、君子は坦蕩々と孔子も發明し給ふ。人間に樂をこのまぬものは無ニ御座一候へ共、眞樂の端的を不レ知故に求むる事能はず。この心をよく辨へ、善心はたのしみ惡念は苦しむと御體認候はゞ、邪念おのづからおさへよく御座候はん。

一色念邪なるは、後日の禍害をよく分別して考へ見レば、その禍害を恐るゝ心忍字の刃となりて、切りすてやすく候。よく其御心得可レ被レ成候。楊貴妃なりとも、うしろに拔刀を構へたらんには、色欲の火消え、身はひえきり可レ申候。能々御體認可レ被レ成候。惣じて心の病は自己を欺くに起り、自欺は獨を不レ愼故也。自反にて浮躁の心氣をしづめ、愛敬中和の獨をよく見附て、愼のはなれざるやうに工夫仕り候へば、何の病もおのづからなほるものにて候。能々御體認被レ成候て、御不審ども候はゞ、春永に可レ被ニ仰越一候。隨分こまかに書附可レ遣候。

校讎—原本と照合して考へ調ぶる事

書藤樹先生書簡雜著端

一此編諸家の本往々同異あり、得失あり。甚しうして讀むべからざるに至る者も、亦之あり。その章は、皆又いまだ次序を成すに及ばず。吾が同志加藤氏等、一善本を得て主とし、さるに五家の藏むる所を以て參互考證し、誤る者はこれを除き、正しき者はこれを收めて、篇章の如きも、又各その類を以て從へり。その力を用ふること勤めたりといふべし。或人速にこれを梓に壽せん事を欲す。或人はその詭謬の猶在るあらんと恐る。余が曰く、然り。大意既に明かならば、餘は必しも問はじ。校讎此に止るも亦可なり。然りといへども、その行文のいまだ順ならず、措辭のいまだ安からざるに似たる者、千百けだし其一二を見る事あり。唐人の詩に、復恐忽々說不レ盡。行人臨レ發又開レ封といひ、又衰遲偏喜レ添二詩學一。更把二前題一改二數聯一といふ。事の一時に出づるは、其或は如レ是なるも亦宜ならずや。是に於て愚衷を伸べ鶩才を致し、敢てこれが

跋

召伯之棠。民猶愛之。孔子之杏。世共寶之。慕德之馨也。先生之集雖質。然其言無不本名教者。則起人之益。何啻棠之與杏。余欽先生之德久矣。今聞此集之上刻。不勝歡喜。謹跋數言。

橘春暉

學を助くる所以なるを謂ふ
一隅云々―論語に、一隅を擧げて三隅を以て反せざれは卽ち復せず

語上。或擧一隅。以待其反。或憤悱而后啓發之。或進之。或退之。或如時雨化之。或成德。或達財。或答問而數之。如灌漑。萠芽拱把合抱。各隨其分。答之如鐘聲音之大小。必隨其扣。育之如水潤物。遲速由物。而不至於浹洽不已。約之。在本于無言之宗。而不失人。亦不失言。格物致知。教學相長。以與致中和。天地位焉。萬物育焉而已矣。原有志。未能得其萬一。夙夜念茲在茲。子亦勉旃。欽哉。

潮園先生　閣

藤樹先生遺稿終

筌蹄—筌は魚を捕ふるに用ふる具、蹄は獸鳥を捕ふるに用ゆる器

溫故知新—論語爲政篇の語

斆學半—書の說命に出づ、人に敎ふるも亦我

所以明德。而非有兩般之功。以自收放心。而謂之自反。以立大本。謂之愼獨。必毋以條分而入支離也。是故。自反而克己。以獨字之義爲筌蹄。而可求仁矣。克己。則可以入德矣。得此意。則以自反愼獨爲事。而不可須臾忘也。所謂。必有事焉。勿正心。勿忘。勿助長也。此之謂也。是以。未見獨。則將愼以見獨爲事。已見獨。則以愼獨爲事。夫然。故貌言視聽思必於是。接物應事必於是。貧富貴賤必於是。禍福利害必於是。死生壽夭必於是。毀譽得喪必於是。造次必於是。顚沛必於是。故曰。無往而非學焉。無入而不自得焉。

送熊澤子序。

不佞。雖非溫故知新者。一二三同志。誤推以爲句讀之師。不得已。而竊依惟斆學半。念終始典于學之法言。而常恐或有誤後學。若蹈虎尾渉于春氷。熊澤子亦有此招。今將趣豫州。臨別告曰。夫師範之官。立本於隱微。而生道於講論。或與其進也。不與其退也。與其潔也。不保其往也。而不爲已甚。或語上。或不

は自から省みて行を直くする也　愼獨―靜思獨坐の時を愼む也、所謂中に誠ある者は外に形はると謂ふ、即ち是也

照。而外面闇然。乃坎水之象也。所謂洗心者。以自反之神水。消放心焦火之義乎。是以。善用自反。則世間種々苦楚怨尤。熱倏消而胸次清凉。似蓮華之濯清漣焉。既自反矣。而苦痛煩熱蠲矣。猶疾病始愈而氣餒而神不爽。故愼獨而立大本。猶病愈而後補養元氣焉。蓋。獨者良知之殊稱。千聖之學脈也。獨字之義。有多端焉。萬物一原。故謂之獨。其（其无間。疑脫尊字。）无對。故謂之獨。太虛寥廓。更無別物。而三才一貫。故謂之獨。在我。則自己一人之所知。而人所不知。故謂之獨。貌言視聽思。接物應事。一於此而無別路无別事。故謂之獨。卓然獨立。而无所倚。故謂之獨。由己不由人。故謂之獨。自然而無所學習。故謂之獨。純粹而无所雜。故謂之獨。眞實而不二不三。故謂之獨。以萬物爲一體。故謂之獨。愛敬不間物我。而無二心。故謂之獨。動靜語默。喜怒哀樂。一樣景象。而无以異。故謂之獨。聖凡一體。生死不息。故謂之獨。貧富貴賤禍福利害。毀譽得喪。處之一。故謂之獨也。愼者。恭敬奉持之意也。愼獨者。尊德性。以爲身心之主宰之謂也。蓋自反也。愼獨也。相兼用工。皆

也

升堂入室—論語先進篇に出づ

自反—自反

人之患。莫甚於憂苦。不知學而以忘其憂苦也。故揭此說字。以興起天下萬世進學之機也。而弟子用此以冠二十篇之端。其意亦可知矣。問。雖初學困勉之資。亦有此說乎否。答。聖賢所開示。有本體有工夫。說者是本體自然之德。學問之種子。無以聖凡加損。故雖困勉之資不無此說。所謂困勉。只言升堂入室之難而已。非謂得此說之難也。蓋人之千辛萬苦。皆出於凡情。凡情者。氣習情欲。三者相釀而成者也。既學。則知凡情之害。而欲復本心之說。是以。初學之士。雖未有所得而凡情之拘攣懊憒。大率蠲其甚者。而無焦火凝氷之變。略似得說之皮殼也。而時習。則漸欛柄入手。而日日躋聖地。而其說與孔顏樂儔。由是觀之。自初學以至成德。皆有此說。故只曰。學而時習之。而無初學成德之分辨。其立言之意。亦可觀矣。

贈國領子說。

竊按。反顧乎外求於人之心。先將全體精神照察自己腔子裡。而無毫髮之滲漏。之謂自反。蓋顧外求人之心。專管外照。而裏面冥然。乃離火之象也。自反之心。專管內

鈞—均に同じ、ひとしくと讀む

天下之故—天下の事由

說—說は樂

鈞是順親養親。或爲大孝。或爲小孝。何哉。人之一身。有大體有小體。以大體順親養親。爲大孝。以小體順親養親。爲小孝。蓋身體髮膚。此小體也。仁義禮知。此大體也。身體德性。皆受之父母而非己所私有。本皆父母也。故以情愛謹身。則順親亦以情愛。所謂順情識之父母者也。尊德性修身。則順親亦以德性。所謂順靈明之父母者也。是以。孝經以嚴父配天爲大孝。中庸以明善誠身爲順親之道。曰配天。曰明善誠身。只是在明明德而已矣。明德之愛敬。寂然不動。感而遂通天下之故。无以聖凡餘欠。不以窮達加損。但爲氣習情欲所蔽。則不嘗不通天下之故。於其親亦不能通。然幸其本體之明。有未嘗息者。可知其止。而艾除舊習之葛藤。消化情欲之邪火。以復本體之明。此之謂大孝焉。此乃天下第一等事。學問第一義也。

贈中西子說。

子曰。學而時習之。不亦說乎。說者心之本體也。天理流行。和暢明快。之謂說。蓋

嚴父配天—孝經聖治章に見ゆ

鴆酒—一種の毒鳥、鴆の羽を浸しし酒

子之爲學者。不知位祿功名。本由學而得。卻患學問、有害其子之位祿功名而已。如識得其實理。則必不可不患其子之不好學也。然則。所拒其學。非所以勸其學乎。爲人者。識得其機。而篤志好學。自反愼其獨。則必觸發父之靈明。而其愚亦可氷釋融通矣。森村子之境遇。有少似于茲者。故特擧以爲臨別之話。於是。森村子問用力之實地。曰。吾子之不從父令而來。豈無父之心乎哉。善知來學之義。雖違父令。而實爲嚴父配天之大順也。此知也。不學不慮。所謂良知也、能體察此知。而默修默證。全無圭角。此乃入聖脈路。格致之工程也。於是得把柄。則雖違父母之情識。而順乎親也。如一念墮落。則雖從父母之情識。而爲悖逆之子也。吾子請勉旃。

爲善如耕耘。雖不得當下之穀。必得秋實。作惡如飮鴆酒。雖得卽席之燕樂。必死期來。

贈清水子說。

不仁之疾—手足の痺痿して自由ならざるを謂ふ、後漢書晉書等に見えたり

贈赤羽子說。

赤羽子志於道。遊原之門。有年于玆。癸未春。講明中庸。未半而患不仁之疾。以慎疾求醫攝州。於是。告吾所聞。蓋百病生於氣。氣之失其所。皆因願其外。是以。不願其外。則厥志壹。則氣不餒。而足以配義與道。配義與道。則其爲氣也。至大至剛。而塞乎天地之間。夫然。故雖形氣有不仁之症。而方寸之仁。豈不存。仁常存。則形氣之不仁。不足以爲憂。而疾亦可以止矣。熟察子之病因。在由人而失己。比來所講。素其位而行。不願乎其外心法。乃對症之聖藥也。愚以短於醫。故唯以此餞厥行而已。夙夜服食。以治心病。而立治療之大本。惟予所望也。因筆之以庶幾厥不忘。欽哉。

送森村子歸鄉序。

親之愛其子。仁也。而俗尙名利之意。間雜於其中。則仁所蔽。而愚也。是以。人有拒其子之爲學者。而其爲子者。誤謂父拒我學。而不知所以勸我學也。蓋父之拒

といひ、荀子は性を惡とし、楊雄は善惡混ずとし、韓愈は三品ありといへり

孩提—幼穉の時也

啻千里乎。老氏以㆓出胎時㆒見㆑性。佛氏以㆓父母未㆑生時㆒見㆑性。可㆑謂甚近㆑理。而未㆑能見㆓玄妙不測之神靈㆒。一貫切近之孝德。還以爲㆓頑極的㆒。比㆓之荀楊㆒。雖㆓稍高㆒。而失㆓其眞㆒惟同。聖賢有㆑憂㆑之。肆易曰。一陰一陽謂㆓之道㆒。繼㆑之者善也。成㆑之者性也。此以㆓父母未㆑生時㆒。示㆓其本眞㆒也。孝經曰。親生㆓之膝下㆒。以養㆓父母㆒日嚴。此以㆓出胎時㆒。示㆓厥實體㆒也。孟子曰。孩提之童。無㆑不㆑知㆑愛㆓其親㆒也。及㆓其長㆒也。無㆑不㆑知㆑敬㆓其兄㆒也。此以㆓神發㆑知之時㆒。示㆓其靈照之眞㆒。又曰。大人不㆑失㆓赤子之心㆒。此以㆓情欲紛擾之時㆒。示㆓其本體㆒也。孝經曰。夫孝。天之經也。地之義也。人之行也。此以㆓三才一貫㆒。示㆓其實體㆒也。順㆑茲安㆑身立㆑命。則未㆑能㆓身立至㆒至處㆒。亦君子之徒也。悖㆑茲立㆑心。則或入㆓異端㆒。或入㆓禽域㆒。是故。雖㆑有㆓周公之才美㆒。不㆑知㆑命無㆓以爲㆒君子㆒也。論語以㆑此終㆑篇。厥旨至矣盡矣。夫子之愛㆑親命也。是故。愛㆓敬其親㆒而不㆑失㆓中和之眞㆒。此之謂㆑知㆑命。今吾子歸事㆓父母㆒。克格㆑物致㆑知。以允執㆓嚴父配天之中㆒。而免㆓三千第一之罪㆒。无㆑愧㆓今日之講友㆒惟幸。戒哉懋哉。

如何と、王曰く、之を棄てんと、士師士を治むること能はず則ち之を如何、王曰く、之を已めん、曰く、四境の内治まらずんば則ち之を如何と、王左右を顧みて他を言ふ

傅會—附會と同じ

告荀楊韓—告子は性は猶生の如し

者。其君無道。而不能用我職分之當爲之謂也。非其才德不足。而不能守其職之謂也。不能守其職之小人。而豈得行不得其職則去之義也。不曰去之。而曰已之。則君之所已。而臣之非所致其職於君而去也明矣。此章三節一意。自遠而輕者。而歸着近而重者。猶詩之章次。宜熟玩。或又取集註憚於自責一句。而遂傅會以爲此章之主意。其亦誤矣。憚於自責一句。貶議王顧左右而言它之過失也。非論此章之主意焉。集註圈外趙氏之說。卽此章之主意也。者箇最宜明辯之也。

送森村子序。

森村子遊原之門。用力於心學。有年于玆焉。今適方論語終篇。從父之命歸省。肆述卷尾一章之意。以竊比於送言之一事。盖天命之謂性。性之實體。有玄妙不測之神靈。而无聲无臭。有中和无偏之至德。而无意无習。生民之大本。學問之靈樞也。然自古知言性者。多迷其眞。不知言性者。日用而不知。是以。告荀楊韓於情欲已發之後見性。故或以爲生或以爲惡。或以爲善惡混。或以爲有三品。其失何

則聖人之書名也。非浮屠之所可假用。剃髪與法印反其本。則佛者之形位也。非儒者之所可假用也。明矣。孟子曰。服堯之服。誦堯之言。行堯之行。是堯而已矣。服桀之服。誦桀之言。行桀之行。是桀而已矣。今肖佛者之形。居佛者之位。服佛者之服者。謂之佛者而已矣。

答小川子書。

孟子梁惠王下篇。王之臣。有託其妻子於其友。而之楚遊者。章之疑問。乍讀如可喜者。而細以本文事理求之。則失之遠焉。此章之主意。在論君臣上下。各不勤其任。墮其職。則憂辱必及其身也。而孟子立言之本旨。則欲戒宣王之（一本之不問。有不君而災害將至也、蓋人君十一字。）不止於仁。而爲天下僇。猶不止於信。而所棄於其友。不能治士。而所已於其君也。然暴君暗主。常以亡身之虐政。卻以爲安身治國之計。而不能察。是故。先設易曉之二事。而啓其心。推類而匡救之。其陳善閉邪之意切矣。夫以已之一句。爲有官守者。不得其職則去之義也。其鑿甚矣。所謂不得其職

堯之服—孟子告子下篇に見ゆ

王之臣云々—孟子齊の宣王に謂つて曰く、王の臣其妻子を其友に託して、楚に之いて遊ぶ者あり、其反るに及んで則ち其妻子を凍餒せば則ち之を

穿窬—論語陽貨篇に出づ、牆を踰ゆるの小盜を謂ふ

麻冕禮云々—論語子罕篇に出づ

浮屠—佛教也、或は佛陀とし或は佛部多とし或は浮國とす、皆相通ず

張子—張横渠なるべし

惑世誣民。充塞仁義。不可勝言。譬諸小人。其猶穿窬之盜也與。盖太伯之斷髮。權也。處父子兄弟之變。而用此得中。所以爲至德也。孔子之鄉服。襲水土之事。而所以安土敦乎仁也。子曰。麻冕禮也。今也純儉。吾從衆。拜下禮也。拜乎上。泰也。雖違衆吾從下。由是觀之。則君子之於國俗也。無適也無莫也。義之與比。非有必於從俗。其國俗尙如此。而況佛氏不仁之形乎。邦俗治喪。用浮屠道。嘗葬其子。不用浮屠。則非不知流俗之不可從。佛氏之可擯斥。只不能擧斯心。加諸彼而已。義足葬其子。而功不至其身者。獨何與。私欲害之也。浮屠假經典爲修多羅名者。巫覡多禹。醫多盧之類也。己之道狂妄。而不足以動人。借此自衒。求人之信從也。以此爲例。則假沙門之位。以將有裨於斯道乎。未聞古昔之聖賢。假異端之位以爲世教之助。嗚呼其亦誤矣。如曰名義相通者。異其解而可假用。張子曰。乾稱父。坤稱母。予茲藐焉。乃混然中處。如此。則生民皆是天之子也。稱庶人曰天子。可乎。不思之甚也。其曰盡反其本。由其言推之。經典反其本。

孟子の語

鸜鵒—禮記曲禮に、鸜鵒能く言へども飛禽を離れず、猩猩能く言へども禽獸を離れず

太伯—文王の父、季歷の長兄也、父の志を推して荊蠻に逃れし人

濁。是以。知德者鮮矣。故推之。以爲吾邦之儒宗。而信其言效其行者多。彼居之不疑。施々驕其門人。出而仕於江戶。以其形類沙門也。已巳之除夕。賜之以沙門之位。林氏兄弟者。受之以爲榮幸也。而慮世之毀咲也。作之以飾其非。而成其惡。聽者懵然不察。同然從之。故擧世以爲。儒者之道唯如彼而已。而不知有明德親民之實學。噫後之人雖欲聞實學。其孰從而聽之。正路之蓁蕪。聖門之蔽塞也。其害有甚於異端者。故予不得已。而擧其言以爲辨如左。道春之辭曰。吾兄弟祝髮者。從國俗。與太伯之斷髮孔子之鄕服。何以異哉。受法印之位者。以經典本聖人之書名也。浮屠假爲修多羅名之例。而名義所取與彼不同也。盖圓剃除顚髮。而以餘髮爲髻者。本邦之國俗也。盡剃除其髮而無髮者。佛者之頭容也。非國俗焉。邦俗恭沙門。故衆技之流。有假其形而求人恭己者。太伯之斷髮孔子之鄕服。其國俗而從之。豈別有異端之法。而從之之謂乎哉。夫林氏之剃髮。非佛者。則假形之徒也。非從國俗也。不言而可知矣。而自附於斷髮之權鄕服之義。自欺而欺人。其所以

人心惟危道心惟微の義、人心は人欲也、道心は天命也

孝經云々―身體髮膚を毀傷せざるは孝の始とあるに背けば也

安宅正路―安宅は仁、正路は義、

不至於顚覆不已也。假饒得免安昌之弑逆。必取其他之死禍矣。曰。於玄同取死之道。既得聞命。敢問。左門謂玄同稱醇儒也。然子以謂之人面獸心者何也。曰。其謂鄙夫。爲人面獸心者。以爲氣稟所拘。人欲所蔽。而失本心之德。是以。心之靈。其所知者。不過情欲利害之私而已。是則。雖曰有人之形。而實不殊於禽獸也。夫玄同之爲人也。徒事於博物洽聞。以狗外誇多爲務。而不覈表裏眞妄之實然。是以。識愈多而心愈窒。故說飾口。既罔大學之明法。效佛剃髮。以侮孝經之聖謨。以陷溺形氣之私。而戕賊性命之正。是則。非人面獸心之俗而何也。而謂之醇儒者。妄人之私言也。

林氏剃髮。受僧位辨。

辛未春作。時年二十四。

林道春。記性頴敏。而博物洽聞也。而說儒者之道。徒飾其口。效佛氏之法。妄剃其髮。曠安宅而弗居。舍正路而不由。朱子所謂能言鸚鵡也。而自稱眞儒也。吾邦聖人不作。而異端之敎。日新月盛。邪誕妖妄之說競起。塗生民之耳目。溺天下於汚

孟成括—孟子盡心の下篇に見えたり

生於三—國語に見ゆ、父之を生み、師之を教へ、君之に食ましむ

傳—孝經の序を指し言へるなるべし

人心道心—

玄同見レ殺者何也。孟成括仕レ於レ齊。孟子曰。死矣孟成括。孟成括見レ殺。門人問曰。夫子何以知三其將二見一レ殺。曰。其爲レ人也小有レ才。未レ聞二君子之大道一也。則足三以殺二其軀一而已矣。由レ是觀レ之。則玄同之爲レ人也。雖レ讀二聖人之書一。口甘二訓詁之學一。而不レ知レ德。是以。不レ能レ變二化其性質一。恃レ才妄作。所三以殺二其軀一也。蓋玄同之待二安昌一。如二犬彘一。安昌爲二怒氣一所レ動。而犯二逆レ理亂一レ常之罪上矣。以二常情一見レ之。則師不レ師。安昌之所レ犯。可レ謂レ宜也。然先王之制。民生レ於レ三。事レ之如レ一。而師居二其一一。傳曰。君雖レ不レ君。臣不レ可三以不二レ臣。父雖レ不レ父。子不レ可三以不二レ子。由レ是推レ之。則師雖レ不レ師。弟子不レ可二以不一レ弟子。苟安昌之罪不レ容レ誅矣。是豈違レ於二禽獸一遠乎哉。玄同安昌。共是人面獸心之俗也。何足レ論乎哉。或曰。若安昌以レ理御レ氣。則必不レ犯二弑逆之罪一。然則玄同得レ免。而子論下所三以殺二其軀一者何也。（也人之間、一有二曰字一。）人之有レ才。不レ足三以爲二人害一。惟無レ所レ本。而徒用二其才一。於レ是。才始足二以病一レ己。甚至レ有レ取二死之道一。又不レ若二魯鈍無才之愈一也。吾但述二其理之當然一而已。苟安昌。使三人心一聽二道心之命一。則玄同得レ免。然如二玄同一者。

玄同—菅原氏、號得菴、儒者、藤原惺窩の門人
安昌—玄同の門人

藤樹先生遺稿　卷之二

近江　岡田維鷹時揚
伊島廷資深卿　校

文類

讀安昌殺玄同論。

洛有舊友。己巳之冬。寄書於潮信。書尾筆林左門所作。安昌殺玄同論。因讀之。其論安昌之罪則可也。論玄同則不可也。其謂玄同稱醇儒也。是則左門之不智之甚者也。盖格物致知。而誠意正心。以修其身。無有氣質物欲之累。而復得本體之全矣。是以。達則兼善天下。窮則獨善其身。此之謂儒者焉。本朝稱儒者者。徒知讀聖人之書而已矣。可與共學者。未之有也。而觀其躬行之實。所以惑世誣民。充塞仁義。有甚於異端者。而玄同其徒之尤者也。如之何而謂醇儒乎哉。吾恐。學者之認左門之言。以如玄同者爲醇儒。而習不察。故忘其固陋。以作論曰。

稱す

五常十義｜五典十義といへるに同じ、集義和書を參照すべし

獄外在レ獄納二世界一　名利傲意其四壁　哀哉世間多少人　拘二攣這裡一長戚々

丁亥正月之吉。試輸之次偶成。

天上無レ心生二春陽一　人間有レ意嘉二新正一　人間天上本無レ異　日用良知惟至誠

送二加世伊右衞門尉歸一レ鄕

萬苦百殃克レ己鋼　五常十義致レ知全　請君歸去事二斯語一　安樂世間莫レ大レ焉

悼二瞽者玉井子早世一

講論日々相師レ道　不レ滅眼光由レ此明　不幸今亡雖レ可レ戚　孰二與浪死與一二虛生一

戊子夏正之吉。綴二鄙詩一章一。以爲二試輸之文字一云。

敎官讀レ法屬レ法晨　同志彌希勸戒眞　怪且羞吾心不レ古　千山萬木唐虞春

戊子夏。與二諸生一見レ月。偶成。

淸風滿座忘二炎蒸一　明月當レ天絕二世塵一　同志偶然乘レ興處　不レ知不レ識唐虞民

中に有る周南と召南とをいふ

朔至つて春立たず｜立春以前に正月復り來れるを謂へり

三元｜一年の元月の元日の元なるを以て正月元旦を三元と

爲試毫之事。

穆々文王不顯春　梅花鶯語二南民　何爲後學不興起　杰（杰俗假與豪通用。）傑惟人予亦人

古來難聞者道。天下難遇者同志。而同志數輩相遇。講心學於江西之僻壤。誠可謂太幸也。然唯慚未克有道義於身而已矣。今乙酉之歲。朔至而春未立。恰似吾人有志。而極未立。肆綴鄙詩一絶。以勵講習之務。

習若密雲名利埃　何時白日青天開　吾人學問似今日　朔已雖來春未回

丙戌之歲旦。

二三同志。賴天之靈。幸講習一貫道術。而未能得仁。唯獨天下第一等事在於茲。而僅超脱世情之拘攣。而竊比於説之皮膚。以庶幾將來之眞樂而已。惟時丙戌之新正。同志相聚。賀三元。於是賦卽景卽事。以爲試翰之事。

霞簇四山和氣新　梅花柳色僉成眞　今朝堂上三行酒　同志嘉（嘉恐賀誤。下二字同。）唯春外春

丙戌之夏。偶成。

萬乙―乙は一に通用せる也

二南―詩經

横山子志於學。有年于玆焉。壬午之夏初。因疾浴攝州之溫泉焉。不佞之環堵僻壤。而往來之便雖不宜。而以有如蘭之素。故來問愚夫之安否。於是互盡氣聲求應之情。而濡滯三旬。以講明孝經之心法。因撮其要綴一絕。以聊抒臨別切偲之萬乙。

體察多幸。

愛敬順時百事公　驕爭除後萬殊通　立身行道配天敬　正與神明同此中

和島川子詩。

靈明一點地雷陽　无迎无將眞坐忘　此箇玄機君信否　通神孝德出人方

龔贊文宣王尊像。

太虛廖廓　夫子至仁　兩儀化毓　六經々綸　普天之下　率土之濱　有血氣者

莫不尊親

舊年之冬。與同志講明二南。至臘之下浣終篇。篤是以賦厥體察之一得。以

有隣—易に、德孤ならずとあり、論語里仁篇に、德孤ならず必ず鄰有り

淵鑑—字面魏書に出づ

志學翼年—志學は十五歳、翼は翌に通ず

吾於熊澤子。似以性命相友愛者。是以愚雖無不孤之德。往年辛巳之秋。謬與有隣之訪。而推其所以相識之由。有同聲相應同氣相求之機焉。人乎天也。故講習討論。心々相融而甚喜。得輔仁之益。莫逆之奇趣。今逮中庸之講終篇而歸省。因賦中庸要旨。以竊比於送言之事。

水（（增）王篇云、古文淵字）鑑惟幸

動而無動靜無靜　无倚圓神未發中　愼獨玄機必於是　上天之載自融通

中川子志學翼年。以父兄之命。遠來草廬。入心學之門。其志篤。其學强。孜々以終日。焚膏油以繼晷。既四年於玆矣。壬午之春末。孝經中庸之講終焉。於是夏之孟。歸省父母于豫州。臨別賦。全孝心法。以望其聽於無聲。視於無形之愛敬。

躬行惟幸。

孝德以中爲厥體　無偏無倚至誠神　一毫意必三千罪　努力戒懼不顯眞

佗山石—詩經に出でたる語

玄黓敦牂—玄黓は壬、敦牂は午、寛永十九年也

準祝詞。

光華孝德續無窮　正與犧皇業亦同　默禱聖人神道教　照臨六合太神宮

仲子曰。負重道遠。不擇地而休。家貧親老。不擇祿而仕。今谷川氏之境。逢於斯焉。故離同志之群。而干貧仕於豫州。而其心患無學文之餘力。而入德之難。是以愚不得已。賦側體一絕。使書諸紳。以餞其行。

素位勿患離同學　佗山石可以攻玉　入神心脉豈在文　莫破至誠無息曲

愚竊有志于心學。於江西藤樹下之草廬。與同志相切磋琢磨者。有年於此。論講已追先進首章。偶逢玄黓敦牂之春。故聊賦大禮大樂之萬一。以供試輸之事。以庶幾吾人明辨之一助。

徒從外勿認文章　梅白桃紅春色常　非綠非青禮葉盛　不濃不淡樂花香

詩云。悠々昊天。曰父母且。由是觀之。火食而竪立者。四海之內皆兄弟也。而其中。或有以性命相友愛者。或有以面貌相友愛者。或有顚連而無告者。今

八目—三綱領に對する大學の八條目也

貧仕—仕ふること時ありてか貧の爲にすとある孟子の出典に據る

七字—菅公の謚號天滿大自在天神の七字を謂へるか

八目工夫請勉レ諸　浩然眞氣復二其初一　死生貧富我何與　一片浮雲過二太虛一

題二竹生島一。

艮上一陽泛レ坎出　卦神本是大明神　浮屠誤做辯財號　天運循環必復レ眞

森村子。志二於道一而好レ學。不レ得レ已而貧仕。東奔西走。猶未レ有レ所レ得。而雖レ無二間暇一。以二其志篤一。故來訪二草廬一。爲講二原人持敬圖說一。臨レ別賦二拙詩一章一。以爲二成レ美之一事一。

題二菅廟一。

世間富貴片雲輕　天爵常尊知是榮　西走東奔還可レ喜　帝心庸玉二女於一成

七字靈光光二日東一　照臨赫々在二儒宗一　斯文興起賛二神助一　千里飛梅一夜松

庚辰之雞旦。將レ試レ觚。而心似レ有レ所レ得因賦二野詩一章一。以爲二將來躬行之戒一。

致知格物學雖レ新　十有八年意未レ眞　天佑二復陽一令レ至レ泰　今朝心地似レ回レ春

辛巳之歲。夏之仲。參二拜太神宮一。以綴二野志一。抒二卑志一。誠恐誠惶。謹述二卑懷一。以

麟經—春秋經

十翼—易の十翼は孔子の作と稱せらる

山梁云々—論語郷黨篇の末章に出でたり

事親盡孝父惟慈　地利天明民秉彝　好惡麟經一王法　行藏犧易六爻時　夏葛冬裘我不與　春蘭秋菊聖無爲　舜何人也立其志　誠意正心立德基

丁丑雞旦。題草稿。

羲畫昭々無極眞　彖爻十翼趣時陳　發明有得莫言贅　野草宮梅同是春

戊寅之雞旦。讀孝經偶成。

心地收春當踐形　於人細柳眼先青　元爲老和氣爲子　充塞兩間惟孝經

戊寅之秋。吉田子遠。訪予陋巷。可謂久要不忘平生之言。而其情深切矣。愚雖未習而說者。似得朋自遠方來之樂。爲講論語。及終郷黨篇而歸。因臨別賦一絕。以爲切々偲々之一事。

一貫心法勿他求　郷黨全篇聖所裁　動靜云爲宜止善　山梁雌雉亦時哉

中村子。志於道。而來求大學講於予。既終篇。而其志彌篤。其愼終欲如始。故臨別賦一絕。以爲誘掖之一助。

作りて食に充つ
輔仁―論語に、君子は文を以て友を會し、友を會して仁を輔く
五福六極―翁問答を參照すべし

池田氏有レ故。以レ義赴ニ於江戸一。因訪ニ陋巷一。濡滯一二日。講ニ論大學之心法一。而有ニ輔レ仁之益一矣。愚雖レ不レ有下朋自ニ遠方一來之德上。尤足レ得ニ莫逆之樂一也。臨レ別賦ニ一絕一。以相ニ勵切瑳之功一云爾。

偶成。

滿襟義々究ニ精微一　遠促ニ旅裝一行不レ違　離別河邊相勵道　勿レ忘應接操ニ舟機一

世味本惟淡　甘辛由レ疾成　正心無ニ氣累一　玉食是藜羹

中川子遠。訪ニ陋巷一。而講ニ論大學之心法一。其情深。其志篤。臨レ別賦ニ一絕一。以庶ニ幾體認自脩之一助一。

畏レ天尊レ性莫レ懷レ居　世事紛々以レ己憂　誠意工夫純不レ已　孔顏至樂自レ茲求

五福六極吟。

惠レ迪吉兮從レ逆凶　嚮レ威期レ福極毋レ評　試レ舟盪レ陸車浮レ海　枉費ニ衆功一虛器成

論レ學。

とあるに出典す

金蘭—同心の言は其の臭蘭の如く、二人同心其利きこと金を斷つ、とある易の繫辭上傳に出づ

兩事—藥を設けて疾を醫し、穀を

格致誠脩貴日新　易難先后不彬彬　料知聖學成功地　氣朔今朝共是春

丙子之春。送信古。

不遠海陸百里之阻。而來訪我草廬。金蘭之交。骨肉之親。謝忱无詞。別後三年事。燈前一夜話。或辨致知之疑。或講克己之功。或論一心之妙。或明萬物之理。而惟日不足。滯留數日。猶造次之頃。臨別不得已。而賦小詩。以言志云。

晦盲否塞聖人謨　聞識窮經皆俗儒　世道重任君勿讓　惟時吾輩中流瓠

會藤田子於洛。而又邂逅初逢島川子。皆心友也。於是弄丸譚易。惟日不足。臨別不得已。而賦一絕。以庶幾相責之一助。

心友相逢堪弄丸　波瀾雖起點無瀾　父慈子孝畫前易　須向韋編絕處看

丙子之冬。十一月念五日。謹贊神農尊像。

開物成務　繼天立極　嘗草作醫　藝穀足食　兩事不設　兆民豈息　大
直恐悳訛
直悳古德字日生　巍々唯則

羈旅逢春遠耐哀　緡蠻黄鳥止斯梅　樹欲靜分(分當作兮)風不止　來者可追歸去來

甲戌之冬。舟中見月有感。

念慮一毫差　酬應千里訛　人心宜主靜　明月不沈波

乙亥之春。二月十六日。謹贊文宣王之尊像。

明同日月　德合乾坤　人中太極　宇內至尊　觀感所得　作耳聞論　莫道圖畫、不繪神言

於洛偶成。

吾孤鼓瑟世皆竽　面友盡言可絕絃　今亦有期人不識　烏紗巾上是青天

乙亥之秋。洛友來請益之次。筆白鹿洞規以示諭。楮國有餘地。故作一絕。以書其端。寄友。

乃獸乃禽從小體　須求明德履其全　請看此理甚分曉　鳶戾天兮魚躍淵

丙子之歲。雖且偶逢立春之節。因有感。賦小詩。以庶幾工夫之一助。

り

樹欲靜―韓詩外傳に出でたり、孝子が父母を失ひたる悲

文宣王―孔子の謚也、唐の玄宗開元二十七年追贈す

鼓瑟―昔は齊王竽を好む、瑟を執りて王の門に立つもの有り、三年にして省せられず、時人之を笑ふ

伊、呂―伊尹は有莘の野に耕し、呂尚は渭水の濱に釣る、殷湯周文に遭うて功業を成せ

藤樹先生遺稿

卷之一

岡田維鷹時揚
近江 岡田師聖伯良 校
伊島延原深郷

詩類

、壬申之冬。寄友。

産業隨時必勿擇　伊耕莘野呂漁翁　君看不有殷周遇　依舊釣磯畎畝中

癸酉之元旦。參神事畢。而獨坐有鄕思。屈指羈旅既十八年于此矣。偶然憶得皐魚之事。而讀其傳。至樹欲靜而風不止。子欲養而親不待。而三復之。而悔悟昨非焉。於是賦曾（曾恐曹字訛）鄶之一絕。以聊言志。非枉費精神於無用。所謂不得其平則鳴者也。故不泥詩法。而只用二十八字而已。

刻藤樹遺稿序

書云。言之非難。行之惟難。蓋夫學者。躬不自行。而口徒言之。誰其難之矣。惟口不輕言。而躬篤行之。則古今乏其人矣。藤樹先生。湖西人也。性聰好學。少而仕于大洲。偶有思親。輒解印綬。而歸鄉焉。自是潛心於孝經一經。專脩愛敬二道。至溫凊定省。甘旨色養。莫不盡其心矣。於是乎。鄉黨感其行。四方化其德。有醜行者。竊變操。強盜者。嘗改行云。夫巧詐不如拙誠。詐難以服人。則若先生。誠可謂口不輕言。而躬篤行之。俗自改。人自化者也。余友某等。應人需。校其遺稿。而語余曰。此書疑數傳寫。今有其誤難改盡者。且恐不合時好焉。余曰。何傷也。校書。如塵埃風葉。固難以盡矣。然疑以疑傳。信以信傳。是之謂實錄也。且諸君。以當世風。皆爲華文浮靡之流耶。安知其間無有朴實淳厚。左文右行之君子。喜爲帳秘者哉。何爲其不傳。於是乎。遂授之梓。因書此爲之序云。

寛政辛亥之孟夏　　近江　西希顏謹撰

書藤樹先生文武問答後

此書。先生自問自答之語也。予謂。文武爲事至大。然使先生揭其要而言之。二三百言足矣。今乃設問答。國字記之。懇切開諭。務教讀者易曉。卽先生之所以爲先生。而其學出乎誠也。誠者先實後名。其棄過高之論。而汲汲於提撕警覺。不亦宜哉。安中巖井氏。不藏之笥底。而上梓公世。其意亦出於憫不知文武正路。以誤一生者。而與先生著書之旨符矣。予嘉此擧。欣然書其後云。

辛亥肇秋初吉　　羽倉用九識

たまふ一言、みな仕置の根本なれば、まつりごとと學問と、本來同じく一理なる事を、あきらかに得心すべし。

此一卷。近江藤樹中江先生所レ著。在二其隨筆中一。頃家君抄錄。名曰二文武問答一。乃刻藏二于家一。爲下問二文武之道一者上。以告焉。

嘉永庚戌六月　　男　巖井孚　謹識

文武問答終

せる孽は猶避くべし、自ら作せる孽は逭るべからず

端的—眞義

明德を明にす—大學の巻首に、大學の道は明德を明かにするに在り

に惰り、天道次第よなどといふ事は、以ての外なるひが事なり。是にて或は家をおこし國をひらき、或は家をうしなひ國を亡す、運命の端的をよく體認すべし。かやうに論ずれば、品多くむづかしきやうに候へども、つゞまる所は明德を明かにする一つに究れり。明德だに明かに候へば、時處位のふんべつ、人事のつとめ、運命のさだめ、皆鏡の影をうつすが如し。

問うて曰、學問とまつりごととは、各別なるものと存じ候へば、別物にて御座候や。

師の曰、惣じて世間に、學問に外れたるものは一つもなく候。正眞の學問明かならざる故に、色々迷ひたる疑ひある事にて候。學問は明德を明かにするを全體根本とす。明德は天地有形の外へ通じ、上もなく外もなく、神明不測なるものなれば、天下國家を治むる政は、明德神通妙用の要領にて候故に、政は明德を明かにするの學問、學問は天下國家を治むる政なり。本來一つにして二、二にして一なるものと心得べし。そのうへ法度の箇條ばかりは政にてはなく候。天子諸侯の身に行ひたまふ一事、口にの

惡法—聖法善法などあるべし、惡の字誤か

とりみ—穀實の收納をいふ

自作の孼—書經太甲篇に、天の作

は天時地利人位みなよく叶ひても、苗と種に生理なき故なり。是にて學問も政も、苗となり種と成る、明德の生理明かならざれば、時と處と位とに叶ひて、聖人惡法を用ひても益なき事を體認すべし。時も處も位もよく叶ひ、苗も種もよく候ても、糞をし草をとる修理のしやう惡しければ、秋のとり實なきもの也。これは時處位いづれもよくても、人事のつとめ足らざる故也。是にて學問も政も、人事の勤めをはげますを本とする事を辨へ知るべし。時も處も位もよく叶ひ、苗も種もよく、人事のつとめをよく勵ましても、或は大旱にやけ、或は長雨にくさり、或は大風にそこね、或は虫くひて、秋のとりみなき事あり。是は天災といひて、運命のなす所なり。時處位のよくかなふやうに分別し、人事のつとめをはげますは、皆人間の力にてなす業なるによつて、おしなべて人事といふ。人事をよく勤めて災にあふは運命にして、人力の及ぶべきに非ざれば、天災といふなり。人事をつとめずして災にあふは、天災にはあらず。自作の孼というて、われとつくる禍なり。耕作をあらくしてとりみなきが如し。人事の勤め

を孔子及び其門人等の集錄せる書、今行はるゝ物四十九篇あり、五經の一に列せらる

菽ー豆に同じ

とは天の時、春夏秋冬運命の否泰をいふなり。たとへば、冬田をうち種をふせ、耕作の作法をよくつとめても、用に立たぬものなり。是は耕作のしやうあしきに因りて用にたゝぬにてはなく候。たゞ時の違ひたるにて勞して功なく候。是にて學問も政も、運命氣數の時の宜しきを知るが第一なる事を明らむべし。耕作の時至りても、畠に稻をうゑ、田に豆を藝ゑては、何ほど精をいれ糞をし、修理をしても育たぬものにて候。是も時もよく、耕作のしやうもよけれども、所のちがひたるにて用にたゝぬにて候。是にて學問も仕置も、水土の地利を知るが肝要なる事を明らむべし。耕作の時至り、田に稻をうゑ、畠に菽をうゑて、天時地利みなよく叶ひ候ても、他人の田畠に植ゑつけぬれば、我用にたゝぬ上に、かへつて盜人の咎め有るべし。是は時も處もよけれども、わが位の分際になき事をする故なり。是にて學問も政も、人位の分を知るが大事なる事を體認すべし。耕作時いたり、我田に稻をうゑ、我畠に菽をうゑ、處も時も位もよく叶ひても、かれたる苗を植ゑ、碎けたる種を植ゑては、生へ育たぬものなり。是

膠柱—琴柱は琴の調子に隨ひて動かすべきものなれば、膠附にしては其活用を失ふ也
禮記—周代の禮儀作法

師の曰、しおきの學問はすなはち儒學なり。眞儒にしたがひて學びたるがよく候。よき法度は活法とて、事をさして定めぬものにて候。一偏に定まりたるをば、死法といひて用にたゝぬものなり。法度にも心迹の差別あり。周禮などに記したる事は、聖人、天時地利人情の至善をはかりて定め給ふ法度の迹なり。その迹のうちに備はりたる所の本意を心といひ、その迹によりて立法の本意をよくさとり、當代の法度を定むるかがみとし、其事の迹になづまず、聖人の心によく叶ふを至善の活法とす。その心を辨へずして、事の迹ばかりを手本として眞似をするを、膠柱の死法といひて、おろかにして用に立たず。夫仕置の法度は、主君の明德を明かにして根本をさだめ、周禮などにしるし置たる、聖人の成法を考へてその本意をさとり、政の鏡とし、時と處と位と、三方相應の至善を能く分別して、萬古不易の中庸を行ふを眼とす。義理にて論じては合點行きがたければ、目の前なる事にたとへて體認したるがよく候。然る故に、禮記にしおきの仕樣を、耕作の事をかりて發明あれば、耕作にたとへて見たるがよく候。時

ば必ず偏す

本末まつりごとは—本末の末字誤か、翁問答を參照すべし

杓子繩規—規矩に拘泥して變通の才なきを譏る語

さい〳〵—再々也、屢屢といふに同じ

なり。秦の始皇のしおきが法治の至極したるものなり。法治は嚴しき程亂るゝものなり。始皇の世を鏡として見るべし。本末まつりごとは數少なく、時相應の至善にかなひ、おほやうなるを本とす。今時のやうに暗くまよひたる人の心を治むるを、混水をすますに喩へたり。なにかといろふ程濁がますものなり。いろはずに靜めておけば、其ごみおのづから沈みて上よりすむが如し。德治法治の分別能く得心有るべし。德治はまづ我心を正しくして、人の心を正しくするもの也。たとへば大工のすみかね、その體ろくにして、物のゆがみを直すが如し。法治は、わが心は正しからずして、人の心を正しくせんとするもの也。たとへば諺にいへる杓子繩規なるべし。君の心明かなれば吟味正しく、法度道ある故に末長くかはらず。君の心暗ければ、萬事不吟味なるによつて、其法度さい〳〵改めかはるものなり。

問うて曰、しおきの學問は、如何樣にしたるがよくおはしまし候や。又定まりたるよき法度も御座候や。

と思はる、或はりの字る字の誤か

下々ー論語に、小人の徳は草なり、大人の徳は風なり、草之に風を加ふれ

きも、國の亂るゝも治まるも、畢竟主君の心ひとつにあり。誠に志あるべき事にて候。

問うて曰、法度は數多く嚴くしたるがよく御座候や。

師の曰、しおき法度の箇條は、所により時によりて定むるものなれば、多きがよきとも少なきがよきとも定むべからず。又嚴くしてよき事もあり、緩くしてよき事もあれば、嚴しきがよしとも緩きがよしとも定むべからず。只時と處と位とに相應したる、道理に從ひたるがよく候。しおき法度にも本末あり。君の心明にして道を行ひ、國中の手本かゞみと定め給ふが政の根本也。法度の箇條は政の枝葉なり。君の好む事をばその下々皆まねをするものなれば、君の心明かに道を行ひ給ひぬれば、法度はなくても自から人の心よくなるもの也。まして法度をよく定め、背く者をば刑罰にてこらし、本も末も正しくしてよく行ひぬれば、國富み榮え長久にあるもの也。本をすてて末ばかりにて治むるを、法治といひて宜しからず。法治は必ず箇條あまたありて嚴しきもの

側に在りて政務を扱ふ權勢ある人

あひくち—意見なとの能く一致する人物

火云々—物必ず原因あり、火は突然物を焼くに非ず、物乾燥せる為に焼け易き也

欲に耽り—耽りの二字誤ならずや

げにさしつかひ、あひくちあしければ、その人の得たる事にもさしつかはざるは、皆ひが事にて候。君のまへ近くさしつかふべき程の士をば、いづれをも直にさしつかひてこそ、人がらをも心だてをも見知るべけれ。たゞ人づてにいひつぎて、差使ひたる分にては、能きも悪しきも知るべきやうなし。然る故に、出頭の者のとりなしにのみ聞あやかるばかり也。箇様のあやまり、皆主君の心暗き迷より起れり。主君の臣下をさしつかふは、たとへば磁石の針をすふが如し。火はかわけるにつき、水はうるほへるに流るゝ理なれば、磁石の鐵ならでは吸はざる如く、主君の心と同じき人ならでは使ひ給はぬものなり。心の暗き主君は、何程よき士をあつめ置いても、それをば用ひず。只君の心にひとしく暗き曲者ばかりを、さしつかひ給ふもの也。然る故に、よき士その家中に有りても無きに同じ。主君の心あきらかなれば、その心に能く叶ひたる、よき士ならではさしつかひたまはぬ故に、曲者も欲に耽り悪をはぢて、何時となくよくなるものなれば、あしきくせもの其家中にありても無きにひとし。臣下のよきもあし

得たる所—得意とする長所の義

出頭人—君

りなければ、諸士のてくち自らなくなり、眞實の德と才と功に力をはげまし、正眞の忠節をつくすものなり。これ昔の掟の眼なり。何程よき掟有りても、主人の心暗ければ、その掟用にたゝぬものにて候へば、君たる人はぢ恐るべき事也。

問うて曰、臣下をば如何樣につかひたるがよく御座候や。

師の曰、主君の臣下をさしつかふ本意は、公明博愛の心を本として、かり初にも人をえらびすてず。賢智愚不肖、その分々相應の用捨に私なく、道德才智ある賢人をば高位にあげ、しおき萬事の談合ばしらとし、才德なき愚不肖にも、かならず得たる事あるものなり、其得たる所をよく見知り、段々相應の位に置きてさしつかひぬれば、人間に用にたゝぬ者はなきものにて候。つかひやうあしきによつて、よき者も用にたゝぬと心得べし。大工の家をたつる、材木のつかひやうにて合點有るべし。また才智拔群なる人にも、無得手なる事必ず有るものなり。それも見わけて、得ぬ事には差使はぬが宜しく候。氣に入りたる出頭人なれば、得たる事得ざる事のぎんみなく、又人もな

吟味の柱―吟味の標準

てくち―翁問答に衒の字をてくろと讀ませたり、此のてくち恐らくてくろの誤ならん

を始めてつくり出し、或は大敵を亡し武功を立つるなど、皆功なり。德と才と功と三つを吟味の柱とさだめ、上中下のしなに因りて、その分限相應の知行をあたへ官職を授るが、古來さむらひの吟味をする掟にて候。今も才と功とのとり沙汰は候へども、德のさたは知る人まれなりとみえたり。

問うて曰、今時の功と才とのぎんみは、昔しの掟によく叶ひ申し候や。

師の曰、功と才との名は、昔と一つにて候へども、吟味のしやう惡き故か、人のてくち上手になりたる故か、むかしの掟にかなふ事はすくなく候。

問うて曰、昔の掟はいかゞおはしまし候や。

師の曰、昔しのおきては、才も功も德を根本とし、德は中和をもつて大本とす。才も功も、義理にかなはねば眞實の才功にあらず。扨君たる人の心がおきての鏡にて候。この鏡くもり候ては、何の吟味もあやまるばかりなれば、人君の心を明かにして掟のかがみと定め、才と功と德の正眞贋上中下の品さだめ、鏡のかげを照す如く毛頭あやま

よき贔負とよき傳手となり

ときめく—時を得て榮ゆるをいふ

行をとり申すかと存じ申し候は如何。

師の曰、それはわる口といふものにて、道の議論にてはなく候。君たる程の人は、よくよく吟味して善き士をかゝへたく思ひ給ひ候へども、世間の風俗あしく、吟味の作法明らかならざる故に、心ならず不吟味になりもてゆくと見えたり。根本さぶらひの品、上中下の三だんあり。明徳十分にあきらかに、名利私欲の累なく、仁義の大勇有りて、文武かねそなはりたるを上とす。十分に明徳は明かならねども、財寶利欲の迷なく、功名節義を身にかへて守りぬるを中とす。おもてむき斗り義理だてをして、心には財寶利欲、立身をのみ貪りぬるを下とす。此下品の曲者澤山にときめくと見えたり。君たる人の御用心あるべき事にて候。さて諸士を吟味するかなめ三つあり。徳と才能と功となり。三つの中いづれにも上中下あり。徳は文武合一の徳なり。才能は天下國家の萬事をとり行ふ、文藝武藝の才智才能なり。功は或ひは天下國家のしおきの功をつみ或は奉公奔走の功をなし、或は天下國家の難をはらひ、或は天下國家のためになる事

立車—龍車の當字也、蟷螂の臂は文選に出でたり

五事—道と天と地と將と法と

贔負つて—

り。其上陰謀をのみ專とし、詐力に任して仁義の德なきは、たとひ韓信項羽の才ありといふとも、節制の敵にさへ盾つく事あたはず。まして仁義の師に敵せん事、立車にむかへる蟷螂に異ならず。大白陰經に、齊の伎擊は魏の武卒にあふべからず。魏の武卒は秦の銳士に勝つ事能はず。秦の銳士は桓文の節制に當るべからず。桓文の節制は湯武の仁義に敵すべからずといへる心よく玩味有るべし。然る故に、孫子の五事は道を第一とし、吳子の兵法は和を以て先とす。道といへるも和といへるも、皆仁義の德の事なり。儒門の心學の外に、この德を明かにすべき道なければ、心學をつとめその德を明かにして、後に軍法を學びたるがよしといふ事分明なり。とても軍法を學ばんとならば、天下に敵なき仁者の軍法を學びたるが宜しかるべきか。

問うて曰、士の吟味は如何やうに仕るものにて御座候や。世間の諸侯の諸士をかゝへ給ふを見るに、吟味ある樣には候へども、吟味のさはり定まりたる事有りとは見え申さず候。我々の見及び候は、たゞよき贔負つての有る者がよき士ともてなされて、高知

奢を指せり、奢の子括能く兵を談ず、實戰に出で一敗して起たず

問うて曰、儒門の心學をきはめずしても、軍法に達し軍功を立て、その名高き大將、和漢共に古來多く御座候へば、心學の磨きなくても、軍法の學びはなり申すべく候。然るに、まづ儒門の心學をきはめて、後に軍法を學びたるがよしと傳へられ候は、不審にぞんじ候。

師の曰、よき疑にて候。大將の才を逞しく生れつきたる人は、心學のみがきなくても、軍法に達し軍功を立つるといへども、その德なきゆゑに、才の逞しきにまよひ、必ず人を殺す事をこのみ、不義不道のふるまひあれば、萬民その毒にあたり、歎き悲しむによつて、終には天罰を蒙り、其身も亡び國もかならず絶滅するものなり。其證據は、唐土にても我朝にても、その德なくて身のみ逞しき大將に、其身に難なく子孫繁昌したる人まれなり。和漢の史書にて考へ見るべし。夫軍法の本意は、國家安穩武運長久にして、萬民をめぐまん爲なるに、かへつて萬民もその毒にあたり、その身の運もつき、國家も絶滅する基となれば、軍法に達し勳功をたつるも、畢竟は無益のいたづら事な

太公—太公望、周初の人
諸葛—諸葛孔明、三國蜀の人
按圖索驥—驥は千里の馬なり、繪圖ばかりを當にしては、到底よき馬を目利して得る事は出來ぬといふ事
名大將—趙

いふ也。この眼目くらく手足かなはざれば、敗軍の後れをとるばかりなる故に、あしき大將といふ也。然るに、この眼目手足をば露もさとせず、たゞ皮膚毛髪ばかりを軍法なりと心得たらんは、無下にあさまし。夫軍法陣圖は本來易よりおこり、黃帝の御代にまつたく備はり、太公諸葛など、代々の諸賢傳授し來れり。日本にて假名がきに直したるにはあやまり多し。只本書を學びたるがよく候。軍法陣圖を有の儘に心得たる分にては、馬の目きゝを段の繪圖にてならひ覺えたると同じ事なり。愚にして物の間にあはぬ事を、按圖索驥とたとへたり。昔し唐土に名大將あり。その子よく父の書を讀み習ひぬれども、臨機應變の覺悟なきに因りて、親死して後大將となり、大敗軍して天下の笑草となれり。是すなはち眼目手足の工夫なく、徒に皮膚毛髪ばかりを專とつとめ學ぶゆゑなり。軍法をまなばんと思ふ人は、まづ眞儒の門に入りて、文武合一の明徳を明かにして根本を立て、のちに軍法の本書を學び、眼目手足の工夫を專とすべき事簡要也。これは誠に武家第一の急務にて候。

覘釁用間―敵の隙を覘ひ、又間牒を放ちて敵状を視察する等の事

かまひ―關係といふ詞に同じ

はぬ事にて御座候や。

師の曰、軍法は大將の知らで叶はぬ事にて候。大將の軍法を知らざるは、譬へば矢はぎの矢をはぐ法を知らざるが如し。軍法を人のかたちに譬へていへば、仁は心なり。覘釁用間はまなこなり。奇法は手足なり。旌旗金鼓兵具のこしらへ、用ひやうの作法、日どりなどは皮膚毛髮なり。然るに、おほかたの人の心得には、皮膚毛髮ばかりを軍法なりと思へり。しかる故にその流多しといへり。旌旗金鼓兵具のこしらへ、もちひやうの作法、日どりなどは、その家々の制度ありて、その流あまた候。これは皮膚毛髮なれば、いづれを善とも惡しくとも定むべからず。所により時によりて考へさだめたるがよく候。昔よりつたへ來る流を汲まずして、その大將の作法にて、新らしく定めたるもよろし。さして勝負のかまひにならざる故に、その流あまた有りと知るべし。覘釁用間奇正は、勝負の眼目手足なれば、只同じく一術にして、流によつてかはるといふ事はなく候。此眼目明らかに手足達者なれば、百戰百勝の功をたつる故に、名大將と

血氣の勇―自己の勇氣にはやりて、前後を顧慮する事無きをいふ
三才一貫―天地人を貫いて立てゝ動かすべからざる眞理

本とする故に、勝軍には武勇をはげみ、忠節のふり一段見事なれども、敗軍の時はその主君を捨てて、あさましき振まひ有る武偏者古來多し。かくの如くなれば、只血氣ばかりの勇にして、義理の用にたゝざれば、血氣の勇といふ。血氣のたけきばかりにて欲のおそれ深ければ、三才一貫の大道を行ふ用にはたゝずして、小體血氣の役に立つばかりなれば、又小勇とも名づけたり。

問うて曰、大勇小勇に用ひやう御座候や。

師の曰、大勇は用ひて悪しき所なく、又用ひてあしき時なし。行住坐臥五倫のまじはり、大勇なくては道を行ふ事あたはず。軍陣にては、大將にしても葉武者にても宜しく候。小勇の人は、武用ばかりの使に立つまでにて、葉武者にはよく候得ども、大將には宜しからず。昔より和漢ともに、小勇の大將勝利をうしなふ事、あげてかぞふべからず、愼しむべき事なり。

問うて曰、軍法にはいろ〳〵習ありて、その流多しと承り候。大將たる人の知らでかな

屣を棄つ—孟子盡心上篇に、舜の天下を棄つるを視る事、猶敝屣を棄つるが如し云云とあり、毫も惜吝するなきをいふ也

千萬人—孟子公孫丑上篇に、自ら反して縮くんば千萬人と雖も吾往かんとあり、大勇の恐るゝ所なきをいふ

心のまよひ少しもなきゆゑに、義理をたて道を行ひ、主親のために命を惜まざる事、やぶれたる屣をすつるが如くなれば、毛頭死をおそれ生を貪る心なし。然る故に天地の間にありても恐るべきものなし。千萬人の敵にあひても、虎狼の狐狸に向へるが如く、少しも恐るゝ心なし。恐るゝ事なきがけなげの至極にて候。明德の仁あきらかなれば、この勇仁義のうちに自らそなはりて有るものなるに因りて、仁義の勇といふ也。かくの如く天下に敵なき至大なる勇なれば、また大勇とも名づけたり。まへに論ずる眞實の武が、すなはち此大勇なり。血氣の勇は、道理無理義不義の辨へなく、只かたむきに猛くして、人に勝ち物に恐れざるばかりなれば、虎狼のけなげにひとしく、かへつて人道の碍ともなれり。けなげにして死を怖れざる事は、仁義の勇に似たれども、道理無理義不義の辨へなく、只血氣に任せてかたむきなれば、虎狼の振舞いとあさましく、位ある者は亂をおこし、貧しきものは盗人をなす。さて又欲心ふかき故に、欲のために恐るゝ心、臆病なる者の死をおそるゝに異ならず。血氣の勇者は、畢竟欲を

勝れたるをいふ

師の曰、末をすてて本を學びたるがよく候。文藝を知らずして文道をよく行ひ、武藝を知らずして武功をたてたる人古來多し。是みな本を第一に勤めたる故にて候。よくよく心得べき事也。

問うて曰、沈勇は世間に多しと仰せられ候へば、みかけのぬるき者を、武用に甲斐々々しかるべきと見たて候はんや。

師の曰、それも鼻先なる心得にて候。沈勇が世間に多しといふは、見かけ鼻の先のもくろみにては知れぬものなりといふ事なり。見かけのぬるき者に臆病なるも有るべし、又けなげなるも有るべし。みかけの猛きに臆病なるも有るべし、又かひがひしきも有るべし。唯みかけに泥まず、その心の勇怯を察するが、目的のまなこにて候。

問うて曰、勇に仁義の勇、血氣の勇とて、二つありと承給はり候。いかやうなる差別にておはしまし候や。

師の曰、明德のあきらかなる君子は、義理を守り道を行ふ外には毛頭ねがふ事なく、欲

ふ

目明―目利の義、辨別する事

多能―論語子罕篇に、吾少うして賤し、故に鄙事に多能なりとあり、才藝の

人を見るに、大概此沈勇多し。見かけは鬼神のやうに猛くいかつにして、拔群に臆病なる人あり。これを羊質虎皮とたとへたり。ひつじは虫もふみ殺さゞるやはらかなる獸なり。虎は人をも獸をも喰ひ殺す猛き獸なり。羊に虎の皮をきせて見れば、見かけは猛くすさまじけれども、したぢが羊なるによつて、見かけに違ひてあさましき振舞なりといふ意なり。かくの如くのためしは眼前に澤山なれども、目明する人世に稀なりと見えたり。

問うて曰、左候はゞ、武藝文藝は要らぬものにて御座候や。

師の曰、それは惡しき心得にて候。本をすてて末ばかりを求め學ぶが僻事なりといふ事にて候。根本の仁義をたてての上に文藝武藝に長じぬるは、本末かねそなはる多能の君子にて、世俗の諺にもいへる、花も實もある人なり。本たつての上には、文藝武藝ことの外重寶なり。本末先後の心得簡要にて候。

問うて曰、本末かねそなはる事ならざる者は、いかゞ仕り候はんや。

文樂云々ー文樂の樂は學の誤にやと思はる

目論ー根底なく淺墓なる議論をいひ

文武も同じく一徳にして、各別なるものにあらず。仁義の徳をよくさとりて、文武の沙汰をあきらむべし。仁に背きたる文は、名は文なれども實は文にあらず。義に背きたる武は、名は武なれども實は武にあらず。文武の正味をよくかみわけざれば、心の闇いとくらく、萬事のさはり多かるべし。扨また、文武に徳と藝との本末あり。仁は文の徳にして文藝の根本なり。文樂禮樂書數は藝にして文徳の枝葉なり。義は武の徳にして武藝の根本なり。軍法射御兵法などは藝にして武徳の枝葉なり。根本の徳を第一につとめ學び、枝葉の藝を第二にならひ、本末かね備はり文武合一なるを、眞實の文武といひ眞實の儒者といふなり。文藝ありて文徳なきは文道の用にたゝず。武藝ありて武徳なきは武道の役にたゝず。たとへば根なき草木の實をむすぶ事能はざるが如し。氣だてやはらかに立振舞花車なるを文といひ、たけくいかつなるを武用に甲斐甲斐しかるべき等いへるは、あさましき鼻の先なる目論なり。見かけは柔かに上たるみし、ぬかりたる者に武用かひ〴〵敷人あり。是を沈勇と名づけたり。世間の武功ある

なり、武は文の根となり、天を經とし地を緯として、天下國家をよく治めて、五倫の道を正しうするを文といひ、天命を恐れず、さも惡ぎやく無道の者ありて、文道をさまたぐる時は、或は刑罰にて懲らし、或は軍をおこし征伐し、天下一統の治をなすを武といふ。しかる故に、戈を止むといふ二字をあはせて武の字をつくりたり。文道を行はんための武道なれば、武道の根は文なり。武道の威をもちひて治むる文道なれば、文道の根は武なり。その外萬事に文武の二ははなれざるものなり。孝悌忠信の道を正しく行ふは文なり。孝悌忠信のさはりと成るものを退治して、つとめ行ふは武なり。譬ば春夏の陽ばかりにて秋冬の陰なく、秋冬の陰ばかりにて春夏の陽なければ、萬物を生成する造化成就する事なし。陰陽二氣差別ありといへども、本來同じく一元氣の流行なる如く、元來文武同一明德なれば、武ばかりにて文なきは、秋冬の陰のみにして春夏の陽なきが如し。文ばかりにて武なきは、春夏の陽のみにして秋冬の陰なきが如し。文は仁道の異名、武は義道の異名なり。仁と義は同じく人性の一德なるによつて、

五倫―父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信をいふ

武の字―說文に、夫れ武は功を定め、兵を戢む、故に止戈を武と爲す

一元氣―太虛の一氣分れて陰陽となる、萬物生成最初の一氣をいふ

兩輪、兩翼ー車に二つの輪ありて車よく道を行き、鳥に兩翼ありて鳥よく翔る、文武偏廢すべからざるに喩ふ

文武問答

上毛　巖井任重鈔錄

問うて曰く、文武は車の兩輪鳥の兩翼の如しと申しならはし候得ば、文と武とは二色にて御座候や。又いかやうなるものを文武とは申し候や。

師の曰く、文と武と世俗大きなる心得そこなひ候。世俗は歌をよみ詩をつくり文筆に達し、氣だてものやはらかに花車なるを、文といひ、弓馬兵法軍法をならひ知り、氣だてたけくいかつなるを、武といひ習はせり。みな似たる事の似ぬ事にて候。元來文武は一德にして、各別なる物にてはなく候。天地の造化一氣にして、陰陽の差別ある如く、人性の感通一德にして、文武の差別あれば、武なき文は眞實の文にあらず。文なき武は眞實の武にあらず。陰は陽の根となり、陽は陰の根となる如く、文は武の根と

文武問答序

中江先生直儒也。而超入聖賢之域。蓋儒之爲行也宜然。而無能及焉。抑天資不及者邪。將記誦詞章之學以誤之邪。私淑之不可及也。況世之稱儒者。虛驕大言。喑噁叱咤。自以爲得者乎。抑亦無望而已。中江先生之行。非啻修其身。亦能及人。鄙夫寬。薄者敦。能化其鄉黨。至今不諼。頑夫廉。懦夫立。能敎其弟子。功業有集。豈非眞儒之言咳唾皆玉。而親近者享其餘光者乎。卽如此篇。固崑山之一片。亦可以照人心之闇。豈非連城之寶乎。余雖私淑其人。已爲記誦詞章所誤。亦爲博聞廣知受累。抑天資不及也。上毛岩井氏刻此篇。想其所淑。必與余同。則其所至也必大矣。抑亦有期焉。故喜爲之序。

嘉永四年辛亥夏　深河元儁

毫釐千里―之を毫釐に失すれば、差ふに千里を以てすと禮記に出づ
用功下手―工夫を用ひ手を下して修爲の法を修むる也

通融なるべし。是をもて見れば、眞學をよく勉むる賤男賤女は、書物を讀まずして讀むなり。今時流行る俗儒は、書物を讀みて讀まざるなり。されば學問の端緒不詮義なれば、斯く毫釐千里の過誤ある事なり。よく〳〵深察あるべし。

右精言の書、學問正眞贋の差別を分ち、其の理を盡せり。讀む人深く是を味はひ、篤く是を信じ、かの外求僞飾の習を捨てて、實落に聖賢となる事を求むるの志を勵ますべし。聖となり愚となる、唯其の志の立つと立たざるとに有り。若その用功下手の方の如きは、尙先覺に就いて講明し、是を心身日用の間に體驗して會得すべし。此の編たゞ聖學の主意頭腦を掲げて其の迷を囘す耳。

橘　明しるす

藤樹先生精言終

大學の道—大學初章に、天子より庶人に至るまで、一に是身を修むるを以て本と爲す

小里にも學校—周禮地官司徒卿大夫州長官等の部を參照すべし

罪人なるべし。

問うていふ、大學の道は、上天子より下庶人に至る迄の敎なりと聞く。愚痴不肖の賤男賤女は、書を讀む事なるべからず、いかゞ。

答へていふ、聖人の御代には、僅の小里にも學校ありて、卽ち其の里の奉行代官其の師匠となりて、耕作の隙に道を講明し敎ふるに因りて、愚痴不肖の賤男賤女に至るまで、道の本意を得心するなり。文字訓詁には通ぜざれども、道の主意を聞き取り、學問の實義を合點して、心を正しうし身を修むる事は、中々後世の俗儒の及ばざる所なり。文字訓詁には通じぬれども、心の會得なく、其の心行凡俗に均しきは眞實の學に非ず。諺にも論語讀みの論語讀まずといへり。然あれば聖經賢傳も解し違へ多かるべし。縱へ文盲なりとも、道を深く信仰して先覺に從ひ、學問の本意をよく得心して、我が明德を明かにするは、俗儒の書物を讀みぬるより、一際勝りたる學者なり。暇ありて文字訓詁に及ぶ時は、聖經賢傳に載する所たゞこの事なれば、其の義理自から明白にして

ふ

寛裕溫柔—渾厚篤敬にして含蓄多く、毫も圭角無きを謂ふ

圭角—程子孟子を評するの語に曰く、孟子は些の英氣あり、才に英氣あれば便ち圭角有り

取沙汰—評判也、世間の噂

間の好格套を善と定め、世間の理窟を認めて道理とし、是をもて心を正しうし、身を修めむと伎倆を勵むによりて、本來活潑融通の心却つてすくみ、自己心裏に固有したる明德の寛裕溫柔くらく、圭角日々に嵩み、次第々々に人と和睦せず、異な者になりぬ。斯くあれば、學問の益といふものはたゞ文藝ばかりなり。世間の人是を見て、物讀出家醫者等の外は、無益の事なりといへる取沙汰、その謂なきにあらず。若又世間の學問する人、凡情の習態を洗ひ捨て、學問第一義の明德明かにして、孝悌忠信の誠ありて、其の行ふ所一事として天理に叶はざる事なければ、親は子の學問せざるを歎き、君は臣下の學術無きを嫌ひ、是を譏らざるのみならず、士はいふに及ばず、農人商人に至るまで、學問なくては叶はぬ事なりと持囃すべし。然あれば世俗の學問を譏るにあらず、學者の招く處なり。然るを學問する者の癖にて、世俗の學問を譏るを聞きては、或は怒り或は笑ひおとしめて、その過の己より出づる事を辨へず。是をもて見れば、學問の實義に志なき學者は、世俗の學問を譏るより、一際まさりたる聖門の

る悪逆を爲せり。人間の萬苦は明徳の明かならざるより起れり。天下の兵亂も明徳の暗きより起れり。是天下の大不幸に非ずや。聖賢是を憫みたまひ、明徳を明かにする教を立てて、人の形有る程の者には學問を勸めたまへり。聖經賢傳に載する所皆是なり。

問うていふ、聖經賢傳は、世間に流布して讀む者澤山なれども、この實義明かならずして、世俗の學問をそしるはいかゞ。

答へていふ、世俗の學問をそしるは世俗の誤にあらず、學者の過なり。世間の學者を見るに、多くは學問の實義を知りて、學問に志す方は稀なり。多分物讀み奉公の望みか、又は醫者の飾りか、或は伊達道具か、是等を志として學問するに依りて、學問第一義の明徳を明かにする事は、取沙汰無き事なれば、心を正しうし身を修むる益は無く、文藝を高慢する病の嵩むばかりなり。まゝ眞實なる方あれども、よき先覺に親炙なきによりて、道の我心に有る事を辨へず、徒に先王の法賢人君子の迹を認めて道とし、世

聖經賢傳―十三經の如き聖人の述作を經とし、是が注解傳註を作れる人、多くは賢人なるを以て賢傳と謂ふ

親炙―親近して薫炙せらるゝを謂

り、藝は才によりて成る、德の有無に拘はらざる也

物讀坊主—儒家にして剃髮せるを物讀坊主と謂ふ

倥氣—茫然として痴呆なるの稱

れつきたる人は、誰も成り難き事にあらず。たとひ文學に長じたる人にても、其の德昧きは儒者にあらず、たゞ文學に長じたる凡夫なり。一文不通の人なりとも、其の德明かなる人は凡夫にあらず、文學なき儒者なり。此の理は本來明かなれども、何れの時よりか誤り來りけん。唯儒書を讀み文字を取扱ふを學問と思ひ、文學ある人を儒者と持てなせり。此の迷世人の心に染みつきたるに因りて、學問は物讀坊主又は出家等の業にして、其の餘の人の所作にあらず等と、取沙汰區々なり。學問の實義世に明かならざる事、天下の大不幸なるべし。

問うていふ、學問の實義世に明かならざる事、天下の大不幸なる事いかゞ。

答へていふ、學問は明德を明にするを主意頭腦とす。明德は我人の形の根本なり主人なり。此の主闇ければ、主人の倥氣て下人の猥りがはしきが如く、其の人の思ふ所爲す所の事皆天理に背き、偏に私の欲深く、親をも親とせず君をも君とせず、唯一向に己を利し人を損する處に、利發才覺を用ひ、相爭ひ相奪ひ、甚しき時は主親をも弑す

盎然―盛んなる貌にいふ

昇擧―仙化して天上に昇り去るをいふ

藝―藝能な

即天地之理自性也。天地之氣自命也。理氣無終壞、此性命亦無終壞。譬以水投水、于何可竭。以火投火、于何可滅。由其體大造而超小劫故。不以天地之成毀而成毀。獲大身而忘小形故。不以軀殼之存亡而存亡。謂之盡性至命。謂之體道同天。謂之至德凝道。此中大有眞樂。盎然春融。熙然宇泰。旣利旣貞。活潑々地。即易之黄中通理。正位居體。美在其中。暢于四肢。發于事業。美之至也。此乃儒敎中不死之神方。長生之正術。不可與守空寂而坐枯禪弄精魂而希昇擧者同日而語也と。この賢範をよく體察玩味して、儒の至誠無息の上には、長生得脱も、仙佛には一位ましたる益ある事を明かに辨へ、迷を霽らしめさるべし。

問うていふ、今の世間には、儒書を讀み文字を取扱ふをば、德無けれども儒者とす。其の身も又儒者の名を受けて辭せず。大いなる誤にあらずや。

答へていふ、然り。儒者の名は德に有りて藝にあらず。文學は藝なれば、物覺えよく生

本源を見究むる事

中行—論語子路篇に、中行を得て之に與せざればとあり、過不及なき人物の稱

利貞—利は萬物の遂、貞は萬物の成

洪劫—多くの劫をいふ、卽ち無數の年所を經るの謂也

の妙理を悟り得ず。然る故に、その見性成道、中行の君子より一位下なり。儒家にも一心の工夫を專らとし、元神の神通を性の端的とし、窮レ理盡レ性至二於命一を宗旨とす。工夫十分成就する所の心性を至誠無息といふ。其の宗旨の端的も、明覺大悟の心性も、仙佛よりは一位ましたる所あれば、長生不死と指す所の益も、成佛得脫と指す所の益も、仙佛よりは一位益したる益ありと知るべし。性理會通に曰く、易曰。保二合大和一乃利貞。愚謂。大和者道體也。生物之本天地之根。一團之眞理實氣。充二宇宙一而無レ餘。歷二洪劫一而無レ改。鼓二剛柔一生二造化一。主二萬象一振二三才一。沖漠絪縕融和純粹。若能保二此氣一而不レ失。合二此理一而不レ違。身同二大道一。如下點雨之滴レ海。渾二滄溟一而共存上。心契二天眞一。猶下片雲之沒レ空。攪二太虛一而同久上。利通而無二凝滯一。貞固而無二變遷一。故天地終而壽不レ竟。日月晦而明不レ虧。故曰。至誠無レ息。無レ息則久。久則徵。徵則悠遠。善保二大和一者。誠道之至妙者也。聞者疑レ之曰。性卽理也。命卽氣也。人之性卽天地之理也。人之命天地之氣也。誠能以レ性合二天地之理一。以レ命會二天地之氣一。

君子云々—中庸に出づ
長生不死—彭祖東方朔葛洪等の如きを指せり
成佛得脫—生死の苦界を解脫し得て菩提を得佛と成る事
見性—自家本來具有の眞如佛性の

者小人にて君子の儒にあらず。たとひ又其の行ふ所、儒書に載する所の禮法に違ひても、其の事中庸の天理に中り、其の心私なく聖賢の心法に叶ひぬれば、儒道を行ふ君子なり。斯の如く、禮法に泥まず眞實の儒道を行ふには、何國にても行ひ難き事は無きなり。君子無㆑入而不㆓自得㆒焉と宣ふは此の意なり。

問うていふ、仙術を學ぶ人は長生不死の益あり。佛道を修行する人は成佛得脫の益ありと承り及ぶなり。儒道を學びても然樣なる身後の益も是あり候や。

答へていふ、然樣の疑も、異端の說を聞誤りて起る事なり。眞儒の道をよく悟りぬれば、生前死後の理、掌を指すが如く分明なれば、兎斯うの議論に及ばぬ事なり。然れども今時の人は多分此の疑あれば、姑く仙佛の道によりて其の迷を釋くべし。仙家の長生不死の術も、佛家の成佛得脫の修行も、皆畢竟は一心の工夫なり。仙家には修心煉性を宗旨とす。佛家には明心見性を宗旨とす。其の工夫の十分成就する處の心性を、長生不死といひ成佛得脫といふなり。二氏共に元氣の靈覺を心性の端的として、元神

等を指す

損益―論語爲政篇に、子の曰く、殷は夏の禮に因る損益する所知るべき也、周は殷の禮に因る損益する所知るべき也、其れ周に繼ぐ者あらば百世と雖も知るべき也

り。此の禮法を少しも違へず、日本にて位なき者が執行ふ事はなり難し。たとひ位ある人の執行ひたまふとても、有の儘に少しも違はず行ひたまふ事はならざるなり。唐土にて執り行ふとても損益なくしては行はれぬ道理なり。伏犧より周の代まで、代々の聖人制作ある禮儀作法、その時代にはよく相應して中庸の法なれども、代替り時移りては、過不及の弊ありて、損益無くては叶はぬ事なり。然る故に萬世通用の定法は鮮し。前にも論ずる如く、禮法は時により處により人によりて變るものなれば、一品の禮法に泥むをば欣眞落法とて、大いに嫌ふ事なり。殷の代には夏の代の禮儀作法を改め損益し、周の代には殷の代の禮儀作法を革め損益したまふにて得心すべし。初學より權の道を目的にせざれば、此の誤り疑ひあるものなり。儒書に出づる所の禮法を、少しも違へず殘る所なく取り行ふを、儒道を行ふと思へるは大なる誤なり。縱令皆とり行ふとも、其の行ふ所、時と處と位とに相應適當恰好の道理なくば、儒道には非ず異端なり。其の行ふ所時と處と位とに相應適當しても、其の心に名利の私ある時は、贋

語として下文を擧げたり

節分—時に隨ひて制定せられたる節目との義也

血氣—生きとし生ける者の義

儒書—禮記及周禮儀禮

も同じく道の總名なれば、經と權と辨ありといふは不可なり。禮法と權と少し辨ありといはんは可なり。然れども禮法はもと權道の節分なるによりて、時中に合ひて用ふれば禮法卽ち權なり。時中に違ひて用ふれば、權に背きて非禮の禮となれば、畢竟禮の外に權なく權の外に禮なし。禮と權と名義は少し辨あれども實は一理なり。よくよく玩味あるべし。

問うていふ、先生の敎を承り候へば、眞儒の道は道理の至極したる事ばかりなり。まことに我人執行はで叶はぬ事なれど、我國は風俗變り候へば、行ひ難からん、いかゞ。

答へていふ、夫も道の道たる本意を辨へず、儒敎の禮法を專ら道なりと得心する誤なり。本來儒道は太虛の神道なる故に、世界の中舟車の至る所人力の通ずる所、天の覆ふ所地の載する所、日月の照す所露霜の隕つる所、凡そ血氣ある者の住む程の所にて、儒道の行はれぬといふ事は無きなり。儒書に載する所の禮法は、時により所により人によりて、其儘は行はれぬものなり。儒書に載する所の禮法は、大方周の代の製作な

反經合道―正義亦曰く、經に反して善なり、是を權道と謂ふ
諷―遠廻しに語りて自ら悟らしむる義
孝經云々―孝經三才章に、孔子の

るによりて　權と名づけ難き故に法と名づけたり。嫂溺るゝは非常の變にして、これを援ふに禮法無ければ、嫂溺援之以手禮也といはずして權なりといへり。權は道の總名なれば、權卽ち道、道卽ち權なり。故に道なりといはん爲に權なりといへるなり。此の章、男女授受不親禮也。嫂溺援之以手者道也とあらば、反經合道の見誤りあるまじ。權なりと言へるによりて、權の字に泥みて疑ひあるなり。此章の主意、禮と權との辨を明すに非ず。儒者の道は法に落ちず跡に泥まず。上天時に律り下水土に襲りて、至善に止まるを本とする事を開示するものなり。淳于髡己が私心をもて孟子を伺ひ、孟子の當時の諸侯の無禮を憎みて仕へめされざるを見て、禮法に泥みたる人なりと思ふによりて、嫂溺るゝの事を寓言して孟子を諷したり。故に孟子、儒者の道は專ら權をもて主本として、物に凝滯せず迹に泥まず。活潑々地なる事を知らしめて、その迷を釋かん爲に、道とはいはずして權なりと論じめされたり。孝經に曰く、夫孝者天之經也。地之義也。民之行也。天地之經而民則之とあれば、經も權

たる語
公明儀—戰國時代の賢者なり、孟子屢々其の言を稱せり
淳于髡—周末戰國齊の人、滑稽多辯を以て名あり
嫂溺—孟子離婁上篇に此章出でたり
漢儒—古註諸家の註解等を指せり

をよく體驗して、明かに辨へ知るべし。若此の準的を知らざる時は、心學の徒なりとも欣眞落法の地に執滯して、非禮の禮多かるべし。

問うていふ、孟子に、淳于髡曰。男女授受不親禮與。孟子曰禮也。曰。嫂溺則援之以手乎。曰。嫂溺不援是豺狼也。男女授受不親禮也。嫂溺援之以手者權也。曰。今天下溺矣。夫子之不援何也。曰。天下溺。援之以道。嫂溺。援之以手。子欲手援天下乎と。此の章を考へ見れば、經と權と差別あるに似たり。

答へていふ、漢儒反經合道爲權の說は、此の章を見誤りたるものなり。此の章の禮は禮法を指していへり。禮法は天下萬民日用通行の爲に、時の宜きを計りて、平生急務の事ばかりを定めたまふものなれば、非常の變事には禮法なし。道は太虛に充滿して身を離れざるものなれば、固より平生日用の禮法も道なり。又非常の變に處する義も道なり。權は此の道の總名なる故に、禮法ももと權なれども、事の模樣定まりて迹あ

角ー錐稜の小なるに對して大なる的を謂へり
子曰ー論語子罕篇末に見えたる語なり
上達ー論語に、下學して上達す
孟子云々ー孟子滕文公上篇に見え

違へては、打ち習ふべき理なし。其の如く、初學の受用と聖人の妙用とは天地懸隔なれども、權を準的として工夫をせざれば、明徳を明かにすべき道なし。

問うていふ、子曰。可與共學。未可與適道。可與共適道。未可與立。可與立。未可與權。此の聖言をもて見れば、權は初學の取沙汰すべき事にあらずと見ゆるは如何。

答へていふ、此の聖言は學者面々の至る所をよしと畫して、上達の志厚からざるを戒め、引き立てたまふ主意なり。初學の者權を取沙汰すべからずと宣ふにはあらず。可與共の學は、卽ち此の權の道を學ぶ學なり。可與適の道も、卽ち此の權の道なり。可與立の道も權の道なり。權の外に道なく道の外に權なし。權の外に學なく學の外に權なし。但その受用に大小精粗の差別あるのみ。然る故に此の聖謨の主意は、工夫成就の次第を明して、至極無上の神道を指出して、學者の準的を示したまふものなり。孟子道性善。言必稱堯舜。公明儀曰。文王我師也。周公豈欺我哉。斯の如きの賢範

致知力行―知を致して力めて道を求むる也

能慮―大學三綱領の下に曰く、止まるを知つて後に定まる事あり、定まつて後に能く靜なり、靜にして後に能く安く、安うして後に能く慮り、慮つて後に能く得

くをば、非禮の禮と名づけて君子のせざる所なり。此の非禮の禮をも眞實の禮なりと迷ひたる人、聖賢の行迹禮法に違ひたるを見て疑ひをなし、禮と權とは各別なり等と得心するなり。此の權の字の精義を知らざれば、心學に志ありて致知力行を勵ますといふとも、必ず欣眞落法の地に迷ふべし。大學の能慮は此の權を詳に分別する工夫なり。能得は此の權を得心受用するなり。法ありて法に落ちず、有らゆる所なくして有らざる所なく、定まる所なくして定まらざる所なき、權の字の理味をよく〳〵體認して得心あるべし。

問うていふ、然らば初學の人も權を行ひ候はんや。

答へていふ、權は聖人の妙用にして、初學の人受用する事能はずといへども、工夫準的は必ず目當とすべし。譬へば鐵炮を打つが如し。いなとみが覘ふ所も初心の人の覘ふ所も、的に違ひは無けれども、いなとみは打つ毎にきりもみに中り、初心の人は角をも打ち外すばかりなり。其の中ると中らざるとは天地懸隔なれども、目的の覘ひ所を

蕩ならざる樣勵み務むる也

吐握｜吐哺握髮の略

恂々便々｜論語郷黨篇に、孔子鄕黨に於て恂々如たり、言ふ能はざる者に似たり、其の宗廟朝廷に在るや、便々として言ふ唯謹めるのみ

迹｜一定の規式と成れるをいふ

問うていふ、常の禮法に違ひて道に叶ふは、權の道なりと承るなり。然樣にて候や。

答へていふ、權は聖人の妙用神道の總名なり。大にしては堯舜の禪受湯武の放伐、小にしては周公の吐握孔子の恂々便々、一言一動の微に至るまで皆權の道なり、然るに經に反して道に合ふを權といへるは大いなる誤なり。程子既にその誤を正しめされたり。權は衡の錘石なり。神道を權と名づくる名義は、聖人は天と同體、至誠無息物に凝滯せず跡によらず、獨往獨來活潑々地にして、行ひたまふ所悉く天道の神理に適當恰好なる景象、秤の錘石の定まる所なく、往來滯らずして物の輕重を量りて、適當恰好なるに似たる意あるによりて象を取れり。餘の人は氣質の累ひありて、明德昧く權を行ふ事能はざる故に、聖賢天下の爲に其の時に應じて禮法を定めたまふ。この禮法も、卽ち權の道なれども、既に法に定めぬれば、迹ありて變通の活潑なきに因りて、權と言はずして禮法といふなり。此の意を知らず、徒に禮法の迹を眞實の道なりと心得て、聖人立法の本意權道の妙を悟らずして、禮法に泥みて專に取り行ひ、時中の神理に背

詩經に、上天の載は聲もなく臭もなし
天眞の累ひ—自家の眞面目を毀損する煩累となるをいふ
無逸—志氣淫蕩なるを逸とす、淫

問うていふ、間思雜慮とは如何樣なる心にて候や。

答へていふ、さしたる惡念に有らざれども、思ひて益なく譯もなき事を、繰返し〳〵思ひ出して、天眞の累ひとなるを閑思といふなり。應事接物の際、至善を分別思慮する時に工夫專一ならず、他の念のとりまぜ起りて、感通の碍となるを雜慮といふなり。此の二つは輕き病にて、却つて克治し難きものなり。よく〳〵省察あるべし。

問うていふ、眞儒の生業には、何たる所作を仕るものにて候や。

答へていふ、儒道を行ふ人は、天子諸侯卿大夫士庶人なり。この五等の人の、よく明德を明かにして五倫に交るを眞儒といふなり。然る故に、天子諸侯卿大夫士庶人の所作が、卽ち眞儒の生業なり。五等の所作の外の生業は、天命本然の生理にあらず、明德を明かにし五倫を親しむ。眞儒は五等の中にて貴賤貧富を擇ばず、運命の程に任せて無逸の務を勵まし、外の願ひ毛頭無き故に、富貴にても驕らず貧賤にても諂はず、只天理の眞樂を樂む外は他事なきなり

女の寵愛を求めて餓死したるに似たる故に、寓言の故事を借りて譬へたり。心學に志ある人は、恥ぢ戒むべき事なり。

問うていふ、習ひ染る心とは、如何樣なる心にや。

答へていふ、習ひ染る心とは、生れ落ちてより以來見なれ聞馴れて、思はず知らず何時となく過り染まりたる心なり。譬へば水にて朱を溶けば其の色赤く、綠青を溶けば其の色青くなるが如し。本來水の色は赤くも青くも無けれども、朱と綠青とに交りあやかりて斯の如し。其の如く、本來人心に變りは無けれども、其の生れ育つ國所の風俗、その家の所作々々にあやかり染まりて、種々に變りあり。學問藝能にも習ひ心あり。先づ本心の端的をよく考へ定め、其上にて、習心を吟味して克ち去るべし。朱を溶き赤き色に變じ、綠青を溶き青き色に變じたる水も、澄ましぬれば朱と綠青は沈みて、水の本色現はるゝものなり。況して無聲無臭の心の水は、其の濁り清まし易かるべきにや。體驗簡要なる事なり。

混沌—莊子應帝王篇に見えたる寓話なり

水にて云々—孔子家語に、善人と居るは芝蘭の室に入るが如し、久しうして其香を聞かず、卽ち之と化す云々

習ひ心—善惡ともに傳染するを謂ふ

無聲無臭—

となる、秦十五城を以て代へん事を請ふ、因りて名あり
楚女云々—管子後漢書等に出でたり
虚夸—虚樂の心といふ義
間思雜慮—正大純粹の思念に對する語
寓言—或る教訓を含ませて作成せる說話
色をよくす—巧言令色なり

に淺まし。名の欲を棄つるには、先づよせい心虚夸の念を克ち去るべし。斯の如く吟味體認して名の欲を棄つる事は、根本天理の眞樂を求め、作法を正しくせん爲なれば、心學に志有る者は、名を捨つる程氣隨の奢りなく作法よくなりて、狂風にも入らず佞姦の風にも入らず、君子中行の風に入りて、其の譽求めずして至るものなり。名利の欲習ひ染る心、間思雜慮を一念の微に省察して、良知を致す事第一の要法なり。

問うていふ、楚女の寵愛を求めて餓死したるといふ事は、何たる事にて候や。

答へていふ、是は寓言の故事なり。昔唐土楚國に、其の主腰の細き女を寵愛めされたれば宮中の腰の太き婦人、楚王の思ひつきたまふまじき事を憂ひ、食物を食はずして瘠せなば腰の細くなるべきかと、斷食して餓死したるといふ事なり。世間の名譽を求むる者、其の時代の天子諸侯好みたまふ事、世俗の賞めて持囃す事なれば、是非眞妄の擇なく、其の時に相應する樣に心を持ち、色をよくし言を巧にして、義不義を辨へず、一向に世人の譽を求めて德性の養を斷ち捨て、混沌の死する事を知らず。恰も楚

牛角—等差なく

不慍—論語學而篇の卷頭に見ゆ

連城璧—楚人卞和が荊山の下に獲たる璧、後年趙氏の寶

性を害ひ破り罪に陷る事は變り無きによりて、名と利の欲を牛角に嫌ひて克ち去るものなり。さて名の譽に眞妄本末の差別ある事をよく辨へざれば、名の欲を捨てんと思ふ志ありても、工夫勵まし難し。聖賢君子英雄孝子忠臣の名の譽、其の外一事の譽にても、義理に合ひたるを天理眞實の名といふなり。異端曲學の名の譽、其の外一事の譽にても、義理に叶はぬを汚俗妖妄の名といひて、君子の尊ばざる所なり。妖妄の名を好む心は棄て易けれども、眞實の名を好む心は、本末をよく辨へざれば棄て難くて、人不レ知而不レ慍の位に至り難し。聖賢君子英雄孝子忠臣の名譽、其の外一事にても義理に叶ひたる譽は、皆末と影となり。其の名譽の本と形とは其の心なり。心聖賢に至らで聖賢の譽を取らん事を求め、心に忠孝なくして忠孝の譽を求むるは、譬へば形なきに影を求むるが如く、本なくして末を求むるが如し。其の上我身の中に連城の璧にも勝り、王公の位にも代へざる眞樂有る事を知らず。世間凡夫の筋もなき俗談の譽を求め願ひて、胸を焦し身を苦しめて、楚女の寵愛を求めて餓死したる如きの振舞、無下

狂者―孔子の所謂狂狷の狂なり

名は實の賓―莊子逍遙遊篇に出でたる語

盜跖―周末の大盜

秉彝―詩經大雅蒸氏の什に、民の彝を秉る、是の懿德を好む

風俗の―世間のといふに同じ

は、必ず氣隨になりて作法あしく、其心潔き人は狂者の風に入り、其の心賤しきは佞姦の風に入りぬべし。吟味有るべき事なり。然れども、是は心學に志なき凡夫の上の吟味なり。心學に志しぬる上の吟味は又各別なり。夫れ名は實の賓といひて、其の心に思ひ身に行ふ實あれば、則ち其の名あるものなり。譬へば實は形なり名は影なり。善を思ひ善を行へば善の名あり。惡を思ひ惡を行へば惡の名あり。堯舜孔顏桀紂盜跖是なり。善を好み惡を憎むは、人心秉彝の本然なるが故に、善名を美め尊び惡名を憎み嫌ふは萬古の常なり。然るによつて、生れ附潔き人は、其の名高く顯はし譽を取らん事を好めり。其の心根善を好み惡を憎む秉彝の本然に近くて、利欲に汚れてきたなき凡夫に比ぶれば一位まさりたれども、其の明德明かならず。眞妄本末の辨へを知らず、風俗の過りに習ひ染りて、或は本を捨てて末を專とし、或は眞を背きて妄を取る故に、其の心根のはじめは、善を好み惡を憎むの本性に似たれども、却つて本心を暗まし性命を害ふ、人欲の煩ひとなれり。利欲と名の欲とは、淸濁變りありと雖も、天

ふべし、以て與ふること無かるべし、與ふれば惠を傷る

形氣の欲―同じく慾望なれども、財欲は物質を獲んと望み、形氣の欲は心の滿足を欲する也

簡要―今の肝要に同じ

義の貯へをば賤み嫌ふものなり。況して聖門心學に志ある人をや。私欲に財欲と形氣の欲と少し變りあり。財欲は金銀財寶を澤山に欲しきと思ひ、分も無き高知行を貪る事なり。此の欲は捨て易きものなり。形氣の欲は酒色に耽り溺れ、又は形の便利を求めず過す事なり。此の欲は捨て難きものなり。惣じて欲を棄つる工夫、我心の一念起る所にて、良知をもて省察して克ち去るが簡要なり。此の工夫を愼獨といふなり。よくよく體認あるべし。

問うていふ、先生の教を承るに、利欲を棄つる事はなり易かるべし。名の欲を捨てて世間の外聞を何とも思はざる時は、氣隨になりて作法惡しからん。いかゞ。

答へていふ、善き不審なり。名の欲は利欲に比ぶれば一位潔よし。子細は、名を好む者は財寶を貪らず命を惜まず、汚なき利欲は少しも無き故に、功名に志す人をば中の位と定めたり。性命の學に志しなく、義理を專に守らざる人は、せめて名の欲ありて利欲の無きが好し。眞儒性命の學に志なく、義理を守らざる人、外聞を何とも思はぬ時

代の隠者

黄屋―天子の居を謂ふ

時中―中庸に、君子にして時に中すとあるに據る

桀を放く―湯王伊尹の輔によりて、夏の桀王を伐ち之を南巣に放く

與ふべき云云―孟子に、以て與

ふ所の事は兎もあれ角もあれ、其の心に欲なく、潔清精微の神理明淨にして、其の事時中の天理に叶ふを無欲とし無妄とす。縱令行ふ所義理に當るに似たりとても、其の心に欲あれば無欲に非ず。況して心に欲ある上に、其の事義理に當らざるは、大欲といふものなり。されば心に欲なく、潔清精微の神理明淨にして、その事時中の天理に中りぬれば、帝堯の天下を舜に禪りたまふも、舜の天下を受けたまふも、又湯王の桀を放きたまふも、武王の紂を伐つて天下を救ひたまふも、皆無欲の德行なり。若又堯舜湯武に欲心ありて斯く行ひたまはゞ、皆貪欲の妄行なり。天下の授受取予は至極廣大なる事なり。其の外萬事皆斯の如し。一錢を人に與へ、また人に受くるも、是の心持は同じ事なり。儒者の心法は、艮背敵應不二相與一の位を目當とする故に、上天子より下庶人に至るまで、本分相應の生業を營み、財寶を貯ふるを欲とはいはず。一錢にても義理に背きて取り貯へ、又與ふべきを惜みて與へざるを欲とす。この欲を捨つるは易き事にて、世の中の住居の障とはならず。學問せぬ人も、生れ附廉直なる者は、不

執、我は我意偏僻也

寂光土―常寂光土の略、覺者の眼に映じたる一點の汚なき世界

摩尼輪―等覺の位なり、三惑を斷じ去る義

巣由―巣父許由共に堯

欲とし無妄とす。神理に叶ひぬれば、天子の位に登るも財寶を貯はふるも、位をすて財寶を棄つるも、皆無欲なり無妄なり。神理に背きぬれば、天子の位を棄つるも財寶を捨つるも、位に登るも財寶を貯ふるも、皆欲なり妄なり。欲と無欲と妄と無妄とは、行ふ所の品にはあらで、只その心根に有るものなれば、如何様なる事は無欲なり、又如何様なる事は欲なりと、事の上にて相定むるは、迷ひたる凡夫の心得、又は異端偏僻の法なり。釋尊是の心を悟り召されたらば、王宮を檀特靈山とし寂光土とし、天子の位を摩尼輪の位とし、袞衣玉殿を麻衣草座とし、禮樂刑政を說法として、衆生を濟度召さるべきに、王宮を厭ひ山に入り、袞衣玉殿を厭ひて麻衣草座を好みめされたるは、何たる心ぞや。艮背敵應不二相與一ときは、王宮帝位何ぞ我を汚さんや。山中の靜坐何ぞ我を益さん。袞衣王殿何ぞ我を損せんや。麻衣草座何ぞ我を潔くせんや。王氏の詩にいふ、嘗是巣由淺。始知堯舜深。蒼生豈有物。黃屋如二喬林一と。この詩艮背敵應不二相與一の意味をよく巧に明したり。堯舜の禪授湯武の放伐、皆この心なり。行

釋尊云々—釋迦の王位を棄てし城を出でたるを指す

意必固我—論語に、子四を絶つ、意なく必なく固なく我なしと、意は私意、必は期必、固は頑

問うていふ、明德を明かにするには、私欲を捨つるが第一の工夫なる由、尤も欲心は汚なきもの故、捨てたき事なれども、欲を捨てては世の中の住居成り申すまじきなり。如何。

答へていふ、それは異端偏僻の教に、釋尊の天子の位を棄て、龐居士が家財を捨てし如きを、無欲なりといふを聞習ひて誤る疑なり。儒道には、その樣に筋も無くて、位を棄て財寶を捨つるをば、氣違ひの欲なきに譬へて大いに嫌へり。位に在るを欲とし、位を捨つるを無欲と思ふは、いまだ明德暗くして、位を好み財寶を貪る心根殘りて、外物に凝滯し便利揀擇の私ある故なり。聖人の心は、艮背敵應にして、意必固我の私なきによりて、富貴貧賤死生禍福、その外天下の萬事、大小高下淸濁美惡に於て、毛頭好惡揀擇の情なく、只滿腔滿目一貫皇極の神理ばかりなり。然る故に、位に登るをも財寶を貯ふるをも、欲ともせず又無欲ともせず。位を棄て財寶を棄つるをも、無欲ともせず又欲ともせず。只天道の神理に背くを欲とし妄とし、天道の神理に叶ふを無

考へて、儒教に專ら神明を信仰する事を得心すべし。日本神道の禮法に、儒道祭祀の禮に同じき事多し。其上三社の神託の意義、儒の神明に仕うまつる心持に異なる事なきなり。さて神明に仕うまつるは、己が明德を明かにし、其位々の作法あれば、その國の風俗を本とし、天秩の祭祀の禮に考へ合せて、よく齋戒して信仰すべき事第一なり。

問うていふ、明德を明かにする工夫は、如何樣に力を用ひ候や。

答へていふ、明德を明かにするには、良知を鏡として五倫に交り、私欲を去るに在り。良知とは、赤子孩提の時より、その親を親しみ長を敬ふ善念を根本として、善惡の分別是非を眞實に辨へ知る德性の知をいふ。是の良知は、磨而不レ磷。涅而不レ緇の靈明なれば、如何なる愚痴不肖の凡夫の心にも有るものなり。故にこの良知を工夫の鏡とし種として、五倫に交り私欲を去れば、本體の明德に復するなり。猶先覺にたよりて講學あるべし。

天に配し、文王を明堂に宗祀して以て上帝に配す、とあるに因れり

大宗伯―周禮春官に出でたり、吉禮を以て邦國の鬼神に事ふるの職也

三社―伊勢賀茂春日

孩提―幼稚の稱

磨而不磷―論語陽貨篇に出づ、磷は薄らぐなり、涅は黒く染むる事

外に有る故に、至理を知らざる人は、五倫の道といへば皆外に有りて、我心の中に無きものなりと思へり。淺間しき迷なり。天地萬物皆神明靈光の中に造化するものなるに依りて、我が明德明かなれば、神明に通じ四海に明かなる故に、天地萬物皆我が明德の中に有るものなり。迷へる人は、心は身の中にばかり有ると思へども、根本は心の裡に生れ出たる身なり。然る故に悟りたる眼には、内外幽明有無の差別なし。五倫の道を外と見て、内外幽明有無の二見を立つるは、悟に似たる迷なり。皆五常の性德より發するものなる故、率レ性を道ともいふなり。

問うていふ、神信仰は致したるが好く候や。

答へていふ、是亦五常の性に本づきて、神明を信敬するは儒道の本意なり。然る故に祖を天に配し父を上帝に配し、神明に通ずるを孝行の至極なりと、孝經に說きたまへり。周禮曰。大宗伯之職。掌レ建ニ邦之天神人鬼地祇之禮一。以佐レ王建ニ保邦國一とありて、祭祀の事を委しく現はせり。又論語にも、祭レ神如ニ神在一といへり。是等の聖言をよく

五常は内、五倫は外と謂ふ也、内外は修爲上より分つ

靈光—勝れて靈妙なる作用といふ義

率性—中庸に、天の命之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ひ、道を修むる之を敎と謂ふ

孝經—周公の后稷を郊記して以て

五典—尚書舜典に、愼しんで五典を徽くし

交泰—相接し相交るに平穏和睦なるをいふ

五倫の外—

道恒に有りて、始めなく終り無きものなれば五典といふ。典の字はつねと讀む字なり。五典を身に行ひ、人を教化するを五教といふ。五典の心の中に備りたるを五常の性といふ。親と子と一倫なり。君と臣下と一倫なり。夫と妻と一倫なり。兄と弟と一倫なり。友達の交り一倫なり。是を五倫といふ。人間の次第差別この五つに極まれり。世間に五倫に洩れたる人は一人もなく、五倫に洩れたる事は一事も無き者なり。故に五倫の外に道なし。親は慈に子は孝にして、よく相愛するを親の道といふ。君は仁に臣下は忠節を盡して、君臣よく交泰するを義の道といふ。夫は義に妻は順にして、夫婦よく相和するを別の道といふ。兄は惠に弟は悌にして、兄弟よく相睦じきを序の道といふ。友達の交り互に僞なく、賴母しく相樂しむを信の道といふ。此の親義別序信の五つを五典といふ。人間の心に仁義禮智信の五常の性備はりて、一身の主本たり。卽ち明德なり。此の五常の性感通して五典の道と成る。父子の親は仁なり。君臣の義は則ち義なり。夫婦の別は知なり。長幼の序は禮なり。朋友の信は卽ち信なり。五倫の

徳を明かにするに在り—

修身齊家—大學の初章に出でたり

推擴云々—中庸に、之を放てば六合に彌り、之を巻けば密に藏せらる

太虚—大空をいふ

三才—天地人

皆和睦して恨なく、神明に事ふまつれば神明納受したまふ。故に身を修むれば身修まり、家を齊ふれば家齊ほり、國を治むれば國治まり、天下を平かにすれば天下平かなり、推し擴むれば天地の外に彌り、取收むれば我が方寸の密に藏る。誠に神妙至極の靈寶なり。是故に、是の寶をよく守れば、天子は永く四海の泰平を保ち、諸侯は永く治國の榮花を享け、卿大夫は其の家を興し、士は名を顯はし位を上り、庶人は財穀を積み畜へ、その樂を樂しむものなり。是の寶を棄てては人間の道立たず。人間の道立たざるのみならず、天地の道も立たず。天地の道立たざるのみならず、太虚の神化も行はれず。太虚三才宇宙鬼神造化生死、悉く是の寶にて包括するなり。是の明德を明かにするを、正眞の學問といふなり。

問うていふ、五倫の道其の名をば承はれども、委しき理をば聽き候はず。日用の急務なれば、審に承りたき事なり。

答へていふ、倫は次第なり。人間の次第差別五つあり。故に五倫と名づけたり。五倫の

の自利說
老氏―老聃の無爲說
神易―易經を指す
明德―大學の初章に、大學の道明

き口に說くばかりにて、德を知り道を行はざる者なり。墨氏は儒道の至公博愛の仁を學び損ひて、本末先後の序を亂る者なり。楊氏は爲己愼獨の密を學び損ひて、一貫の眞を失ふ者なり。老氏佛氏は、無方無體の神易の皮膚を見て、中和の骨髓を失ふ者なり。是の中にて、日本に流轉して弘まりたるは、俗儒と佛氏と二つなり。二つの中にて、世俗の專ら學官といへるは俗儒の記誦詞章なり。俗儒の學問は、正眞の學問に殊の外近けれども、毫釐の違ひにて千萬里の誤となれり。愼み擇ぶべき事なり。

問うていふ、記誦詞章の學問とは、如何樣なる學問にて候や。

答へていふ、經史諸子百家の書を殘らず讀み覺え、文を書き詩を作り、口耳を飾り、利祿の求とのみして、心の驕慢深きを、俗儒記誦詞章の學問といふなり。

問うていふ、正眞の學問は、如何やうなる學問にて候や。

答へていふ、我人の身の中に、明德といへる天下無雙の靈寶あり。是の寶は、上は天道に通じ下は四海に明かなる物なり。然る故に、是の寶を用ひて五倫に交はれば、五倫

得方―得意とする方也

墨氏―墨翟の兼愛說

楊氏―楊朱

せて、人を誑かすものにて候や。

答へていふ、然樣に汚なき心一筋にては無けれど、生れつきと習ひとに樣々變りあるによりて、心ならず得方へ片向になりて、その心には、我が學ぶ所を正眞なりと眞實に思ひぬれども、正眞を學び得たる人の眼より見れば、似て似ぬ事故に贋とは申すなり。正眞を學びても、志に少し違ひあれば、覺えず傍道へ行き贋となれば、贋を學びて千萬里の違ひとなる事、推し明めらるべし。

問うていふ、贋の學問は何々にて候や。

答へていふ、先づ敎と學問の本意を能く辨へて、正眞贋の沙汰を明むべし。敎も學問も、皆天道を根本準的とする故に、唐土にても夷國にても、世界の中にて敎へ學ぶ所の道、天道の神理に叶ひぬるを正眞の敎とし學問とし、儒敎と名づけ儒學といふなり。天道の神理に背きぬるは贋の學問なり。其の中にてよく似たる贋は、俗儒、墨氏、楊氏、老氏、佛氏等なり。俗儒は儒家の書物をよく讀み、訓詁を覺え記誦詞章を專とし、耳に聽

る者は上也、學んで之を知る者は次也、困しんで之を學ぶは又其の次也、困しんで學びず民斯を下と爲す

伏犧―支那古代の帝王太皞伏犧氏

一度は―漢より唐に至る諸代を指して謂へるか

爲さで叶はぬ事なれども、正眞の學問は、よく知りて敎ふる人稀なれば、學ぶ人も少なし。世間に取囃す學問は、多分贋にて、贋の學問をすれば何の益も無く、却りて氣質あしく異風になる者なり。學問に正眞贋の分ち有る事を辨へざる人は、不審も尤なる事なり。

問うていふ、學問は皆一つなりとこそ思ひけるに、正眞と贋と二色ありと仰せらるゝは、如何なる差別にて候や。

答へていふ、正眞の學問は、伏犧の敎へ初めたまふ儒道なり。昔は敎も學問も此の正眞の外は無かりしに、世の末になりて、何時となく唐土にも夷國にも、學問の贋數多出で來てより、贋勝になりて正眞は衰微するなり。唐土にも、一度は贋物ばかり時めきて、正眞をば失ひたる事あり。正眞を學びてさへ學び損ひ有るものなれば、況して贋の學問をしては、心立作法惡しくなりぬる事、尤なる事なり。

問うていふ、贋の學問とやらんは、刀脇差などに贋ある如く、正眞の名を借り模樣を似

形氣―氣質の宛字

其餘云々―論語に、子の曰く、生れながらにして之を知

藤樹先生精言

讃岐橘　明編次

後學　同　田村　盈　同校

江戸島　保武

問うていふ、世間の學問する人を見るに、さして學問のしるしといふべき益なし。却つて形氣惡しく異風になる人有り。所詮學問はせぬがましかと存じ候は如何。

答へていふ、人間の生れつき、樣々ありといへども、大體のおほわけは三品につゞまれり。聖人賢人凡夫なり。聖人は生知安行とて、學問せずして德を知り道を行ひたまふ。其餘は、學問せざれば德を知り道を行ふ事能はず。人間に生れて、德にそむき道を離るれば、人面獸心とて、形は人間なれども心は鳥獸と同じ事にて、世俗の諺に、人の皮を被りたる犬といへる如く、いと淺間しき事なれば、學問は人間第一の急務にして、

むは、人ごとにある心なれば、貪るも必ず財あつまらず。廉直も必ず財を失はず。その上貪欲には餓死の報あり。廉直には富貴の報ひある天理をよくわきまへなば、誰も貪欲のけがれ有るまじ。才美はじめは兩牪の貪欲によつて、財あつまると惑はんずれども、婦の廉直にして、家のいよ〳〵富めるを見る時は、兩牪の貪欲によつて福分の劣れる事を悔ぬべし。されば貪欲の人には、金銀米錢をほしゝ惜しゝと思へる念々積り堅まりて、心中の積となるを錢癖となづく。この積いできぬれば、聖人の教化も入りがたし。才美にはこの積いまだ無かりけるにや、よく金言を信じ、過を悔い善にうつり、終に清福を得たり。此故事を見聞く人、才美にほまれを專らにせしむる事なかれ。

鑑草 終

さいばん—取りさばき
意趣—理由といふ程の義
及第—官吏登庸試験に及第する也

もちがたき所帯ならば、我さいばんの及ぶ所にあらず、いとまを給はりて家に歸らんと請ふ。才美その意趣をとへば、婦こたへて、翁の兩升をつかひたまふところ、天道にそむきぬれば、必ず天の責ありて、此家やぶるゝのみに非ず、子孫までもその報恐ろしく侍ればかく申なりと言ふ。才美驚き恥ぢて、左あらばその方の心にまかせて、向後兩升を敗り棄つべしといふ。婦答へて、兩升をつかひ給ふ年數はいくばくぞやといふ。二十餘年に及べりと答ふ。婦人申しけるは、今より二十餘年の間、ちひさき升にてとり大きなる升にて出し、今までの科をつぐのひてのち、升一つにし給はゞ、とゞまりて家をうけ取べしといふ。才美悔悟つて、兎も角も汝がさいばんに任すとて家を渡しければ、婦うけとりて、廉直に家を治めぬれば、その家日々に榮え、生める子二人まで、少年にして及第して高官にのぼりてけり。

よのつねの人の心得には、貪る時は財積り、貪らざれば財あつまりがたしと思へり。此習ひ深きによつて汚なく惑へり。廉直をいさぎよしと好み、貪欲をきたなしと惡

周才美—列女傳に出づ

きてけり。陸錦衣大いに奇特なりとして、銀一兩米一石あたへて、驢馬を子の手へかひとらせけり。

貪る者の習ひにて、貪れば己に益ありと思ひ、却つて大いなる損ある事を知らず。飢饉の年餓死するもの、皆貪欲のともがらなれば、その大いなる損一つなり。貪欲の人をば、衆人にくみあなどる事、犬馬の如し。これその損二つなり。貪欲の人一錢の損得にも焦熱凝氷の苦痛あり、これその損三なり。存生の内かく損あるのみにあらず、死してのち牛と生れ驢馬と生れて、畜生道の苦びをうく、これその損四つなり。廉直の人には此損一もなくして益あり。よく損得をわきまへて、貪欲をいましむべき事なり。

○周才美か婦、才德すぐれけるが、才美家をわたさんとて、斗を二つとりいだし、此小き斗にては人にわたし、大きなる斗にてとり納むべし。そのうけとり渡しのてだてはかくすべしと、いとねんごろに教へければ、よめうけごはずして申しけるは、左樣に

借状—借用證書を作る也

一つ橋—獨木橋の事

の某といへるそうめんやなりと、さだかに語りて夢さめぬ。その子おどろき覺て、件のそうめんやを尋ね行きて、ゆめ見る事を何となく問ふに、すこしも違はず。此驢馬一兩二錢に直なつて、すでに渡すべきに究まりぬといふ。折ふし子の手に四錢ならではかねなし。殘りをば借狀をして、重ねて償んと乞ひぬれ共、ゆるさゞりければ、夢の告のありさまを一々語りて、歎きもらひけれども、そうめんや少もうけごはず。あたりの聞人も眞しからずと疑ひ、かの者に驢馬を見せければ、驢馬此者を見るとひとしく、涙を流し歎き告るふり有り。見る人あはれに思ひ、錢を出して合力しぬれども、一兩二錢に足らざれば、そうめんや許さず。この子再三なげき求めて止まざるによつて、そうめん屋申しけるは、この驢馬日頃一つ橋を渡らず、汝是をひいてわたりなば汝に與へんといふ。此もの驢馬に向つてかくと告げければ、驢馬をどりて悅ぶ色あり。この者驢馬をひいて一つ橋を渡りければ、難なく越えてけり。陸錦衣この事を聞て、驢馬と人とを喚びて是を試みるに、子のかしこまるを見て、驢馬も蹄を伏してひざまづ

を以て人を衡く也、馬に人喰といふに同じ

禍淫―天道の善に福し淫に禍する事

人ならでは無かりしが、此娘を見て馴れ懐くのみならず、涙を流しければ、娘もあはれに思ひ、立よりぬればいよ〳〵この牛泪を流し、娘を舐りて只物を言はざる計の有さまなり。娘すなはち價をもつて買とり、家に歸り養ひ殺してけり。

貪欲の人は、損得の苦しび牛の田を耕にひとし。よのつねの世俗も、きたなく貪るをば人畜生といひおとしめぬれば、生をかへてはじめて畜生と成るにあらず。今生すでに人の皮を張りたる畜生なり。かく淺間しき沈魂滯魄なれば、むすめに告る程の通力はあるまじけれども、禍淫の妙理をあきらかに示さんために、神明のかれに代り告給ふなるべし。謝氏一人かくあるにあらず、世間貪欲の人は皆一例なり。きく人よく眼をつくべし。

○崇文門のほとりに商人ありけるが、或夜のゆめに其母告けるは、われ存生の時、そうめんやのかけをまげて濟さゞりけるが、今その家の驢馬となりて、これを償ふ事數年、今我を屠る者に賣りなんとす。汝母を思はゞすみやかに來りて命をあがなへ。某の町

の臺灣、鳳山の舊稱

人つき—角

て言けるは、われ存生の時、小さき舛にて酒を賣り、大きなる舛にて價をとり、あまつさへ酒のはかりをわろくせし報いに、今北山下の人家の牛と生れ、法界寺の夏侯師といふものに買とられ、城南の田を耕しぬ。その苦痛つねならずと、語ると覺えて夢はさめぬ。娘まことしくは思はざれ共、さだかなる夢の告なれば、深く歎かしく涙をながし、その夫にしかじかと語りぬ。夫さのみ聞も入れざりければ、娘も何となくうち過ぎぬ。その明る年正月に、法界寺の比丘尼かの娘の家へ來りぬ。むすめありし夢物語をして、夏侯師といふ人やある。その家に牛や有ると問ひければ、比丘尼答へて、げに夏侯師といふ人あり。しかも此家に牛も見えぬ。その牛の來る所はいづちとも知らずといふ。娘不思議に思ひ、彼比丘尼とともに夏侯師が家にゆきて、牛の來りしところを問へば、まさしく北山下より買來り、いま城南の田をたがやすといふ。娘ゆめの告に露たがはざる事を思ひあたり、涙を流し牛を求め得てかへらんと請ふ。夏侯師あやしく思ひて、娘を以て牛屋へ行きければ、此牛すぐれたる人つきにて、使ふ者一

過ぎまじきや—長きに過ぎはせずや

万年縣—今

上にありける二人の前にひろげおきて退く。衣冠の人この帳を讀みて、ひとりの官人、汝すはひに玉をかへす事を覺えけるやと問ふ。郡君よく覺えぬと答ふ。又一人、汝が壽限この時にあたりぬれども、件の陰德あれば、二十年の命を延ぶといへり。一人の曰、二十年までは過ぎまじきやと。一人の曰、女人は貪欲深き者なるに、玉をかへしぬる廉德すぐれて奇特なる事なれば、多しといふべからず。いそぎ歸すべしとの仰にて、また車にのり門を出ると覺えければ、驚きさめぬ。病も程なく癒えてかく語りけるが、その後二十年にあたるとし、身まかりてけり。

何ほど貪心ふかき人なりとも、一年の命を千兩にもかへなんや。壽命長遠のためとて、そくばくの財寶をつひやすは、よのつねの人の習ひなり。此等のためしにて、壽命長遠の祈禱、廉直より大なるはなしとよく得心して、貪欲をすて陰德をはげむべし。

○万年縣の元氏が妻の謝氏、身まかりてのち龍朔元年に至りて、或夜その娘の夢に託し

恍惚として精神憒せる也

此金云々―金を受けん程ならば爭で玉を返すべきと也

るさまにあらず。郡君あやしく思ひ語られけるは、いかにして左樣に衰へけるぞ。いつぞや來りし時、玉を一つおとしゆきぬ。返さんとおひかけぬれども、行方知らざれば、わが手にをさめ置きぬ。今汝さいはひに來れり。かへし與ふとて玉を指出されけり。すはひ驚きよろこんで、淚をながし申しけるは、此玉を失ひし所を思案すれども、思ひ當る方なく、了簡に及ばずして、玉ぬしの方へ、金子百四十めにて侘れども、その主ゆるされず。あまりの悲しさにかくやつれ侍りぬ。今さいはひに君のめぐみありて、此玉を給はるは我命を給はるなり。たゞに申しうけんもあまり空恐ろしければ、金子六十め奉らんとて、金子をさゝげ玉をうけぬ。郡君あざ笑ひて、此金を受けんとならば、いかんぞ玉をかへさんやとて、金子をもかへし與へてけり。其後ほどありて、郡君病のゆかに臥しぬ。病中の夢に、車にのりて廣き野を行きすぎ、大いなる官府に至りけるが、尋常にすぐれてたけ高き人二人、衣冠正しくして堂上に坐せり。郡君を請ずる人ありて、郡君をひいて堂下に至りぬ。事をさばく奉行とおぼしき人、大帳を持て、坐

すはひー仲買

ほれ〴〵ー

れば、廉にして聚まるべからざる理なし。いかんとなれば、大抵すこしも取るまじきものを、押してとるは盗賊なれば、貪る者もとる事あたはず。かならず與ふべき者を與へざれば、忽ち世間の交りならざる故に、貪る者もあたへざる事能はず。たとへば百錢とるべきをむさぼれば百三錢五錢とり、百錢與ふべきを貪れば九十七錢五錢あたふる如きの損得なり。此三五錢の内の損得を、塵積りて山となるとむさぼり、財寶につれて、禍ひもまた山の如くあつまる事をわきまへず。燭におもむく蟲の如くなるは、まことに哀にあさまし。

○李郡君は、女なれども賢德あり。或時玉をあきなふすはひの媼、玉をたづさへて來り、歸る時に玉を一つおとして去ぬ。そのあとにて郡君おとせる玉を見つけ、急ぎおつかけさせられけれども、行方しれず。宿をも知らざりければ、返すべき樣なくして、尋來る時に與へんとて、よくをさめおきぬ。久しく程ありて彼すはひ來りけれども、玉の事をもいひ出さず。その姿を見れば痩せ衰ろへ、精神ほれ〴〵と成て、前かど來れ

しはくば云云—しはくは吝也、吝ならざれば財寶集積せざる義なるべし

をうく。まことによく辨ふべき事なり。或曰、道理はいづれの處にかあるや。曰、わが心に萬物一體の仁愛あり。これを道理の本とす。此心にて分別して與ふべし取るべし蓄ふべし施すべしと知る心、すなはち道理なり。此道理にしたがひて財を用ふれば、福分厚きものは財用ともしからず。福分うすき者も飢寒の患なし。或曰、むさぶらずんば財あつまり難きに似たり。されば諺にも、しはくば心得よ、富は心得とこそ。曰、それは財の本意をわきまへず、妄りに金銀をあつめ、箱に入れて富と思ひ得と思へる惑よりおこる疑ひなり。金銀を集めてわれも使はず、人にも施さゞるをば、古人かねのやつことおとしめり。夫金銀を重寶とするは、我用を達し難儀をすくはんとなり。然るにむさぶる者は金銀を惜しむ心深きによつて、我用にもつかはずして箱に入れ藏にをさむ。この不義のたくはへによつて、種々の難儀おこりぬれば、金銀の重寶たるところ一つも用にたゝずして、石瓦にひとし。かく聚りてもせんなき物を、あつめんと願ひて貪心を棄てざるは、愚痴の至極なるべし。且廉と貪とその得失わづかの事な

報なからんや。されば小人の貪るは、おのれがためを思ふより起りてその得あるに似たり。然れども人間これをにくみ、天道是を棄てたまひて、つひに恐ろしき報いあれば、その損すくなからず。おのれが爲を思はざるなり。君子の廉は己がはかりごと愚にして損あるに似たり。然れども人間これを愛敬し、天道是に與し給ひて、つひにいみじき福ひあれば、その得甚多く、我ためのはかりごと賢きなるべし。貪るは得に似たる損なり。廉は損に似たる得なり。夫は陽に屬して發散を主とすれば、財寶をもつかひ施す職なり。婦人は陰に屬して收斂を主とすれば、財寶をもたくはへ積む職分なり。然れども陽中に陰あり。故に夫は財を生ずる本をつとむ。陰中に陽ある故に、婦人は家内に財用をほどこす。陰陽の發散收斂、みな大極にしたがふ故に、財寶を施すもたくはふるも、皆道理に從ふを廉とす。廉なる者はよく蓄ふるといへども、惜しむ心なき故に、人にあたへ人に借すに味ひよく、人の感ずるところあり。むさぶる者は蓄へ深ければ、惜しむ心甚しき故に、人にあたへ人に借に味ひあしくして、人の恨

大極―天地に先だちて生ずる無形の條理也

生民—人民といふに同じ

○廉貪報

○廉はむさぶらざるなり。貪はむさぶると讀めり。欲ふかくきたなく財寶をゑぐるをむさぶるといふなり。夫財寶は天下の生民を養はんために、天地の生じたまふ物なれば、かりそめにも貪り私すべき物にあらず。廉なる時は汚なき貪心なし。貪る心なければ、財寶を己一人の私用にせんとの欲心なし。欲心なければ、蓄へるも施すも皆道理にしたがひ、おのれをも利し人をもすくふ公用となつて、萬物一體の心昧からず。萬物一體の仁明にして、財寶に私用の貪りなく、人をすくふは天道の與し給ふ所なるによつて、必ずいみじき報あり。もし此本心をうしなひ、財寶をおのれ一人の私用にせんとむさぶる時は、萬物一體の仁おほひかくれて、たゞ己れが身の爲ばかりを偏に慮りて、人をそこなふ事をかへり見ず。わづかの私欲さへ天道の容れざる所なるに、財寶を私用にむさぶり、人をそこなふ心行は、虎狼のたぐひなれば、などか恐ろしき

三從―儀禮の喪服篇に、未だ嫁せざれば父に從ひ、既に嫁すれば夫に從ひ、夫死しては子に從ふ

あやかる―感じ肖る

凡夫のならひにて、妻のことばに惑はざるはなし。されば父子兄弟一族の和睦せざるは、みな婦人の言なしよりおこりぬれば、一門の和合する事、婦人のいひなしにて一入たやすかるべし。婦人は三從の義あるによつて、自ら善をなすよりは、夫をすゝめて善を爲さしむるを第一とす。その功德の報も、夫を善にすゝむるは、みづから善をなすに一倍せり。人間の善行をたくらぶるに、父子兄弟一族の間に於て、仁德をおこなひ和睦するより大なるはなし。人の妻たるもの淑睦のまことあれば、夫にすゝむるところ、皆淑睦の善行にあらずといふ事なし。夫は妻の言なしにあやかるならひなれば、必ず是によつて夫の仁德明かにして、一門和睦すべし。その身の淑睦のみならず、夫をも淑睦に勸化すれば、その功德無量にして、その報を受くる事も又量るべからず。淑睦の本心をくらます魔障しな多しといへども、損德をはかる貪心と、勝ことを好む滿心より大いなるはなし。我滿の勝心を消して、損得のむさぶり淺くば、淑睦日々に進みなん。よくかへりみて力を用ふる所を知るべし。

かるべしといひければ、夫も強ふる事能はずして止みぬ　然れども弟強く請ふてやまず。兄嫁やむ事を得ずして、養へる子は與ふべきことわりなければ、今まうけたる子を與へんといふ。弟辭退深かりけれども、遂にまうけたる子を與へけり。養子實子もろともによく育ち、才徳勝れて官にのぼりぬ。二人の子供に男子二人づつまうけけるが、いづれも才徳人にこえて、皆位高く榮えてけり。

子の數多きだに、我子に私あるは婦人の常のならひなり。いはんや稀にまうけたる子をや。此兄嫁淑睦の心まめやかなる故に、兄弟妯娌一體のいつくしみ暗からず。我うちに育つると、弟の家に育つると、同じく思ひなすによつて、たまくまうけたるひとり子を弟にあたへ、我が身は養子をそだてぬ。まことに有りがたき仁德なれば、などかその報なかるべきや。婦人のその子にわたくしするも、わが子を愛する事の深きより起れり。私なくして我子の榮えなん事をわきまへなば、たれも淑睦くらかるべからず。よくく思ひとるべき事なり。

うけごはずして—肯はずして

なむ事を厭ひて、いつとなくその心やはらぎ、後には二人のよめにひとしく情深かりけり。これより家内和樂し、王祥王覽もろともに高官にのぼり、子々孫々に至るまで、富貴その家をはなれず、今に至るまで、家門めでたく榮えけり。

朱氏の虐惡よのつねならざるさへ、淑睦の德にはやはらぎぬ。ましてさもなき同輩の人をや。されば王覽夫婦の悌睦によつて、朱氏の靈明ひらけ、家内和睦し、代代の富貴をもとゐし開きぬれば、至誠の功德無量なる事、よくわきまふべき事にこそ。

○章氏兄弟、壯年をすぐるまで子なかりしかば、一族の內をえらびて、兄一子をやしなひぬ。そののち程なく男子を一人まうく。弟申しけるは、兄に實子生れぬれば、養子をば吾にあたへ給へ、養ひ立てんと請ひうけけり。兄その妻にかくと語りければ、妻うけごはずしていひけるは、子なくして人の子を養ひ、子をまうけて棄てなん事、まことに道なき事なり。かく道なき心行あらば、うまれたる子も冥加なくして育ちがた

王覽—晉書列傳に出づ、蒙求にも見ゆ

が仁愛の誠なきにこそと自ら咎めて、かりそめにも人を尤めず、いくたびも人にまけて、たゞひたすらに淑睦をつとめ、我滿の燄をけし、堪忍ふかく利欲あさくば、いかなる惡人にても感動せざるは有るべからず。たとひ其人は感動なくとも、かたへの人は良知くらからざる故に、我淑睦をほめうやまひ、かれが横逆をにくみ嫌ふものなり。人のよく思ひ入るゝところは、すなはち天道の與し給ふところなり。天道人間もろともに吾にくみせん事、まことにたれも願はしき事なれば、こゝを思ひなぐさみて、人のつれなきを忘れなば、淑睦の心行日々にすゝみなん。

○王覽の妻、その兄よめに淑睦まめやかなる事たぐひなし。その姑め朱氏のために、兄の王祥は繼子にして、弟の王覽は實子なりければ、王祥の妻にはつれなくあたりて、王覽の妻をばいつくしみいたはれり。兄嫁につれなきあたりある時は、王覽の妻なげき悲しびてふかくわび、兄よめに似合ざる業をあてがはれぬる時は、王覽の妻もともどもいとなみぬ。朱氏王祥が妻につれなくあたらんとすれ共、王覽の妻の共に歎きいと

天屬―連枝同氣になるをいへり

綿に針―元の戲曲中に、綿裏針の語あり、是に出づるか

人のあたり―人の我に向ひ當るにつけて

の福ひ來れり。これ後來の福報なり。然れども世間に淑睦の人まれなるは、兄弟は天屬なれば互に意念なし。あひよめ小じうとめは、人合なるによつて互に他人なり。心許すべからずと思へる意念むねに塞がる上に、互に才を爭ひ容儀を爭ひ利を爭ふ。我滿邪欲交るによつて、一體の仁おほひかくれて、互にそねみ爭ふ心根ありて、上つらは親しきふりなれども、綿に針をつゝむといへる諺の如し。此心を種として、色々見苦しきわざども出來て、甚しきは仇讎の如く、相爭ひ相そこなひて、互に限なき苦しびを受くるのみならず、家門のをはぢあらはし子孫の禍ひを基す。されば苦びと禍は、誰もいとひ避くる所にして、樂みと福ひは、たれも好み願ふところなりといへども、吾心にて苦樂禍福を作り出す理りを知らず。間に粗淑睦の心ありといへども、人のあたりにさかだちて、吾には咎なけれども、人のつれなければ等と惑ひて、ともに本心を失ひ、同じくあさましき心行あり。よく禍福損益の理りをわきまへ、淑睦の心行をはげみ、もし人のあたり道なき時は、吾よきに人のあしきはなき世なり。たゞ己

あひよめ―夫の兄弟の妻

鑑草 巻之六

○淑睦報

○淑睦はよく親しむとよめり。あひよめ小姑、その外一族に仁愛の誠ある事なり。心の本體は萬物一體の仁具はるものなれば、惑ひなければ、親しみなき人をもよく愛する理りあり。ましてあひよめと成り小姑となりぬれば、骨肉同胞の親みあるをや。萬物一體の仁心を明かにし、人はいかやうにもあれ、吾は何の心もなく、ひたすらに親しみ和ぎぬれば、人も又岩木ならざれば、感動するところありて、仁愛をもて我を親しむものなり。かくあれば、あひよめ小姑その外一族に至るまで、皆骨肉同胞のしたしみとなりて、吾は人のためを思ひ、人は吾ためを思ひ、あつまり居ては兄弟和合のたのしびあり。わかれて家にある時は、とかうの氣遣なく安堵の思ひをなせり。これまづ淑睦眼前の福報なり。かくの如く淑睦まめやかなれば、家門和睦して、卒に子孫

進み、遂に相位に登る、詩に盛名あり

仁徳は人々固有のものにして、元母のひとり得る所にあらざる故なり。

市町にて―孟子公孫丑上篇に、北宮黝の勇を擧げん、一毫を以て人に挫めらるゝを思ふこと、之を市朝に撻たるゝが如し
元稹―元和以來官頻に

れ、官に入りぬ、奉公のはじめ俸祿すくなうして、まかなひ成りがたかりけるが、常に衣食をあたふるに、先孤弱なる者を始にし、うとく賤しきものを次にす。何事も公にして情ふかゝりければ、親き者はよろこび疎き者は近づきぬ。かく家を治むる事二十五年、家人ををしへ戒る事を專にして、過ちありてもむちうつ事一度もなく、顏色を正しくして敎へ戒るばかりなり。かく仁にして烈しからざれども、その戒を受る者の耻恐るゝ事、市町にてうたれたるが如し。家人みなその德に化し、奴に至るまで互に怒り爭ふ聲を聞く人なし。後に元稹宰相の位にのぼり、並びなく榮えてけり。一念の仁愛すら福報あれば、かく有がたき寛仁の德によつて、家內の僕まで和睦しぬれば、宰相の福ひその家に來る事、必然の理りなれば、奇特といふべきにあらず。されば人の不仁なるは、眼前の小利を貪るより起れり。眼前の小利と宰相の福ひと、いづれが願はしかるべきや。よく思ひたくらべて、眼前の小利を貪らず、大いなる清福を求めなば、貪欲の毒心滅し、元母の仁心たれも明かなるべし。いかんとなれば、

惑へる執念

きは、邪見妄執の甚しきものなれば、胡泰が母愚痴の妄執によつて、畜生と生れぬ。然るに猶存生のねたみを忘れざるありさま、あはれに淺間し。後の妻かくあらたなる報を見ながら、是を殺しぬる心、一しほ深き妄執なれば、身後定めて畜生の苦みをうくる事いと深かりなん。かく眼前に報を見ながら、こり戒むる事なければ、傳へ聞人のうたがひをなし、惑をわきまへざるも宜なりともいふべきにや。然れども先覺この理を明し、そのためし世に絶えざれば、よく考へみづからかへり見て、心中にたくはへぬる畜生の種をたゝん事、その人の幸ひなるべし。今の世間の畜生業報のもの、定めて多くあるべけれども、人語をなさゞるによつて現れざるなるべし。誠にあはれぶべし恐るべし。

元寛―盛唐の人、妻は鄭氏

○元寛の妻、孝悌の德まめやかにして、先祖の祭祀に誠を盡し、且文學もさとかりき。元寛世をはやう去られけれども、節を守り、その二人の子をそだて、みづから詩書ををしへ學問を勵ましければ、兄の積も弟の積も、ともに學問成就して、皆高第にあげら

かしはー羽の褐色なる鷄
うはなりー後妻をいふ
妄執ー迷ひ

人をなやましける罪によつて、今鷄と生れぬ。明日軍士の來る時、かしはの雌を持來るべし。これ吾今のすがたなりと、さだかに聞えて夢さめぬ。胡泰あやしく思ひけれども、さのみ心にも掛けず、夜明ぬれば用ありて外へ出ぬ。その跡に軍士の來りて宿をとりけるが、にはとりを一つ携へ來りぬ。その家このには鳥を受取りて、殺し料理せんとはかりければ、此庭鳥人の如く言て、われを殺す事なかれ、しばらく胡泰が歸るをまてといふ。家人驚き怪しみて遲々しけるうちに、胡泰かへりてけり。には鳥胡泰を見附てよろこび、母の世にありし時の事をつまびらかに語りぬ。胡泰これを聞いて、ありし夢の告に思ひあはせ、涙を流し、抱きとつてその父に告げてよく是を飼ひぬ。久しうして後、此にはとり人間のうはなりを嫉む如く、胡泰が繼母をのりごとしてつゝき止まざりければ、繼母なげかしく思ひ、胡泰が留守をうかゞひて、此にはとりを殺し捨てぬ。

佛教に無明を生死輪廻の種とす。無明はすなはち邪見妄執の事なり。心悍くつれな

あり

もいかばかり、感冒の病も計り難し。たゞ願くは止め給へと申されければ、夫人答へて、つとめて是をなすにあらず。我たのしぶところなれば、寒きをも苦勞をも覺えず。若し強ひて止めなば、我心安かるべからずとて、終に止められざりき。年八十餘の時までも、紡み績ぎの業をつとめられぬ。男子四人女子三人まうけられけるが、皆位たかくいみじく榮えてけり。

奴を愛して苦勞を覺えられざるは、慈母のみどり子を愛する心を失はざるものなり。奴は常の人の侮り輕しむる所なるに、こゝに於てこの心を失はざれば、その餘の人倫に於て、仁厚の心推し量るべし。さればかく勝れたる仁德なれば、七子の福ひを作り出せり。朝とく粥を煮る事をば則る事あたはずとも、奴も又人の子なりと思へる仁心、誰もよく則り守るべき事にこそ。

○胡泰が母、性悍くして家人につれなかりけるが、世を去りてのち十年あまりすぎて、胡泰が父また妻を娶りぬ。或時泰が夢に亡母告げけるは、われ世にありし時心たけく、家

舌根殘る—狗が人語を爲せしをいふ

楊誠齊—楊萬里、字は延秀が事也

人の子—陶潜が子を戒めし文中に、彼も亦人の子也と

どり、得失の念おもければ、その苦勞をいたはり憫まず、烈しくつかひなやまし、少しあやまりあれば凄じくあたりぬ。されば愚痴は畜生の心なれば、會師が母愚痴の心行たくましく、家人につれなき報いに、狗と生れぬること宜なり。此狗の如く、人間の舌根殘りて、その報いをあらはす事は稀なりといへども、世間に愚痴の人絶えざれば、人間の舌根ともに滅して、告げあらはす事の能はざる狗多くあるべし。狗と生れん事は、誰もにくみ厭ふべき事なれば、戒め懲らすところを知るべし。

○楊誠齊の夫人羅氏、仁德高かりけるが、年七十あまりなる時にも、朝疾くおきて、手づから粥を煮て、奴共に喰はせてのちさし使はれけり。その子の東山申されけるは、斯寒き時なるに、自ら冷え苦しび給ふ事もつたいなし。向後止めたまへと諫められければ、羅夫人答へて、奴も又人の子なり。朝さむき時なれば、腹をあたゝめさせてその苦勞を緩めんとの事なりといへり。東山また曰、夫人年老たまひて、斯賤しき業をいとなみ給ふ事、さかさまなる行ひなるべし。その上寒天に朝疾くひえ給ふこと、苦勞

會師が家に飼ひける犬、ひとつの牝犬を産む。此犬あまりに盗み喰ひをしけるによつて、會師が妻杖にてたゝきければ、この犬人の如くものいひて、われは汝が姑なるが、吾世にありし時、家人につれなくあたりし報によつて、いま畜生の形をうけぬ。汝われを打つは大いなるあやまりなり。斯うたれて恥をかく上は、此家を去るべしといひて走り出ぬ。會師これを聞いて涕を流し、抱き留めければ、しばしは留まりぬれども、また走り出はしり出て、終に留まるべくも見えず。會師その心を察して、のきの下にへやを作りておし入れければ、よろこびはいりて去るべき氣色なし。會師毎日食を饋りて、人をやしなふが如く其志し切なりければ、常にこの室にありて外へ出ず、人間の家にすむ如くにぞ有りける。一二年ありてのち、行方知らずうせぬ。まことに希代不思議なる事なり。

主人の奴につれなきは、愚痴より起れり　いかんとなれば、愚痴なる時は貴賤一體の理りを辨へず、得失利害の道理を知らざる故に、奴をば犬家のごとく思ひあな

候氏—卷四にも出でたり

○程子の母公候氏、孝順の德まめやかにして、家を治むるに法あり。寛仁を本として、何事につきても烈しく忙しからず、奴とがありても、笞つ事をきらひ、少々の事をばのどやかに敎へ戒めて、烈しく怒れる事なし。是によつてその家よく和睦して、正しく齊りけり。間に子達の奴を叱り責むる事あれば、貴賤異りといへども、同じく人なれば、さのみ賤しみ惱ますべからずと、深く戒め給ひき。その子にをしへ給ふところ道あるによつて、明道伊川もろともに、大賢となり大官にのぼり、子々孫々に至るまで、いみじく榮えたまひぬ。

程母は孝慈順仁そなはるによつて、造化し給ふ淸福なれば、さしていづれとも言がたけれども、貴賤一體の心得、君子もわきまへ難きところにして、この心得功德無量なれば、造福の修行必ず是を外にせず。人々此心なきにあらず。候氏を師とせば虐念の雲はれて、仁德の光あらはるべし。

○王會師の母心たけくして、家内の人につれなくあたりけるが、身まかりて後、程へて、

して立ち行く事叶はずと也

そのためし多し。彼といひ是といひ、下人なればとて侮りかろしめ、つれなくあたるべき理なし。たとひ罪ををかす事ありとも、あはれぶ心を本として戒め懲らすべし。あはれぶ心あつて罪を正せば、その人悔改むる所あり。あはれぶ心なくて罪を糺すときは、其人改め悔ゆる事なし。恩を施す事は常の例なれば、いふに及ばず。たゞなさけ深くあらん事、下人を使ふ第一義なり。諺にも、恩には命を捨ざれども、なさけには命を棄つるといへり。もし何事につきても虐悪の念おこる時は、道理を思ひ報いにこりて、虐念を變じて仁愛となすべし。

生とし生ける人、誰かその子を愛せざらん。奴といへ共皆人の子なり。わが子その位にあらば、わが心忍ふべからず。奴の親たるもの、同じくこの心あれば、よく思ひたくらべ、必ずあなどり輕しむる事なかれ。萬物一體の心、人々具足のものなれば、奴なり他人なりと侮りへだつる意念なくば、たれも仁ならざるはあるまじ。よくみづからかへりみて仁を施さん事、その身の福にあらずや。

下子なき云云—下部として召使ふ者無ければ、貴人と

○仁虐報

○家内にさしつかふもの、奴婢雑人に至るまで、何事につけても慈悲ふかく情あるを仁といひ、何事につけても情なくきつくあたるを虐といふ。天地は萬物の父母にして、人は萬物の靈なれば、人として人を愛する者を天道のたすけ給ふ事、たとへば人の子をいつくしみぬれば、その父母恩に報いるが如し。人として人をそこなふ者を、天道のわざはひし給ふは、譬へば人の子を害ひぬれば、その父母うらみを報いるが如くなれば、仁虐の報い影の形にしたがふが如くなる事、必然の理りなり。夫福分に貴賤ありて、主人となり奴となるといへども、畢竟同じく人の生をうけたる者なり。主人も奴なければその用を達する事あたはず。諺にも、下子なき上臈はならずとなん。奴も主人なければ衣食をとる所なし。奴は主人をたのみ、主人は奴をつかひ、互に相たすけて渡る世の中なり。その上主人情あれば臣下忠節を盡し、主人無道なれば下人讎となる事、

もにゆるされ、母には義繼母といふ號をくだされ、その諸役免許せられてけり。子を愛する事の吾身より深きは、おやのつねの情なれば、子のいのちを惜しむ事、吾命よりも甚しかるべし。しかるに死生の間にのぞんで、その慈善の操をあらためざる事、まことに君子の大義なれば、義繼母の號よくかなへり。大義は萬福の源なれば、死禍を轉じて福ひとなす事、むべなるかな。さればよのつねの人は命を惜しみ福ひを求むる心深きのみにして、命をたもち福ひを得る道の、仁義の心にある事をわきまへざる故に、命をたもたんと圖るわざ、却つて死を急ぐみちとなり、福ひを求むるわざ、却つて禍ひをとるかたちと成りぬ。義繼母の如く、命をすててかへつて死をまぬかれ、禍ひを避けずしてかへつて福ひに轉ずる、君子の跡をかゞみて、そのつとめ勵ますところを知るべし。

にては、爭闘など爲すべきに非ずと也

いづれが助け度と問べし。二人の内惡人あらば、必ず母にも不孝なるべし。一人不孝ならば、必ず孝行なる子を助けんとねがふべし。これをもてその罪を定むべしとありければ、奉行うけたまはり、其母をよびて、國王慈悲ふかくましませば、二人ともに殺し給ふべきにあらず。然れども、その罪人いづれをと定め難し。母の心も不便なれば、母の助けたく思ふ者をたすけよとの勅定なり。とても遁れぬ事なれば、汝が願ひを包まず申すべしとぞ示されける。母涙を流して、わが願ひをかなへ給はんとならば、兄をたすけ給へといふ。奉行また問うていはれけるは、尋常のならひにて弟をいたはるに、兄をたすけ度思ふいはれはいかん。母申しけるは、されば兄はまゝ子にて、弟はわが子にて侍る。夫死せし時、兄の事を深くたのみけるを、子細に及ばず固く契し故なれば、かく申すなりと答ふ。奉行これを聞いて感涙を流し、宣王へ詳かに奏聞申されければ、實子をすてて繼子をたすけんと願ふ程の義繼母なるによつて、互に死にかはらんと爭ふ兄弟なり。かく有難き者を殺さんは、天の責もおそろしとて、兄弟と

とぢめて—つきとめて

云分云々—斯の如く死を争ふやう

ば、妻答へて、それは頼み給ふに及ばず。吾子をばうとむとも、まゝ子に於てはなほざりの思ひをなすべからずと契にけり。夫世をさりて後は、まへかどよりも一入にいつくしみ深く、まゝ子實子の隔なく、一味に養育してけり。或時まゝ子町へ出て、人と口論して、終に相手をころして、その身は難をのがれて家にかへりぬ。對手の方より跡をつけて、かれが家をとぢめて、奉行所へ訴へぬれども、しかとその人の面をば見知らざりけり。奉行所より捕へに行きければ、弟すゝみ出て、人を殺すものは吾なりといひ、兄また走り出て、それは實にあらず。罪なき者をあやまり給ふな。吾こそ人をころす者なりといひて、兄弟互に爭ひければ、めしとりに來りたる者共、いづれを其人と定むべきやうなしとて、兄弟ともにつれて奉行所へ行きぬ。奉行所にても始の如く、兄弟あらそひけるによつて、時の奉行もわけあぐみて、宣王の批判をうかゞひけり。宣王きこしめして、此兄弟の云分にては、無道の喧嘩は有るまじき事なれば、罪の疑はしきを殺さむより、ゆるすには如く事あらじ。然れども先その母に、二人の内

義繼母—列女傳に出でたり

ば、必ず淺ましき報いあり。もし子ありて殺せば、罪の上の咎なれば、その報いはなはだ重し。此つもりをもてその淫念をこらし消すべし。貧しくして子を厭はん者は、淫念のおこるはじめにその時節を思案して、懐妊すべき時をきくべし。その時に至りて淫念おこらば、子を殺す報おそろしき事を思ひこりて、淫念をけすべし。かく一念の起るはじめによく思案工夫せば、殘惡の虵心退治やすかるべし。元秀の如き殘惡は、退治きはめて易し。いかんとなれば、淫欲をこらふるにあらず、やしなひ難きにあらず、たゞ報ある事をわきまへて、利欲の私だになければ、おのづからなき殘惡なり。世上に多きまどひなれば、こまやかにいひ述べぬ。心あらん人はよく思ひとるべし。

○齊の宣王の時に、義繼母とて名高き慈善の人あり。義繼母の夫身まかる時に、我子二人の内、一人は實子なればいふに及ばず。兄はその方の實子ならねども、我むなしくなりての後は、その方より外に頼む方なければ、實子の思ひをなしてたべといひけれ

闕所—領地財産を官に没収せらるる事

をば、男女をいはず皆うづみころしぬ。元秀或時、夢中に數十人來りて、人をころす者を捕へんとひしめくと覺えて、驚きさめて起き上りぬれば、手足牛のひづめとなり、その苦痛甚しく、轉びあがきて大聲をあげて叫びけるが、中三日ありて、たちまち頸きれて空しく成りぬ。その後四人の子ども、四十萬のたからを分けて榮花にふけりけるが、程なく咎にあひて闕所せられ、其財殘らず皆官府へいりぬ。

とら狼だもその子をばくらはず。然るに人としてその子を殺せるは、虎狼よりもはなはだしき毒心なれば、元秀生きながら牛と變じぬる事、奇特なるにあらず。名利の欲心におほはれて、親のおやたる本心をうしなひ、石揆が妻の如くなる殘惡は、いにしへも今も世間にたえず。その殘惡の源を尋ぬるに、そのまよひ二あり。一つには不義の淫亂にして、その子育てがたき故なり。二つには家まづしく子多ければ、養育續きがたき故なり。されば淫念のおこる始めに、交はるべき人なるか、人にあらざるかを思案すべし。交はるべき人にあらざる時は淫亂なり。淫亂は惡逆無道なれ

はざるのみならず、公族の大夫となる事もあたはずして、六十日のうちに二人の子供を殺さるゝ上に、その身も殺され、あさましく尸まで恥を晒しけり。まゝ子を殺すとわが子を殺さるゝと、たゞ中四年の遲速あり。わが子の殺さるゝ事おくれぬれば、その殺さるゝさまきはめてあさまし。是等の故事をもて見るに、まゝ子實子一體にして、わが子の榮えん事をもとむる道は、たゞまゝ子を一味に愛するにあり。まゝ子をにくみそこなふは、わが子の禍ひをつくれる理り分明なり。驪姫の才智よのつねならずといへども、この理りをわきまへず、わが子の福ひを求むる才覺とて、却つて其子をころす禍ひをつくり出せり。恐るべし戒しむべし。

○石揆が妻、家貧しくて子供多き事をいとひて、二人まで産むとそのまゝ殺してけり。そののち懷妊しけるが、一度に四人うみぬ。その産ことの外なんぎにて、その苦痛いふべからず。終にその身も生れたる子も、皆むなしくなりぬ。又元秀といへる人、家とみて四十萬のたからをもてり。本妻の子四人をば、明月の玉ともてなし、妾のうむ子

驪姫—列女傳に出づ

荀息—晉の名臣、驪姫の亂に死す

○晉の獻公の夫人驪姫に、わかぎみ二人あり。驪姫わが子を世にたてんと思ひて、種々はかりごとを用ひ、機變をたくみにして讒言をかまへ、終にまゝ子の申生をば殺し重耳夷吾をば國を追出してけり。かく思ひの儘にしすまして、その子奚齊を世つぎの太子に立て、よろこび限りなしといへども、申生の死せし年より、六年めの九月に獻公薨ぜられぬ。そのとしの十月、奚齊いまだ位につかざるうちに、國人奚齊をころしぬ。驪姫荀息といふ大夫をたのみ、奚齊の弟悼子を位にたてければ、また同じ年十一月に、國人悼子を殺すのみならず、驪姫をば市にひき出し、殺して町にさらしてけり。

驪姫、まゝ子と實子と一體の理りをわきまへ、まゝ子を愛すれば必ずわが子の福ひとなる事を明らめて、その智惠才覺を慈善に用ひなば、其子ども晉國の主とならずとも、必ず公族の大夫となり、その榮花繁昌いみじかるべし。然るにこの理をわきまへず、たゞまゝ子をだになくすれば、わが子は榮花繁昌なりと心得て、たくみなるはかりごとを用ひ、殘惡を凄じくふるまへるによつて、その子供國主となる事能

神宗の時、擢でられて参知政事となる

の封號をうけ、めでたく榮えぬ。

世間の男子、學問を好める方多しといへども、吳氏に恥づる事なき人は稀なり。これ吳氏の得道修福の根本なり。まゝ子と實子とよめとわが子と、前妻の一門とわが一類と、他人のむすめと我がむすめと、皆一味に恩愛厚き事、いはゆる萬物一體の仁なり。この仁吳氏のひとり私に得るところにあらず。吾も人も、人々に生附てあるところなり。然れども、常の人は一念のあやまりによつて、貪嗔癡のまよひ深く、仁德の光くらきによつて、わが子をば愛すれども、まゝ子をば愛する事能はず、わが一門には厚けれども、他人にはうすく、色々にへだて差別ありて、かりそめの事にも淺間しくすさまじ。吳氏は學問のみがきによつて三毒の迷なく、仁德のひかり明かなる故に、いづれの人に逢ひても仁愛の心明かにして、その行ひいみじくまめやかなりぬ。然る故に子供の大福をまねき、その身も榮花をうけられき。その子を愛せん人は、かへりみ法るところを知るべし。

才覺をたのみて惡をつくる事なかれ。

○王益の后妻吳氏は、女なれども學問をこのみ、物おぼえよかりけるが、その學問まことありて、見ひろく德盛にして、貪嗔癡の三毒きよくつきぬ。しかる故に二人の繼子をいつくしみぬる事、その實子よりも甚し。まゝ子二人ともに、幸ひなくして世を早う去りぬ。その婦いづれも節を守りて、王氏の家に在りけるが、此二人の婦をとりわき大切にいつくしみはごくまれけり。すべて何事につきても讒言をきゝいるゝ事なし。もしまことしき事あれば、隱さずしてその實否を明らめぬ。わが身の衣食手道具等は、きはめてそさうにもてなし儉約を守り、もし親類他人によらず、貧しくゆきつまりて合力を乞ひ求むる事あれば、必ず與へてそのもとめを空しうせず。王益の一門の中に、貧しくして婦いりすべきたよりなき者、三人までとりたて嫁入させられけるが、わがむすめに異ならず。まゝ子の母方の一類へのあひしらひ、わが一門にすこしも違はず。その產むところの子、王安石は宰相となり、安禮安國みな高官にのぼり、その身夫人

の腦病、俄然痙攣を起して人事不省となる

さめたる時飲食をくふふり、祖胤がていに露たがはず。夫これを見て涕をながして、わが子かくありしに、妻又かくの如くなるは何なる天罰ぞやと、歎く事限りなし。となりの友あはれに思ひ、くはしくその故を語りければ、夫是によつて、妻のわづらひ残惡の報なる事をわきまへぬ。友だち此事をかたり終る詞の下に、その妻いき絶えにけり。

子を犬に育てなしぬる才覺、まことに巧なる事なり。若しこのたくみを慈善に用ひて、この子をよく育てなば實子となるべし。子なき者は養子をするならひ、よのつねの事なり。養子は實子よりも愛らしきなどいひ習はせり。然れば他人をやしなはんよりは、わが夫の子を養子とせんに何ぞや。この妻の智惠にて、この理りは心得難き事ならねども、一念のあやまりにて、才覺を用ふるところちがひて、人をそこなひ家をやぶり、己もあさましき報にあへり。されば人たくみをもて惡をつくれば、天道もまたたくみをもて報をあらはしたまふ事、かくの如くなれば、かならず智惠

怒りぬる故、せんかたなく妻の下知に隨ひぬ。よくしいれけるによつて、手にとりて物を喰ふ事を知らず。其ふり犬の物をくふによく似たればとて、狗兒と名を改めてよびければ、わが名ぞと心得てよく答へてけり。狗兒はいぬちごとよむ文字なり。かく犬の樣子にしいれ育てければ、三歳に成りぬれども、つねの子供の如くならず、ゐずまひ物くひ、あだかも犬の如し。夫家に歸りて、祖胤はいかにと問へば、その妻眉をしかめていひけるは、されば何の罰にて候やらん。祖胤はそのまゝ犬に似て侍べる、あさましき事なりと語る。商人驚き騷ぎて、是をこゝろむればいふに違はず。其父あまりに腹を立て、先祖惡逆の報にこそとて、つひにふみ殺してけり。妾これを見て悲しさ身にあまり、妻の仕業なりと語らんとすれども、妻たけくすさまじき者なれば、その威におそれていふ事能はず、あまり悲しびにたへかね、終に縊れて空しくなりぬ。妻はにくしと思ふ者を二人ながら殺しぬれば、しすましたりと思ひ悦びけるが、いく程なくて癲癇を病み出して、地にたふれあがきぬる有樣、犬のたはぶれあがくに似たり。

癲癇一種

孟子に、惻隱の心は仁の端也

欽縣―徽州府に屬す、昔の丹陽の地

うけぬ―承諾せぬ

に得たり。されば殘惡の繼母のまゝ子を殺せるは、わが子の福ひを求めんとの心なれども、殘惡は禍ひの根なるによつて、必ずわが子の禍ひ求めずして來る。よくよく天道自然の妙理をわきまふべし。

○欽縣に商人あり。家富みて子なかりければ、子孫相續のためとて手かけをかゝへぬ。一年あまりして、其手かけ男子を一人まうけぬ。商人よろこびの眉をひらき、祖胤と名づけ、寵愛よのつねならず。ほどありて外國へ商に出ぬ。家を出る時その妻にむかひ、この子育ちて家の本となれば、その方の腹より出ざれども、その方の子なり。よく大切に育つべしといひふくめぬ。妻こたへて、われもさこそ存じ候へ、心やすく思ひ給へと、上にては誠らしくうけぬれども、心はうけざりけり。夫出でて後は、その妾にもつれなくあたり、祖胤をばつねに庭に置かしむ。その母いだかんとすれば、怒り罵りてふせぎけり。ものを喰ふほどに成りければ、食をまるめて犬猫のものを喰ふ如く、口にて喰ひならはせり。妾あさましく思ひ、よのつねの如く育てんとすれば、烈しく

惻隱―人に忍びざるの心をいふ、

の母つねにまゝ子にいつくしみ深かりけるが、今度とらはれとなりしを聞て、親しき友に語りけるは、わが實子かくなるを捨て置きたらんは、亡夫のうらみも有るまじ。繼子の角なるを棄ておきなば、亡夫のうらみさこそと思へば、夜もねられず、食物もあぢはひを知らず。しよせん弟に代へば、亡夫の恨もなく、わが心も是程までは苦しかるまじと口說けると承ると、委しく夫の死せる時の事迄を語りけり。奉行是を聞て感淚をながし、角有難き繼母の望みなれば、他にことなるべしとて、具に奏聞ありければ、天子も勅感あつて、死罪をゆるして返したまはり、そののち勅使をもて褒美をくだされ、其門を旌し、世の鑑となし給へり。

柴氏に希代不思議の福二あり。國賊と成たる者の死罪をゆるされぬる福ひ、その一なり。まづしき寡の身として、かたじけなくも勅使をうけたる福ひ、その二なり。柴氏慈善をなす時、この福ひを求むる心あらんや。たゞ仁性の惻隱くらからざるものなり。是まことに慈善は百福の源なるによつて、響の聲に應ずる如く、求めざる

懿公—在位八年
伋の子孫—伋の弟昭伯頑の子孫、

は是を見て、あまり堪へがたなさに、かゝるつれなき世に生らんよりは、兄の身がはりに死せんには如かじと思ひ定めて、太子伋のまねをして、伋に先立つてかの伏のところを通られければ、伏の兵ども太子伋なりと心得て、押寄ころしてけり。そのあとへ太子伋いたり、弟の尸を見て尸にいだきつき、涙をながして、わが身は父の命なれば、とても遁れぬ道なり。かく情ある人の此難にあへる事はいかむぞや。歎くにあまり有り、いふに言葉なし、むくはんとするに道なし。たゞ同じ道にいそぐには如かずとて自害しぬ、宣公宣姜是をきゝ、たゞ惘れはてたるばかりにて、太子伋を殺しぬるよろこびはよそに成りて、愛子のわかれ詮方なく、涕の淵にぞしづまれける。そのの ち壽の弟朔を太子にさだめ、國を讓られけれ共、いく程もなく國みだれ、つひに朔の子懿公の代に成て、種を盡して滅びてけり。其後國人、太子伋の子孫を立て、國主にいたゞき仕へにけり。

兄の難をすくはんとて、壽の死を輕んじられけるは、まことに有難き悌弟なれば、神

宣姜―列女傳にも出づ

わぎみ―汝

りて、あながち修行に苦勞もなき仁を求むる事を知らざるは、愚なるかな痛ましきかな。

○衞の宣公の夫人宣姜、容儀すぐれければ、宣公の寵愛よのつねならず、男子二人を儲く。兄をば壽と名け、弟をば朔と名く。宣姜つく〴〵と思はれけるは、いかにもしてまゝ子の太子伋を殺して、わが子を世に立てんとたくみ、その子の朔と談合して、太子伋の事を宣公へ讒言しぬ。宣公その讒言にまよひ、太子伋を齊國へ使につかはし、道に伏を置きて、强盜の殺せるふりにて殺すべしとたくみ、道に伏をこしらへすましてのち、齊國へ密談の使あり、太子伋然るべしと下知有りければ、既に出立日限きはまりぬ。宣姜の長子壽、此はかりごとをきゝ附て、父母弟を種々諫められけれども、終にうけひく方なし。せんかたなくて太子伋のもとへ行きて、件のはかり事あり、必ず往き給ふべからずと語り歎かれけり。太子伋の曰、わぎみの情はまことに嬉しけれども、父の命を背きて命をながらへんは、わが心にあらずとて、留まるべき氣色なし。壽

軀殻云々｜我と人と軀幹を異にするより、心も亦異なるべしと思ふ也

り、無欲の慈悲心を仁と名づく。この仁は人々固有のものなれば、もとむる志しだにあれば得難き道にあらず。問、人々具足の仁なるに、みどり子にのみあきらかにして、他人に暗きはいかん。曰、みどり子は一體の親しみきはめて重き故に、私欲のへだてなく、本性の仁くらからざるなり。よの人倫は軀殻の差別に迷ひて、一體の理をわきまへず。姑にあうては、他人なりわれにうとしと思ひ、まゝ子に對しては、他人のうむ子なり、吾に親みなしと思へる一念の私、はや仁のかゞみを暗ます曇となる。此くもりによつて嗔恚のほむらもえ出て、つひに仁のかゞみをくらまし、慈悲無欲の本心、變じて殘惡貪欲の邪心となれり。一念の私を早くのぞき、仁性のかゞみあきらかなれば、姑につかへては必ず孝行、まゝ子を育てては必ず慈善なるものなり。されば孝慈は一徳にして二の名なり。この孝慈の仁性は、天地の大徳百福の源なる故に、仁性を失はざれば、必ず陳夫人の如き福報いみじきものなり。福ひを求むるとては、叶はぬ業をもつとむるは常の情なるに、人々生附て心にそなは

翰林學士―翰林院に侍する學者

繼子とわが子と、本來一體の理りなれば、まゝ子をさいなむはわが子をさいなむなり。繼子を愛するはわが子を愛するなり。これ定まれる天理なるによつて、陳氏が殘惡かくその子に報いぬ。珍しき事と思ふべからず。本來繼母のまゝ子につれなきは、わが子を愛する事の甚しきより起りぬれば、むくいあるべき事を少しにてもわきまへなば、陳氏貪欲無慙なりとも、かくつれなかるまじき事必定なり。よくかゞみて、わが子を大切に思はん人は、苟且にも繼子をおろそかにすべからず。

○張一清が妻の廖、男子一人まうけて早世しぬ。一清又陳氏をめとりて室につぐ。陳氏姑に事へてきはめて孝行なる上に、まゝ子を愛する事わが子に勝れり。かく孝行慈善の德そなはる報によつて、陳氏の產める子、聰明人にすぐれ學問世にこえければ、終に翰林學士といふ大官にのぼり、母の陳氏もいみじき封號をうけられけり。

陳夫人の孝慈、まことに希有の事なれ共、人ごとに斯の心なきにあらず。いかんとなれば、みどり子を愛せざる母は人にあらず、みどり子を愛する心は無欲の慈悲な

様子也

おがー大鋸

ず、家内の人驚き見れども、その姿は見えざりけり。その後は、つねに其聲うつばりの上にとゞまりぬ。陳氏肝を消し、いろ〳〵のそなへ物をまうけ、巫をよび僧をかたらひて、さま〳〵わびぬれども、たゞ嘲笑ふ聲のみして受けつけず。或時はこの家をくづさんといふ聲して、おがを引く如く屋鳴凄まじく、すでに家くづるゝかと、家内の人走り出ければ又音もせず。見ればすこしも破るゝ所なし。或時はまゝ母我を殺してこの家にらく〳〵と居らんとや。たゞ燒き拂ふべしといふ聲すれば、たちまち火燃え出て、みな燒けぬと見ゆれども、又もとの如く少しも損ずる所なし。かくすさまじく奇特なる事をあらはし、その間には繼母がさいなみけるやうすを一々かぞへあげて、怨をいひ罵しる事、聞く者たましひを消す。この時鐵杵六歳になりけるが、腹はり五體うづきて泣き叫ぶありさま、目もあてられず哀なり。怨靈たゝくと見えしところは、青く腫れてくさりぬ。かくなやます事一月あまりして、鐵杵つひに空しくなりぬ。鐵杵身まかりし日より、怨靈の聲も靜まりてけり。

かつやかす―餓死せしむる也

天曹の符―天帝の裁判所の命令

ものごし―

陳子男子をうめり。鐵杵と名く。まへ腹の鐵臼はくろがねうすとよむ文字なれば、陳氏が產める子をばくろがねぎねと名づけて、思ふざまに繼子をつかんとのたくみなり。鐵杵はくろがねきねとよむ文字なり。徐甲は本より智惠くらく氣よわき男なるに、あまつさへ旅にのみありて家に在る事まれなれば、はゞかる所もなく、心に任せて殘惡をはたらきぬれば、まゝ子の鐵臼をつれなくさいなむ事、あげて數へがたし。かくさいなむこと年ありて、鐵臼十六のとし、終にかつやかし殺してけり。陳氏まゝ子を殺して、今は思ひのまゝなる世中なりとよろこぶところに、鐵臼死して十日あまりして、俄に家の中に聲あり。驚き聽けば、陳氏が坐にならんで語りけるは、われは鐵臼が怨靈なり。われ罪なきに繼母に殘害せられぬれば、わが母うらみを天帝へ奏聞申し、すでに天曹の符を得て、その報に鐵杵をとりころさん爲に來るなり。今日より鐵杵をさいなむ事、我を繼母のさいなみけるやうに惱ましいためて、終に殺すべし。いかにまま母思ひしり給ふべしとかきくどく。その聲鐵臼世にありし時のものごしに露たがは

つぐふ—償ふ也

めずして、自らとがめ、まゝ子を專らいつくしみ、わが子をおろそかにするのみならず、わが子と一味にその罪をつぐへる心ばへ、まことに君子も難しとするところ、婦人には古今まれなる賢女なり。然れども人毎にこの母の心なきにあらず、この心は本來人の性なり。性は人生の根本なれば、貴きも賤きも智あるも愚なるも、人々具足のものなり。衆人は利欲におぼれて本性をうしなひ、魏の慈母は利欲のけがれなく、本性明らかなるものなり。然れば平人の及ばぬ事なりと、みづから殘惡に身を棄つべからず。されば子供多く繁昌せん事は、誰も願はしき事なれば、魏の慈母慈善によつて產まぬ子を五人までまうけ、其德によつて我子三人もろともに福報を受け、いみじく榮えぬるためしをかゞみて、魏の慈母の心をもて、人々具足の本性を觸發すべし。

○徐甲が妻の許氏、男子一人をまうけて鐵臼と名づく。その後いくほどなくて身まかりぬ。徐甲また陳氏を娶つて后妻となす。この陳氏あくまで殘惡の心行たくましかりき。

き精を出さで叶はぬ事なり。いかんとなれば、この子供母なきによつて、われを娶りて母にかはつて養育せしむ。人の母となつて其子を愛せざるは、虎狼にも劣れり。わが子のみを愛して繼子をうとまんは、人の人たる義にあらず、とりけだものの心なり。われ不肖なりといへども、虎狼禽獸の心をもて心とせん事、深く忍びざるところなり。豈わが心の忍びざる所をすてて他を求めんやといふ。終に國王へ訴狀を奉りければ、國王その慈善の德を感じ、是は自餘の例にもなるべからずとて、その子の罪をゆるして家にかへし給ひぬ。是より五人のまゝ子、慈愛まことある事を感じて、わが母の思ひをなし、孝行實子に勝りければ、八人の子ども、おなじく產み出せるが如く、和睦よのつねならず。母養育の厚きのみにあらず、八人の子どもに禮儀ををしへ勵しければ、みな善人と成り、八人ともに魏國の大夫卿士の高官にのぼり、いみじく榮えてけり。是によつて魏國の慈母と天下にほまれをあげ、末代の手本となれり。

わが子と一味にまゝ子を愛するさへ、よのつねならぬ事なるに、まゝ子の疎むを尤

傳に見えたり

籠舍—牢舍なり、入獄したる也

育、妻なくては叶はざれば、芒卯止む事を得ずして、孟陽が女を娶りて后妻とす。后妻また三子をまうく。この后妻よのつねの繼母にかはりて慈愛ふかく、わが子まゝ子の差別なく、一味になさけ有しかども、五人のまゝ子、母を憎みて親しまず。繼母是をもとがめず、我あてがひの惡しきにこそと自ら咎め、衣裳食物萬端について、まゝ子を第一として、我子には殊の外おろそかにあてがひぬ。然れどもまゝ子の心つひにやはらがず。しかはあれど、繼母はまゝ子を咎むる心なく、たゞ我あてがひのその母に及ばざる所ある故なるべしと、いよ〳〵いつくしみ深うはごくみけり。或時まゝ子のうち一人、國の掟をそむきければ、死罪に行はるべしとて籠舍しぬ。繼母是を歎きかなしびて、痩せおとろへ、いかにもして繼子の罪をのがるゝ道もがなと求め苦しみ、方々さいかくいとまなし。或人まゝ母に語りけるは、まゝ子といひながら、とりわき不孝無慙の者なれば、さのみ悲しび給ふ事せんなしといふ。繼母こたへて、我實子ならば、不孝なりとも誰かその子のわざはひを救はざらんや。増て繼母なれば、とりわ

あきらかにましませば、まゝ子を害ふ報いにて、必ずわが子災ひにあふ事、影の形にしたがふが如し。繼子にかはんとこしらへたる毒を、わが子喰ひて死したるためしあれば、まゝ子を憎みそこなふは、畢竟わが子を憎みそこなふなり。まゝ子を愛するは畢竟わが子を愛するなり。古今のためしをよくかゞみて、產まぬ子をまうくる心得、繼母の福德なるべし。とりわき繼子にはそのをしへ道あるべき事なり。いかむとなれば、その子ねぢけて行儀あしければ、繼母の心にさはる事多くして、慈善の施しなりがたく、いつとなく殘惡の心も出で來るものなり。まめやかなる友にまじはり、道ある君子を師とししたがへば、心だて正しく、孝行の道をわきまへ、行儀さだかなる故に、繼母の心にさかふ事なく、慈善のほどこしたやすきものなり。この理りをよく心得、かりそめにも惡しき友にちなまざるやうにをしへ、道ある人を師と定むる事、慈善の第一義なり。

芒卯—列女

○魏の芒卯が妻、子を五人まうけてのち、世をはやう去りぬ。家事のいとなみ子供の養

正路—正しき順序を踐む事

に我を迎へぬるは、家事をいとなみ子供を養育せさせんためなり、世間に養子する人もあれば、われに子なくば養子となし、われに子有らばわが子のたすけなり、よく愛すれば繼子も實子となるためし、古來多ければ、胎育生産の苦勞なくして儲たる子也。一しほわれに益ありと思ひたくらべ、苦勞をいとふ利欲の蛇心をはらふべし。衣食もてあそび物は、多きも實はその子に益なし、すくなきも實はその子に損なし。あるに任する世中なり。千金の讓をうけて程なく貧窮にせまり、一錢のゆづりなき孤も富み榮えぬるためし、古も今も家毎にある事なれば、わが子に福分あらば、親のあとしきをとらずとも、榮えなん事うたがひなし。若福分うすくば、正路なるゆづりを受けたり共たのみなし。まして兄の取るべき跡識を奪ひとりては、天の責恐ろしき事なり。その上繼母の慈によつて、まゝ子も實子となるなれば、その兄たるもの弟を見すてなんやと思案工夫せば、衣服跡識などの貪欲きえ、本來の慈心まめやかなるべし。されば繼母のまゝ子をそこなふは、多分わが子を世に立てんとむさぶる心より起れり。天道

砂云々―木に縁りて魚を求むると同義
阿鼻獄―八熱地獄の一、無間地獄の事
跡識―家督といふに同じ

は地獄の業なり。殘惡の虵心に三毒の甚しきものなれば、何ほど後生を願ふとても、砂をかしいで食をもとむるが如し。身後かならず阿鼻獄の責をうく。これそのむくい四なり。かく眼前の報ある事をよく考へ、殘惡をあらため慈善にかへるべき事、皆其身の福ひなり。繼母たる人も、本來殘惡の心はなき物なり。いかんとなれば、我子ならねども、みどり子を見て憎しと思ひ、殺さんと思ふ人は天下に有るべからず。然るに繼母となりてはこの心を失ひ、尤なきににくみ怨なきに死を願ふは、たゞ利欲の一念とゞこほりて本心を昧ます故なり。その利欲といふは、先づ我產まざる子に苦勞をする事、せんなきあだ事なりと迷ふ一念より、養育の苦勞をいとふ利欲その一なり。さてわが產むところの子あれば、衣裳食物玩物までも、わが子ばかりにと思ひ、ゆくゆく跡識をわが子にかたづけとらせ度おもふ利欲その二なり。この二の欲心日にそひ月にまして深くなり行き、うとむ心はつれなくなり、つれなき心は恐ろしき虵心となりて、終に繼子をさいなみ殺す殘惡となれり。繼母たる人、よく思案工夫して、この家

給ふところなれば、わが産むところの子に報いて福ひめでたきものなり。これ其報三なり。繼子につれなくあたる時は、まゝ子も又恨むるふるまひあり。その上憎しと思ふ者のいふ事する事は、皆目にさはり耳に逆ふものなれば、日々夜々にむねを焦さゞる時なし。しかるに慈善の德あれば、まゝ子も實子にことならず、目にふれ耳にきく事、心に逆ひむねのこがるゝ事なく、日々夜々心安くゆるやかなり。これその報四つなり。淨土の三部經に、九品の往生をあかせるに、誠心慈心を上品上生の第一義とすれば、慈善の誠ある人は、極樂に往生する事必定なり。是その報五つなり。殘惡の報いも又四あり。まゝ子につれなければ夫も凄じく思ひ、家内の人皆目をそばめ、世間のあざけりあさましき物也。是其報い一也。福善禍淫の報應は、山彦の如くなれば、まゝ子をつれなくそこなへば、必ずわが産むところの子に報いてあさましき禍ひあり。是そのむくい二なり。とても我手に養ひながら、あだかたきの如く思ひぬれば、家内に常にかたきありて、胸をこがし心を惱しぬ。これそのむくい三なり。貪嗔癡の三毒

三部經―無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經

福善禍淫―天道は善に福し淫に禍す

鑑草　卷之五

○慈殘報

○慈はいつくしみとよむ。我子と一味に繼子を愛しそだつる事なり。殘はそこなふとよむ。まゝ子を憎みつれなくあてがふ事なり。慈愛は天道人道の根本なれば、求めずして福ひを得る。殘は虎狼毒蛇の如くなる凶惡なれば、おのづから禍ひにかゝる報有り。されば慈善の福ひ五つあり。繼子をわが子と一味に養育すれば、夫の思ひいれ世間のおぼえいとめでたし、是その報一なり。わが子と一味に慈愛すれば、まゝ子も岩木ならねばその慈愛を感じ、ひたすらに慈母の思ひをなし、一しほ孝行を盡さんと思はざるはなし。しかれば眼前産育の苦勞なくして子をまうくる福ひ、その報い二なり。母たるものは、たれも子を思ふまことあれば、繼子の母冥々のうちにして如何ばかり嬉しくおもひ、後母の子供の守り神共なりぬべし。そのうへ慈善は天道のくみし

思入れ—氣受
後母—後妻

ふの餘力をいふ

つねの人は、男にてもこの見識あるはすくなし。だまくその子の藝に長ずる事あれば、世になき事とよろこびたかぶりて、却つてその子の滿心を焚き附くるのみなり。いはむや婦人をや。親たる人、人ごとに陳氏の心を心とせば、家每に孝子國みな忠臣にして、目出度世界なるべし。されば人々、陳氏の心は本來生れつきて持ながら、迷ひて寶をうしなふ事、歎かしきかな。

傳に出づ

節度使―諸州重要の地を鎭する職名

緒餘―事業

咨河南の太守となり、入部して歸られけるに、母何にても民をすくふ仕置ありやと問れけるに、堯咨否と答へられければ、陳氏怒れる氣色にて、續いて言葉もなく過ぬ。ある時堯咨と客と的を射けるに、堯咨もとより勝れたる弓の上手なれば、誰人も及ぶ者なし。陳氏是を聞いて、堯咨をよびて戒められけるは、汝の父、つねに汝に忠孝の道をのみ敎へられき。然るをその敎を守らず、ちひさき藝能に精をつくし、人に勝らんとのみ志を勵みぬる事、むげに淺まし。その藝にはげます精力を忠孝の道に用ひなば、君子ともなり、民をすくふ政をなし、敎化もよのつねなるまじきに、父の敎へにそむきて小藝に溺れぬる事、不孝といひ不忠といひ、言語道斷なりとて、裝束のかざりの落つる程まで擲かれけり。かく道ある敎へ烈しければ、堯咨よくつゝしみて、德業人にすぐれ、節度使といふ大官にのぼり、母は秦國夫人と封號をうけられぬ。目出度ためしにこそ。

才藝を緒餘として、道德を第一義とたつとぶは、まことに君子のをしへなり。よの

たがひ召さるれば、汝が子を家に置くべき義なしとはげましければ、潭すなはちその子をも允にしたがへて、軍に具してけり。なんなく蘇峻を退治して大功をたてぬれば、虞潭は武昌侯に封ぜられ、孫氏は金章紫綬をうけ、壽命ながく目出度榮えられけり。孫氏は婦人なりといへ共、よく大義を明め、死を守りて道をよくする敎、君子にも恥づるところなければ、子孫繁昌して榮花の報いを受けられける事、宜なるかな。尋常の女の習ひにて、軍場へゆけば、死すまじき者も死すると思へる惑ふかし。その上命を第一の重寳と惑ひて、大義の重き事を知らず。それ人の死期は、生を受くる初にさだまりて、天地神明もみだりに變じ給ふ事あたはず。まして人力をや。そのうへ壽命の根は明德にある故に、大義をおもんじ明德を明かにすれば、軍陣にありても非業の犬死なし。大義にそむき明德をくらます時は、家にありても非業の犬死あり。此理をよくわきまへ、母每に孫氏の心をその心とすべし。

○堯咨の母陳氏、常に大義をのみ子に敎へて、利祿立身の事をば齒にもかけざりけり。堯

虞潭が母―亦列女傳に出でたり

蘇峻―王敦の叛に功あり、後却つて叛す

忠臣云々―通俗篇に、求㆓忠臣㆒必于㆓孝子之門㆒

と有がたき事也。この心を以つて心とせば、いづれの母もよく敎へざるはあるまじ。斯をしへはげましなば、子も亦あやまちを改め、善にうつらざるは有るべからず。その子を愛せん人は、よくかゞみるべき事なり。

○虞潭の母孫氏は、若うして寡なりしかども、かたく誓つて節をあらためず。虞潭幼少の時より、忠義をもて敎へはげまして、姑息の愛すくなし。虞潭よく母のをしへをつつしみ守りぬれば、その名高く世のおぼえも重かりけり。虞潭南康の太守と成りて、杜弢がむほんを退治しける時、母虞潭をはげますに必死の義をもてす。さて軍兵共には、それ〴〵に禮義を厚くおくりてけり。潭たゝかひ勝て軍功を建てぬ。その後又蘇峻がむほんせし時、虞潭いくさ大將の命を蒙りければ、母いましめていひけるは、忠臣は孝子の門より出るとなん。汝必ずいのちをすて、軍功をたてて君にむくゆべし。我老て殘れる事を、毛頭も心に掛くべからずと戒めはげます。時に内史王舒、その子の允を軍横目としていでたゝせければ、孫氏また潭にいひけるは、王府君の子息さへ軍にし

木によつて魚を求む—孟子梁惠王上篇の語

る事を推はかるべし。是によつてその子豪傑となり、代々の貧賤を轉じて都督の位にのぼりぬれば、母公も富貴の孝養をうけられぬ。徒に子孫の榮えん事を求めて道をおこなはざるは、木によつて魚を求むるなるべし。

○呉賀の母は、つねぐ\その子に敎ふるに道ありけるが、或時呉賀友達と語りけるついでに、人のかげ事をいひしを母聞きつけて、殊の外怒りて、呉賀を鞭うちてけり。母の友是を見て、時の興によりてたまく\人の噂をいはんは、さのみ苦しかるまじき事なりといひければ、母大いに歎きて曰く、君子は人の惡を隱して、人の善を揚ぐるとなん聞く。人の善をあぐるまでこそなく共、人の惡を語らん事、その心ばへいとあさまし。我たまく\一子を持といへども、小人の心ばへありては子無きに劣りぬれば、斯は戒むるなりとて潸々と泣きぬ。是によつて食をすゝめざりければ、呉賀甚恐れ、よく愼みて終に名人と成り、位たかく榮えてけり。

子ありても小人なれば、子なきに劣れりといへる覺悟、丈夫にもまれなる心得、い

ろこぶもの間に有り。これは正しくその子に不孝を教ふるなり。いかんとなれば、子の不孝はかならず親の不是なる所を見るより起れり。程母の謙順にして、わづかの事をもうかゞひ給ひぬるは、子に孝を教ふるの本なり。誰も母たる人心得べき事也。

○陶侃の家代々貧賤なりき。侃、學に就きしかば、母紡み績ぎのかせぎにて賄を足しぬ。そののち侃縣吏となりて、魚梁の奉行に行きけるが、母の方へ鮨を贈りてけり。母受けずして戒めけるは、汝奉行となりて、公儀の物をもて我に贈り、我がよろこびを求むるは愚にあさまし。汝かく汚れたる振舞あるは、本より我歎き悲しぶところなり。我をよろこばしめんと思はゞ、たゞ忠義廉直を専にすべしと、烈しくいひおくられたり。陶侃もとより尋常ならぬ人なれば、母のいましめを聞て、いよ〳〵忠義廉直をはげまして、つひに大功を建てて八州の都督となり、富貴天下にふるひけり。貧を安んじ道を貴ぶは、丈夫も難しとするところなり。然るに陶母かくの如きの心行、まことにたぐひ少なき事なり。此一つのをしへにて、その外萬端のをしへ道あ

陶侃が母―列女傳に出でたり

八州―荊湘等の諸州に都督たりしをいふ

頤濂溪先生を指す
從祀―宋以後孔廟内に程子を從祀せり

父の命にしたがひ、周子を師として學び、遂に大儒となり、道學をいざなひ明らめ給ひしかば、萬世の儒宗となり、名儒多くその門に出で、伯爵の封をうけ、孔廟の從祀にあづかり、父母も無窮の孝養をうけ、後世に至るまで、程母の教を誦賛して、天下の手本となり給ひぬ。

二程のうまれつきよのつねならずといへども、幼少の時には、徳性をやしなふ母御の教へなく、成人の時に至つて、父大中公道徳の師をえらび、心學の指南ましまさずば、その大徳の成功かたかるべし。されば姑息におぼれざる教へ、衣服飮食に於てえらびなきをしへ、道徳の師をえらびて明徳を明らかにする教へ、いづれも有難き教へにして、親毎の法り守るべきところなり。就中心學の教へ肝要なるべし。大中公の道徳の師をえらび給ふは、尋常の人より見れば迂濶なるに似たれども、その子名高く富貴をうけ給ふこと、利祿のをしへに越えたる事千倍せり。よく辨ふべきことにこそ。母たるもの、夫のみじかき所惡しき事などを、其子に語り聞かせてよ

とことは—永久

姑息の愛—目前祇犢の愛をいふ

周子—周敦

ありて、たとひ罪あるも、笞ち苛責む事を嫌ひたまへり。御子たちの故なうして奴を怒り責め給ふ事あれば、運命の厚薄によりて、貴き賤しきかはりありといへども、一氣同體の人なれば、理不盡に責めさいなむべき理なし。心ならずのあやまちは、誰も有るべき事なれば、必ず宥めゆるすべしなど、深く戒め給ひぬ。かくある故に、家内みな和睦して、とことはに春風和氣の中にあるが如し。子孫にをしへ給ふ事究めて道ありて、御子たちのすこしもあやまち在すれば、必ず戒めとがめ給ふ。もし大いなるあやまちあれば、大中公へうかゞひて、ふかく戒め、改めざれば止め給はず。常々人に語り給ふは、子の不肖なるは、必ず母たる人の姑息の愛におぼれて、その子の過ちを戒め責むる事を知らず。あまつさへ夫にも蔽ひ隱して知らしめざる故なり、とぞ仰られける。かくある故に、御子明道伊川、幼少の時より、衣服飲食に於て一つも選び給ふところおはしまさず、よろづ人に勝れてぞ見え給ひし。父大中公、大知あきらかに在しければ、周子の大賢を見しりて、二程をつかはして心學を受けしめ給ふ。二程

狂がる—常識に外れて奇を好む事

侯氏—列女傳に見ゆ、大中公名は珦

もこの心を師として、其子の我滿の根、あらそひそねむ根、貪欲の根、狠戾の根、人をあなどりかろしむる根などを、引うごかし習はざるやうに用心第一なり。孟母の機をきり給へるは、餘りに狂がるやうに思はるゝ事なれ共、德を明らかにする事の、天下第一等にして人間第一義なる事を、明らかにわきまへ、孟子の學問懈怠なく、明德を明らかにし給はん事をねがひ給ふ心、常々はなはだ深き故に、おぼえず興に乘じて此事あり。その心の甚深なる所よりあらはれたる戒めなる故に、孟子の觸發もまた甚深にして、終に母の願にかなへり。是をかゞみて、その子に敎へ戒めて、願ひもとむる所を知るべし。

○程子の御母侯氏は、孝順の德崇く、その譽かくれなかりけり。故に大中公も、よのつねの妻のやうには思し召さず。禮儀いとおごそかにうやまひ給ひけれども、侯氏はいよいよ謙りて、すこしも悖らせ給はず。わづかの事をも必ず大中公の仰をうけて、我まゝに行はせ給ふ事ましまさず、家を治め給ふに法ありて烈しからず、婢妾になさけ

聲を聽かず、夜は則ち瞽をして詩を誦し正事を道はしむ
孟母―列女傳に出でたり
知覺―知慧に同じ
四配―孔廟の四配は、顏子曾子子思孟子也

母御、なんぢに振舞はんためよと戯れ給ひけるが、ことばの下に思ひたまひけるは、君子は胎教とて、胎内の子にさへ教へあると聞くに、今わが子すでに知覺ひらけたる時に、欺きたぶらかして、機變の根を引うごかす事こそ淺間しけれと悔みて、ひそかにゐのこを買ひとゝのへ、さきに汝が語りしゐのこの來りけるはとて、孟子にすゝめて、欺きたはぶれにあらざる事を示し給ひけり。孟子年たけて、師にしたがひ道を學び給ひぬる時、里へ歸り給ひぬ。折しも孟母機にあがりて絹を織り給ひけるが、はたの上より孟子に問給ひけるは、用なきに里に歸りけるは、學問のかたも盡きけるにやと、孟子の答へまめやかならざりければ、小刀にて機をきりて、汝が學問に油斷あるは、此たてたる機を斷るに異ならずと、甚しく戒め給ひぬ。孟子驚きおそれて、ひたすらに學問を勤めて、終に大賢となり、諸侯の贈爵にあづかり、萬世四配の祭りをうけ、その父母も類なき孝養をうけ給ひ、子々孫々、博士の榮花めでたく傳はりけり。

孟母のゐのこを買ひ給へる心、誠に有がたくたへなる教へなり。子を育つる人、誰

南面―君位をいふ易經に聖人南面して聽くとあり
胎教―列女傳に曰く、古は婦人子を妊みては、寢ろに側たゝず、坐するに邊ならず、立つに蹕せず、邪味を食はず、割正しからざれば食せず、席正しからざれば坐せず、目に邪色を視ず、耳に淫

り出し給ひて、王季大任もろともに、王者の孝養を受け給ひけり。

胎教とは、胎内に有るうちの教なり。この時のをしへは、母の心もちと身の行ひにあり。いかんとなれば、氣あつまり形かたまる始めなる故に、物にあやかり易き故なり。胎教の心もちは慈悲正直を本とし、かりそめにも邪なる念を發すべからず。食物をもよくつゝしみ、居ずまひ身のはたらきをも正しくつゝしみ、目にむざとしたる色を見ず、耳に邪なる聲をきかず、古への賢人君子の行迹、孝悌忠信の故事を記せる草子をよみ、或は物語をきくべし。これ胎教の大槩なり。生る子のすがた形もよく、智惠德藝もすぐれなん事をねがふは、母ごとの心なれども、胎教によって子の容儀もよく、智惠も勝るゝ理りをわきまへざる故に、胎教に力をもちひず。されば胎教は子にをしふる根本なれば、よく戒め勵ますべき事にこそ。

○孟子の母御は德高くおはしまして、母儀正しく、よく子に教へ給ひけり。孟子幼き時、外より歸りて、東どなりに只今ゐのこを殺せるが、何の用にやと母御に問給ひければ、

かざるやうに、用心第一にし荀且のたはぶれにも、父母兄老たる人にみやづかへの業を教へ、つとめて謙德を養ふべし。成人しての教には、明德明らかなる君子をもとめ、師匠として儒道の心學を教へ、ひたすらに明德を明らかにする工夫を勵まし、才智藝能などは、その生得の器用に隨つてをしへ成すべし。或人の曰、三教皆明德を明かにする教なるに、儒道の心學とのみ承はれば、かたむきなるやうに聞え候は如何。曰、もとより三教ともに明德を明らかにする教なれども、仙佛の二教は、その法世間に便り惡く、その上工夫取入がたき所あり。儒教は世間の日用にたよりよく、その工夫取入きはめて易き故に、世間通用のためなれば、儒道の心學とのみ論ずるなり。ひがめる私言にはあらず。

〇王季の后大任は、その御こゝろ端一誠莊にして、慈悲深くおはしましけるが、懷姙の時にはいよ〳〵德をつゝしみ、胎教をよく行ひ給ふ故に、その御子文王聖德明かにましまして道をひろめ、天下萬世を救ひ給ふ故に、周の代八百年、南面のさいはひを造

三教—儒教道教佛教
かたむき—偏頗

大任—文王の母、任氏の中女也、列女傳に見ゆ

身がまへ―自分勝手なるないふか

さかふ―逆らふ也

狼戾―心のねぢけ戾る事

機變―所謂權謀術數の稱也

むべし。そのをしへやうは、父母乳母などの心得にて、常々の戲言にも用心ある事なり。世間の人此理りをわきまへざるによつて、その子の我滿にして身がまへなるわざあれば、利根なりと悅びほめて、いよ〳〵習ひ染むやうにもてなし、或は兄弟並み居ぬる時は、かれは我子是は我子に非ず等とたはぶれて、其子の爭ひ嫉む心を引き動かし、或はいみじき食物衣服などに逢ふ時は、與へん與へまじき等たはぶれて、その子の貪欲の根を引うごかす。或はその子人に對し、心にさかふ事ありて泣き叫ぶ時は、その子に道理を附けて、彼をうたん彼を叱らんなど言ひ賺して、その子の恨みを報い、人をうち人とたゝかふ狼戾の根を引うごかす。あるひはむざと誑かして、人を欺く機變の根を引き動かし、或はむざと恐ろしき作り言をいひたはぶれ、おどして怯へ恐るゝ臆病の根を引うごかす。かくの如く覺えず知らずその子の惡念を引きうごかし、ゆくゆく明德をくらます習ひをつくる事、あげて數へがたし。此理りをよく心得て、貪欲の習ひ我滿の習ひ、狼戾の習ひ爭ひ勝つ習ひ、人をあなどり賤しむ習ひなどの染み附

すくむ─恐れ縮むをいふ

めても得る事能はざるとの理りをよく考へて、天下第一の寶をゆづらん事、子を愛するの至極なるべきにや。

○子に敎ふるに、幼少と成人との差別あり。幼少の時には、父母乳母などの心行を敎の根本とす。さて其子の惡念をひき動かし、惡にならはざるやうに用心第一なり。童部業たはぶれ事などをば其子の心に任せて、あながちに戒しめ制すべからず。いかんとなれば、是等の業は、年たけぬれば自から直るものなり。子に敎ふるといふ事を淺く心得たる人は、心のをしへある事を辨へずして、幼少の時より成人の者の振舞をさせんと戒めぬるによつて、その心すくみ氣屈して、異な者になるものなり。かくの如くなるを見て、幼少の時には敎へ戒むる事惡しと心得、寵愛におぼれ、何事をもその子の氣隨にまかせて、佚樂に耽るやうにもてなし、ものいひ立ふるまひ等の卑しく疎忽にして、その心放埒に習ふをも戒しめ制する事なし。これ皆子を育つるあやまりなり。是をかゞみて童業たはぶれ等をば、その子の業にまかせ、心の惡に習ふをば能敎へ戒

寶なり。いかんとなれば、明德明らかなる人是を得れば、その福ひめでたく、天下の人皆そのめぐみにうるほへり。明德くらくして是を得れば、その身の苦しびと成り、或は身をころし國をうしなふ災ひ是より起れり。桀紂は天子の富貴をうけられぬれ共、明德くらき故に其身ころされ、國を失ひて田夫野人の福ひにも劣れり。是は用ふる人のあやまりにして、此寶のとがにあらざれども、本來寶の功德劣れる故なり。しかのみならず。世間萬用の重寶のみにして、出世間の重寶とならず。彼といひ是といひ、如意寶珠の明德には遙に劣れる寶なれば、天下第二の寶とはいふなり。其上如意寶珠の明德は、人々具足の物なれば、上天子より下庶人に至り、上聖人より下凡夫に至るまで、求むれば得る物なり。世間の寶は天命の福分ありて、人每に得る事あたはず。その福分なければ、夜日にむねをこがし、東奔西走して求むるといへどもその甲斐なし。しかる故に、千金の讓を受けて程なく貧窮に苦しみ、一錢のゆづりを受けざる孤も、家を興し富み榮えぬるためし、眼前に明白なり。寶の勝劣を求むれば、必ず得ると、求

り、此語太平記にも見ゆ

無價の寶―價を附すべからざる至寶

如意寶珠―如意輪觀音の兩手にあ

徳くらくして、徒に供佛施僧の孝養をのみいとなむばかりにては、生天の福ひをうる事あたはず。斯あれば、現世後生ともに孝養の誠をうくる事は、子の明徳を明らかにするより外はなし。本來親の子に教ふるは、報を望むところにあらずといへども、此理りをよくわきまへて、教をはげますところを知るべし。貴も賤も智あるも愚なるも、生とし生る人その子を愛せざるはなし。子を愛する時は、必ずその子に寶を與へん事を願はざるはなし。しかはあれど、天下第一の寶のある事をわきまへざる故に、徒に世間のたからを與へんとのみ願ひて、性命の寶をあたへんと願ふ心なし。それ天下の寶二あり。人々の心の中に明徳と名づけたる無價の寶あり。これを性命のたからといひ、天下第一の寶なり。いかんとなれば、この寶をよく保ちぬれば、その心常にたのしび、何事も皆心にまかせ、世間の寶も福分に從ひてあつまり、子孫もこれによつて繁昌し、當來かならず天に生す。今生後生の安樂、思ひのまゝなる功德ある如意寶珠なれば、天下第一の寶とす。金銀珠玉、天子諸侯の位を世間の寶といふ。天下第二の

一子云々—盂蘭盆經には、七世の父母とあ

鑑草　巻之四

○教子報

○教子は子に道ををしへて、その明德佛性を明らかにさせる事なり。子の明德明らかなれば、生ては忠養の報をうけ、死しては生天の福ひをうく。いかんとなれば、子の明德明らかなれば、かならず孝行誠ある故に、たとひその子の福分うすくして貧賤なりといへども、その孝養まめやかにして、親のこゝろ安樂なるものなり。子の明德くらければ、孝心まことなき故に、たとひその子の福分厚くして富貴なりといへども、孝養まめやかならざれば、親の心よろこび安んずるところなし。さてまた子の明德明らかなれば、當來生天の福ひをうくる事、一子出家すれば九族天に生ずといへる理りなり。出家といふは、髪をそり衣を墨に染むるをいふにはあらず、明德佛性を明らかにして、世間の苦しびを免かれ出づるを、出家ともいひ出世間ともいふなり。其子の明

也

たいせつに愛するなり。その上人の妾となり奴となる女も、同じく人の生をうけて異なる所はなけれども、貧窮にせん方なくてこそ人の手にかゝり、起寝だにも心にまかせず、何事もみな主にはからはれ、一門の會合をもはなれ、又夫婦のちなみもなく、いと哀なる境界なり。我身わが子の彼が境界にあらば、如何ばかりかは悲しかるべきと思ひはからば、心あらん人はあはれむ情深かるべし。然るを情あるまでこそなくとも、いかに苛なみ悩ますに忍びてんや。よく仁恕の本心を興起して、陰隲を積みぬべき事、その人の大幸なるべし。

を同じうせんとあるに出づ

萬物一原―萬物皆其原を同じうす、人我彼此の別なき

あさましく歎かし。もし夫不義無道の淫亂ある時は、必ずふせぎ止むべし。妻の異見ばかりにて叶ひ難くば、或はしうと或は一門、或は親しき友などへ、ひそかに談合してふせぎ止むべし。是はもと守節の事にして、悋氣にはあらず。りんきといふは、不義無道にあらずして他人に心あるを、防ぎ嫌ふ事なり。又わが身に子なき故に、子孫相續のために妾などを持つを、烈しく防ぐは、一しほ悋氣の蛇心なり。いかんとなれば、聖人七去の法の中に、子なきは去るとあれば、子なくして己その家にあるは、夫の慈悲有難き事なれば、われより勸めても妾をとゝのへ、情をかけて子孫を求むべき事、義理の當然なり。その上かれに男子うまるれば、その家末長く繁昌して、わが身も孝養をうけ、めでたき報を受くる事なれば、よく心得べき事にこそ。萬物一原の理りなる故に、本來吾と人との差別なし。かるが故に嫉みて人を憎み害なふは、我身の爲を思ふに似たれども、畢竟は己が身を憎み害なふなり。ねたまずして人をめぐむは、わが身のはかりごと愚なるに似たれども、畢竟は我身を

或人―大和物語に此話此歌あり

偕老同穴―詩經に、君子と偕に老いんとあり、又死しては則ち穴

方をよびたてまつる。かつて返事もなかりけれ共、たび〳〵とかく申されければ、歸り給ひぬ。遊女も心有るものにて、互に遊びたはぶれて、隔なき事にてぞ有りける。又或人本の妻をも家におきながら、又妻を迎へてあひすみけり。今の妻と一所に居て、かき一重へだてゝ本の妻のありけるに、秋の鹿のなく聲きこえけるを、夫きゝ給ふかと本の妻に言ひければ、返事に

我もしかなきてぞ人に戀られし今こそよそに聲ばかりきけ

といひければ、わりなく覺えて、後の妻を送りて又復り逢にけり。されば是等の故事を考ふるに、既に離別に究りたるも、不嫉の心行まめやかなる功德によつて、終に偕老同穴の緣となれり。もし少しにても妬毒の心行あらば、永く離別の憂に沈みなん事必定なり。不嫉の德は夫婦の緣を堅く結ぶのみならず、蛇道の苦しびを免がるる功德無量なれば、つとめて明かにすべき事なり。此理りは分明にして、知がたき事にあらざれども、習ひにひかれ情欲におほはれて、覺えず毒蛇の苦しびに沈む事、

殿上人—四位以上の公卿と六位の藏人は、常に殿上に昇るを許されし也

おびたゞしく—類に

本心明かなれば、夫の淫亂必ず止むものなりと心得、夫の淫亂をきらはん人は、よく悋氣の蛇心を捨て、不嫉の本心を明かにすべし。むかし或殿上人、田舍くだりのついでに、遊女を相具して上られけるが、使を先立てて、人を具して上り侍る也、むつかしくこそ思しめさんずらめ。御心なり、出でさせ給へと、女房のもとへ情なく申されけり。女房すこしも恨みたる氣色もなく、殿の人を具して上らせ給ふなるに、御まうけせよとて、こま〳〵と下知して、見苦しきものよりとりしたゝめて、わが身ばかり出給ひぬ。遊女この事を見聞いて大きにおそれて、殿に申けるは、御前の御ふるまひ、有りがたき御心ばへにておましますよし承り候。且つ事の樣を見まゐらせ候に、爭でかゝる御住居のところには候べき。身の冥加もよも候はじ。たゞ御前を呼び參らせて本の如くにて、此身は別の所に候て、時々召されんは然るべく侍りなん。さらでは一日もいかでか斯くて侍るべきと、おびたゞしく誓ひければ、殿もことわりに折れ、且は北方のなさけもわりなく覺えて、やがて使をつかはし、北

あふれ事―溢事の義か、醉狂などいふに同じ

つら〳〵悋氣の根を尋ぬるに、夫の己を嫌ひ侮どる事をいかると、ゆく〳〵我を棄てん事を歎くとの一念よりおこれり。本來夫の淫亂は、妻を嫌ひ侮るにあらず。又その妻を棄てんとの巧にあらず。美色におぼるゝか、或は珍しきを好む、情欲の邪火うちに燃ゆるによつて、心暗く氣亂れて、一旦のあふれ事なり。この理をよくわきまへなば、妬毒の念おこらずして、不嫉の本心常に明かなるべし。萬一その夫ねぢけ人にて、その妻を嫌ひ侮り、或は棄てんとたくむ心にて淫亂にあらば、悋氣のふせぎにては彌々疎み捨つる心いやましになりて、淫亂必ず止むべからず。もし不嫉の本心明かにして、夫のかくあるは已に惡しきところ有る故なりと心得て、いよいよよく從ひよく事へてまめやかならば、ねぢけたる夫も必ず思ひ返す事も有りなん。たとひその妻をきらひすつる心なき夫なりとも、凄じくふせぎなば、妬毒の蛇心を見つけて、恨み嫌ふ心いでき、却つて離別のもとゐとも成りぬべし。これらの理りをよく心得、妬毒の心あれば、夫の淫亂いやましになりて止む事なく、不嫉の

づべしとて、その御用意しきりなりければ、世子の母しりぞいて世子に申されけるは、后の外に出で給はんとあるは、我世にながらふる故なり。われ聞く君子は順徳をもて命を立つとなん。今われ上下の分を亂りて世に生らんよりは、順を守つて死せんには如かじとて、既に自殺せんと有りけるを、世子抱きとゞめて泣き悲しび、やう〳〵に諫め給ひける。后是を聞き給ひて、その忠順の誠をよろこび感じて、外に出る事をやめ給ひ、世子の母も其本意を遂げて、めでたくもろ共に衛公の孝養をうけ、衛宗の二順とて、天下にほまれをあらはし、末代の手本となれり。

后の不嫉一つによつて、靈氏の子孫繁昌して、その國治まり其民めぐみに潤へり。この功徳に依て、その身子なくして孝子のやしなひをうけ、且傅妾の忠順を招きて、天下に譽をあらはせり。もし此后妬毒の虵心あらば、靈氏の子孫絶えはてゝ、其身も流浪の寡となり、悪名天下の人口をけがすべし。これらの故事をかゞみて、不嫉妬毒の損益を能心得、慈悲清淨の明徳をあきらかにすべし。

うたてしけしからぬの意

侍れ。我ねがはくは外へ出で、時をもて相見えて、孺子をわづらはす事なかりせば、心安くあらめとかきくどき給ひければ、世子の母涙をはら〳〵とこぼして申されけるは、うたての御事を宣ふものかな。靈氏をして三の不祥を受けしめ給はんとの御事にや。靈王不幸にして世を早く去り給ひぬるは一の不祥なり。后に子なくして婢妾に子あるは二の不祥なり。今又后出て外に居給ひ、婢子は内にはんべらば、是三の不祥なり。二の不祥は人力の及ばざるところなれば詮方なし。今后の外に出給はんは、君の御心に有事なれば、靈氏に不祥の數をそへ給はんは、かへす〴〵も勿體なく歎かしくこそ候へ。その上妾が主君の母たる事は、后の不嫉の德明かにして、御めぐみ深く渡らせ給ふ故なれば、君こそ主君の御母にてわたらせ給へ。われ主君の母たるべしとは、露も思ひはんべらず。我みやづかへは妾が職分なり。君なんぞ御心にかけ給はんやとて、又さめ〴〵とぞ泣かれける。后かさねて宣ひけるは、子なき我身にて、主君の母をはづかしむる事、孺子は何と思ふとも、世間のそしりもさる事なれば、必ず外に出

靈王—列女傳に出でたり

孺子—曲禮に、大夫の妻を孺人といふとあるより誤れるか

りと思ひ懲りて、不嫉の本心を明かにすべし。

○衛の靈王の后、つひに御子なかりけるが、わきばらに公子うまれ給ひぬれば、殊の外によろこび給ひ、嫉む御心毫もおはしまさず。いそぎ世子にたてて、我子の如くいつくしみ給ひけり。世子も又后に孝行を盡し給ふ事、本の母御よりも優りてぞ見えし。靈王世をはやう去りたまひて、世子位につき給ひしかども、その孝行猶おとろへ給はず。その母御もまた聊おごる色もなく、前かどよりも一入謙りて后へ宮づかへ、いよいよ愼み給ひけり。かくして八年過ぐれども、そのみやづかへ衰へず、心入うたたいやましに成行けり。有る時后世子の母にかたりて宣はく、世子既に位に卽きぬれば、孺子は正しく主君の母なり。われに斯くみやづかへ有るべき理なし。然るに昔に變らぬみやづかへはその恐あり。我きく、主君の母は人にみやづかへずとなん。その上われは子なければ、禮に於て退けらるゝ人なり。然るを止まつて我節を守る事を得るは、これ我さいはひ也。然るに孺子をかくわづらはす事、我はなはだ恥かしくこそ

輪廻―三界六道の中に、限りなく流轉の苦を受くる事

り殺しぬ。今はわが頸を締めし女を殺すべき時到りて、その喉を塞ぐなれば、各の醫術せんなき事にこそ。たゞいそぎ御歸り有るべしといふ。兩人答へけるは、それはともかくも汝の言に從ふべし。さて冥途の事はいかにとたづねければ、地獄輪廻の沙汰すこしも僞なしといふ。又二人問て曰、われら年たけて子なき事は、何の故にやと、靈鬼こたへて曰、金淮は若き時、力あらそひの故にて、さる人を暗討にし給ひたるたゝりによつて、子孫絶ゆるなり。丁洋は時節いまだ到らず。ゆく〳〵子孫繁昌なるべしと語る。そののち金淮はつひに子なく、丁洋は子五人出來て、子孫繁昌しけり。靈鬼の言露もたがはず、不思議なりし事どもなり。

喉を乾し頸をしめて殺しぬれば、又喉をもて報ぬ。まことに谷に聲をあぐる如くなる感應、おそろしき事なり。されば妬毒の行ひは、本來わが身の爲を思ひすごす迷よりおこれり。然れども却つてその身のそこなひとなれば、我身を思はざるに似たり。妬毒の蛇心發る時は、古へ今のためしを思ひいだし、わが身をそこなふ毒心な

喉氣―喉内の腫れて飲食呼吸に障害を起す病氣

兩殿―二人の殿達

きぬる男どもに、棺の中より聲をあげていひけるは、我きる物の中に金あり。なんぢら我を助けばこの金を與へんといふ。男ども是を聞いて、さらばとて棺を開きて出しければ、金をとり出して與へけり。四人のものども、この金を取つて助けたくは思ひしかども、主の妻のかへり聞かん事を恐れて、なさけなくも又とつて棺の中へ押し入れて、生ながら深く埋みてけり。その後かの商人の妻喉氣をわづらひけるが、次第に喉ふさがりて、湯水もとほらずなやみけるありさま、目もあてられぬふぜいなり。療治のためにとて、金淮丁洋といふ醫者二人をまねきて、晝夜彼の家にとめおき、種々療治のてだてをはげみける。有る時日中に、二人の醫者ばかり座敷にありける所へ、顔青ざめてしほ〴〵としたる女一人、忽然と來りて座敷に打直り、二人の醫者に向ひて申しけるは、いかに兩殿、われをな怖れ給ふなよ。我は元此の家のつかひ女なりしが、あるじの妬毒にあてられ、空しく成りて又蘇へりしを、四人の奴に埋み殺されたる怨靈なり。四人の奴の内、その一人は川に沈めて殺しぬ。三人はその隙間を伺ひて皆と

れよとの敎なり。然れども賀氏その覺悟なく、たゞに虵を養ふのみにて、夫にさへさんげの誠なきによつて、終にその報い逃れがたく、その兩眼を失へり。されば賀氏、神明大慈のいましめをよく心得て、その過を夫にもさんげし、妬毒の虵心をひるがへし、不嫉の慈心を明かにして、陰隲の行ひまことあらば、その兩眼潰れざるのみならず、後虵もいつとなく消え失せぬべし。しかるを禪師の敎も淺く、たゞ虵を養へとのみなるを、これのみ大事と心得て懺悔のまことなく、善に遷らざる事淺間しく拙なし。これをかゞみて、過ちあらん人は、第一其心を善にうつして禍ひを免かれ、福ひを得んと務むべき事なり。

○休寧のさる商人の妻、きはめて嫉み深き女なりけるが、有る時夫の手をかけし女を捕へて、一間なる所に閉ぢこめ、食どめをして干殺さんと巧みける。かくして五三日を經れども死せざりければ、てづから彼の女の頸をしめころし、棺へ入れ、奴四人にかかせて野へ出しけるが、女の締めける故にや、かの女棺の中にてよみがへり、棺をか

らで、蚺一すぢ產み出せり。あまりに不思議なりければ、恐しながら是を取りあげ見れば兩眼つぶれけり。つくぐ〵と彼の報なる事を思ひ出でて、ある有驗の禪師のもとに行きて、ひそかに懺悔して問ひければ、禪師答へていはく、夫人の心妬毒ふかくして、人の眼を燒き潰したる故に、この報に遭へり。此蛇はかの眼をやき潰されたる女なり。よくやしなひなば難を遁るべし。もし殺しなば禍ひ夫人に及ぶべしといふ。賀氏恐れてよく養ひけるが、一二年すぎて次第に大きに成ぬれ共、眼見えざる故に、ただ衣服の中にのみわだかまりけり。胡亮には深く隱しければ曾て知らず。ある時胡亮ふすまを開きてかの蛇を見つけいだして、大に駭き伐り殺しぬれば、賀氏が兩眼たちまちに潰れけり。悔ゆる事かぎりなかりしかども、その甲斐さらに無かりけり。

賀氏が妬毒きはめて甚しければ、そくじにその兩眼つぶれなん理りなれども、その福分の厚き故か、又は先祖の餘慶にやうるほひけん。神明大慈大悲の御惠にて、めしひたる蚺をうませ、その報をあらはしたまひ、過を改め善にうつりて、禍を免か

永劫に―永遠にの義

る事あたはずして、あやまちを悔い善にうつる事あたはず、常に虵道の苦しみを免かれず。ながく無比のたのしびを失ひ、又當來には必ず毒虵のせめをうけ永劫にもうかぶ事あたはず。悔る共甲斐あるまじ。されば柳氏が報にあへるは、不幸に似たる幸なるべし。それ神明はきはめて慈悲深くましくて、あやまちを悔い善にうつる事をよろこび給ふ。故に柳氏が妬毒よのつねならずと雖も、非を悔い神に祈りて善に移りぬる誠ある故に、その禍ひを免かれぬ。もしその心善にうつる誠なくば、禪師の祈そのしるし有るべからず。この故事をかゞみて、よく過を改め善にうつり、禍ひを轉じて福ひとなすべし。

○唐の胡亮、遼國を征しけるが、てかけを一人もとめ得て歸りけり。その妻の賀氏深く是をねたみ、胡亮の留守の隙をうかゞひて、一間ところへ誑かりよせ、かの女をとらへ、釘を燒てその兩眼を突き潰しければ、かの女口惜しくや思ひけん、みづから縊れて失せにけり。その後賀氏懷姙し、十月みちて產みおろしけるが、まことの子にはあ

至心―誠心誠意

臓腑―五臓六腑の略、斯處には唯腹中の義

心を明かにし給はゞ、萬一祈禱の驗あるべしといはれければ、柳氏悲しく思ひ、五體を地に擲つて頂禮再拜して、至心にあやまちを悔い、善心を發してひとへに神明の助をいのりけり。かくして七日みちて又禪師來り、柳氏の口を開かせて呪しければ、一尺あまりある蛇二すぢ喉の中より這ひ出て、半は内にとゞまりぬ。禪師聲を勵まして急に呪しければ、くだんの蛇地に落ち、行方なく失せて、舌もやうやく平愈しぬ。是より深く懲りて篤く神明を信じ、ねためる心毛頭なく、慈悲深くぞ成りにける。萬物みな一心の變化なれば、一念の住するところは皆その形を生ず。かるが故に妬毒の心はすなはち蛇心なり。すでに蛇心あればかならず蛇道に入るなり。されば柳氏が妬毒すでに蛇道に入りて蛇と變じ、腹中にわだかまりぬ。いま天罰に驚き、敎にあひて惡心をひるがへし、善にうつる誠あるゆゑに、その祈によつて、臓腑に隱れるたる毒蛇あらはれ出て、落ち失せけり。柳氏一人にかぎらず、妬毒の蛇心ある人には、必ず臓腑に毒蛇わだかまりぬれども、凡夫のあさましきは、現れざれば知

有驗ー祈禱禳除に妙を得たる事

て凄じく怒りけるが、あまりに腹を据ゑかねて、金荆が兩手の指を一つづつ斬りてけり。程なくある夕暮に、きつね來りて、柳氏が兩の手の指を一つづつ喰ひきりて、その報をあらはしぬ。その後又玉蓮とて、聲よくして歌うたふ女あり。杜昌是をよろこんで、時々歌はせてきゝければ、柳氏ねたく思ひ、あるとき玉蓮を捕へて、彼の舌をぬきいだして、汝がこの舌あればこそ、杜昌もよろこぶらめとて、情なくも弗ときる。其後柳氏が舌にかさいでて、痛み爛れけり。色々に療治しけれども、終にしるしなく、既にきれて落つべくなりぬ。みづから婢の舌をきる報なる事を覺えて、さる有驗の禪師の許に行きてさんげし、いのりしてたまはれと深く頼みければ、禪師いはれけるは、夫人嫉妬の心深くして、前かど婢の指をきり給ひぬれば、既に狐來りてその報をあらはしけれども、それにも懲りず、なほ嫉妬の蛇心甚しく、又婢の舌をきりたまひぬ。此わづらひは其報なれば、舌きれて落つべし。しかれども神明は慈悲深くましませば、あやまちを悔い善にうつり、向後嫉妬の蛇心の根をたちすてて、ひたすらに不嫉の慈

高陽―直隷省保定府高陽縣

でたく榮えけり。

趙姫の叔隗をむかへたるは、夫の寵愛おとろへなん道を求むるに似たり。然れども不嫉の德明らかにして、義理正しき行ひなるによつて、却つて夫の寵愛いやましに成りぬ。趙盾を嫡子にたてぬるは、我子のするびを求むるに似たり。然れども慈仁の德明らかに私なき行ひなれば、却つてその公族の大夫となり、終に嫡子のゆづりをうけたり。されば嫉みふかきは本來夫の寵愛をそねむ故なり。繼子をにくむは、本來わが子の繁昌をもとむる故なり。然れども終にねたみによつて寵愛をうしなひ、不仁によつて我子を損ずる事、古來その例すくなからず。趙姫の故事をよくわきまへ、夫の寵愛を望み子孫の繁昌をねがはん人は、その心をおほやけにして道に入るべし。

○高陽の杜昌が妻の柳氏は、嫉み深き女なりけり。杜氏が家に金荆といふつかひ女ありしが、ある時杜昌かみをあらひ、人なき處にて金荆に髮を梳かせけるを、柳氏見つけ

内子—卿大夫の嫡妻をいふ

しみ給はんとならば、我不肖なりといへども、みやづかへかなふまじ。いそぎ御暇たまはれと、強くいさめられければ、趙衰その議に同じ、叔隗趙盾もろともに、晋國へ迎へとりぬ。趙姬よろこんで叔隗をば内子にたて、わが身はこれにくだり、趙盾を嫡子にたてて、原同屛括樓嬰、三人の子供をくだして、趙盾を兄としつかへしめぬ。さて趙衰百年の後、趙盾をあと目にたて正卿たらしむ。その後趙盾趙姬の德に感じて、いかにもしてその恩を報たく思ひければ、晋の君へ申上けるは、臣すでに狄人たるべかりしを、趙姬の賢德明らかに、恩愛深きによつて、趙衰が嫡子と成り、君に事へ奉りて正卿の位をけがしぬ。もしさもなく候はゞ、三子の中その器にあたれる方、わが位をふまん事うたがひなし。其上すでに公族たるうへは、大夫の位にあげ給へとて、我身は旄車の族と成り、趙氏の故族をば、皆屛括につけて趙氏の嫡子にたてんと、たつて申上ければ、晋公御感あつて、その議をゆるし給ひ、その才德すぐれたればとて、屛括を公族の大夫になし給ふ。これによつて、原同樓嬰もろともに大夫の位にのぼり、め

ゆ、列女傳にも出でたり

かへり位につき給ふ時、趙衰も同じく供奉してかへりけるが、かた田舎にてまうけたりし妻子なれば、國本へ供してかへる事恥かしくや思ひけん。妻の叔隗子の趙盾もろともに、狄國にのこし置きぬ。文公國にかへり位につき給ひて後、そのむすめの趙姫を趙衰にめあはせらる。趙姫趙衰にとつぎて男子三人をまうく。兄をば原同と名づけ、次をば屏括となづけ、弟は樓嬰と名づけぬ。そののち趙姫、狄國に趙衰がふるき妻子のある事をきゝて、趙衰に申されけるは、狄國に妻子のおはする事をこのごろ聞いだし候ひぬ。何しに今までは迎へ給はぬにや。われ不肖に候へども、いさゝかも嫉み嫌ふ心なし。いそぎ御迎へ候べし。叔隗ははじめの妻なれば本妻にする、わらははは叔隗に仕へんこと、道のあらゆる所なれば、我願ふところなりと、いとまめやかに聞えけれども、趙衰辭退してうけがはず。趙姫また申されけるは、舊きをすてて新しきをこのみ、義理をかへりみずして欲にしたがひ、貧賤患難のうちにての因縁を、富貴になりて忘るゝは、みな人の人たる道にあらず。人の人たる道をそむきて、我をした

陰司―陰は幽冥なり、冥界の諸司を指せり

文公―晉の献公の次子、齊の桓公に繼いで覇たりし人

趙衰―左傳國語等に見

の蛇心思ふざまにふるまひ、胎内の子を殺しぬるによつて、その腹中に子の如くなる塊出來て、その報をあらはし惱み殺しぬ。まことに人をなやまし己を損するのみならず、夫の家をほろぼしぬる罪甚ふかければ、今生の報のみならず、陰司の鬼責もさこそと哀に淺間し。されば徐氏、己こそ子をまうけずとも、妾になさけありて、その子をとり己が子としてそだてなば、趙氏が子孫相續して、己もそのまつりを享くべし。然るに嫉妬の蛇心にまよひて、あさましき報にあへり。趙氏も又程なく空しく成りぬるは、かく冷じき妻にまかれて、子孫をたつ不孝の罪重き故なるべし。

○晉國の君文公、まへかど繼母の讒言によつて、方々流浪し給ひしとき、狄國に久しく逗留おはしましけり。狄人叔隗季隗といふ女を二人、文公へみやづかへに參らせけるが、季隗をめしつかひ給ひ、叔隗をば供にはんべりける趙衰にめあはせける。趙衰叔隗をめとり、ひとりの男子をまうけ、趙盾と名づけて養育す。そののち文公本國へ

岳州―湖南省岳州府岳陽ともいふ

寒薬―今の堕胎剤の事也

かんなぎ―神に奉仕して人類の罪悪を禳ふ者

の内助その益すくなからず。よくかゞみて、不嫉の徳を明かにして、子孫の繁昌を招くべし。

○岳州の趙指揮は、ひとり身にて年老くるまで子なかりければ、妾を求めて子孫さうぞくのはかりごとを営みけり。その妻の徐氏、もとより悍くしてねたみ深き女なりければ、色々に手だてを廻らして、夫の妾にあはさぬ様にはからひ、あまつさへその妾を悩ましけり。手かけ懐姙するたび毎に、ひそかに寒薬をのませければ、皆おりて育たざりけり。そののち徐氏か腹中に子の如くなる塊出で來て、堪へ難くなやみ物苦はしく成りて、いろ〳〵の囈言を盡しぬるうちに、有る時は手かけのまねをして命をこひ、有るときは幼き者のまねをして、棺をくれよなどいひて、なやむ事日久しかりけり。方方の醫者かんなぎを招きて、かたの如く療治はらひなどしけれども、露もしるしなく、終にむなしく成りぬ。趙氏も又程なく身まかりて、その家跡方なくたえはてけり。七去の中、子なきを去るとあれば、徐氏すでに其罪なきにあらず。しかる上に妬毒

なば、嫉妬の蛇心もうすく、妬毒の行ひ有るまじきに、貪欲愚痴にして、この理りを信ぜず、人をなやまし己を害する事、いとあさまし。彼靈のせめ來るときは、後悔かぎり有まじけれども、つひに其甲斐なし。朱氏が妬毒は世に珍しき事なるによつて、又世にめづらしき報に遭へり。善惡の報、影の形にしたがふ如くなれば、よのつねの妬毒には又よのつねの報有り。よく心をつけて恐れつゝしむべし。

○文王の后大姒は、仁德さかんにまします故に、不嫉の德明かにして、衆妾皆めぐみをかうぶり、宮中に怨女なかりしかば、衆妾樛木螽斯の詩を賦して、その德をたのしめり。かくめでたく不嫉の德明らかなりければ、その報にて、玉の樣なる男子十人までまうけ給ひ、其中に武王周公二人は、聖人にておはしましければ、終に天下をたもち、文王大姒もろともに、天子の祭りをうけたまひ、子々孫々めでたく榮えたまひけり。子孫の繁昌をば人毎にねがふところなれども、不嫉の德によつて、此福ひを得る事をわきまへず。されば周室の繁昌は、文王の聖德によつて興起すといへども、大姒

大姒—列女傳に出づ
樛木螽斯—詩經周南に、樛木螽斯の詩あり、樛木は不嫉を明にし、螽斯は子孫衆多を歌ふ

ずた也

あきどし空所もなく

に斬りさき、溷の中に棄ててけり。そののち一年あまりして、朱氏懐姙しけるが、何となく悩みて次第に重く成りぬ。常にかの女の靈來りておもかげにたちしが、手をもつて朱氏が胸をつくと覺ゆれば、錐にてもむよりも甚しく、堪へ難くて叫きさけぶ聲、となり四五間へ響きわたり、なか〳〵目もあてられざりけり。朱氏が兄弟かなしく思ひて、靈驗有る神巫かんなぎをむかへて、いろ〳〵に祓ひせさせけれども、すこしもその驗なし。のちには靈の來る每に、すさまじき大鳥二三十飛び來りて、朱氏を摑みあげ叩きふせ苛責けり。あたりに近づく者までも、疵をかうぶりければ、人皆恐れて寄りつかず。その羽風にて、朱氏が寢間臺所へ、あきどもなく糞をまきぬれば、門外まで臭ひけり。かくさいなみなやます事程ありて、終に責め殺してけり。

朱氏が妬毒、たけき鳥獸の業にひとしきによつて、すさまじき鳥來りてその報をあらはし、尸を糞の中へすてぬれば、彼靈叉糞をまきて報いぬ。まことに響の聲に應ずる報、いちじるしく恐ろし。されば朱氏もかく報有るべき事をかねてわきまへ

しは、寶山に入りて手を空しくして歸るが如し

さにこそ—果して然り

づた—ずた

れ難き故なり。然れども必ず家に置くべからずとにはあらず、他の婦人をもとめて、子孫相續のはかりごとをなすべしとの事なり。其妻かへすべき方なきか、又は去るべからざる理りあらば、かならず去るべきにあらず。聖人の法には、夫婦して先祖の鬼神を祭るおきてなり。然るに癩瘡如きの惡疾ありては、祭祀の役をつとむる事ならざる故に、あらため娶るべしとの事なり。是も歸す方なきか、又去りがたき勢ひあらば、その家にやしなふべし。必ず棄てよとにはあらず。

○縉雲が妻の朱氏は、勝れてたけく嫉み深き女也。縉雲が家へとつぎし時、顏よき女一人供して行きしが、縉雲もし手をかけんかとうたがひ、常ににらみつけて、科なきにむちうち惱ましけり。年經てのち、かの女孕めるけしき見えければ、あはれさにこそ斯くは思ひつれと、事も夥しく腹を立て、みづから杖をもつて情なくもたゝきける程に、杖のあたらぬ所もなく、はだへきれ爛れて、血の流るゝ事夥し。堪へがたしと叫べどもやまず、終にたゝき殺しけるが、是にも腹を据ゑかねて、みづから女をづたく

事

寶の山云々
―正法念經に、閻羅王曰く、汝人身を得て道を修せざり

聞も入れず、姑に孝行いよ〳〵淺からざりけり。宋國の君この事をきこしめし、殊に御感あつて、かやうの人は女の手本たるべければとて、其家へ勅使を下され、褒美を給はるのみならず、女宗といへるいみじき號を下されて、その家をあらはし、國中のすゝめとなし給ふ。鮑蘇が家是によつてめでたく榮えけり。

婦人の身として國王の勅使をうけ、ほまれいみじき號を給はる事、まことに希代不思議なる福ひなり。是ひとへに孝行不嫉の德あきらかなる故なり。誰人もかくいみじき譽榮花は願はしき事なれ共、孝行不嫉の德明かなれば、求めずして自づから得る理りをわきまへず。間に粗知れる方ありといへども、力を用ふる事專ならず、いたづらに外に求め胸をこがして、生樂をうしなひぬ。まことに寶の山に入りて、手を空しうしてかへるが如し。

或曰、七去のうち、子なきと惡疾あるとは、忠厚の道にたがへるに似たり。曰、先儒この發明あり。子なきは不孝の第一なれば、その妻一人を守りては、不孝の罪遁

十二人—禮記に出づ

七去—小學明倫篇の語

中言—中間に立ちて相互の感情を傷害する言語を發する

ぎ此家をさり給ふべし。何の殘り多き事ありて今まではおはすぞやといへば、鮑蘇が妻こたへけるは、婦人は一度緣をむすびては、夫むなしくなるとても、二度人にまみえずして、舅姑に孝行を盡し、心の專一なるを貞とし、道をもつてしたがふを順とす。夫婦のちなみは貞順をもつて本として、いもせのちぎり深きを本とするにあらず。貞順の本なくして、たゞにいもせのちぎりを專とするは人の道にあらず。それ天子の后は十二人、諸侯は九人、卿太夫は三人、士は二人、これ禮法の常なり。わが夫は士なれば、妻ふたりあるも理りなきにしもあらず。その上婦人には七品去るゝ罪ありといへども、夫を棄つる事柄は一もなし。七去の罪、一には舅姑に不孝なるを去る、二には子なきを去る、三には淫亂なるを去る、四には吝氣ふかきを去る、五にはあしき病あるを去る、六には多言にして中言をいひ僞をいふを去る、七にはめがくして夫の物を盜みかだましきを去る。七去の中、ねたみは第四に有るなれば、我もしねたむ心あらば、敎誨をしたまはん人の、今かく不義をすゝめたまふは何事ぞやとて、いさゝか

当來—未來の義

鮑蘇—列女傳に出づ

音物—好意を通ずる爲に贈與する物品

熱のくるしびに沈み、當來にては地獄のせめのがれがたし。これ妬毒の損その三なり。此理りをわきまへずして、吝氣なければ己に損あり、りんきは己に得ありと迷ふ故に、妬毒の虵心いやましに成りて、あさましく己をなやまし人をなやます事、擧げてかぞへがたし。若よく氣をしづめ心を正しうして、不嫉に益多く、妬毒に損ある事を明かにわきまへなば、三毒の虵心おのづから消えて、不嫉の明德佛性あきらかなるべし。

○宋の鮑蘇が妻、姑にきはめて孝行を盡せり。鮑蘇衞の國にみやづかへぬれども、家人をばひきこさゞりけり。かくして三年すぎぬれば、獨りずみさびしくや思ひけん、衞の國にて又妻をめとりぬ。古鄕へは深くかくしぬれ共、終にそのかくれなし。鮑蘇の妻これを聞いて、すこしも怒るけしきなく、鮑蘇が方へおくりぬる衣服など、常よりは却つてよく調へ、あまつさへ衞の國にてまうけたる妻のかたへ、音物あつく送りて、ねためる心は露もなかりけり。その兄婦もどかしく思ひて、鮑蘇が妻に異見していひけるは、鮑蘇すでに別の妻をまうけぬるうへは、御身はありて甲斐なき事なり。いそ

ふかみ―心深しとして敬ふ意歟

ものなり。これ不嫉の徳その二なり。不嫉の本心あきらかなれば、夫も是をふかみ、世間に是をおもんじ、其名末代にかうばしく、その上三毒の焰燃えざれば、明德佛性あきらかにして、現世安樂後生善所の得益あり。これ不嫉の得その三なり。扨又妬毒の蛇心はなはだしく、或ははげしく夫をふせぎ、或はねたましき女にすさまじくあたりて、おそろしき行ひあれば、その夫たる者其妬毒を見れば、興さめおそろしくて、毒蛇の如くおぼえぬれば、つひに離別のもとゝ成りぬ。吝氣は離別をいとふ心よりおこりて、かへつて離別の害にあへり。是妬毒の損その一なり。妬毒の蛇心ふかければ、かならずまづ家内和睦せず、しかのみならず妬毒の惡行は、その報踵をめぐらさゞれば、或はその身をなやまし毒蛇となるも有り、或は其子孫を絶滅し、家門の衰微多分これより發る。これ妬毒の損その二なり。妬毒の蛇心甚しければ、その夫にあなどりうとまるゝのみにあらず、世間に是をそしり、惡名先祖をけがす、その上三毒のほのほつねに燃えぬれば、明德佛性をやきほろぼして、今生にては常にむねをこがし、焦

鑑草　巻之三

○不嫉妬毒報

○不嫉はねたまずと讀む。吝氣の心なく、りんきの行ひなき事なり。妬も又ねたむと讀む。りんきは三毒の蚰心なれば、その身の明德佛性をそこなひ、終に人をなやまし人を殺す事、毒藥よりもすさまじき故に、りんき深く人をなやまし人をころすを妬毒といふなり。不嫉は守節の善行なる故に、必ずめでたき報いあり、妬毒は背夫の惡逆なれば、必ず淺ましくおそろしき報あり。それ不嫉に三の得あり、妬毒には三の損有り。夫の他人に心を通はす時に、りんきの毒心なく、不嫉の本心明かなれば、かならず其夫つまの賢德を感じ、おのれが非をくいて淫亂を止むるものなり。業平のいんらんなるも、その妻の不嫉に感動して、河内通ひをやめられけるとなん。是不嫉の得その一なり。不嫉の德あきらかなれは、家内和睦して、家門の福ひ子孫の繁昌めでたき

三毒―貪嗔癡

業平云々―伊勢物語第二十三段參照

なき事を、篤く信じつとめ行ふべし。

絶入—氣絶する事

きたい—稀代

も一つに喰はんと思ふにやといひて、弓を持つて走りかゝりければ、虎終に逃げ去りぬ。天柱は絶入して前後を知らざりけるを、金氏おうて歸り、やう／＼に療治しければ、夜あけ方に成つてよみがへり、終に恙なかりけり。其夜また虎來りて、大きに吼えて荒れければ、金氏つえをつき、門をひらき虎に立ち向ひて、汝も又これ性あるものなり、何故に斯く甚しきぞやといひければ、虎家のほとりの梨の木を咬みて歸りけるが、其木は枯れて、天柱は難なくのがれにけり。

惣じて神明のゆるしなければ虎狼も人をくらふ事能はず。然るに天柱虎につかまれぬるは、其身に無逆なくば、必ず宿惡の報なるべし。然るにその妻守節の誠あるによつて、その禍を免がれぬる事、きたいの奇特なり。さすがに猛き虎なれば、女のおひおどす分にては、中々ひるむべき事ならねども、守節の善心誠あるを、神明加護し給ふによつて、その神威におそれて虎も逃げさり、夫も禍を免かるゝものなり。守節の功德にては、猛き虎だに恐れ去りぬれば、有がたき明德上もなく外も

安東—盛京省の安東縣なるべし、江蘇省にも同名の地あり

おつつけ—追附き

らはれ、をりから刺史の通りあはせられ、かうべに蠅の群りたる事、みな人間の業にあらず、神明の其科を告げ給ふなり。莊遵のきゝ知られたるは、誠にたぐひなき聰明なりといへども、畢竟は神明の告によつて斯くあるなり。是をかゞみて、たくみをもて人間をだまさんと思へる人も、神明の照覽は隱すべきてだてなき事を、わきまへいましむべし。

○安東の金氏は、天柱が妻なりけるが、洪武年中に、夫の天柱軍役にあたつて、明けなば出たたんとする夜半ばかりに、しきりに人の驚きよぶ聲あり。ことの外に物凄じかりければ、家内のものども、皆かうべを縮めてひれふし、誰起き合はする者もなし。金氏ひとり走り出て是を見れば、虎すでに夫をくはへて引ずりゆきぬ。金氏悲しく憤りて、弓をとつてをめき叫んでおつつけ、左の手にては夫にとりつき、右の手にては虎をたゝきて、十間ばかり程ゆきけるが、虎は天柱をすてゝ立ち退き、金氏をつく〳〵と眺め居たり。金氏虎にむかつていひけるは、なんぢ既に我夫をつかみぬ。また我を

長官の稱

蠅云々ー腦漿の流れ出でたるに蠅の集れるなるべし

聲を聞いて怪しみ思はれけるは、此なく聲はおそれたる調子ばかりにて、悲しぶ調子はすこしも聞えず。何事をなげく者ぞ、尋ね來れとて使を立てられければ、しか〴〵の事なりと答ふ。莊遵是を聞て曰く、夫のやけ死したるを歎きなば、かなしぶ調子ばかりにて、怖るゝ調子は有るまじきに、却つておそるゝ調子ばかりにて、悲しぶ調子の聞えざるは不思議なり。いかさまにも此死人は女のわざにこそあるらめ。かの死骸をよく探しみよと下知しければ、下人走りよつてつく〴〵と是を見るに、そのかばねのかうべに、蠅の多くむれ居たりければ、怪しく思ひて髮をわけて見れば、なづきに大きなる釘うちこみて有りけり。此よしかくと申せば、莊遵いそぎかの女を捕へよせ、拷問を嚴しくさせければ、前後つまびらかに白狀しけり。是によつてかの姦夫をも捕へ、女ともろともにはりつけにかけられけり。

此妻の夫をころせる手だて、極めてたくみなるによつて、人間はわきまへ知る事あたはず。然れども神明の照覽はたくみをもてのがるゝ道なければ、其とが泣聲にあ

楊州―江蘇省楊州府也、楊は揚に書くを正しとす

なづき―頭腦

刺史―州の

れば、李尉が靈來りてとりころしぬる事、氣味よき報なり。其後一年もすぎずして、張氏をも李尉が靈來りて叩き殺してけり。此故事をかゞみて、第一夫をにくみ悔る一念を絶ち去るべし。李尉が妻の惡逆、皆この一念よりおこれり。扨又何事につきても、女の見物ごのみをよくいましむべし。

○楊州ある里のなにがしが妻、さる男とひそかに通じて、日に添ひてたがひに情深くちぎり淺からざりければ、ある夜のむつごとに語けるは、いつが何時までかくは忍びなんや。いかにもして主の男を空しくして、思ふ儘に契らばやと、互にうちとけて談合したくみ出して、ある夜男に酒を強ひて醉ひ臥さしめ、夜更け人しづまりて後、姦夫と二人して、男のなづきに釘を打ちて殺し、さて家に火をかけ燒死したる體にもてなしけり。誰うたがふ人もなかりしかば、得たり賢とよろこびながら、いよ／＼人の疑ひをうけじと、きはめて悲しきふりを作り、やけ死したる尸にとりつき、聲も惜しまず泣き歎きけり。折ふし楊州の刺史莊遵といふ人通り合はせられけるが、此女のなく

領南―五嶺以南の地、今の雲南貴州兩廣等を謂ふ

つけ、幸なる事の出きたるにとよろこび、奉行所へ厚くまひなひて、かろき科を重く取りなし、はげしくたゝきて領南といふ所へながしけるが、道にて空しくなりぬ。張氏よろこびて、李尉が母に金銀を過分にとらせ、色々にこしらへて其妻を奪ひとりてけり。李尉が妻も、つねぐ\己が容儀にまよひ、李尉を不足に思ひければ、强ひて拒ぐ事もなく、張氏に從ひて、偕老同穴のちぎり類なかりけり。されども張氏が家へ歸ぎたる日より、絶えず李尉が面影のかたはらに有るやうに見えて、常に心苦しくおだやかならざりければ、張氏に斯くといへば、張氏悲しく思ひて、しるしある術士を多く喚び集めて、いろ\/\にはらひをさせ、又は神明に祈禱しけれ共、そのしるしなく、一年あまりして、終に李尉が靈にとり殺されけり。

李尉が妻(い)その容儀にまよひ、夫を不足に思ふ心、貪慾愚痴の悪念地獄の種なり。その上に夫のふせぎをかへりみず、ひそかに見物に出たる過によつて、終にその夫を凶死に落しいるゝのみならず、夫のかたきに契りをこめける事、言語道斷の悪逆な

開元寺—唐玄宗の開元四年、長安城内に建立せる寺院

制する故にといふ。又つく〴〵思案して、巧なる細工人をえらびあつめて人形をつくり、あやつりをもて、或は歌はせ或は琵琶琴をひかせて、人形に管絃をぞさせける。巧をつくして成就せしかば、開元寺に於て是を見せけるが、三日過ぎて禁中へあぐべしと披露しければ、一日路のうちの者は、貴賤男女をえらばず、われも〳〵と見物の人おびたゞしく群集しけれ共、李氏がつまはいまだ見えざりしが、三日に滿ずる夜、見物の人も散り靜まりける時、李尉が妻あまりに見たくや有けん。夫に忍びて乘物にのり、下女一人つれて、ひそかに見物にぞ來りける。常々たのみおきければ、隣の者急ぎ張氏に告げたりければ、張氏は衣裳を改め、物の蔭より覗きみるに、聞及びしに一きはまさりたる美人なれば、是より戀したふ事日にそひて深かりければ、李尉が家に出入する比丘尼、又は巫女などを賴みて媒にし、たび〴〵文を遣はしけれ共、李尉が妻烈しくふせぎて、中々手にも取らざれば、せん方なくてぞ日を送りける。折ふし李尉すこし法を犯す事の有りしを、下人訴人に出でて、その罪の評定ありしを張氏きゝ

華陽―巴蜀の地、今の四川省方面

了簡なくて―せん方なくて

妻もし德なくば、子孫のたねを絶つのみにあらず、老母もよるかたなく淺間しかるべし。それ守節といふは、兩夫にまみえず寡の操を守るのみにあらず、平生其夫のあやまちを過をいさめて、其善をすゝめなすを守節の常とす。惣じて女は内にのみありて外事のつとめなければ、其夫をすゝめて善をなさしむるを肝要とす。されば古の君子のおきてに、夫に三つの善あれば、妻其一つの報を得る、夫をすゝめて善をなさしむれば、夫と同じく其報を得るといへり。善の報かくの如くなれば、惡の報も遁るべからず。よく〳〵わきまへてその節を守るべし。

○華陽の李尉が妻は、世にまれなる美人なりけるを、その時の節度使の官張氏といへる人聞及びて、見まく願ひぬれども、その道なければ、了簡なくて有けるが、つく〴〵と思ひ出して、寺々へ下知して、七月十五日に色々の燈籠をまうけぬ。若李尉が妻見物に來りもやせんとのたくみにて待ちけれ共、終に見えざりけり。となりの人に、如何なれば李尉が妻一人は見えぬにやと問はせければ、容儀の勝れたれば、夫のかたく

物だね―物の種となり、基となる物

大老―極めたる老人

やうに御分別あれかし。若さもなく候はゞ、我等には御いとまを給はり侍れ。前かどに此幼き者をつれて、何方へものがれて、物だねに殘したく侍ると打口說て、又さめざめとぞ泣きにける。姑いよ〳〵腹をたちて、答子に告げて、終にその妻を去りてけり。其妻幼なき男子一人をこひうけ、つれて里にぞ歸りける。かくて一年過ぎて後、答子が惡逆こと〴〵く露れければ、一族に至るまで皆一度に殺されて失せぬ。姑ばかりぞ、大老なればとて宥されて里へ歸りける。答子が妻此事をきゝて、幼なき者もろともに、姑の方へたづねゆき、答子が世にありし時よりも一入孝行の誠を盡し、答子のために三年の喪を終り、幼なき者をやしなひたてて、終に答子の家をつがせてけり。

答子若その妻のいさめをきゝ入れなば、めでたく共に榮えなんものを、悼ましきかな哀なるかな。答子は妻のいさめをうけざる故に、其身凶死に遭ふのみにあらず、其子共一門まで皆たやされぬれども、その妻の守節の功によつて一子を全うし、家を繼がしむるのみならず、老母の孝養までとげける事、有がたきためしなるべし。其

答子ー列女傳に見ゆ
つかみの張れるー物を貪る
よこざまー無道邪曲なるをいふ

○陶の奉行答子は、欲深くつかみの張れる人にて、まつり事すなほならず、まひなひに耽りぬれば、其家日に富み榮えぬる事かぎりなし。そのつま賢徳ある人にて、夫の心行の正しからずして、わざはひを招かん事を歎かしく思ひ、つね〴〵ことわりを盡し利害をそなへて意見しけれ共、きゝも入れざりけり。あるとき答子、くるま百兩ともに具し　おびたゞしき體にて故郷へかへりけるが、一門の者ども相あつまつて、めでたしと悦び祝ひけるに、答子の妻は幼き者をいだきて、なにとなく泣き歎きけり。姑是を見て怒り、かほどめでたき中に、いま〳〵しき泣やうかなと詈しりければ、婦こたへて申しけるは、答子の陶を治め給ふ事無道にして、國おとろへ民恨みをふくみぬれば、その禍遁れがたく思ひ侍りて、常々いさめ申せども、聞も入給はず、いよ〳〵よこざまなる事のみ工み出して、たゞ金銀財寶を集めんとのみ貪りて、後の禍をば露もかへりみ給はねば、ほどなく答子の一家皆ほろぼされて、子孫のたねを絶たん事を思ひつゞけて、かくは歎き候なり。御異見ましまして、あやまちを改め善に遷り給ふ

戀ひく—戀慕する也

ず。一人はたやすく靡きければ、忍び〳〵にかよひて情ふかかりけり。年へて後、かの妾のあるじ空しくなりて、二人共に身のまゝになりける時、かのなかだちしたる人かの男に申しけるは、今は忍び給ひし方をよびとつて、思ひのまゝに契り給へかしといひければ、男の曰く、我方へ喚びとらんは願ふ所にあらず、いかんとなれば、我ごとく戀ひく人のあらば、必定また靡くべければ頼むべき人にあらず。今はあるじなければ、前かど靡かざりし人を媒してたべといひて、今まで通ひし女をばすてて、前かどうけ引ざる女をよびとつて、ふかく契をこめてけり。いま此二つの故事にてかんがへ見るに、男の人の妻をこひ引くはその本心にあらず、たゞ淫欲の焔さかんにして、心くらく氣亂れてなすわざなり。かくの如きのためしをよく心得て、もしいざなふ人のあらば、われを惡道へ引いるゝ惡魔なり、その上かの男の本心は、わがなびくを惡みいとふ誠あり、今來りいざなふは淫欲の狂亂なれば、恃むべからずとよく〳〵思案工夫して、淫欲を懲し義理の心を明にすべし。

觸發—一旦物に觸れ、油然として感發する也

良知—孟子に曰く、人の學ばずして知る所のものを良知といふ

ありといへ共、ころす所の女、犬畜生にひとしき者なれば、殺害の科の例にあらず。其上菜うりの無實をあかす事、その功たぐひまれなる事なれば、その罪をゆるすべしとの勅定にて、菜うりの翁ゆるさるゝのみならず、かの姦夫をもゆるされけり。

凡夫の情をもて見るに、日ごろかよひて情のふかければ、觸發の事ありて先非を悔なば、向後思ひとまり、重ねて通はざるまでにて止みぬべき事なり。しかるを愛欲たちまち變じて殺心となり、情なくも是をころす事は、たゞ件の男の心に神明の入かはらせ給ひて、此男の手をかつて、淫亂の罰をおこなひ給ふなるべし。そうじて淫亂なる人も、明德なきにあらざれば、淫欲におほはれて不義を行ふといへども、感觸の事あれば、良知則ひらくる事彼の男の如し。若かの男此心を淫亂のまへに失はざりせば、隣の妻も此害にあはず、己も恥をさらすまじきに、義理の思案工夫足らざる故に、あさましき事をなしぬ。昔ある者に妾二人ありけるを、さる人二人の方へなかだちを求めて、玉章をつかはしけるが、一人はかたく節を守りて色事もせ

さけなくも我に心を通はしぬる事の憎さよ。かく人非人の者に契をこめんは、あさましき迷なり。所詮犬とひとしき女なれは、斬つて棄つべしとふと思ひ立ちて、ゆかの下より出で、腰の刀を拔きてかの女房をさしころして家へ歸り、さらぬ體にてぞ居たりける。いまだ誰もみつけざるうちに、常々菜賣とくいの翁、菜を持ち來りて、いかに菜は召さるまじやと問へども、答ふる者なし。入りて見れば件の體なりければ、おどろき恐れて走り出けるを、人あつまりて此翁をとらへ、いかさまに此者やうすを知るべしといひて、奉行所へ將て披露しけり。奉行所にて栲問しければ、翁苦痛のたえがたくや有けん、僞つて、わが殺しはんべるなり、科に行なはせたまへと白狀しぬ。これによつて頸をきらるゝに極まりけるを、かの男此事を聞いておもひけるは、われ人を殺して、又罪なき者を刑罰にあはせん事、科の上の科、もつたいなしと思ひて、みづから奉行所へゆき、我殺したる事を詳に白狀して、菜うりの翁の罪なき事を明しければ、奉行所より此事をつぶさに奏聞申されけり。帝きこしめして、此もの淫亂の罪

囈言―夢幻の境にありて、自から意識せずして語る言語

洪武―明の太祖の年號

なく大風にあてられて、目をくじられ鼻をそがれて、物狂はしくなりけるが、われ錢をとりて、亂倫の怪獸の同類となる故に、此せめに遭ふなりと、あけくれ囈言にいひ止まざりけり。

此報希代不思議の怖ろしき事なり。これをかゞみて淫亂の心行は、必ず地獄の責をうくる事を、よく〱辨へ戒しむべし〱。

○洪武年中に、都のある奉公人、隣の女房とひそかに淫通しけるが、ある曉、隣の男用所ありて外へ出けるを、かのまをとこ是を窺ひ見て、やがて隣へ忍び入り、かの女房とあひまじはらんとせし時、男ほどなく立歸りければ、間男は我を見つけけるにやと、驚きさわぎて床の下へにげ隱れぬ。女房男に問ひけるは、何の用のありて歸りたまふにやと、男こたへて、殊のほか曉冷のするに、汝よく寢入たれば、冷えて病もやせんと思ひ、夜衣を着せんとて歸りぬといひて、夜衣を引かけて又出でゆきぬ。間男床の下にて此事を聞て、つく〲と思ひけるは、かの男斯程に妻を大切に思ひけるに、な

ほださる―束縛せらるる也

○蓮眞といへる女、或る方へとつぎけれ共、その夫の心に叶はずして、去られて家に在りしが、その從兄の祖惠といへる坊主と忍びて通じける。あまりに度重なりぬれば、ある時その姨に見つけられぬ。そのをばあさましく思ひて、蓮眞にも祖惠にも烈しき異見をいひければ、祖惠錢二萬貫を姨にまひなひて、此事沙汰なしに、我々がまゝにしてたべと深く頼みければ、をば錢にほだされて見ゆるすのみならず、却つて淫亂のなり易きやうに媒をしたりければ、いよ〱互の情深くなりて、夫婦のちなみよりも猶睦まじかりけり。斯くして年を積りければ、雷蓮眞が家におちて、蓮眞を燒き惱ましぬる事、都合三度に及びけれ共、命はいまだ絶えはてず、三度めにはその背に大文字に烙印あり、其ことばに曰く、亂倫怪獸。求ㇾ生不ㇾ得。求ㇾ死不ㇾ得。三年方令ㇾ入二地獄一受ㇾ罪と、いかにも鮮に書きつけたり。この語の意は、淫亂の心行あるいたづら者は、怪しきけだものに同じければ、生きん事を求むるとも得べからず、死せん事を願ふとも得べからず、三年過て後地獄へおとして、責をうけせしめんとなり。其後かの姨も程

淮陽―今の安徽省鳳陽府の地

縁をもとめて改め歸がしめんと謀りけるを、孝婦聞いて大きにいかり、泣き悲しびて父母に告げて申しけるは、今我夫にまみえて夫はやく死す、又夫われに姑を養ふ事を賴みしを旣にうけあひぬ。然るを今改め歸がんは不義にして不信なり。不義不信にして世に立たんは、死して安堵するに如かずといひて、自害せんとしければ、其父母おどろき恐れて、孝婦が心に任せてけり。是よりいよ〳〵孝行を盡し、姑を養ふ事二十八年にして、しうとめの天年終りければ、田地財寶をうりて葬禮をいとなみ、喪に居てかなしびを盡せり。此事隱れなかりしかば、淮陽の太守、御門へ奏聞申されけり。御門なのめならず勅感あつて、すなはち勅使をもて黃金四十斤、ならびに陳孝婦といふ號を下したまはりけり。

うみつむぎの稼にて、世を渡る程の賤の女なれども、その孝行守節すぐれぬれば、其名雲の上にひゞき、かたじけなくも褒賞の勅使其門に立ちたまへり。誠に是をかゞみて、守節孝行の上もなく外もなく、有がたき德なる事をわきまへ知るべし。

いなる事をわきまへず。故に貧賤をはづる惡心にて不義を行ひぬれば、又貧賤をはづる惡心にて先非を悔いなげき、くびれて失せぬ。まことに善惡の報、ひゞきの聲に應ずるが如く妙なるためしなるべし。

孝婦―列女傳に出づ、小學にも見えたり

○孝婦は年十六にして陳氏が家にとつぎ、いまだ子もまうけざりけるが、その夫軍役にあたりて往きぬ。その出たつ時に、孝婦に向つていひけるは、われ今度の旅、生きて歸らん事は不定なり、老母を養ふべき兄弟も別になければ、母の事のみ心にかゝり、歎かしく思ふなり。若我むなしくなりて歸らずば、汝わが老母をやしなひてたびなんやと、涙に咽びてしみ〴〵と賴みければ、孝婦答へて、それは仰にも及ばぬ事にてこそ候へ、心易くおぼしめして旅だち給へとぞ約しける。案にたがはず、その夫軍中にて空しく成りて歸らず、孝婦は陳氏が存生の時よりも、猶一入に姑に孝行の誠をつくし、紡み績ぎをかせぎて生業をいとなみ、終にあらため歸ぐ心なかりける。三年の喪終りぬれば、孝婦の父母、その若うして子なく、又寡なる事を悲しびあはれびて、能

涯

いとまを賜はれかしと口説ければ、買臣やう〳〵にいひなぐさめ留めけれ共、次第に口こはく成て、是非共にと強ひて暇を請ひければ、了簡に及ばずして、いとまを出してけり。其つま程なく或奉公人の方へとつぎて、豊に日を送りけるが、折々は買臣が方へ食物などを送りてけり。年經てのち、嚴助といへる人のとりもちによつて、買臣會稽の太守となりぬ。その時かの妻夫婦をよびよせて、我やしきの隣におき、金銀知行をとらせ、かたの如く懇にはごくみける。その妻買臣がめでたく榮えぬる體を、日日に見聞によつて、こし方のくやしさ今のうらやましさ、日にそひ月にまして、胸ふさがり心亂れて、終にくびれて空しくなりにけり。

人間は義理をもて命の根とし、福ひの種とし、一生の樂みとするものなれば、貧しくいやしき事は恥る所にあらず、苦しぶところにあらず。かりそめにも不義無道の事ははづかしき事にして、身をうしなひ禍をまねく本なれば、恐れて除き去るべき事なり。されば買臣が妻は、貧乏の恥なる事を知つて、あらため歸ぐの恥甚おほ

て伯爵の封をうけ、その身は秦國大夫人の號をかうぶり、殘る所なくめでたき大福をつくり出せり。それ節を守る事は、誠に有りがたき例なれ共、その子に道ををしへざれば、至善の心行にあらず。故に其報いも又うすし。計夫人の如く守節の大義を行ふは、至善の心行なれば、其報も又あつし。節を守らん人、よくわきまへて大義を篤く行ふべし。

○漢の武帝の時、朱買臣といふ人有り。わかき時殊のほか貧しくして、朝夕もつゞきかねけれども、常に讀書を好み、其貧しき事をも苦しまず、みづから薪をこりて市に出でて代がへ、一日の糧だにまうけぬれば、さして生業のいとなみにも心を入れず、書をよみ詩をうたひてうかうかと暮しければ、其妻貧しき事をいとひ、又は朱買臣が生業をつとめざる事を心得ず思ひければ、常々さやうにいたづらに日を送り給はんは勿體なき事なりなどと、强ひていさめけれ共、朱買臣聞も入れざりけり。或時妻朱買臣にいひけるは、かやうに淺ましき體にて一期を過さん事は、人目も恥かしければ、哀

朱買臣—漢書列傳に出づ

一期—一生

陛下—陛下の誤

張南軒—張載が事也

だその父の對策の語に、所謂臣寧言而死於斧鉞。不忍不言以負陛下。といへる言葉を唱へられければ、張浚さては母も同心にこそ、今は思ひ殘す事なしとて、秦檜の事をつぶさにしるし、御門へ奉つりければ、案にたがはず、秦檜の讒によつて封州へ流されける。其時母張浚を送りて言はれけるは、なんぢ忠節をもて禍をかうぶるはめでたき事なれば、はづかしめとするに足らず、厭ひ苦しぶべき事にあらず、いよいよ心を安んじて往くべしとて、歎くけしきは露も見えざりけり。そののち秦檜みまかりぬれば、張浚の忠言かくれなくして召還さるゝのみならず、宰相の位にのぼり魏公に封ぜられ、孫の張南軒大儒となり、伯爵に封ぜられ、計夫人は秦國大夫人と、諸侯のつまのおくり號をぞ給はりける。

節を守るは、その夫を愛敬する心誠あるゆゑなり。其夫を大切に思ふには、その子を教へ家を興すを本とす。計夫人は此理りをよくさとつて、能其本を立て、張浚に道ををしへ、守節の大義を篤く行はれける故に、その子は宰相になり、孫は大儒に

も教を怠る時なし。故に張浚いとけなき時より行儀正しく、心だてすなをなりけり。すでに元服して、國學へ學問にいりぬる時、計夫人てづから戒の文を書きて、張浚に授けていはれけるは、今此家衰微したりといへども、汝一人を頼みて興隆せんと願ふ處なり。汝よく心得、なんぢが祖父汝が父の徳行を思ひ、亦我いましめを忘れずして、學問油斷有るべからずと、いとこまやかに勵まされける。是によつて張浚學問懈怠なく、才徳成就して高官にのぼりぬ。張浚位高くなりて後にも、母の心にすこし叶はざる事あれば、色を變じて戒をしめされけり。其時の宰相秦檜といふ人、勝れてかだましき人にて、善人君子をそこなひ、天下禍ひをほどこし、御門の位を危うくしければ、張浚なげかしく思ひ、秦檜がかだましき事を文に書きて、帝へ奉つらんと思ひしか共、秦檜が勢ひつよければ、多分罪をかうぶるべし。さあらば母の歎きとなるべきと思ひわづらひ、日夜に此事を案じければ、次第に瘠せ衰へてぞ見えにける。母この體を見て怪しみ問はれければ、張浚ありの儘にぞ語りける。母は何共答へずして、た

元服—男子成人の儀式

かだまし—心姦曲にして、正しからざるをいふ

秦檜—南宋の人、宋をして金に屈せしめし人

り。

寺にて淫亂をなして、寺にて殺されけるこそ、奇特なる報なれ。されば此妻もかくあらはれん事を豫て心得なば、かくあさましき心行もあるべからず。又張氏も報の理りを明めなば、淫婦のいざなひにばかさるまじけれども、善悪の報影の形にしたがふ如くなれば、何程隱密なる事も、必ずあらはるゝことわりを互にわきまへざる故に、その身見苦しき害に逢ふのみならず、父母兄弟の面をもけがしぬる事、歎きてもあまりある事なり。

○張氏の妻計夫人は、その心行正しく、聖人の法を尊び守りけり。年二十五にて夫の張氏にはなれければ、その父母改め歸がしめんとはかりけれ共、ちかひを立てゝ聞もいれず、其節を堅く守り、その子の張浚を養育して、身終るまで操かたかりけり。張浚やうやうものをいふ時にも成りぬれば、すなはち父の作れる文を讀ましめ、よく物のわかちをわきまへぬる時になりぬれば、つねにその父の言行を語りきかせ、しばらく

必ず現はる―中庸に、隱すより顯はるゝは莫し

計夫人―列女傳に出でたり

比翼連理―前に出せる長恨歌の結句に、地に在りては願はくば連理の枝と爲らん

すくやか―すこやかに同じ、強健なる事

りをこめ、比翼連理のかたらひをなし、是より度々かの寺にて參會ありけり。程へて其夫かへりて、件の事をつぶさに聞きしかども、知らざる體にもてなし、日をへて後その妻に語けるは、蜀への道すがら難所多かりければ、危き事のありしとき、百人の僧を供養せんとの願を立てぬるまゝ、明日崇夏寺に於て供養を遂ぐべしと思ふなり。汝はけふより行きて、だんなの比丘尼に談合して、その用意をなすべしといひければ、妻嬉しき事に思ひ、尤にてこそ侍れとて、急ぎかの寺に行きけるが、張氏にひそかに此事を告げしらせければ、いそぎ來りあひぬ。また例の如くに契りなのめならざる所へ、夫すくやかなる武士二三人あひぐし來て、張氏と妻とは一つ枕にきりころし、其外なかだちしたる者共、一人も殘らず皆きりころし、扨奉行所へ往きて、しか〴〵といひあげけるを、奉行どころより帝へ奏聞申されければ、太宗仰られけるは、かくの如くの惡人は、風俗をやぶる天下第一のくせ者なれば、是を殺して何のことわりかあらんとて、かへつて褒美し給ひければ、是をきく人、皆きみよしといはざる者はなかりけ

太宗―唐の太宗歟

て明ならざるなるべし。よくかゝみつもりて、守節の心をあきらむべき事なり。

〇太宗の時、さる官人蜀の國へ勅使に行かれたりし留守に、その妻、道ちかき座敷に出て、道行人をながめ居たりけるに、折ふし張氏といへる人その前を通り過ぎぬ。かの妻窓のうちより張氏を見て、その美男なる事をほめさゝやきけり。張氏これを聞いてあやしく思ひながら、一町あまり程行き過ぎしが、心残りたりけるにや、又立歸り、件の窓の前を徘徊しければ、窓の中より、金の簪を一つなげ出しぬ。いよ〳〵怪しく思ひて立やすらひける所に、うちより女一人走り出て、張氏を招きてひそかに申しけるは、此までの内におはしますは、なにがしどのゝ御内にてわたらせたまひ候が、殿の蜀へ使にゆき給ひ、久しき御留守にてさびしくおぼしめす折から、只今通らせ給へるを一目みたまひしより、たへ難く思ひ入り給ふなり。いつ〳〵の日崇夏寺へ參詣し給はんまゝ、君も必ずかの寺にまち給ふべしとさゝやきにけり。張氏も否いはず、ただ打ちうなづきて歸りぬ。そののち約束の日になりてかの寺へゆき、思ひのまゝに契

也
生樂―生けるうちの樂み

るべきに、いはれざる節を守り、鼻を殺ぎけるなど思ふべし。是よのつねの迷なれ共、きはめて心の暗き故なり。それ人間の生樂は、身やすく心たのしぶにきはまれり。宮女の榮花といふべき事は、只いつくしき衣裳を着かざり、味ひいみじき食物を喰ふのみなり。これは見たる處の快きのみにして、さして樂とするに足らず。いかんとなれば、いやしき衣食も常に着なれ食なれぬれば、我身の暖に口の安んずる所はかはりなし。しかれば高行のいやしき衣食も、馴たる事なればくるしびとするに足らざれば、宮女の衣食を榮花と思ふべからず。さあれば節を失ふことの、心に於て安からず歎かしき苦しびの上に、なれぬ宮中の人まねをせんと思ふ苦しびをさしそへ、習はぬ事をしならはんは、心も苦しく身も安かるべからず。かくの如くわきまへ見れば、凡夫の苦樂にても、高行の節を守れるは賢き分別なるべし。いはんや節をうしなふ時は、今生後生あさましき報あるをや。國王の淫亂なるも、高行の節義をば感ずる所あれば、誰人もみな高行の心なきにあらず、たゞ欲心におほはれ

命の根ー節義は人生の根本義也との義

高行ー其行を高しとして賞賜せる

王勝れたる美人なる事をきこしめし及ばせ給ひて、内裡へまゐりて宮づかへ申すべしと、勅使をたて給ひける。かの寡勅使に對して申しけるは、一たび歸ぎてより後は、たとひ夫空しくなるといへ共、他の夫にまみえざるは婦人の守れる節義なり。此節義は人の人たる所の道理にして、命の根なり。もし此節に背きなば、たとひながらへ侍る共、死せるにひとしき事なり。然れども、今國王のみことのり既に下りぬれば、我守る所を遂ぐべき事難からんといひて、鑑をとり刀をもちて、その鼻を殺いで申しけるは、いま我自害をつかまつりたく侍れ共、をさなき者のよる所なからん事の不便に悲しければ、かくはつかまつり候なり。國王の我を召すは色ある故なり。今既に鼻なき不具者となりぬれば、召されても詮なかるべしとて、うち被きてぞ臥しにける。勅使歸つてしか〴〵と奏聞申しければ、國王もその節義を感じ思召して、其身の儘にゆるし給ふのみならず、高行といふ號を下されて、其譽をあらはし給ひけり。

凡夫の情にて見れば、高行もし節義を枉げて宮女となりなば、大かたならぬ榮花な

幽府―幽冥界の政廳

目まひて―目眩む也

梁女の話―列女傳に出づ

へ奉りぬれば、やがて幽府へよびとつて、恥を與へ憤りを散ずべしと、鮮かに書きくどきけり。陸氏是をよみて、氣も消え胸ふさがり、はぢ怖るゝ心たへがたく、遍身より汗を流したりしが、程なく目まひて空しくなりにけり。人の妻たる者は、その身皆夫の身にして己が身に非ざれば、己が身のみふたゝび歸ぐ共、その罪遁れがたかるべし。いはんや陸氏は夫の財寶田地までぬすみて歸ぎぬれば、鄭氏が訟へ、天帝のゆるし給ふ所勿論の事なり。陸氏幽府にての責、推し量られて哀なり。陸氏まへの夫の文をひらき見たる時には後悔身にあまるべし。もしかくの如く死人に神靈ありて、其咎あらん事をわきまへなば、陸氏も節を守り身を全うすべきに、迷ひてあさましき報に遭へり。此故事をかゞみて、死人に靈なしなど思へる迷をひらき、其節を守る助となすべし。

○むかし梁の國に、わかうして寡なる女あり。その容儀世に勝れければ、國中の位ある人々、我も〳〵と媒介をもとめ、娶らまく願ひけれ共、終にきゝも入れざりけり。國

比翼―白樂天の長恨歌に、天に在りては願はくは比翼の鳥と作らん、

復あるまじき事を覺えけるにや、父母のおはします時陸氏に向ひて、いつぞやのさゝめ事忘れ侍るにや。今ははや幼きものも有れば、いよ〳〵改めとつぐ事なかれといひければ、陸氏は顔うち赧め、頭をうなだれ、たゞかなしび泣きて何とも物をば言はざりけり。鄭氏が病ひ日に添ひ重りて、終に空しくなりにけり。ほどへて陸氏は鄭氏が言葉にそむき、夫の家督を持つて、曾氏が家へあらため歸ぎぬ。ある時夫の曾氏留守なりし日、夕暮に陸氏唯ひとり有りけるが、幻の如くに獨の男の文を持ち來りて、我にわたすと見えしが、男はかき消すやうにうせて、文ばかりぞ有ける。取りて見れば、前の夫の鄭氏の自筆にて、我かたへの玉章なり。陸氏心も心ならず披きて是を見れば、その辭に曰、十年比翼の契りをむすびし夫婦なれば、一生われをまつる主たるべし。其上我家財寶ともしきにあらず。何の願ひ慕ふところありてか、みなし子をはごくまず、舅姑をかへりみず、あまつさへ我田地家督をぬすみて歸ぎぬる事、人の母にあらず人の嫁にあらず人の妻にあらず、人非人の心行いふに言葉なし。我既に上帝へうつた

に房氏に希代の德行ある故なり。それ慈悲清淨の心を、儒家には仁德と名づけ佛法には佛性と號す。房氏その夫を愛して節を守り、姑に孝行を盡し、その子を愛するに道あるは、皆慈悲心の明かなる故なり。其身の不具なる事を求め、身の傷つき痛む事を省みず、一生樂事にあづからす、心を盡し力を勞する事皆夫のためにして、欲心のけがれ露もなければ、是清淨の本然なり。此慈悲清淨の仁德佛性は百福の根本なれば、その才德官位の福をつくり出せり。現世の報かくの如くなれば、冥福も又推して知るべし。

さゝめ言―聲低く私語する事

○鄭氏が妻の陸氏、容儀殊に勝れければ、夫婦の間きはめて睦まじかりけり。ある時鄭氏さゝめ言にいひけるは、われ若不幸にして身まかりなば、汝必ず兩夫に見ゆる事なかれ。若汝我に先立ちなば、我も必ず餘の妻を重ねまじと語りければ、陸氏こたへて、百年までも共に老なんとこそ思ふ中なるに、こは忌はしき事を宣ふものかなといひ流してぞありける。其のち年月をへて、鄭氏病の床にふしてなやみけるが、みづから本

濟陰―今の山東省曾州の附近、濟陰郡又定陶と言へり

に居てかなしびの誠をつくし、姑にいよ〳〵孝行怠らず、其子をよくはごくみ育てぬ。一生のうち終に音樂をきかず、酒宴の座敷へ交らず、つねに内にのみ有りけり。子の緝人となりて年十二の時、房氏の父母いまだ恙なかりければ、子をつれて里へ見舞に歸りけるが、折ふし房氏のなき所にて、房氏をおさへて家へ歸さずして、さる方へ歸がしめんと、父母一門談合有りけるを、子の緝聞つけて、母の房氏に潛に語ければ、房氏いそぎ隱れて家に歸りぬ。やゝありて父母房氏を尋ぬれば、歸りてなし。驚き追ひかけぬれども終に歸らず。身終るまで節を守り、姑によく事へける。扨子に敎ふるに道ありければ、その子才德すぐれ、その名隱れなくて、御門へ召いだされ、濟陰の太守となり、めでたくさかえけり。

寡の手にてそだてたる者は、大かた才德不肖なる者なり。諺にも、氣隨にして不肖なるをば、後家そだち等いひおとしめり。然るに魏緝、後家そだちにして才德勝れ、ほまれ有りて、貧賤の中より太守の位にのぼりぬるは、希代の福ひなり。是ひとへ

ともに老いなん―偕老也、詩經鄭風に、子と偕に老いん

るべからず、是のみ臨終のさはりともなるべしとこそ覺ゆれと、播口說ければ、房氏なく〱いひけるは、わが身父母の命をうけて、君にまみえ奉りければ、ともに老なんとこそ契りしに、今君不幸にして早く空しくなり給ふは、我身の不幸にてこそ侍れ。たとひ我身ひとつなりとも、また誰人にか見えんや。まして大夫人と幼き者とあれば、わが身若ければとて、是を見棄てゝ身のさいはひを求めんは、犬畜生にも劣るべし。左様に思ひいれ給ふこそ情なく思ひ侍れとて、泣き恨みけり。魏溥の病次第におもりて、終にむなしくなりぬ。房氏は殊に泣き悲しびしが、尸を棺に納むる時、みづから左の耳をきりて棺のうちへなげ入れ、かね〲の契り違はずして、後の生にて相見えんまでのかたみなりといひて打臥し、聲も惜まず泣き焦れけり。姑是を見て膽を潰し、かく悲しき中に、如何なればかく凄じき事をばし給ふやらんと怪しみければ、房氏答へて、われ年若く侍れば、父母の我志を奪ひ給はん事を思ひはかりて、是をもてわが心根をあらはし、自から誓ひ申すなりとぞ語りける。さて葬禮かたの如くいとなみ、喪

く心えて、背夫の念おこる時は、神明の照覽おそろしく、浮名のたち淺間しき報に遭ふのみならず、その親兄弟までの恥をさらさん事をつくづく思ひこらして、その念を除きすつべし。扨又夫の情のうすきも、夫の容儀心ざまの劣れるも、夫の家のまづしきも、夫の族姓のいやしきも、皆わが身に生れつきたる果報なりと思ひかへし、孝行守節の誠をつくしなば、子孫繁昌めでたかるべき事を偏に思ひ慰さみて、露も恨み厭ふ心をおこすべからず。

○太守湛のむすめ房氏、幼少の時よりさだかなる操有りけるが、十六にて魏溥が妻となりぬ。其父の家の富貴なる事をわすれ、姑に孝をつくし、夫にはよく節を守れり。年へて男子をまうけしが、いまだ百日にもみたざるに、夫の魏溥重き病をうけて、助かり難く覺えければ、房氏に語りていひけるは、人の生死は天命のさだまれるところなれば、今われ身まからんは露も恨なし。たゞなげかしきは、汝年若ければ、寡にて暮さん事難かるべし。さあらば年よりたる母いとけなきみどり子、誰はごくむ方もあ

むげ―甚しく

此道―男女淫亂の事

は露も思ふべからず。しかれ共或は夫のなさけ薄きによつて恨をふくみ、或はその夫の容儀心ざまなどのむげに劣れるをあなどりかろしめ、或はその夫の家の貧しきをきらひ、或はその夫の族姓のいやしきを厭ひなどする一念、みな背夫の根となり、その上に或は美男の色にさそはれ、或は情欲のやるかたなきに迷ひ、或は道なき男のいざなひにひかれて、終に背夫の淫亂におぼれ、見苦しき心ざま身の行ひあるによつて、世間の浮名を流すのみならず、天罰の報あさましきものなり。さればかくの如きの人も、終にその名のたち、天罰のあたるべき事をよくわきまへなば、其惡念をこらし、あさましき道には落ち入るまじけれども、他人の見ず聞かざるところなれば、知る人もあるまじと心得ぬれば、まして天道神明の照覽は思ひもよらずして、いましむる心淺く、願ふ心いやましになりて、遂に迷ひ溺るゝなるべし。昔よりこのかた、此道にかぎりて人知れぬところのまじはりなれ共、實ありて浮名の立たざるはなし。是ひとへに神明の照覽は、闇の夜も晝の如くなれば、神罰によつて其名たつものなり。此理りを能

鑑草　巻之二

○守節背夫報

○守節はせつをまもるとよむ、女の心いさぎよく正しうして、情欲のまよひなく、その夫一人をたいせつに思ひ、餘の夫を戀ひ慕はず、たとひ夫死して寡なるも、ふたゝび餘の夫にまみえ交はらざるを守節といふ。背夫は夫にそむくとよめり、守節のうらなり。その夫をば侮どりかろしめ、餘の夫を戀したひて、淫亂なるを背夫といふ。それ守節は孝行の一端天理の當然なれば、かならず今生後生めでたき報あり。背夫は不孝の一しなにして、天理に背く故に、今生後生あさましき報あり。しかれ共この理を心得たる人世に稀なれば、その報のすみやかにして氣味よきためしを一つ二つあげて、勸戒のかゞみに備へぬ。一つを取て萬をかんがへん事、讀む人のさいはひなるべし。

人の妻たる程の者は、その家へ嫁ぎし始には、かならず守節の心ありて、夫に背かんと

に孝行の誠を盡しぬれば、別の功德をなすに及ばすといふ理りを明せり。かくの如くなれば、家ごと人々の父母舅姑は皆佛菩薩なり。されば父母舅姑を或は福神なりと思ひ、或は佛菩薩なりと思ひなば、不孝の人世にあるまじけれ共、此ことわりをわきまへざる故に、舅姑はありて益なく、却つてむつかしく妨になる物なりと心得るによつて、厭ひ嫌ふ心常に絶えず。此一念不孝の根と成りて、色々の枝葉しげり、終にあさましき禍を作り出せり。不孝は王法三千第一の罪なれば、冥律も亦かくの如し。かるが故に、不孝の人は或は人間の刑罰をかうぶり、或は雷火のせめに遭へり。それ父母は福神佛菩薩なれば、現世安穩後生善所のまもり神なりと心得なば、むつかしと思ひ嫌ふ心自から消えて、孝心かぎり無く現るべし。若不孝の念おこる時は、三千第一のつみ、陽間陰司のせめ遁れ難しと思ひこりなば、人每にみな孝行の誠ありて、めでたき世界なるべし。

爹娘—父母といふに同じ

へるなどと、福善の疑ひ霽れがたかるべし。されば世間善をなして災に遭へる人、千人に一人もあらんは、宿悪の報重く、その善いまだ償ふに足らざる故に、喩氏が如く免かれざるなるべし。よく〳〵わきまふべし。

右孝逆の報ははなはだすみやかにして、氣味よく奇特なる事をえらびて記しぬ。迷ふかき人をよびさまさん爲なり。世のつねの報は、檐をならべて家毎に多けれども、孝逆の報なる事をわきまへず、たゞその生れつきの福分なりなどとのみ心得ぬる事、あさましき事なり。

福善過淫の善は、孝行をもて本とす。かるが故に、孝行の誠ある人福ひを得たるためし、數ふるにいとまあらず。然る時は、父母舅姑は人々家ごとの福神なり。又梵網經曰、孝順至道之法といへり。これは、孝行は成佛得脱の眞實の法門なる事を明せり。彌勒佛勸孝の文に曰、現世の爹娘便是釋迦彌勒、若能供二養得他一何用二別作二功德一といへり。これは現世の父母はすなはち生身の釋迦彌勒なれば、父母

後生善所—來世に於て善所に生るべきをいふ

節義ふかく、生死のまよひなき心、君子にも恥ぢざる所あり。かく勝れて奇特なる孝行の德ある故に、宿惡の報を免るゝのみならず、孝感の福めでたくさかえけり。喩氏は宿惡ありといへども、孝行によつてその報をまぬかれ、馬氏は宿惡なしといへども、不孝によつて喩氏にかはり、雷火のせめをうけぬ。是にて孝行の功德不孝の罪をよくかんがへ知るべし。

現在の果を見て過去未來を知るといへば、孝行の功德にては宿惡だに變じぬれば、まして後生善所の功德、言はずしてあきらかなれば、成佛得脫の望みある者は、そのつとむる所を知るべし。

善惡のむくい、大略三十年を限とあれば、あしたに善をなして夕に報を待つ誤をよく辨ふべき事なり。いはんや又その身一代に報ずして、子孫にむくへるも有るをや。

喩氏もし雷火に燒かれて、宿惡ありし事を知らずば、孝行の人なれどもかく災に遭

仙家にて祀る天神の名

本ある—本原の誠あるを指す

れ難しといへども、今の孝行の誠ある上に、今日末後に臨んでいのり申すところ、心もことばも公にして孝行節義ふかく、其ことわり正しければ、禍を轉じ福をあたへ給ふべき事なり。おなじ里の張氏が妻の馬氏、心たけく淫亂にして姑に孝行ならず、夫をば奴の如くあなどり輕しめぬ。此馬氏を喩氏がかはりにやき殺させ給ひなば、福善禍淫の理り、人間に明なるべしと奏聞ありければ、天帝其議にしたがひ給ひて、雷公に勅りして、汝がかはりに馬氏を燒き殺し、汝をたすけ給ふなり。今より後いよ〳〵孝行をはげむべしと、つぶさに告給ひけるこそ有がたけれ。

世の常の姑にさへ憎まるゝは、常のならひなるに、きはめて猛き黃氏の悅びを得る事、その孝行本ある故なり。一錢の器をも我ものと思へる心あるは、つねの女の情なり。しかるに喩氏はその道具を夫の醉狂のつぐのひに失ひて、惜しみ悔む心なきは、夫婦一體とおもへる順德明にして、欲心のけがれなき事、男子にも有がたき德行なり。宿惡の時いたつて、天に祈りぬる心といひ言葉といひ、義理正しく孝行

ずる事三つあり。夫の家貧しく姑とし老ぬれば、我身空しくなりなば、跡の生業なりがたかるべき事、一つのなげきなり。我いとけなかりしより、父母のをしへさだかなりしに、今天罰にて雷火に燒き殺されなば、父母の恥をさらさん事、その歎きの二つなり。今わが身たゞならずして、既に七月になりぬ、この子若男ならば、支氏の子孫相續すべきに、胎内にて共に空しく成る事、そのなげき三つなり。前の二つの歎はのがるべき道なければ、祈り求むるに及ばず。今三月の命をのべ給ひなば、身二つに成り、支氏の子孫相續すべし。百日の命を給はらん事は難きにも有るまじきにや。是のみこひ願ふところなりと精誠に祈りける。時は大暑の頃なりしに、俄に天かきくもり、風はげしく雷凄じくとゞろきければ、喩氏は祈も叶はぬにこそと思ひ、今や〳〵と待ちるたりけるが、その里の張氏が家へ落ちて、其妻の馬氏をやき殺して天はれにしかば、喩氏は難なくのがれにけり。其後また神明枕がみに立ちて、汝が孝心のたぐひなき精誠のいのりを、梓潼帝君きこしめしたまひて、天曹へ至りて、喩氏が宿業の報遁

書類 天曹ー天帝の裁判所

前生不幸にして空しくなりし年より、今既に三十年にあたりぬれば、宿悪の報時至りて、明日雷にやき殺さるべし。汝今の生にて孝行なるによつて、前かどに告しらするなりと宣ひ、夢はさめにけり。夢ながら著しき神の告なれば、喩氏さめて悲しく思ひけれども、のがるべき道ならねばと思ひきり、夙に起きゆあみ髪あらひ、衣裳あたらしく改めて、姑の前にひざまづきいひけるは、かりそめにまみへ奉りてより、既に三年に成りぬれ共、さして御心をなぐさむる事もなく、本意なき事にこそ思ひ侍れ。父母にすこし用の事ありて里にかへりぬ、老少不定の世のならひなれば、最早まみえ奉らぬ事もこそ有りなんと、いとま請ふて出にける。姑はその言葉の常ならざる事をあやしく思ひしかども、あながちに問ひ明らむべき事にもあらざれば、たゞ如何なれば左様にはいへるぞとばかりなり。喩氏は里にかへり、父母にも暇乞うて、いそぎ夫の家に帰り、家の南の大木の下にゆき、北にむかひ香を焚き、天に仰いで申しけるは、わが身今日の雷死、宿業の報なれば、まことに遁るべきにあらず。然れども歎かしく存

しろかへて―賣却して
ろくならざる―正しからざる
案牘云々―

る時夫の支祖宜醉狂して、人の齒を二枚うちもぎて、其つぐのひに金を出しけるが、家貧しくて調ひかねければ、喩氏が手道具をしろかへて出しける。喩氏少しも惜みくやむ氣色もなく、たゞ夫の罪のゆるされし事をよろこびけり。喩氏とし二十五の夏の頃、ある夜神明まくらがみに立ちてつげ給へるは、汝前生にては牟容といふ者の妻なりしが、三十の年病ひをうけ、年をこえて惱みけるに、汝が姑七十あまりにて、手づから粥を煮て、さい〳〵强ひてすゝめけるを、その恩愛有がたしとは思はずして、汝が口にがく食を惡むによつて、食はるゝ食を喰はざるにはあらず、理不盡なる事なりなどのゝしり、泣うらみぬる事たび〳〵なり。末期に及んで姑に對し、天に仰ぎ、年七十の人は死せずして、三十のさかりなる我をさきだて給ふ事はいかんぞや。天道もろくならざるにこそと歎き叫びけり。其家の司命これを天帝へ奏聞ありしかば、雷公に勅して、汝を燒き殺さるべきに定まりけれども、汝すでに空しく成りてその責行はれず。その案牘いまに天曹にあり。凡善惡の報は一世をかぎりとす、一世は三十年なり。汝

て應試すれば進士となる

鄴邑—鄴と名くる處、齊蜀汝南等に有り、定め難し

悲柔和の心を明にし、節を守り子にをしへ、奴になさけ深く、すぎはひの稼をつとめ、かりそめにも僞をいはず、無道を働かざるに至るまでも皆孝行なり。存生の舅姑に事ふるよりも、死せる舅姑を祭るになほ心をつくすを、孝行の誠とす。しかるに周氏生るには事へてそのよろこびを得、死せるを祭るにその誠をつくし、寡となりて節を守り、生業をはげみ、子にをしへ奴をいつくしみ、孝行の道缺ぐる事なければ、希代の賢女なり。かるが故に、終に二子の才德官位のさいはひを作り出して、めでたく榮えけり。高夫人の如く心猛きも、周氏の孝にはやはらぎぬれば、高夫人程猛からざる姑に惡まれぬるは、皆よめの不孝の致す處なるべし。

○鄴邑の百姓支祖宜がつまの喩氏、いとけなきより愛敬廉直にして、女事のかせぎも勝れたりしが、二十あまりにて、支祖宜が家へとつぎぬ。其姑黃氏、八十計なりけるが、目もくらみて見えず、きはめてせはしなく綺麗ずきにて、事へがたく有りしかども、本より愛敬の德ふかき喩氏なりければ、孝行の誠を盡し、黃氏のよろこびを得たり。あ

るをぞ待兼ける。高夫人の機嫌あしくて、食物のすゝまざる時も、周氏みづから調へてすゝめぬれば、必ずきげんやはらぎ、いつにても箸を取らざる事なし。高夫人老後に痺風といへる重き病ひをうけて、身もかなはざりけるを、周氏常にそばを離れず、帯をもとらで赤子をそだつるより猶懇切にあつかひしかば、はげしき高夫人も其孝行を悦びて、病苦をも忘れて終にけり。其後夫の戚生身まかりけるが、男子四人女子一人、いづれも未いとけなくして、生業のいとなみもなり難かりけれ共、周氏夜晝となくかせぎ、衣食のつたなきに身をやつし、五人の子供をはごくみて、男子には皆學問をつとめさせけり。周氏本より孝心あきらかなりければ、女童をもおろそかにさしつかはず、なさけ深し。其上舅姑夫の忌日、または四時の祭祀には其誠を盡し、病中といへ共必ずみづから調へてまつりぬ。その惣領の如圭、次の子、皆學問成就して、兄は進士にのぼり、弟は郷薦にえらばれけり。

孝行といふは、舅姑によく事ふるのみにあらず、貪嗔痴の三毒をのぞきすて、慈

痺風―身體のしびるゝ病氣

進士、郷薦―郷里の秀才より選ぶを郷薦、郷薦が京師に

安からん事を思ふ孝心眞切なるによつて、子の溺れて空しく成ぬる事、江水を汲みぬる故なりなど思ふ、凡情の迷なきのみならず、そのかなしみ色にだにあらはれざる孝行、そのきどく三つなり。江水を汲み鱠をそなふる事、よのつねの養ひといひながら、家貧しく暇なき身にて、懈怠なく調へすゝめける孝行、そのきどく四つなり。この四つの孝行のきどくをもて、泉わき出で鯉のたえざる奇特のさいはひを招くのみならず、悪人を感動し、終に萬乘の君にまみえ奉り、郎中の官にのぼりぬる、有難き報を受くるものなり。

○周氏いとけなかりしより孝心深かりけり。おとなしくなりて、戚生にとつぎしが、その孝心を失はず、姑の高夫人に事へて孝行たぐひなかりけり。高夫人きはめて猛く烈しき人なりければ、いづれの嫁も心に叶ふ者なし。然れども周氏は孝行誠ある故に、高夫人の心にかなひ、何事につきても周氏ばかりをさしつかはれけり。若周氏留守なれば、高夫人のきげんあしく、家内のもの共手に汗をにぎり、難儀に思ひて、周氏の歸

妨を禁制し、あまつさへ帛米などを姜詩に與へて通りける。そののち、帝より姜詩をめし出し給ひて、郎中の官にのぼ□でたくさかえけり。

姜詩の子、祖母のために母に代つて江水を汲みしかば、何の難もあるまじき事なるに、水に溺れて空しくなりぬるは、元來姜詩が家きはめて薄福なる故なり。しかれども姜詩夫婦の孝すぐれてまめやかなる故に、終に薄福を轉じて厚福となせり。姜詩夫婦の孝行其奇特四つあり。大かたの人は、其妻まことに咎ありて父母よろこびずといへども、去る事あたはず。然るに姜詩は常々孝行にして科なきに、姑姓みじかくて怒りぬるを、そのまゝ去りぬる事、情識に事ふる小孝なりといへども、毛頭妻におぼるゝ凡情のけがれなき孝心、その奇特一つなり。親の折檻道なきにさへ、恨むるは凡夫のならひなるに、龐氏罪なく去られぬれ共、親の家へもかへらず、いよいよ孝行をはげまし、露も姑をうらみざる孝心、其奇特二なり。子を愛する心深きによつて、孝心の衰ふるは、よのつねの人の習なり。然るに姜詩夫婦は、母の心の

賊群

郎中—宮殿披門を掌る官職

□—鈌字、原本判讀しがたし

赤眉―樊崇等を首領とせる一團の

歸しけり。是より龐氏の孝行いやましにまめやかなりければ、姑もよろこび思ひ、家まづしけれども豊に日をぞ送りける。年へて一子をまうく、やう〳〵人となりぬれば、龐氏に代りて江水を汲みけるが、或る時水に溺れてむなしくなりぬ。龐氏姑の歎かん事を恐れて、ほど遠き方へ學問に遣しけるといひて隱しけり。姑つねに鱠を好みけるが、ひとりくふ事をいとひ、必ず隣の嫗をよび、ともに喰ひぬれば、一入とゝのひ難くありしかども、夫婦よる晝かせぎて絶えず鱠をすゝめける。かく有難き孝行年へて久しければ、家のうしろに泉わき出たり。其あぢはひ江水に少しもたがはず、姑の心によく叶ひければ、是より江水を汲む事を止めて、此泉をぞすゝめける。毎朝この泉のうちに鯉二つづつ有ければ、是を捕りてなますとなし、常にすゝめけり。かく希代不思議なる靈應あるほどの孝行なれば、其名天下にかくれなかりけり。其ころ天下みだれけるが、赤眉といへる惡人、同類數千人を引率して、姜詩が里を通りしが、此里には孝行なる人あり、濫妨狼藉をせば、神明のとがめおそろしといひて、かたく濫

姜氏が事―列女傳に出づ、李瀚の蒙求にも錄せり

とだえ―中絶する事

ことに影の形に隨ふ如くなる報、おそろしとも中々いふに餘あり。若き者の見る時に、蛇の尾の動きぬるは、孝を敎へ不孝をいましむる心分明なれば、天地神明の示し給ふ所をよく得心して、人々の孝心を明かにせん事、其身のさいはひなるべし。

○姜詩が妻の龐氏、姑に事へてきはめて孝行なり。姑つねに江水を好きて飲めり。江水は姜詩が家よりは一里あまり程ありければ、たやすく汲み難けれども、姑江水に非ざれば飲む事ならざる故に、龐氏每日江水を汲みてすゝめぬ。ある時風はげしくして歸る事晩かりければ、姑待ちかねて甚いかりけり。夫の姜詩も本より孝行なる者なれば、母の心を安めんために、其妻の龐氏をおひ出しけり。然れども龐氏はわが親の家へも歸らず、程近き所に宿をかり、よる晝となく紡績のいとなみをはげみ、姑の心に叶ふ物をとゝのへ、其隣のうばを賴みて姑の方へ送りけるが、程久しくとだえも無かりければ、姑怪しく思ひ、是は誰人の給はるぞと問ひければ、姥しか〴〵と有の儘にかたる。しうとめ其孝心の誠を感じ、且は有がたき志はづかしく思ひ、姜詩にわびて呼び

程なく赤色なる蛇、かの妻の口へ飛び入りけるが、尾四五寸程は口より外に殘れり。其妻泣き叫び悶えぬる事いふばかりなし。まことに希代不思議なる事なれば、聞傳に見物の人多く集りけるが、老たる人の見る時は蛇の尾うごかず、若き者の見る時は、尾をひだりみぎ上下へうごかし、面をたゝきけるこそ恐しけれ。或人くぎぬきを以て蛇の尾をはさみ、引き出さんとしけれども、尾のかたき事くろがねの如くにて、奥へは入るといへども少も口へは出ざりけり。かくの如くなやむ事三日ありて、終に空しく成りにける。

つねぐ\の不孝だに、其罪のがれ難きに、藥喰をせんなき事に思ひ、胞衣に取かへぬるは、畢竟姑を殺さんとたくむに等しき悪逆なれば、天罰のすみやかなる事勿論なり。姑の口へ入るまじき曾孫の胎衣をすゝむるのみならず、己が口へ喰ふまじき豚の胃を盗み喰ひける悪逆によつて、人の口へはいるまじき蛇の飛入りけるは、ま

誠にたぐひなき孝心なり。又秦氏は李氏が隣なれば、たとひ李氏が異見なく共感化あるべき事なるに、常々の異見を聞入れざる事、大不孝のいたりなり。惣じて悪心悪行の人も、いまだいましめを聞かざるうちは、猶悪を改め善にうつるべきたのみあれば、其罰すこしゆるし。異見を聞いてあらためざる時は、その悪固く定まる故に、其罰すみやかなるものなり。されば李氏は孝行の至極、秦氏は不孝の至極、二人檐をならべけるを、おなじ日に禍福を下し給ふ事、人間を勸戒し給ふ天意のほどを、よく〳〵かゞみつべし。

○嘉靖年中に、順天府の百姓、その母の久しく病みてなやみけるを歎きて、醫師を求めて療治しけれども、しるしも無く日を送りけるが、ある醫師、ぶたの胃を煑てあたへなば本復あるべしといふについて、ぶたの胃を求めて、是を能煑て母にすゝめよとて、其妻にわたしてけり。そのつま常々殊の外不孝なりければ、老病の事なれば、せんなき藥喰なりと思ひける。折ふし其孫嫁子を産みければ、其胎をひそかに取りて、よく

順天府—今の北京府、嘉靖は明の世宗の年號

は姓名を錄せる帳簿

しろがへぬれば―賣拂ひたれば

順儀―順當の事

るしたまへりと、さだかなるつげの有りけるが、程なく舅の病はいえぬ。其後一とせありて、或るあした、門もいまだ開かざるに、座敷を見れば金玉座中にみてり。是をとりてしろがへぬれば錢八十萬になりぬ。其のち二人の子供高官にのぼり、ありし夢のつげ露も違はざりけり。其となりのよめ秦氏、二十ばかりなりけるが、口のさかしきにまかせて舅姑にさからひ、はなはだ不孝なりけるを、李氏つねぐ〵異見しけれども、聞もいれざりけるが、天より李氏にたからを下したまはる日、かみなり凄じくとゞろき、秦氏が家におちて、かの不孝の秦氏を燒殺しける。貧をいとひ富をねがふは凡夫のならひなるに、李氏夫の家の貧しきをきらはず、常舅姑に孝行の誠をつくしけるは、誠に有がたき賢女なり。さてまた老年の人の身まかるをば、順儀なりなど思ひて、大かたの人は、親のわづらふにも、身がはりに立たんと思へる心は有るべからず。まして普通のよめは舅姑をきらふ者なれば、他人の煩ふをとぶらふよりも猶うとかるべし。然るに李氏身がはりにたゝんとの祈、

徽州―今の安徽省徽州の地

名錄籍―籍

必ず孝行なる子をまうけ、不孝なる者は必ず不孝の子をうみ、孝行なる婦は必ず孝行なる婦を迎へ、不孝なる婦は必ず不孝なる婦を娶れり。是すなはち犬のふんをもて姑にすゝめて、犬のかうべとなる感應の理りに少しも違はざれ共、習におほはれて、此ことわりを知る者稀なり。畏るべし戒むべし。

○徽州の葉元贊がつま李氏、名は善瑜、年十八にて歸ぎしが、はじめより舅姑によく孝行を盡くせり。其家まづしくして、朝夕もつゞき難かりけるが、よく營み、心を盡して、我身は食せざれども舅姑にはよく調へてすゝめけり。一年舅やまひの床に臥し、既に限と見えけれども、本より貧しければ、醫師をよぶべき力もなし。かなしく詮方なくて神明に願をたて、身がはりに立たんと清誠にいのりける。其夜の夢想に、三官の神明世界をめぐりたまふとて、汝が孝心清誠なる祈を、そらにて聞しめしとゞけ、天帝へ奏聞ありければ、天帝勅感あつて、舅姑には十二年の壽命をまし、婦には錢八十萬をあたへ、二人の子供をば高官にのぼせ給ふべしと勅あつて、すでに名錄籍にし

谷に云々―山彦の反響するに喩へたる也

り甚しかりけるが、其いなびかりの中より、人來りてよめが頸を斬ると見えしが、肩よりしたは本のよめにて、首は犬にぞなりにける。其時の奉行賈耽、此事を聞いて、くだんの婦を召しよせ、其國中を引わたして、不孝の者の戒めとせられけり。時の人狗頭の新婦といひて、淺間しきためしにぞしける。

善惡の報は、谷に聲をあぐるが如くなれば、善を思ひ善を行ふには、必ず善の報あり。惡を思ひ惡を行へば、かならず惡の報有り。これ誠に天地感應の妙理なり。かるが故に人を愛しうやまふは、すなはちおのれを愛し敬ふところなり。人を憎み侮るは、すなはち己を憎みあなどる所なり。されば酸棗縣のよめ、姑をにくみ侮つて、犬の糞をすゝめければ、おのれがかうべ犬と成りぬ。天罰の懲す所といへども、本來おのれが心行によつて招く所なれば、姑を憎みあなどつて、犬の糞をすゝめけるは、畢竟おのれを憎み侮つて犬となすなるべし。かくの如くの婦は世に稀なる事なれば、かくの如きの報もまた世に稀なり。世間家毎にある常の報は、孝行なる子は

根に云々—徹底したる

滑州—河南省延津縣の北十五清里に酸棗縣あり、此邊一帶昔の滑國也

も、大方の人はおどろきさかだちて、咎め詈るべし。然るによめとして、おだやかに根にいりたる孝心のはたらき、誠にたぐひなき事なり。常々姑を大切に思ふ心、眞實にして絶間なき故なり。かくの如きの孝心は、天地神明を感動するまなこなれば、即時に其靈應ありて、一代の糧をくだし給ふなり。是をかゞみて、姑を大切に思ふ誠の心を、つねにあきらかにすべし。

○滑州の酸棗縣に、きはめて不幸なるよめあり。姑年老て目も見えざりければ、夫のうちになき時は、いよ〳〵侮りかろしめて、婢の如くにぞもてなしける。ある時夫の留守なりし跡に、めしの中に犬の糞をまぜて姑にすゝめぬ。しうとめ是を喰ひけるが、臭惡しく覺えて心地あしかりければ、邪見のよめ、如何なる事をかしたるらんと思ひ、喰ふふりして隱し置きしが、程なくその子歸りければ、ひそかによびて彼の飯をとり出し、是は何にてあるぞ、曩によめの我にたまはりしといひけるを、見れば犬の糞なり。其子惘れ果てゝ、天にあふいで大になげき叫びけり。俄にかみなり凄じく、いなびか

汚れざるを夫にすゝめ、わが身はまるのうつり香けがれて臭き所を、取り集めてぞ喰ける。良久しうして、天にはかに曇り暗くなりて、並びたる人の面も見わかざるやうになりぬ。その暗きうちに、誰とも知らず婦を引ゆくやうにおぼえけるが、しばらくして天はれ、本の白晝になりぬ。あたりを見ればわが家にはあらで、程近きはやしの中にてぞ有りける。心得ず思ひ家にかへりぬれば、ふところの中にちひさきぬの袋あり、あけて見れば、中に米三四升ほどあり、取りてしらげ一日の糧となし、明るあした袋を見れば、また本の如く米三四升あり、毎日とれども跡よりわきて盡くる事なし。これをたからとして一代さかえけり。

人の常の情、思ひの外の事に遭ふては驚き、そこなひ有る事に遭へばさかだつものなり。おどろきさかだつ時は、氣うきたち心さわぎて本心をうしなふによつて、遠慮を忘れ圖方なくて、いふまじき事をもいひ、なすまじきわざをなすものなり。此嫗のまるにめしをうつせる事は、この二つを兼ねたれば、たとひ眞のむすめなりと

常州―今の江蘇省常州府

まろ―虎子と書く、大小便を受くる一種の桶

にて、兄嫁にかろ〴〵しく語りたるてい、魔縁あるに似たり。しかる故に本より貪欲の兄嫁、新婦の孝行をそねみ、又は錢を貪ぶりて此魔障をなし、新婦害にあへり。しかれとも新婦の孝心誠あるによつて、終に天道のめぐみをかうぶり、禍をひるがへして福となせり。されば是をかゞみよく心得て、ひそかに人知れず善をとりおこなふ心持、肝要なるべし。

○常州にある村の百姓、母一人有りけるが、夫婦ともによく事へけり。母老て盲目と成しかども、いよ〳〵孝をぞ盡しける。ある時夫は耕に出ぬ。妻は家にありて、飯をかしぎて未だたきあげざるに、夫用所ありて妻を田よりよびければ、姑にめしを賴みて走りいでぬ。媼めしをたきあげ、めしつぎを探りもとむる時、あやまつてまるを得たり。もとより盲目なれば見分くる事能はず、めしつぎなりと思ひて飯をうつし置きぬ。よめ歸りて是を見て、あさましき事には思ひけれども、姑の悲しまん事をおもひはかりて、何ともいはず、其まん中のいさぎよき所を姑にたてまつり、そのつぎに

魔縁—魔がさすべきたより

三つには新婦をころせるつみ、此三つの咎、何れも王法のころす所なり。三つのうち一つ犯してもその責のがれがたきに、三つまで犯したる兄婦はつゞがなくて、孝行なる新婦は却てむなしくなり、三日にいたるまで、人間の賞罰沙汰なかりければ、天帝怒をうごかし、雷公に命して、罪ある兄よめをころし、孝ある新婦をよみがへらせ給ふのみならず、ぬすめる錢を手にもたせて、恥をさらさせ給ふ事、誠にきみよき賞罰、たくみに速なる事、人間の及ぶべききはにあらず。是をよくかゞみて、人の知らざる處は苦しかるまじなど思へる、悪心をいましめ懲らすべき事なり。或の曰、新婦の孝心神明の加護あるべければ、かやうのさはりは有るまじき事なり。曰、そうじて善をなすには、ひそかに人の知らざるやうにとりなすを第一とす。少にても人に知られんと思ふは滿心なり。滿心は必ず魔緣となる、魔緣あれば必ず魔障あり。寸善尺魔といへるも、善をなす人に大略滿心ある故に、すこしの善には大なる魔障ある事をいましめたり。されば新婦の孝心誠ありといへども、若氣

靈を祀るに用ひる器具

□缺字―原本、毀損して見えず、「物も」などいふ語にや

所へ行きつくべき程の間あつて、俄にかみなりさわぎ雨ふりて凄じかりけるが、門によぶ聲あり。姑は兄婦なりと思ひしかども、そのものごしの似ざる事をうたがひ、戸を隔てゝたれぞと問ければ、われは弟婦なりと答ふ。姑、狐のわれをばかすにやと、隙間より是をのぞきぬれば、さにはあらで正しく弟婦なり。しかれ共なほ疑はしく恐しくて、人をあつめ門を開きて、汝は人か幽靈かと問ふ。まさしき人なりと答ふ。姑のいはく、御身むなしくなりて既に三日になりぬ、何によつてか又蘇りぬるや。弟よめ答へて、われ初ねぶるが如くなりしが、かみなりの凄じき音に心さめて、覺えずこゝに在るといふ。姑うれしく思ひ、内へよび入れ、やう〳〵にいたはり、不思議に思ひ人をかたらひ、棺を置いたる所に行きて見れば、棺のふたはあきて、中には□なかりけるが、兄よめ棺の前にひざまづきながら死しぬ。見れば失せたりし錢を手にもちて有りけり。目もあてられず、身の毛たつてぞおぼえける。

兄婦の錢をぬすみしに、大なる罪三あり。一つには不孝の罪、二つには盜賊のつみ、

うけん—請出さんと

りやうぐ—

錢をとゝのへ、手道具にそへて返しければ、なのめならずよろこび、けふは日も暮れぬ。明なば行きて翁をうけてかへり給へと、夫にいひ合せて、錢をばゆかのほとりに置きてけり。折しも兄婦來れり、弟婦つぶさに此事をぞかたりける。兄婦はもとより不孝にして貪欲なる癖者なりしかば、ひまをうかゞひ、くだんの錢を盜みさりぬ。弟よめ、明るあした錢を求め見れば跡もなかりけり。こは如何にと尋ね求むれども得る事なし。錢をうしなひて、翁を贖はざる事の悲しきのみならず、請ひ受けたる錢を空しくして、父母へことばなき事をなげき、心も心ならざる折から、又夫の心に、はじめはうけんといひしかども、また錢を惜しく思ひて、盜にことよせて隱しけると、疑ふ色の見えければ、うたゝ詮方なく、胸ふさがり心惑ひ、くびれて空しく成りぬ。もろこしの作法にて、かばねを棺にをさめ、ほどへて後野邊におくりぬれば、新婦のむなしきかばねを棺にをさめ、たよりよき所を求めて他所に置きけり。扨すでに三日をへて、姑りやうぐをとゝのへ、兄婦に持たせつかはし、棺に供へしめけり。兄婦棺の

開封—今の河南省開封府の地

故事にてよくわきまふべし。

○開封といへる所の、ある翁に男子二人あり。兄には既によめを迎へて家をわけぬ。弟にはなにがしの娘をいひ名づけして、いまだ迎へざりしが、折から時の帝色を好みたまひて、天下の美女をえらび給ふ。いひなづけせし娘、容儀すぐれければ。其父母もし選びとられなんかと歎きて、いそぎめとり賜はれとぞ促しける。翁もさは思ひけれども、家貧しくてかなひ難し。また默さんは本意なければ、せんかた盡きて、さる富める人のもとへ行き、僕となりて錢をかり、よめとりの費となして迎へとりぬ。よめ夫の家にいりて、姑にはまみえぬれ共、翁は見えず。疑はしく思ひ夫に問ひけれども、夫は恥ぢてあかさず。姑に問ひぬれば、有の儘にかたりぬ。よめ驚き泣いて、わが爲に翁を人のやつことして、一日も爭でやすからんとて、いそぎ手道具などもたせ、親の方へつかはし、しか〲の事ありて翁をうけかへさんと思ひ立ぬるまゝ、此手道具をしちにおきて、錢をかり給はれとぞいひおくりける。父母その孝なる事をよみして、

ひとつがみ—はたゝがみの誤なるべし

當來—將來

十日あまりの事なりしに、白晝俄に空かきくもり、ひとつがみなり轟きて、いなづまの光紫に夥しく光り、眼もくらむばかりなりけるが、三人の嫁が、上は本の如くにて、肩より下は一人は牛となり、一人は犬となり、一人は豚と成りぬ。此事かくれなかりしかば、見物の貴賤男女其家に群集してけり。かく恥をさらす事月をかさねて、終に命たえにけり。里人ゑにかき版にゑり、賣り弘めて天下の戒となしぬ。

しうとに孝行を盡すは、人の人たる心行なるに、これをすてゝ貪欲無慙なるは、まことに犬畜生の心行なれば、たとひ人間の形を變ぜずとも、人間にあらず畜生なり。さればかくの如き人をば、諺にも人の皮をかぶりたる畜生なりといへり。然るに此三人の婦、犬畜生の心行たくましきによつて、上帝雷公にみことのりして、人の皮をはぎとり、畜生の本體をあらはし、人の皮を張りたる畜生どもを懲らしめ給ふ物なり。我も人もよくいましめて、皮の人なる事を恃むべからず。不幸にして畜生の心行ある人は、たとひ今生にて畜生の形に變ぜずとも、當來畜生道におつべき事、此

延平府―福建省にあり、昔の閩越の地

しか〴〵―碌々といふに同じ

氏の孝行誠あるによつて、よめの徐氏が孝行をまねき、又孫婦の潘氏が孝行をまねき、三婦人の孝行の餘慶によつて、その子夫婦贈官をうけ、孫の定老高位にのぼり、子々孫々めでたく榮えぬる大福を作り出せり。これひとへに周氏の孝行にて基をはじめたる故なり。薄福の家にてさへ、斯くめでたく禍を轉じて福となしぬれば、まして福あつき家に孝行の善積りなば、其福はかるべからず。斯樣のためしをよくかがみて、眼前のむくいなきは福分のうすき故なり、まく種は子孫に空しかるまじと、頼もしく思ひ、おこたらず孝行をつとめ行ふべし。

○延平府に、杜氏のもの兄弟三人あり。母一人ありしを、三人して一日づつまはりて養ひけるが、みな農人なりければ、皆その妻によせてやしなひけり。三人のよめ、皆慳貪邪見なる女にて、夫共耕作に出たるあとにては、我やしなへ人やしなへと睨み合ひける程に、ぞうするなどいふ淺間しき食物をだに、しか〴〵すゝめず。其母たへかねて、いかなる淵川にも身をなげばやと思ふ事度々なりき。嘉靖十年かのとの卯、七月

縁にもと媒する人も多くありけれども、きゝも入れず、ひたすらに周氏に孝をぞ盡しける。定老をさなきうち病多かりしを、周氏徐氏やうやうにいたはりて人と成りぬ。年たくるに從ひ學問をはげまし、才德すぐれければ、潘架といふ人その貧しきをきらはず、其むすめをめあはせられけり。定老が妻の潘氏も又、孝行あまりありて、おのれが家の富貴をわすれ、衣裳身のつくろひまで、定老が家のさまにとりかへ、周氏徐氏につかへて孝行なる事類なかりけり。徐氏としよりてのち煩ひ、行步も叶はざりけるを、潘氏よるひるそばを離れず事へぬる體、慈母の赤子をそだつるに異ならず。定老程なく內裏へめし出され、秘書亟といふ位にあがり、定老が父母にも贈官を下され、そののち子孫うちつゞき、高位大官にあがる人絕えず。是皆周氏徐氏潘氏、三婦人の孝行誠ある餘慶によつて榮えけり。

林侑はやく身まかり、其子また若くして凶死にあへり。是をもて見れば、林氏が家貧しきのみにあらず、きはめて薄福なること分明なり。かく薄福なる家なれ共、周

さうなく／＼
輕々しく

ける處に、また盗に逢ひぬ。周氏は年老ぬれば目にもかけず、徐氏に迫りてとりこにせんとせしを、周氏徐氏たがひに手に手をとり、死なば共にと歎きぬれば、盗もさうなくよりつかざれども、遂にのがれべくも見えざりしを、周氏つね／＼信仰してつかへける神明に祈りければ、神明の助によつて、誰とも知らず盗をおひちらして、難なく遁れてげり。かくして道に迷ひ、こゝかしこにさまよひ、澤のほとりをすぎ行ければ、澤の中に定老すてられて有りけるを見つけける。一年にも足らぬ赤子といひ、盗賊兵亂の中といひ、人遠く虎おほかみの往來する野原澤といひ、安穩にあるべき事ならねども、周氏徐氏の孝行天をうごかし、神明の加護にや有けん、如何にも恙なく、泣事もなく、母に抱かれたる如くにてぞ有りける。周氏徐氏よろこびいだきとりて歸りぬ。そののち林氏が尸をば尋ね出してよく葬りぬ。兵亂しづまりて家に歸り、周氏徐氏さびしき日を送りながら、徐氏きはめて孝行なりければ、互にあひ慰みて世事のなやみを忘れけり。此時徐氏はいまだ三十ばかりにて、かたちも勝れければ、いかなる

の人間
三千第一―
孝經に、五
刑の屬三
千、而して
皐不孝より
大なるは莫
し
麗水―縣名

る事なければ、不孝の罪は三千第一にして、冥律猶これを禁ずる事を心得て、不孝の邪心をいましめ、孝行の功徳無量にして、上もなく外もなき事をよくわきまへ、孝行のすゝめとし、本心をあきらかにし、孝行をつとめ勵むべし。

○むかし麗水に林侑といふ人あり。そのつまの周氏、女なれども聖人の書に通じ、儒道を信仰して、行ひ正しかりけり。かるが故に、姑にきはめて孝行の誠をつくせり。男子一人まうけて後、林侑母に先だちむなしく成りぬれ共、夫の在し時よりも、猶姑に孝行の誠をつくし、毎日三度の食物、必ず手づから調へてすゝめけり。其子成人してよめをめとれり。よめの徐氏も又、周氏につかへて孝行の誠ある事、周氏の姑に孝行なるに露も差はざりけり。徐氏男子を生めり。定老と名く。定老生れていまだ一年にもならざるに、天下亂れたり。其家盜にせまられて難儀なりしかば、林氏定老を澤の中へすて、盜を防ぎてうたれにけり。此あひだに、周氏徐氏は東山へふかく忍びけるが、林氏が討れたるをも知らず、盜のすきまをうかゞひ山を出て、林氏定老を尋ね

し事

凡夫—普通

を聞くや。妻の曰く、これを聞きぬ。男曰、母をころす者あるを見るや。妻の曰く、未だ聞かず。男曰、人間は孝行を本とす。親の恩は、身を殺しても報いがたし。妻をめとるは、本來親につかへ子孫を相續せんためなり、然るになんぢ孝行のつとめなくて、却て姑をとがめ、われに大惡をすゝむ。此刀をこしらへし事は、なんぢが頸をきつて母の心を慰さめんためなり。なんぢに刀を見せし時、きつて捨つべしと思ひしかども、なんぢ孝行のつとめあらば、母の慈心あらはるべし、是によつて母のなんなくして、科の汝にある事を知らしめて後、斬つて捨つべしと、兩月の命をのべたるなりといふ。妻おそれ悲しび泣いて、わが罪をゆるし給へ。今より毛頭懈怠なく孝行をつとむへしといふ。久しくありて、其まことをよく見て許してけり。其後しうとめよめの中、親と子よりも和睦して、其名高くさかえけり。これをもて見れば、無道にして事へがたきしうとは、天下になき事なり。たゞよめの不孝によつて、姑の名までも汚るゝなるべし。凡夫のならひにて、利を見ざればすゝまず、害を知られざれば懲る

いかゞしー
憚りありて心苦しければ
なじかはー
何とて
かねての事云々ー殺さんと談合せ

めの無情なき事を告げて泣き歎きぬ。はじめは男聞きも入れざりけれども、あまり度度泣きなげきけるまゝ、男ある夜ひそかに妻をよびて、刀をぬぎて妻に見せて、汝が歎もさる事なれば、母を殺すべしと思ひて、この刀をこしらへたるが、如何あらんと問ひければ、妻これを聞きて、それは我願ふところなりといふ。男の曰く、母のあてがひ無道なる事を、隣在所にもしかと知らざるうちにはいかゞしければ、汝先づ一月二月のほど、よく孝行を盡して、なんぢは孝行なれども、しうとめの無道なりと、隣在所に取沙汰有りて後、汝の本意を遂ぐべしといふ。妻よろこんで、それより一月程のあひだ、孝行をつとめければ、しうとは本來慈心ある者なれば、なじかは惡しかるべき、あてがひよくやはらぎけり。その後男ひそかに妻をよびて、母のあてがひいかがと問ふ。つま前かどよりは好しと答ふ。また一月ありて、男ひそかに妻をよびて問ひければ、妻答へて、今はすこしも惡しき事なく、わが親に異ならず、かねての事沙汰も無かるべしといふ。此時男刀を拔き怒りて曰く、なんぢ世間につまを殺す者ある

あてがひ—仕向け

文安懸—懸は縣の誤

ます深くなれば、よめの角もいやましになりて、遂に不孝の嫁となりぬ。此ことわりをよくわきまへ、しうとの本心は、必ず我をいつくしみ愛し給ふ者なりと心得て、物我の隔心をうちとけ、姑のあてがひ道有る時は、もちろん孝行の誠をつくし、もし又しうと道無きあてがひあらば、是はしうとの本心にあらず、わが身に良からぬ事ある故に、しうとの情識うごきて斯くあると、身をかへりみてわがあやまちを改め、いよいよ孝行の誠をつくし、苟且にも姑をとがめ怨むべからず。萬一とがめ恨むる念おこりなば、天道に棄てられ人に憎まれ、わざはひを招き、子孫の衰微すべき邪心なりと畏れつゝしみ、本心の孝徳佛性をあきらかにすべし。かくの如く好く工夫して、常におのれが本心をあきらかにし、孝行のまこと有れば、しうとも必ず後來の情識とけ、本來の慈心明になりて、家内和睦し子孫繁昌めでたかるべし。むかし文安懸といへる里の百姓、妻をめとれり、その妻容儀すぐれければ、容儀をやたのみけん、しうとめに事へぶり猛かりければ、しうとめも又憎み嫌へり。男ほかへ出て歸れば、しうと

あひしらひ―挨拶應對

はした―はしための略、下婢

り。容儀才徳のよくそなはりたる女は、世にまれなる物なれば、よめのそなはらざる所を責むる心はげしきによつて、いつくしみ愛する本心くらく、日にそひ憎む心おこりて、そのあひしらひかど〳〵しくて、次第に蔭のうはさも悪しく成りゆきぬ。扨又人の嫁たるものも、本来人の家へゆくはじめに、姑にさからひ、不孝をせんと巧む心は露も有まじ。只管にしうとの氣にいり、夫にもよく思はれんと思ふ心のみなり。これ孝行の本心なり。しかれどもつねの人の習にて、他人は必ず我をにくむ者なりと、迎へ滞ほる心有り。この心すなはち物我の隔心といふものなり。この物我の隔心より姑を見れば、しうとも又他人なれば、さだめて大切には思ひたまはじと、迎へたる隔心ふかきところに、しうとの角々じきふりを見て、すはやかくこそと心安からぬ上に、又かげのうはさ良からぬ事を、はしたなどの告げ知らすれば、むね騒ぎ心さかだちぬ。かくさかだちたる心にて、姑に事へぬるによつて、そのふり覺えず角々しくなりぬ。かどなきだにも障る中なるに、まして角ある振のつかへなれば、姑の憎みます

作仙成佛—仙となり佛と成るをいふ

隔心なる—憚るべき

微す。又孝行は作仙成佛の修行、不孝は地獄の業ともいへり。その上人間は、明德佛性をもて根本として生れたるものなれば、誰も此性なきものはなし。この性は人の根本なるによつて、又本心とも名づけたり。此本心は愛敬せざる所なきものなれば、本來姑はかならず婦を慈しみ愛し、よめは必ず姑に孝行なる理りなり。かるが故に、誰人をも孝行と賞むれば悅び、不孝とそしれば怒る。きはめて不孝なる人も、隔心なる人のまへにては、かならず孝行のふり有り。しかれども姑はその子をおもひすごす迷によつて本心をくらまし、よめは物我の隔心に迷ひて本心をくらまし、互にあさましき心行ある也。それよめは、いとをしく大切に思ふ子の妻なれば、しうとの本心は、いつくしみ愛する者にきはまれり。のち〳〵に惡みきらふ如くなる心初めより有らば、何のためにか取迎ふべきや。とりむかふる時に、憎む心はすこしも無けれども、よのつねの親のならひにて、其子を思ひすごすによつて、婦の容儀才德のよく備はらん事をねがへり。才は女の萬のしわざなり、德は心だて、身の行ひのやはらかに道ある事な

鑑草

卷之一

○孝逆之報

○孝は孝行なり、逆は不孝なり、孝行なる人には天道福をあたへ、不孝なる人には天罰をくだし給ふを報といふなり。女は夫の家を我家とし、夫婦一體の理りなる故に、夫の父母をわが父母とし、我父母を大せつに思ふ心をうつして、夫と一味に孝を盡すを、婦人の孝行とす。此孝をよくおこなひ、誠ある人は、天道是をたすけ惠み給ふ故に、人も又これを愛敬す。しかのみならず、百福のあつまるところにして、子孫これによつて繁昌す。不孝なるものをば、天道憎み棄て給ふによつて、人もまたこれを侮り輕しむ。しかのみならず、よろづの禍これよりおこり、子孫もまたこれによつて衰

迷ひを、達磨大師あはれみ給ひ、敎誨親切なりといへ共、武帝習心に蔽はれ、悟る事あたはず、いよ〳〵有爲の善根にふけり、萬民を苦しめらるゝによつて、天下大にみだれ、終にかつえ死なれけり。現在の果をみて過去未來を知るなれば、後生の有樣もさこそとあはれにあさまし。前車のくつがへるは後車のいましめなれば、佛道修行の人よく〳〵かゞみて用心あるべき事なり。

の福ひなどと、各別の思ひをなし、無爲無漏の善根を知らず、たゞに有爲有漏の善根のみをむさぶり、佛道を修行するとて、覺えず外道に入りぬ。明德佛性の修行を捨て、徒に外ざまの修行をつとめて成佛得脫を求むるは、たとへば木によつて魚を求むるが如し。されば明德佛性の修行誠あれば、願はざれども自から佛果に至る。もし又明德佛性の修行をつとめず、三毒の心を捨てず、たゞに外ざまの修行ばかりをつとめては、晝夜に佛果を願ふといふとも必ず地獄におつ。如來眞實義にそむく故也。むかし梁の武帝達磨大師に問うていはく、我位につきてよりこのかた、寺をつくり經を寫し僧を度する事、其數を知らず。いか程の功德あるべきや。達磨こたへて、それはたゞ人天の小果有漏の因にして、影の形に隨ふが如く、有といへ共眞實にあらず、少しも功德なき事也。たゞ淨知妙圓の修行功德無上なりといへり。武帝有爲の善根に溺れ、天下の財をつひやし、萬民を苦しましめ、地獄の業をつみて佛果を求めらるゝ

世安穩後生善所とねがへり。明德佛性の修行にも、後生佛果の福ひあるべきにや。いはく、明德佛性の修行すなはち後生佛果を得る修行なり。いかんとなれば、今生後生すべて心に有り。今生に心なければ、此身しかいにして今生のはたらきなし。後生に心なければ、極樂地獄の果をうくる者なし。肉身には生死ありといへ共、心には生死なきによつて、今生の心すなはち後生の心なり。今生の心明德佛性あきらかにして、清淨安樂なれば、後生の心卽極樂の佛果に至る。今生の心三毒さかんにして迷妄苦痛なれば、後生の心すなはち地獄のせめをうく。あるひは直指人心見性成佛としめし、或は自性覺卽是佛。慈悲卽是觀音。喜捨名爲勢至。平直卽彌陀。貪嗔是地獄。愚癡是畜生と敎へ、あるひは十方佛土中。唯有一乘法無二亦無三。除佛方便說と說き、あるひは唯心淨土。己心彌陀などといへる大乘の法門、みな此理りをあかせり。然るに世の中の人、小乘敎の方便說を敎へあやまり聞そこなひて、世間法出世法現世の福ひ後生

身に報いなき事を頼まずして、ひたすらに戒しむべき事なり。其上かくの如きの人は、命ながく富さかゆる福ひは有りといへ共、其身やすく心たのしび、子孫のさかゆるさいはひをば、必ず取うしなひぬれば、さしたる福ひにもあらず。或のいはく、明徳佛性の修行誠ありても、福ひを得ざる人も有るべし、いかゞ。いはく、然り。それはその生れつきの福分うすき故か、又は先祖積惡の餘殃によつて、其身一代には福ひを得ずといへ共、かならず子孫に報いて、積善の餘慶めでたくさかゆるものなり。善をなしてだに、其身に報なき程の福分なれば、若惡をつくりなば、其禍ひはかるべからず。我身のさかえんよりは、子孫のさかえん事をねがふは、皆人の親のならひなれば、誰もつとめ行ふべき事なれ共、必ず報なん理りをわきまへざる故におこたるなるべし。其上明徳佛性の修行誠あれば、身やすく心たのしみ、子孫のさかえぬる福ひあれば、富貴榮花の外のかざりは、福ひといふべきにもあらず。或のいはく、今時の人は、現

はざるはなし。しかはあれど、もとむる道にまよひ、明徳佛性をすてゝ、人倫日用の外に求むるによつて、二六時中に心を盡し、むねをこがして求むるといへども、其甲斐なきのみにあらず、却つて生れ付たる福分をもおとしぬれ共、其あやまりをわきまへず、夏の蟲のともし火におもむき、江河の魚のゑばをむさぶるに似たり。或のいはく、明徳佛性の修行なき凡夫にも、富さかえ命ながき者あるはいかゞ。曰、然り、それは其生れつきの福分あつき故か、又は先祖の積善の餘慶によつて、その身一代のわざはひをば免がるゝといへども、かならず子孫に報てあさましきものなり。惡をなしてだに、一代のうち報なき程の福分なれば、若善をおこなひなば、其身の樂み子孫の繁昌、たぐひなくめでたかるべき事疑ひなし。其身にわざはひを受くるよりも、子孫のわざはひ歎かしかるべき事は、みな人の親の情なれども、子孫にむくふべき理を、たしかにわきまへざる迷ひにて、惡を改めざる成るべし。子孫の爲を思はん人は、其

鑑草之序

倩世間の福ひを思ひくらぶるに、身やすく心たのしび、子孫のさかゆるを上とす、命のながきを次とす。位たかく富るを下とす。此福ひの種は明德佛性なり。此種をまきて此福ひを造る田地は、人倫日用の交なり。明德佛性をつねに明かにして、何事につきてもむさぶらずいからず、かたくなゝらずむづかしからず、親に事へては孝行の誠をつくし、夫に事へては順從の道を守り、子を育つるには正しき道にしたがひ、夫の兄弟一族には、其程々にしたがひて懇切にあいしらひ、家内の僕にはねんごろに情ふかく、こつじき非人に至るまで慈悲をほどこすを、明德佛性の修行とす。此修行誠あれば、かならず其生れつきの福分を得る事、たとへばふかく耕しよく耘りぬれば、秋實むなしからざるが如し。德たかく業ひろければ、かならず其福分をますところ有り。古も今も貴も賤も智あるも愚なるも、いきとしいける人このさいはひを願

るに今年春又梓家に洩て終に板行す。驚き取つて讀むに、乃草稿の本にして、舊本の清書にだにもあらず。其隱しうつせるをもつてにや、誤字脫簡も亦間多し。かるが故に今やむ事を得ずしてこれを考訂し、且前後改正の篇を編入し、幷に其事を叙して、聊以て師の志をあらはし、重ねてこれを梓に刻ましむ。讀者これをもつて其學の日日に新なる事を考へ、終に此問答をもつて了手とせずして、精微中庸を希ひなば、此書乃入德の階級ともなりぬべし。もしなほざりに讀去て、滴血の實なく致知の功おろそかならば、却て先師のおそれし弊に陷んか。吾黨欽哉。

庚夏六月旣望　門　人　識

ず。讀人吾本意をさとらずんば、却つて或は勝心を助けんか。恐くは世に益なうして損あらん。吾これを改正せんと欲す。かるが故に今ひろく、傳へん事を欲せず。丙戌の年、下巻一二篇を正したまふ。丁亥の年又これを改めんとす、病をもつての故にや、少きにして終に不成。同年上巻を改め書せんと欲す、わづかにして又果さず。先師嘗曰、問答の中儒佛を論ずる處のごとき、今これを讀に、其理精當を得ざる事を覺ゆ。

又曰、問答上巻、吾孝經に觸發して筆を下す。故に頗る孝字を播弄す。孝經の旨においては敢てたがふ事あらずといへども、今これを撰ばゞ又しからじ。

又曰、此書、志氣あつて世を憤り弊を憂る的の人讀まば、或は觸發興起あらんか。心術の精微用功下手の實地のごときは、いまだ委く論じ及ばず。夫先師の意かくの如し。是をもつて問答を出す事其本旨にあらず。かるが故に師卒して後愈これを藏す。然

翁問答は、我藤樹先生の撰ぶ處なり。先師嘗て仕を豫州に致して江陽に歸る。豫方の同志、先覺に離て刑儀をうしなひ、又文學につたなければ、經書の觸發をも得べからずとなげきて、惑を辨へ德に入べき方を、假名書にして與へたまへと希ひぬ。師是に於て終に此問答上下を著したまふ。時に寛永十八年辛巳の歲。雖然師の學愈新なるにしたがつて、此問答愈其心にかなはず。改正の志ありければ、廣く門人にだに授けたまはず、爰に癸未の歲、梓人の手にもれて既に梓にちりばめしを、幸に早く知て是をやぶりぬ。

或人の曰、翁問答其文正明にして其論快活也。吾人の愚なるがごとき、是を讀んで益をうる事多かるべし。何が故にかたく秘して、あまねく授けたまはずや。師の曰、吾此問答を書せし時、今に比すれば學いまだ精到ならず、且聖道の行はれざるをうれひ、末學の弊を救ふに心あり。かるが故に其議論抑揚甚しく、終に圭角の累をまぬかれ

る、樂亦其中に在り

苦みなし。大禹水を治め給ふは勤勞の至極なれども、其樂快活たり。かくの如くよく實理を體察すれば、苦樂の心にあつて外相になき事、辨へがたきにあらず。

翁問答 終

古歌―詠人誰とも知らず

蔬食―論語に、蔬食を食ひ水を飲み、肱を枕にして眠

を憂ひ、金銀財寶あれば金銀財寶憂となる、見ること聞くこと、大形苦みとならざるはなし。かくあれば、天子となりても下庶人となりても、外相の見かけには變りありといへども、其心の苦は差別なし。されば古歌にも、

うきことの品こそかはれ世の中に心やすくて住人はなし

とよめり。君子は明德あきらかにして、習に染らず人欲毛頭なし。勿論酒色財氣の惑なき故に、天下を得ても與らず、國を得ても憂とならず、家を得ても煩らはず、妻子あれば妻孥を樂み、牛馬あれば牛馬に滯らず、金銀財寶あれば金銀財寶に溺れず、見ること聞くこと皆樂となる故に、上天子となりても其樂增す所なく、下庶人となりても其樂減ずる處なし。されば御門の御位は富貴安佚の至極なれ共、和漢ともに歷代の帝王明德くらければ、酒色財氣の惱なきはなし。簞瓢陋巷、蔬食をくらひ水を飲むは貧賤の至極なれども、其樂比ひなし。又凡夫の上にても、禁中の宮女は、其情欲怫欝の苦みやる方なし。農人の耕耘は勤勞の至極なれども、其心さのみ

はたとへば眼の如し。眼の本體は、閉開自由にして物を見ること分明快活なり。若塵砂など目の内へ入るときは閉開自由ならず、物を見る事も明ならず、苦痛こらへがたし。一旦苦痛こらへ難しといへども、塵砂を除き去るときは、本體に復りて開閉自由にして分明快活なり。其如く、心の本體は元來安樂なれども、惑の塵砂にて種々の苦痛こらへがたし。學問は此惑の塵砂を洗ひすてゝ、本體の安樂に返る道なる故に、學問をよくつとめ工夫受用すれば、本の心の安樂にかへる。

問曰、皆人の心得には、貧賤勤勞を苦とし、富貴安佚を安樂とす。然るに苦樂境界にはなくて、唯心に有りとはいかん。

答曰、左樣の心得ぞこなひを、凡見といひてあさましき惑なり。凡夫は外を願ふ迷深く、實理を辨へざる意見にて、見かけばかりを以て定むる心得なり。夫明德くらければ、習に染り人欲に滯り、酒色財氣の惑ふかき故に、天下を得れば天下を憂ひ、國を得れば國をうれひ、家あれば家を憂ひ、妻子あれば妻子を憂ひ、牛馬あれば牛馬

孩提ー嬰兒に同じ

翁問答　上　丁亥冬（改訂）

問曰、人間世第一に願ひ求むべきものは何事ぞや。

答曰、心の安樂に極まれり。

問曰、人間世第一に厭ひ捨つべきものは何事ぞや。

答曰、心の苦痛より外はなし。

問曰、苦を去つて樂を求むる道はいかん。

答曰、學問なり。

問曰、學問にて苦痛を除き安樂を得る道理はいかゞ。

答曰、元來吾人の心の本體は安樂なるものなり。其證據は、孩提より五六歲までの心を以て見るべし。世俗も幼童の苦惱なきを見ては佛なりなどいへり。かくの如く、心の本體は安樂にして苦痛なきものなり。苦痛は只人々の惑にて、自ら作る病なり。心

卓散―今の澤山といふに同じ

三益―書に就きて悟り養ひ行ふに至るをいふ

め油断なければ、必ず眞をなすべし。三書を學びて餘力あらば、其力と隙に從がひて語孟を學ぶべし。扨また餘力あらば十三經を皆學ぶべし。十三經をみな學ばねば得道ならぬと思ふも大なる誤なり。いかんとなれば、十三經そなはらざる時に成德の人卓散なり。十三經備りて後、却つて得道の人すくなし。孝經學庸の外は要らぬと思ふもあやまりなり。如何となれば、時に趣く敎へ己む事を得ざる勢にして、皆聖賢の遊ばしたる書なれば無用の書にあらず。學ぶところの書物數の多少に心を留むべからず。たゞ一向に聖人となるべきと、志を勵まし迷ひを辨へ、自己心裏の明德を明にする益を求むべし。聖經賢傳をきくに、明德を明かにする三益あり、觸發一つなり、栽培二つ也、印證三つ也。此三益は皆自己の憤りによつて得る所なり。平生體察の功を用ひずして憤りなくば、二六時中手に卷をすてずとも、其得る所の益あるべからず。若此益なくば、書を讀みても讀まざるに劣れり。

七書ー孫子、吳子、尉繚子、司馬法、李衛公問對、六韜、三略
十三經云々ー卷の三參照

答曰、夫は大なる心得そこなひなり。聽かでかなはぬ書物は十三經なり。十三經の取入のはしごに成べき名儒の書、七書などの外は讀みて益なし。然るにつとめて讀ぬるは、目だるく心つかるゝあだ事なり。史書は古今の事變を考へ、福善禍淫の印證とするものなれば、餘力のなぐさみに讀むものなりと知るべし。

問、十三經は何々ぞや。

答曰、孝經、論語、孟子、周易、尙書、周禮、儀禮、詩經、禮記、左傳、穀梁傳、公羊傳、爾雅、以上十三部を十三經と定めたり。

問曰、十三經も書數多くて、文才なき者は皆まで學ぶ事及びがたし。其内一二卷學びて道を知るべき書は何れぞや。

答曰、本來易經一部を推擴めたる十三經なれば、易經をよくまなびたるがよし。然れども易經は簡奥玄妙にして、尋常の人の取入なりがたければ、孝經大學中庸をよき先學に隨ひて學びたらば、人の明暗によりて遲速ありといふとも、志專らにして勤

師匠—古は學を專業とする者無かりし也

女は、書を讀む事なるべからず、いかゞ。

答曰、むかし聖人の御代には、わづかの小里にも學校あり。即其里の奉行代官其師匠となりて、耕作のひまに聖經を講明し、道を敎ふるによつて、愚痴不肖の賤男賤女に至るまで、書物の本意をよく得心するなり。文字訓詁には通ぜざれども、聖經の主意を聞取、學問の實義を合點して、心を正しくし身を修むる事は、中々末代の俗儒の及ばざる所なり。文字訓詁にはよく通じぬれども、心の會得なく、其心行凡俗にひとしきは眞實の讀書にあらず。諺にも論語よみの論語よまずといへり。たとへば文盲なりとも、聖經賢傳をふかく信仰して讀み覺えたる人に講釋させ、其本意をよく得心して我明德を明かにするは、俗儒の書物をよみぬるより一きは勝りたる書物よみなり。是を以て見れば、心學をよくつとむる賤男賤女は、書物を讀まずして讀むなり。今時はやる俗學は、書物を讀て讀まざるに等し。

問曰、唐土より渡たる書物際限なし。かたはし皆聽かで叶はぬ事にや。

に先覺後覺の字面見ゆ

筌—魚を捕るに用ふる竹製の器

がひて性命の道を學び問ふを、學問の實義とす。文學は只その一品なり。されば文學なき大昔には、もとより讀むべき書物なければ、只聖人の言行を手本とし學問せしなり。世の末になりて、學問の本義を取失ふべき萠芽あるによつて、聖賢これを憂ひて、其の道をもの〻本にしるして、學問の鏡と定め給ひてより此かた、書物をよむを學問の初門とするなり。人の生附さま〴〵なれば、文藝は極めて器用にして、心法の取入は無下に無器用なる人あり。此類の人多分俗儒となれり。又文藝は無下に無器用にして、心法の取入は極めて器用なる人あり。かくの如くなる人よき先覺に從ひ、聖經賢傳の講明を聞く時は、文藝無器用なれば、文學訓詁を覺ゆる事はならざれども、心法のとりいれは器用なるによつて、必ず聖經賢傳の大意主意をよく聞とりて、其明德を明かにし君子となれり。かくあれば、一文不通にても上々の學者なり。如何となれば、文藝は道を求むる筌なり、魚を獲れば筌は無用の物なり。

問曰、大學の道は、上天子より下庶人に至るまでの敎なりと聞く。愚痴不肖の賤男賤

無益の事なりといへる取沙汰、そのいはれ無きにあらず、若また世間の學者、人毎に凡情の習態をあらひすて、學問第一義の明德を明かにして、孝悌忠信の誠あらば、親は子の學問せざるをなげき、君は臣下の學術なきをきらひ、學問をそしる口なきのみならず、士はいふに及ばず、農人商人に至るまで、學問なくては叶はぬ事なりともてはやすべし。さあれば世俗の學問をそしるにあらず、學者のそしるなり、學者の招く所なり。しかるを我も人も、學問する者のくせにて、世俗の學問をそしるを聞ては、或は腹を立て或は笑ひおとしめて、其のあやまりの己より出る事をわきまへず。是をもつて見れば、學問の實義に志なき學者は、世俗の學問をそしるよりも、一きはまさりたる聖門の罪人なるべし。

問曰、一文不通にても、仁義の明德明かなる人有るべしとならば、聖人以下の人も、學問なくして明德を明かにする事なり申すべきや。

答曰、夫もはや文藝を學問とあやまりたる習心より起る疑なり。後學の先學にした

だて—伊達也、裝飾として外見を修飾する也

學問をそしる、いかゞ。

答曰、世俗の學問をそしるは世俗のあやまりにあらず、學問する人のあやまりなり。世間の學問をする人を見るに、學問の實義を知りて學問に志す方は稀なり。多分物讀奉公の望か、または醫者のかざりか、或はだて道具か、此三つを志として學問するによつて、學問第一義の明德を明かにする事は、始終取沙汰なき事なれば、心を正しくし身ををさむる益はなくて、文藝を高滿する病のかさむ計なり。間に志眞實なる方あれども、よき先學に親炙なきによつて、道のわが心にある事をわきまへず。徒に先王の法賢人君子の迹を認めて道とし、世間の好格套を善とさだめ、世間の理窟を認めて道理とし、是をもつて心を正しくし身を修めんと伎倆をはげむによつて、本來活潑融通の心却つてすくみ、自己心裏に固有したる明德の寛裕温柔くらく、圭角日々にかさみ、次第々々に人と和睦せず、異な者になりぬ。かくあれば、學問の益といふものは唯文藝ばかりなり。世間の人是を見て、物よみ出家醫者などの外は

うつけ―空氣と書く、痴呆なる貌

問は物讀坊主又は出家などの業にして、士の所爲にあらずなどゝ取沙汰まち〳〵なり。學問の實義世間に明かならざる事、天下の大不幸なるべし。

問曰、學問の本意世に明かならざる事、天下の大不幸なる事、いかゞ。

答曰、學問は明德を明かにするを主意頭腦とす。明德は我人の形の根本なり主人たり。此主くらければ、主君のうつけて下人のみだりがはしき如く、其人の思ふ所行ふ事皆天理にそむき、偏に名利のよく深く、親をも親とせず君をも君とせず、たゞ一向におのれを利し、人を損する處に利發才覺を用ひ、相爭ひ相うばひ、甚しき時は主親をも弑す惡逆をなせり。人間の萬苦は明德の暗きよりおこり、天下の兵亂も又明德の暗きより起れり。これ天下の大不幸にあらずや。聖人是をあはれみたまひ、明德を明かにする敎を立てゝ、人の形ある程の者には學問を勸めたまへり。四書五經にのする所皆是なり。

問曰、四書五經は世間に流布して讀む者澤山なれども、此實義明かならずして世俗の

問はれたり―此下脱文あるべし

器となれり。然るを靈公小人にして戰伐を好み、强剛暴逆のいくさを逞しくせんために陣を問はれたり。

翁問答　下　丁亥春（改訂）

問曰、今の世間には、儒書を讀み覺ゆる人をば、德なけれども儒者とす。其身もまた儒者の名を受けて辭せず、大なる誤にあらずや。

答曰、然り、儒者の名は德にあつて藝にあらず。文學は藝なれば、もの覺よく生れつきたる人は、誰もなり難き事にあらず。たとひ學文に長じたる人にても、仁義の德なきは儒者にあらず。たゞ文學に長じたる凡夫なり。一文不通の人なりとも、仁義の德明かなる人は凡夫にあらず、文學なき儒者なり。此理は本來分明にして、辨へがたき事ならねども、何の時よりかあやまり來りけん。たゞ儒書を讀むばかりを學問と思ひ、文學ある人を儒者ともてなせり。此迷世人の心に染み附たるによつて、學

々孔子に戒められし人

季康子—魯の大夫、三家中の最大權勢家

衛靈公云々—論語衛靈公篇に出づ

を用ひ、冉求自身鑓を入れて齊の軍を敗り、甲首八十を得たる故に、終に魯國の勝軍になりぬ。其後季康子冉求に問けるは、今度の軍功たぐひなき事なり、軍法を學び得てかく有りしや、但し又生れつきたる器用にやと。冉求答へていはく、生れながらにして能するにあらず、孔子に學び得たりといへり。季康子是に依て幣をもつて孔子を迎へ、孔子魯國に歸り給ひぬ。

師の曰、冉求若季氏が大將となりめされずば、此軍功有るべからず。此軍功なくば、孔子の文武兼備り軍法に長じ給ふ事を、季氏うかゞひ知る事能はざるべし。聖人のいます時さへかくの如くなれば、後世の文武を分けて二つにするあやまりも、さのみ咎むまじき事にや。

體充曰、孔子かくの如く軍法に長じたまひて、衛の靈公に傳へたまはざるはいかゞ。

師の曰、兵は凶器なりといへども、君子是を用ふれば天下の亂を定めて、凶器却つて寶となれり。小人是を用ふれば、國をみだり天下にわざはひして、凶器ます〳〵凶

伯益―尚書大禹謨に見ゆ、伯益は當時の賢臣
周公云々―論語泰伯篇の語
冉求―孔門の人、季子に仕へて屢

へども、とがを歸すべき方なければ、只何となく譏るばかりなり。若學者にかくの如き人あれば、學問にとがを歸して滿心の祟なる事をわきまへず。愚なるかな歎かしきかな。されば大禹は聖人なれば、毛頭の滿心あるまじけれども、伯益禹を贊けて、滿招損。謙受益といへり。まして聖人より下ざまの人、しばらくも此戒を忘るべけんや。周公の才ありても、滿心あらば取るに足らずと孔子の宣ふも、高滿の凶德の甚だ害ある事を戒しめ給ふなり。學問に志ある人はいふに及ばず、無學の人も此魔障を能のぞき捨べき事、第一の急務なり。名利のけがれなく道に志ありといへども、高滿の凶德をのぞき棄つる心得なきによつて、暗所に魔を來し、其身凶惡に落入るのみならず、とがなき學問にきずを附る事淺間敷なげかし。我も人も能戒むべし〳〵。

齊人と魯人と郊に戰ふとき、魯軍の右手の大將は冉求也。管周父御たり、樊遲右たり。すでに戰合うて、魯の左手敗軍しぬれども、右手は少しもしりぞかず、樊遲の謀

かさみ―當む也、增し加はる事

は天地鬼神のそこなひ捨て給ふ所にして、人も亦是を惡み、謙は天地鬼神の保祐し給ふ所にして、人も亦是を好みぬる實理を明かして、後學の盈をすて謙を求めん事を示し給ふ聖謨なり。此故に温恭自虛の四字を以て、初學心法の第一義とす。此四字の法を用ひ滿心をのぞきすてぬれば、其まなぶ所悉く心のみがきとなりて、明德日々に明かになるものなり。若此法によらずして滿心をのぞかざれは、その學ぶところ皆滿心のかさみとなりて、明德日々に暗くなりぬ。かくの如きの滿心は、天地鬼神の捨給ふ所なる故に、其心だて行儀異なものになり行き、人も亦是を惡む。是を暗所に魔を來すといへり。すでに暗所に魔を來しぬれば、何事も異風を好み、人をば生ける虫とも思はず、天下に我をこすべき者なしと、人もゆるさぬ高滿を鼻にあて、親々がたの愚痴なるをさげしみ、友達をあなどり、かりそめにも己れを是とし人を非とす。或は世間の交りをいとひ、獨り居る事をこのみ、或は甚しきときは氣のちがふ方も有りと見えたり。かくの如きの人、學問せざる方にも數多有りとい

體充曰、學問の本意世間に明らかならざる事、天下の大不幸なる事はいかゞ。

自レ此以下、十三經も書數多くて、文才なき者は云々の一段の終に至つて、丁亥の本と小異大同、故に刪レ之。

體充曰、名利に心ありて、學問する人のみ益なきは尤にて候。さのみ名利のけがれもなく、道に志して學問する人の、益なきのみにあらず、却つてこゝろだて行儀異なものになり行きぬるはいかゞ。

師の曰、人心の私を種として、知あるも愚なるも、自慢の心なきは稀なり。この慢心明德をくらまし災禍を招くくせものにして、萬の苦しびも又大かた是より起れり。されば易に、天道虧レ盈而益レ謙。地道變レ盈而流レ謙。鬼神害レ盈而福レ謙。人道惡レ盈而好レ謙。謙尊而光。卑而不レ可レ踰。君子之終也といへり。盈は高滿甚しく、己れを是として自ら用ひ、萬事分過を好み、人を輕しめ侮る心なり。謙は温恭自虛にして、自反し獨を愼み、人をうらみず人をあなどらず、人に取て善をなす德なり。盈

幸—此邊原本錯誤あるに似たり、一本に從ふ

易—謙の卦の彖傳に見ゆ

天下の大不

下してけり。かくして五日過ぬれば、國中に儒服の者見えず、たゞ一人儒服を改めざるものあり。召して國事を問たまひぬれば、千轉萬變にして究りなかりけり。

師曰、魯國の君は儒服を着たる人をとめて儒者とあやまり、今の世間の人は、儒書を讀む人をとめて儒者とあやまれり。その誤る所の品はかはりたれども、實體を知らざる事は同じまよひなり、文學は藝なれば、物おぼえよく生れつきたる人は、誰も習ひ知るべければ、文學ある人にても仁義の徳なきは儒者にあらず。只文藝ある凡夫なり。一文不通の人なりとも、仁義の徳明かなるは凡夫にあらず、文學なき儒者なり。此理は分明なれども、いづれの時よりか誤り來りけん、只儒書を讀むばかりを學問と思ひ、文學ある人を儒者ともてなせり。此迷ひ世人の心にしみつきたるによつて、學問は物よみ坊主又は出家等のわざにして、士のわざにあらずなどと取沙汰まち〳〵なり。儒服の儒者にあらざる事をあかしたる莊子の如き人なくて、學問の本意世間に明かならざる事、天下の大不幸なるべし。

翁問答　下　丙戌冬（改訂）

莊子—莊周なり、此話は莊子に見ゆ

魯國の君莊子に語りて曰く、魯國には儒者多うして先生の道を學ぶ者すくなし。莊子曰く、魯國には儒者甚すくなし　君あやまりて多しと宣ふ。魯公の曰く、魯國の人過半儒服を着たり、然るに少しといはんや。莊子曰く、儒服は儒者の裝束なり、仁義は儒者の德なり、裝束は誰も着るべければ、儒服を着たる人にても、仁義の心なきは儒者にあらず、只儒服を着たる凡夫なり、仁義は君子ばかりの受用する德なれば、たとひ夷國の裝束着たる人にても、仁義の心あるは凡夫にはあらず、夷國の裝束着たる儒者なり、然る故に、伏犧神農は儒服をめさゞれども、儒德明かにましませば、天下一の儒者にてまします、魯國の人は儒服を着たるといふとも、多分儒德あるまじければ儒者にはあらず、もし我言を疑ひたまはゞ、儒德なくして儒服を着たる者をば死罪におこなふべしと、禁制を立て試みたまふべし。魯公莊子の言を用ひて、右の如く法を

孝に止まり云々―大學に見ゆ

玄聖素王―孔子を指す

体胖に、廣大高明、精微中庸の神道を服膺して、人の子となりては孝に止まり、人の臣下となりては忠に止まり、人の親となりては慈に止まり、人の君となりては仁に止まり、人の兄となりては惠に止まり、人の弟となりては恭に止まり、人の朋友となりては信に止まり、富貴に素しては富貴を行ひ、貧賤に素しては貧賤を行ひ、夷狄に素しては夷狄を行ひ、患難に素しては患難を行ひ、境遇に意必の累なき事水の流るゝが如く、心の安く靜なる事は山の定まれが如く、暴君汚吏も志を奪ふこと能はず、天災地妖も殺すこと能はざるものなり。若又聖胎純熟の時至り、脫胎神化して聖神の位に至る時は、天地と其德を合せ日月と其明を合せ、四時と其序を合せ鬼神と其吉凶を合せ、四表に光被し上下に格る。然る故に、南面の位に在りては帝堯の君たるなり、北面の位に在りては帝舜の臣たるなり。位を得ずして下に在りては玄聖素王の道なり。孔子の曰。夫聖人之德。又何以加於孝乎。

そこなひやぶらざる事なりと講說するによつて、陳氏此の發明あり、此語の意は、全孝の心法をよく受用すれば、龍逢比干の諫めて死にめされて、身體髮膚を切り破り、身首分裂したるも、曾子手足を啓きて、一毛をも毀ひ傷らざる事を示しめされたるも、同じ孝行也。若し又全孝の心法をよく受用せざる人は、八十九十まで年老いて、我家のうちにて病死して、毛一筋そこなはずといふとも、刀にて斬られ鋸にてひかれぬる刑罰に遭ひたる恥と同じ不孝なりといふ義なり。よく〳〵體認あるべし。

體充問曰、全孝の心法をよく受用仕り候はゞ、艮背敵應の聖域にも至り申すべく候や。

師翁曰、心學は凡夫より聖人に至る道なれば、全孝の心法が卽ち艮背敵應の心法にて候。名は變りて實はおなじ道理也、是を本體工夫といふなり。心法の端的は同一貫なれども、受用する人に善信美大聖神の差別ありと得心すべし。たとへば心法は大路也、受用する人は路を行く人なり。路を行く人に貴賤、老幼、男女、達者、不達者の差別あれども、路は同じ大路なるが如し。全孝の心法をよく受用して得る事あれば、其心廣く

刀、鋸云々
—前の刀鋸
修辱を指し
ていへり

殺身成仁—論語衛靈篇に出づ

龍比—龍逢と比干と

啓予手—論語泰伯篇にあり

身體髮膚をそこなひやぶらざる故なり。殺レ身成レ仁と宣ふは此意なり。天性仁孝の道を心に守らず、身に行はずして惡逆無道なる時は、たとひ身を全うして毛一筋そこなひやぶらずといふとも、孝行にあらず不孝なり。血肉の身體髮膚をばそこなひやぶらずといふとも、天性仁孝の身體髮膚をそこなひやぶる故なり。曾子曰。戰陣無レ勇非レ孝也。此賢範の意は、軍陣戰場にて武勇をはげみ、さきがけをして軍功をなす時は、疵を被ぶり討死するが孝行なり。若武勇をはげまさず軍功をたてざる時は、縱臆病の惡名をうけずとも不孝なりと戒めされたり。陳明卿曰。若有二曾子之心一。卽龍比之身首分裂。與二啓レ手啓一レ足一般。不レ然。則老二死牖下一。亦與二刀鋸僇辱一何異。是論語に、曾子臨終の時門弟子を呼で、啓二予手一啓二予足一といひて、詩を引て不二敢毀傷一の心法を示しめされたる事を記せり。曾子の本意は、血肉の身體髮膚をそこなひやぶらざる所を以て、天性仁孝の身體髮膚をそこなひやぶらざる事を明しめされたる事、孝經聖謨の如し。しかるを章句の儒者、曾子の本意を悟らずして、只血肉の身體髮膚を

大雅にあり

仁者人也—孟子の語也

し給はんためなり。よく〳〵體認あるべし。

體充曰、身體髮膚をそこなひやぶらざるが孝行にて御座候はゞ、軍陣にてきずを被ぶり討死するは不孝にて御座候はんや。

師翁曰、夫は大なる心得ぞこなひにて候。不義不道なる事にて毀ひ傷るが不孝なりといふ義なり。孝經に、身體髮膚受之父母。不敢毀傷孝之始也と示し給ふ。此毀傷は、血肉の身體髮膚をそこなひやぶる事にはあらず。孝德をそこなひやぶる事なり。害仁とのたまふ害の字の意なり。血肉の身體髮膚の事にはあらず。孝德の形體の事なり。仁者人也とのたまふ人の字の意、形色天性也。惟聖人然後可以踐形と發明めされたる形色の字の意なり。此聖謨賢範の心は、人間の身體髮膚は、本來天性仁孝の凝聚なる事を示したまふものなり。孝經に示したまふ身體髮膚是なり。然る故に天性仁孝の道を心に守り身に行ふ時は、たとひ血肉の身體髮膚をばそこなひやぶるといふとも、不孝にあらず孝行なり。血肉の身體髮膚をばそこなひやぶるといへども、天性仁孝の

身體髮膚―孝經の開宗明誼章第一に出づ

天の尊爵―孟子曰く、仁は天の尊爵、義は人の安宅也

爾祖―詩經

心にて親の身を害ひやぶるといふ子細は、孝經曰。身體髮膚。受之父母。不敢毀傷。孝之始也。この聖謨の心は、我身に具はるものは、心も性も身體も毛髮も、皆親の心性身體毛髮を受けたるものなれば、身體髮膚も本我身體髮膚にあらず、親の身體髮膚なり、身體髮膚の主本たる心性も我心性にあらず、父母の心性なり、しかる故に、我身體髮膚をそこなひやぶるは、卽父母の身體髮膚を毀ひ傷るなり、我德性をそこなひやぶるは、すなはち父母の德性を毀ひ傷るものなり、身體髮膚は器にしていやしく、德性は道にして貴きものなり、いやしき身體髮膚をそこなひやぶるも大惡逆大凶德なり、身體髮膚の主本たる天の尊爵の德性をそこなひやぶるは、猶以大惡逆大凶德なり、此道理を明にわきまへて心によく守り、不敢毀傷は孝德を受用する始なりと敎へたまふなり。此聖謨をよく體察すれば、名利の欲、習心、間思雜慮などの邪念を克すてずして、我德性をそこなふ時は、卽父母の德性をそこなひやぶる事分明なり。孝經この節の終に、無念爾祖。聿修厥德といへる詩を引て結びたまふも、此意を示

良知―人々生れながらにして有する知慧の稱

六極―卷の二參照

者。謂二之悖德一。不レ敬二其親一而敬二他人一者。謂二之悖禮一と戒めたまへり。かくの如くなる孝德全體の天眞を明にする工夫を、全孝の心法といふなり。全孝の心法、その廣大高明なる事、神明に通じ六合に彌るといへども、約ところの本實は、身を立て道を行ふにあり。身をたて道を行ふ本は明德にあり。明德を明にする本は、良知を鏡として獨を愼むにあり。良知とは赤子孩提の時より、その親を愛敬する最初一念を根本として、善惡の分別是非を眞實に辨へ知る德性の知をいふ。この良知は磨而不レ磷涅而不レ緇の靈明なれば、いかなる愚痴不肖の凡夫の心にも明にあるものなり。然る故に、此良知を工夫の鏡とし種として工夫するなり。大學の致知格物の工夫是なり。獨を愼むとは、一念の少しおこる時に良知を鏡とし、よく省察吟味して、名利の欲、習心、間思雜慮などの邪念おこる時は、我親の身を害ひやぶる不孝の罪人となりて、幽にしては六極莫重の鬼責をうけ、明にしては五刑莫大の肉刑を受くべき魔心なりとおそれ愼み、火急に克ち去りて神明に相通ずる至德の獨樂を求むる工夫をいふなり。一念の惡

仁之實—下文は、孟子離婁上篇に出づ

夕。推而放諸東海而準。推而放諸西海而準。推而放諸南海而準。推而放諸北海而準。詩曰。自西自東。自南自北。無思不服。此之謂也。又曰。衆之本。敎曰孝。其行曰養。養可能也。敬爲難。敬可能也。安爲難。安可能也。卒爲難。父母既沒。愼行其身。不遺父母惡名。可謂能終矣。仁者仁此者也。禮者履此者也。義者宜此者也。信者信此者也。强者强此者也。樂者自順此生。刑自反此作。孟子曰。仁之實。事親是也。義之實。從兄是也。智之實。知斯二者弗去是也。禮之實。節文斯二者是也。樂之實。樂斯二者。樂則生矣。生則惡可已也。惡可已則不知足之蹈之手之舞之。禮記。仁人不過乎物。孝子不過乎物。是故。仁人之事親也。如事天。事天如事親。是故孝子成身。以上の聖謨賢範をよく熟讀して、孝德の親切眞實、廣大高明、無上無外、至尊、無對にして、孝の外には德もなく道もなき事を明に辨ふべし。假令其行ふ所よしといふとも、孝德の天眞に背きぬれば、天威のゆるさゞる所、君子の貴ばざる所なり。然る故に、孝經に不愛其親而愛他人

亡而存亡。謂之盡性至命。謂之體道同天。謂之至德凝道。此中大有眞樂。盎然春融。煕然宇泰。既利且貞。活潑々地。卽易之黃中通理。正位居體。美在其中。暢于四肢。發于事業。美之至也。此乃儒敎中。不死之神方。長生之下術。不可與守空寂而坐枯禪。弄精魂而希昇擧者。同日語也。この賢範をよく體察して、儒家の聖神至誠無息の位には、仙佛の修行の分にては、梯しても及ばぬ所ある事を明にわきまへ、迷をはらし給ふべし。保合大和する心法を他に求むべからず、すなはち全孝の心法なり。

體充曰、全孝の心法をば、いかやうに受用仕るべく候哉。

師翁曰、孝經曰。夫孝天之經。地之義。民之行。天地之經而民是則之。又曰。天地之性。人爲貴。人之行。莫大於孝。孝莫大於嚴父。嚴父莫大於配天。又曰。孝悌之至通於神明。充於四海。無所不通。詩曰。自西自東。自南自北。無思不服。曾子曰。夫孝。置之而塞乎天地。溥之而横乎四海。施諸後世而無朝

詩—詩經大雅文王有聲の章に出づ

性理會通ー清の鐘人傑著

至於命を宗旨とす。工夫十分成就する所の心性を聖神至誠無息といふ。其宗旨の端的も、明覺人悟の心性も、仙佛よりも一位ましたる所あれば、長生不死と指す所の益も、成佛得脱と指す所の益も、一位ましたる益あると知るべし。性理會通曰。易曰。保合大根。一團眞理。實氣充宇宙而無餘。歷浩劫而無改。鼓剛柔生造化。生萬象攝三才沖漠絪縕。融和純粹。若能保此氣而不失。合此理而不違。身同大道。如點雨之滴海渾滄溟而共存。心契天眞。猶片雲之沒空攬太虚而同久。利通而無滯礙。貞固而無變遷。故天地終而壽不竟。日月晦而明不虧。故曰。至誠無息。不息則久。久則徵。徵則悠遠。善保大和者。誠道之至妙者也。聞者疑之。曰。性即理也。命即氣也。人之性。天地之理也。人之命。天地之氣也。誠能以性合天地之理。以命會天地之氣。即天地之理自性也。天地之氣自命也。理氣無終壞。此性命亦無終壞。譬以水投水乎。何可竭。以火投火乎。何可滅。由其體大造而超小刼故。不以天地之成毀而成毀。獲大身而忘小形。故不以軀殼之存

かろき病―輕微の弊害なるやうにて實は然らざる也

慮といふなり。此二はかろき病にて、却つて克治しがたきものなり。よく省察あるべし。

體充問曰、仙術を學ぶ人は長生不死の益あり、佛道を修行する人は成佛得脱の益ありと承り及び候。儒道を學び候とも、さやうなる身後の益ある事御座候や。

師翁曰、さやうの疑も、異端の說を聞あやかりて起る事にて候。孝經易經をよく悟候へば、生前死後のことわり、掌を指如く分明に候へば、とかくの議論に及ばぬ事なり。然れども、今時の人は多分此疑あれば、しばらく仙佛の道によつてその迷をとき可申候。仙家長生不死の術も、佛家成佛得脱の修行も、皆畢竟は一心の工夫なり。仙家には修心煉性を宗旨とす。佛家に明心見性を宗旨とす。其工夫の十分成就する所の心性を、長生不死といひ成佛得脱といふなり。二氏ともに、元氣の靈覺を心性の端的として、元神の妙理をさとり得ず。しかる故に、その見性成道、中行の君子より一位下なり。儒家にも一心の工夫を專とし、元神の神通を性の端的とし、窮理盡性、

習染―論語孔子家語等に出でたる、芝蘭鮑魚の譬喩の如し

體驗―實驗して沈思研究する也

師翁曰、習染心とは、生下てよりこのかた見なれ聞なれて、思はず知らずに何時となくあやかり染まりたる心なり。たとへば水にて朱をとけば其色赤く、緑青をとけばその色青くなるが如し。本來水の色は赤も青もなけれ共、朱と緑青とに交りあやかりて斯くの如し。その如く、本來人心に好惡の事定はなけれ共、その生れ育つ國處の風俗、その家の所作にあやかり染まりて、好惡の品定色々にかはりあり。學問藝能にも習心あり。先本心の端的をよく考へ定め、その上にて習心を吟味して克ち去るべし。朱をとき赤き色に變じたる水も、よく淸しぬれば、朱は下へ沈みて水の本色あらはるゝものなり。まして無聲無臭の心の水は、其濁り淸し易かるべきにや。體驗簡要にて候。

體充曰、間思雜慮とは、いかやうなる念慮にて御座候や。

師翁曰、さしたる悪念にあらざれ共、思ひて益なくわけもなき事を、くり返しくり返し思出して、天眞のわづらひとなるを間思といふなり。應事接物の際、至善のある所を分別思慮する時に工夫專一ならず、他の念のとりまぜおこり感通のさはりとなるを雜

楚王―管子後漢書等に見えたり

の風に入りて、君子の譽もとめずして至るものにて候。名利の欲に習染る心、間思雜慮を一念の微に省察して、獨を愼んで除き去る事第一の要法にて候。

體充曰、楚女の寵愛をもとめて餓死したるといふ事は、何たる事にて御座候や。

師翁曰、それは寓言の故事也。むかし大唐楚國の王、腰のほそき女を寵愛めされたれば、禁中の腰のふとき宮女、楚王の思ひつき給ふまじき事をかなしび、食物を喰はずしてやせなば腰の細くなるべきかと、斷食してかつえ死したるといふ事なり。世間の名をこのみ譽をもとむる人を見るに、その時代の天子諸侯の好みたまふ事、世俗のほめてもてはやす事なれば、是非眞妄のえらびなく、その時に相應する樣に心をもち色をよくし言を巧にして、義理不義をわきまへず、一向に世人の譽をもとめて恰も楚女の寵愛をもとめて餓死したるに似たる故に、寓言の故事をかりてたとへたり。心學に志ある人、はぢ戒むべき事なり。

體充曰、習染心とは、いかやうなる心を申し候や。

に阿り權貴に諛ふ也

連城の珠―前に出でたる和氏の璧に同じ

先よせひ意―餘情心、氣どろ心

好む意はすてやすく候へども、眞實の名を好む意は、本末をよく辨へざれば棄てがたく候て、人不レ知而不レ慍の位に至りがたし。聖賢君子英雄孝子忠臣の名譽、その外一事にても義理に叶ひたるほまれは、皆末と影となり。その名譽の根本と形とは、その心と行跡となり。聖賢の心を心に守らず、聖賢の行跡を身に行はずして、聖賢のほまれをとらん事を求め、心に孝德なく身に孝行を行はずして、孝行の譽を求むるは、たとへば形なきに影を求むるが如し。猿猴の水の月をつかむに似たり。其上我身のうちに連城の珠にもまさりて、王公の位にもかへざる名譽の眞樂ある事を知らず。世間凡夫の理もなき俗談のほまれを求めねがひて、胸をこがし身を苦しめて、楚女の寵愛をもとめて餓死したる如きの振舞無下に淺まし。名の欲をすつるには、先よせひ意虛夸の念をかち去るべし。かくの如く吟味體認して名の欲をすつること、根本天理の眞樂を求め、氣隨をわすれ作法を正くせん爲なれば、心學に志ある者は、名をすつるほど氣隨のおごりなく作法よくなりて、狂風にもいらず市井の風にもいらず、君子中行

常也、五常を乘りて失はざる也、詩經大雅烝民の什を出處とす

曲學—自家所信の學を曲げて、世

善名をほめたつとび惡名をにくみきらふは萬古のつねなり。然るによつて、生附いさぎよき士は、其名高くあらはし譽を取らん事を好めり。其心根善を好み惡をにくむ秉彝の本然に近くて、利欲に汚れてきたなき凡夫にくらぶれば、一位まさりたれ共、其明德明ならず、眞妄本末のわきまへを知らず、風俗のあやまりに習そまりて、或は本をすてゝ末を專とし、或は眞をそむきて妄をとる故に、その心根の始は善を好み惡を憎む秉彝の本然に似たれ共、却て本心をくらまし性命を損なふ、人欲のわづらひとなれり。利欲と名の欲とは淸濁かはり有りといへども、天性をそこなひやぶり不孝莫大の罪に落ち入る事は變りなきによつて、名と利との欲を牛角に嫌ひて克ち去るものなり。さて名の譽に、眞妄本末の差別有る事をよくわきまへざれば、名の欲を棄てんと思ふ志ありても、工夫はげましがたし。聖賢君子英雄孝子忠臣の譽、其外一事の譽にても、義理にかなひたるを天理眞實の名といふなり。異端曲學の名の譽、そのほか一事の譽にても、義理に叶はぬを汚俗妖妄の名といひて、君子の貴ばざる所なり。妖妄の名を

て世間の外聞を何とも思はず候はゞ、氣隨になりて作法あしく候はんと存じ候はいかゞ。

師翁曰、其はよき不審にて候。名の欲は利欲にくらぶれば一位ましていさぎよく候。子細は、名を好むものは財寶をむさぶらず、命を惜しまず、きたなき利欲は少しもなき故に、功名の士をば中の位と定めたり。性命の學に志なく、義理を專に守らざる人は、せめて名の欲ありて利欲のなきがよく候。眞儒性命の志なく、義理をまもらざる人外聞を何とも思はぬ時は、必氣隨になりて作法あしく、其心潔き人は狂者の風に入り、その心きたなきは市井の風に入りぬべし。吟味有るべき事なり。然れども、是は心學に志なき凡夫の上の吟味なり。心學に志ぬる上の吟味はまた各別なり。夫名は實の賓といひて、其心に思ひ身に行ふ實あれば、卽ち其名有るものなり。たとへば實は形なり名は影なり。善を思ひ善を行へば善の名あり。堯舜孔顏など是なり。惡を思ひ惡を行へば惡の名あり。桀紂盜跖など是なり。善を好み惡を憎むは人心秉彝の本然なる故に、

また—原本いまだとあり

名は實の賓—莊子に出づ

秉彝—彝は

き、武は紂を牧野に殺す

分もなき高知行—身の程に過ぎたる高祿

なり。其外萬事皆かくの如く、一錢を人にあたへ一錢を人にうくるも、此心もちは同じ事なり。儒者の心法は、艮背敵應不相與の聖心を鏡とする故に、天子より下庶人に至るまで、分々相應の本分のすぎはひをいとなみ、財寶をたくはふるを、欲とはいはず。一錢にても義理に背きて取り蓄へ、又與ふべき物を惜みて與へざるを欲とす。此欲を棄つる事はやすき事にて、世のなかの住居のさはりに成り申すまじく候。學問せぬ人も、生附廉直なる者は、不義の蓄へをば賤しみ嫌ふものなり。まして心學に志ある人をや。利欲に財欲と形氣の欲との少しかはりあり。財欲は金銀財寶を澤山にほしきと思ひ、分もなき高知行をむさぼる事也。此欲は棄て易きものなり。形氣の欲は、酒色に耽りおぼれ、又は形の便利を求めすごす事なり。此欲は棄てがたきものなり。惣じて欲をすつる工夫、我心の一念おこる所にて省察して克去るが簡要にて候。此工夫を愼獨といふなり。よく〳〵體認あるべし。

體充曰、先生の敎を承り屆け候へば、利欲をすつる事は成易く候はんが、名の欲をすて

なるべし

湯王の桀を放ち…武王の紂を伐ち―湯は桀を南巣に放

所、けはしくひがみて王宮を厭ひ山に入り、袞衣王殿を厭ひて麻衣草座を好みめされたるは何たる心ぞや。艮背敵應不二相與一時は、王宮帝位何ぞ我を汚さんや、山中の靜座何ぞ我をまさんや、袞衣玉殿何ぞ我を損ぜんや、麻衣草座何ぞ我を潔よくせんや。王氏詩曰。曾是巣由淺。始知堯舜深。蒼生豈有レ物。黄屋如二喬林一。此詩艮背敵應不二相與一の意味を能巧に明したり。堯舜の禪授湯武の放伐皆此心なり。行ふ所の事は兎もあれ角もあれ、その心に欲なく、潔靜精微の神理明淨にして、其事時中の天理に叶ふを無欲とし無妄とす。譬ひおなこふ所義にあたりても、その心に欲あれば無欲にあらず。まして心に欲ある上に、その事義にあたらざるは大欲といふものなり。されば心に欲なく潔靜精微の神理明淨にして、その事時中の天理にあたりぬれば、帝堯の天下を舜にゆづりたまふも、帝舜の天下をうけたまふも、また湯王の桀を放ちたまふも、武王の紂を伐ちて天下を救ひたまふも、皆無欲の徳行なり。もしまた堯舜湯武に欲心有りて斯く行ひ給はゞ、皆貪欲の妄行なり。天下の授受、取予は至極廣大なる事

の私ある故なり。聖人の心は艮背敵應にして、意必固我の私なきによつて、富貴貧賤死生禍福、その外天下の萬事大小高下清濁美惡において、毛頭好惡揀擇の情なく、只滿腔滿目一貫皇極の神理ばかりなり。然る故に、位にのぼるをも財寶をたくはふるをも、欲ともせず。位をすて財寶を棄つるをも、無欲ともせず又欲ともせず。只天道の神理にそむくを欲とし妄とす。天道の神理にかなふを無欲とし無妄とす。神理に叶ひぬれば、天子の位にのぼるも財寶をたくはふるも、位をすつるも財寶をすつるも、皆無欲なり無妄なり。神理に背きぬれば、天子の位をすつるも財寶をすつるも、位にのぼるも財寶を蓄ふるも、皆欲なり妄なり。欲と無欲と妄と無妄とは、行ふ事の品にはあらず、只その心根に有るものなれば、如何樣なる事は無欲なり、如何樣なる事は欲なりと、事にてさだむるは、迷ひたる凡夫の心得、または異端偏僻の法なり。釋尊この心を悟りめされたらば、王宮を擅特靈山とし、寂光淨土とし、天子の位は摩尼輪の位とし、袞衣玉殿を麻衣草座とし、禮樂刑政を說法として衆生を濟度めさるべき

意必固我―論語に、子四を絕つ、意なく必なく固なく我なし

擅特靈山―擅特山と靈鷲山との事

長範を指す

分剛強達者なるものなれ共、武篇者とはいはずしてぬす人といひおとしめり。そのけなげの振舞は、名大將武篇者の振舞にも劣るまじけれ共、その心根ぬすみを本とするゆゑに、その心を以て盜賊といふなり。萬事皆かくのごとし。よく〳〵體認あるべし。

體充曰、眞實の儒道を行ふには、名利の欲をすつるが第一の工夫なりと被仰候。尤欲心は穢なきものなれば、棄てたき事にて候へども、欲を棄てゝは世の中のすまひ成り申すまじく候と存じ候はいかゞ。

師翁曰、それは佛氏偏僻の敎に、釋尊の天子の位をすて、龐居士が家財を棄てし如きを、無欲なりといふを聞ならひて誤れる疑にて候。儒道には、さ樣に筋もなくて位をすて財寶を棄つるをば、氣ちがひの欲なきに喩へて大に嫌ひ申候。位にあるを欲とし、位をすつるを無欲とし、財寶を貯はふるを欲とし、財寶をすつるを無欲なりと思ふは、いまだ明德くらくして、位をこのみ財寶を貪る心根のこりて、外物に凝滯して便利揀擇

舟に刻みて劍を求む—呂氏春秋に見ゆ、時勢の變遷を悟らざる愚を笑ふ也
まいす—賣僧の宋音、僧侶を罵る語
熊坂—熊坂

事なりなどいへる人あり。これは舟に刻みて劍を求むるの愚痴にあらずば、烏を鷺といひまどはす佞人なるべし。心に仁義の守なく、また何の求むる筋もなくて、髪をそり身を文にして走りまはらば、氣ちがひといふ者にて候。心に利欲ふかく知行をむさぶらんため、座敷上になをらんために髪をそりて、中庸の神理に背く者をば、欲ふかき小人とやいはん、まいす坊主とや申し候はん。その髪を剃りたる所ばかりにて吟味しては、是非の眞實知れぬものにて候。その髪をそる所の心根は、遁世のためか何のためぞと考へみて評判あるべし。只その表面の事ばかりにて吟味評判するは、迷へる凡夫の取さたなり。是のみにあらず。何事の評判にても、其心根にて吟味せざれば是非のあやまり有るものにて候。これに就て分明に辨へ易きたとへあり。むかし大唐に盜跖といふぬすびと有り。同類數千人を引率し、みづから將軍と號し、あまたの里をやぶり強盜し、人を殺す事その數を知らず。その武勇のてがら比類なけれども、名大將とはいはずして、大盜というて卑しみにくみたり。我朝の熊坂も、盜跖ほどこそなけれ、隨

泰伯─周文王の伯父、古公亶父の長子、父の志を察して荊蠻に避けし人

弟の間には友恭を行ひ、妻子には義慈を施すべし。かくの如くに行ふを儒道を行ふとはいふなり。箇樣に行ひてさはりある所は、世界のうちには有るまじく候。よく〳〵體認してつとめ行はるべき事なり。

體充曰、さやうに候はゞ、今時の物よみ坊主衆の髪をそり、出家のまねをめさるゝも、道理にかなひたる事にて御座候や。

師翁曰、俗儒の作法は無案內に候へば、何とも了簡に及び難く候。定めて日本にての俗儒は、髪をそり候はでは叶はぬ子細有りての事にて候はんか。眞儒の道にて論じ候へば、中庸の神理にだに叶ひ候へば、髪を剃りても苦しからず候。泰伯は孝行の爲に髪を斷ち身を文にし給ひたり。然るを孔子、泰伯其可レ謂ニ至德一也已矣と嘆美したまふ。髪をたち身を文にしたまふを賞めたまふにあらず。その孝德十分に明にして、その行ひたまふ事の道理、中庸に叶ひたる所をほめたまふなり。此意を知らざるにや。泰伯の孝德もなく、中庸にかなふべき義理もなくて、髪をそりて、我剃髪は泰伯の斷髪と同じ

素夷狄—中庸の本文に據れり

よりおや—寄親なるべし

子の儒にあらず。たとひ又その行ふところ、儒書に載する所の禮義作法にちがひ候ても、その事中庸の天理にあたり、その心私なく、聖賢の心法にかなひぬれば、儒道をおこなふ君子なり。かくの如く禮義作法になづまず、眞實の儒道を行ふには、何國にても行ひがたき事なきものにて候。素二夷狄一行二乎夷狄一。素二患難一行二乎患難一。君子無二入而不一レ自得一焉。と宣ふは此意なり。

體充曰、さやうに眞實の儒道をおこなふ工夫は、如何やうに仕たるがよく御座候や。

師翁曰、その工夫には、先自慢の浮氣名利の欲心をすて、間思雜慮の妄をのぞき、明德の心源をすまし、全孝の心法を受用するを根本第一とす。さて世間に交はる禮義作法は、其國其處の風俗を本として、何事も圭角なく目にたゝぬ様に取なし、いかにも作法うやうやしく謙德を守り、かりそめにも人に爭ふ魔心なく、孝悌忠信の道を根に入れてつとめ行ひ、親には孝行をつくし、君につかへて忠節をはげまし、よりおや、位高き人、年老たる人、德たかき人などをよく敬ひ、友だちにたのもしく義理を立て、兄

す

損益—論語爲政篇に、子張の問に答へたる孔子の語中に見ゆ

日本にて位なき者が取行ふ事は成りがたく候。たとひ位有る人の取行ひ給ふとても、有の儘に少しも違はず、取行ひ給ふ事はならず候。大唐にて取行ふとても、すこしづゝ損益せずしては行はれぬ道理なり。伏犧より周の代まで、代々の聖人製作し給ふ禮義作法、その時代にはよく相應して中庸の儒法なれ共、代かはり時うつりては大過不及の弊ありて、損益なくては叶はぬ事なり。然る故に、萬世通用の定法は少なく候。前かどにも論ずる如く、禮義作法は時により處により人によりて變るものなれば、一しなの禮法になづむをば、欣眞落法とて大にきらふ事なり。殷の代には、夏の代の禮義作法をあらため損益し、周の代にはまた、殷の代の禮義作法をあらため損益したまふにて得心あるべし。初學より權の道を目あてにせざれば、此あやまり疑ひあるものなり。儒書にのする所の禮法をすこしもちがはず、皆取行ふといふとも、其おこなふ所時と處と位とに、相應適當恰好の道なくば、儒道をおこなふにはあらず、異端なり。その行ふ所時に相應適當しても、その心に名利の私あるは、贋物の小人といふ者にて、君

六通―天眼天耳他心宿命神魂漏盡

血氣―生氣といふ程の義、血氣未だ定まらずの血氣に非

の禮に考へ合せて、よく齊戒して信仰すべき事、誠に第一にて候。しかるに、佛者は神明を信仰するを雜行雜修と厭ひ、佛は六通神は五通などいへるは、物體なき事なるべし。

體充問曰、先生の敎を承り居け候へば、儒道は道理の至極したる事ばかりなり。實に我人取行はでかなはぬ事にて候へども、日本は風俗あしく候間、行ひがたく候はんと存じ候はいかゞ。

師翁曰、それは道の道たる本意をわきまへず、儒敎の禮法を以て專眞實の道なりと得心するあやまりなり。本來儒道は太虛の神道なる故に、世界の内、舟車のいたる所人力の通ずるところ、天の覆ふところ地の載するところ、日月のてらす所霜露のおつる所、血氣ある者の住む程の所にて、儒道の行はれぬといふ事はなく候。儒書に載する所の禮義作法は、時により處により人によりて、そのまゝは行はぬものにて候。儒書に載する所の禮義作法は、大方周の代の制作なり。此禮義作法を少しもちがへず、只今

三社―伊勢石清水春日をいふ

爲百姓立社曰國社。諸侯自爲立社曰侯社。大夫以下成群立社曰置社。王爲群姓立七祀。曰司命。曰中霤。曰國門。曰國行。曰泰厲。曰戸。曰竈。王自爲立七祀。諸侯爲國立五祀。曰司命。曰中霤。曰國門。曰國行。曰公厲。諸侯自爲立五祀。大夫立三祀。曰族厲。曰門。曰行。適士立二祀。曰門。曰行。庶士庶人立一祀。或立戸。或立竈。夫聖王之制祭祀也。法施於民則祀之以死勤事則祀之以身。定國則祀之。能禦大菑則祀之。能捍大患則祀之。及夫日月星辰。民所瞻仰也。山林川谷丘陵。民所取財用也。非此族也。不在祀典。論曰。祭神如神在。以上の聖謨をよく考へて、儒教に專神明を信仰する事を得心すべし。是は外神につかふまつる大法なり。先祖の鬼神を祭るは此外なり。日本の神道の禮法に、儒道祭祀の禮にあひかなひたる事あり。其上三社の神託の意義、儒者の神明に仕ふまつる心もちによく合ひ候へば、本朝は后稷之裔なりといへる說、實に意義ある事なり。さて神明に事ふまつるには、その位々のおきて作法あれば、その國の風俗を本とし、天秩の祭祀

體充問曰、神信仰をば仕たるがよく御座候や。

師翁曰、神明を信仰するは儒道の本意にて候。然る故に、祖を天に配し父を上帝に配し、神明に通ずるを孝行の至德なりと、孝經に說たまへり。周禮曰。大宗伯之職。掌建邦之天神人鬼地祇之禮。以佐王建保邦國。以吉禮事邦國之鬼神祇。以禋祀祀昊天上帝。以實柴祀日月星辰。以槱燎祀司中司命飌師雨師。以血祭祭社稷五祀五嶽。以貍沈祭山林川澤。以疈辜祭四方百物。又曰。若大師則帥有司而立軍社奉主車。若軍將有事。則與祭有司。將事于四望。又曰。凡師甸用牲于社宗則爲位。類造上帝。封于大神。祭兵于山川亦如之。祭法曰。燔柴於泰壇祭天也。瘞埋於泰折祭地也。用騂犢。埋少牢於泰昭祭時也。相近於坎壇祭寒暑也。王宮祭日也。夜明祭月也。幽宗祭星也。雩宗祭水旱也。四坎壇祭四方也。山林川谷丘陵。能出雲爲風雨見怪物皆曰神。有天下者祭百神。諸侯在其地則祭之。亡其地則不祭。王爲群姓立社曰大社。王自爲立社曰王社。諸侯

天時、水土—天の時に則り地の利に據る也

辨—差違也

也といへるによつて、權の字に泥みて疑ひあるなり。此章の主意、禮と權との辨を明かすにあらず。儒者の道は法におちず迹に泥まず、上天時に律り下水土に襲て、至善に止るを本とする事を開示するものなり。淳于髠おのれが私心を以て孟子を窺ひ、孟子の當時の諸侯の無禮を憎み、事へめされざるを見て、禮法に泥みたる人なりと思ふによつて、嫂溺の事を寓言して孟子を諷したり。しかる故に孟子、儒者の道は專權を以て主本として、物に凝滯せず迹に泥まず、活潑々地なる事を知らしめて、その迷をとかんために、道とはいはずして權也と論じめされたり。孝經曰。夫孝天之經也。地之義也。民之行也。天地之經。而民是則之。とあれば、經も權も同じく道の惣名なれば、經と權と辨ありといふは不可なり。禮法と權と少し辨ありといはんは可なり。然れ共、禮法は本權道の節文なるによつて、時中に叶ひて用ゆれば、禮法すなはち權なり。時中に違ひて用ゆれば、權にそむきて非禮の禮となれば、畢竟禮の外に權なし、權の外に禮なし。權と禮と名義は少し辨あれども、實は一理なり。よく〳〵玩味あるべし。

—孟子離婁篇に出でたり

漢儒云々—漢の趙岐等の古註を指す也

曰。嫂溺不レ援。是豺狼也。男女授受不レ親禮也。嫂溺援レ之以レ手者權也。曰。今天下溺矣。夫子之不レ援何也。曰。天下溺援レ之以レ道。嫂溺、援レ之以レ手。子欲二以レ手援二天下一乎。孟子の此章を考へ見れば、經と權と差別あるべきと存じ候はいかゞ。

師翁曰、漢儒反レ經合レ道爲レ權の說は、此章を見あやまりたるものなり。此章の禮は禮法を指ていへり。禮法は天下萬民の日用通行のために、平生急務の事ばかり定たまふものなれば、非常の變事には禮法なし。道は太虛に充滿して、身を離れざるものなれば、もとより平生日用の禮法も道なり。また非常の變に處する義も道なり。權は此道の惣名なる故に、禮法も本權なれども、事の模樣定りて迹あるによつて、權と名けがたきなれば法と名附たり。嫂溺は非常の變にして、是をすくふ禮法なければ、嫂溺、援レ之以レ手者禮也といはずして、權なりといへり。權は道の惣名なれば、すなはち道すなはち權なる故に、道也といはんために權也といへるなり。此章、男女授受不レ親禮也。嫂溺。援レ之以レ手者道也、とあらば、反レ經合レ道の見あやまりあるまじ。權

しとなり

淳于髡云々

へて、道の害ひとなる人を戒しめたる主意なり。權の理味を心得そこなひて、道のさはりとなる人、二しなあり。一には、狂見に入りたる人、權道の法におちず迹に泥まざる面影を見附、中庸精微の矩をわきまへず、無欲の心にまかせて、迹に泥まず法に落ちざるを至極の道として、神道の權にそむけり。禪を學ぶ人此心地に迷へり。是は權の體段徹頭徹尾こと〴〵く中庸精微の神理にして、法におちず迹に泥まざるは、權の景象なる事をさとらず、影を認めて形とする誤なり。又一には、俗儒の學をひろくして、禮法になづまざるを權なりとばかり心得て、時中の適當をわきまへず、欲心に任せて禮法をそむき、その心にも不義なりとはわづかに知れども、高慢の傲氣はなはだしき故に、權の名をかりてのがれ、言葉を巧にしてその門人を罔し世を惑し、道のさまたげとなる人あり。今の物讀坊主衆是なり。此二品の權の贋ものを戒しめんために、洪氏の格言を集註に引用ひめさたれり。よく〳〵明辨すべし。

體充曰、淳于髡曰。男女授受不レ親禮與。孟子曰。禮也。曰。嫂溺則援レ之以レ手乎。

等を踰ゆ―分限を踰越して僭に近

師翁曰、此聖謨は、學者の面々の至る所の位をよしと畫して、上達の志厚からざるを、戒め引たて給ふ主意なり。初學の者權を取さたすべからずと宣ふにはあらず。可與共の學は、すなはち此權の道をまなぶ學なり。可與適の道も卽ち此權の道なり。可與立の道も卽ち此權の道なり。權の外に道なし、道の外に權なし。權の外に學なく、學の外に權なし。但その受用に生熟、大小、精粗の差別あるのみ。しかる故に、此聖謨の主意は、工夫成就の次第をあかして、至極無上の神道を指出して、學者の準的を示したまふものなり。孟子道性善。言必稱堯舜。公明儀曰。文王我師也。周公豈欺我哉。かくの如きの賢範をよく體驗して、明に辨へしるべし。若この準的を知らざる時は、心學の徒なりとも、欣眞落法の地に執滯して、非禮の禮多くあるべし。

體充曰、洪氏曰。權者聖人之大用。未能立而言權。猶人未能立而欲行、鮮不仆矣。此格言にて見申し候へば、先生の致、等を踰ゆる弊あるべしと存じ候はいかゞ。

師翁曰、此格言は權を工夫のめあてとする事を戒むるにあらず。權の理味を心得ちが

―大學に止まるを知つて後に定まる事あり、定まつて後に能く靜なり、靜にして後に能く安く、安うして後に能く慮り、慮つて後に能く得

いなどめ―稻富、射擊の名手

與共學云々―論語子罕篇に出づ

は此權を詳に分別する工夫なり。能得は此權を得心受用するものなり。法ありて法におちず。在ゆる所なくして在らざる所なく、定むるところなくして定まらざる處なき、權の字の理味をよく〳〵體認すべし。

體充曰、さやうに候はゞ、初學の人も權を行ひ可申候や。

師翁曰、權は聖人の妙用にして、初學の人受用する事能はずといへども、工夫の準的は必ず權を目あてとすべし。たとへば鐵砲を打が如し。いなどめが覘ふ所も、初心の人のねらふ所も、的に違ひは無けれども、いなどめは打つごとにきりもみに中り、初心の人は角をも打ち外すばかりなり。その中ると中らざるとは天地懸隔なれ共、めあてのねらひ所を違へては、うち習ふべき理なし。その如く、初學の受用と聖人の妙用とは天地懸隔なれ共、權を準的として工夫せざれは、明德を明にすべき道なし。

體充曰、子曰。可與共學。未可與適道。可與適道。未可與立。可與立。未可與權。此聖謨を以て見れば、權は初學の取沙汰すべき事にあらずと存じ候はいかゞ。

されたり。權はかりのおもりなり。神道を權となづくる名義は、聖人は天と同體、至誠無息、物に凝滯せず跡によらず、獨往獨來活潑々地にして、行ひたまふ所悉く天道の神理に適當恰好なる景象、秤のおもりの定まる所なく、往來滯らずして物の輕重をはかりて、適當恰好なるに似たる意あるによつて象をとれり。大賢以下の人は、氣質の累ありて明德くらく、權を行ふ事あたはざる故に、聖人天下のために禮法を定めたまふ。此禮法もすなはち權の道なれ共、すでに法に定りぬれば、迹ありて變通の活潑なきによつて、權といはずして禮法といふなり。此意を知らず、徒に禮法の迹を眞實の道なりと心得て、聖人立法の本意權道の妙をさとらずして、禮法に泥みて專にとり行ひ、時中の神理にそむくをば、非禮の禮となづけて、君子の爲ざる所なり。此非禮の禮をも眞實の禮なりと迷ひたる人、聖賢の行迹禮法に違ひたるを見て疑ひをなし、禮と權は各別なりなどゝ得心するなり。此權の字の精義を知らざれば、心學に志ありて致知力行をはげますといふとも、必ず欣眞落法の地に迷ふべし。大學の能慮

凝滯—楚辭屈原の漁父辭に、聖人は物に凝滯せず

時中—中庸に、君子にして時に中す

能慮、能得

けて巧に行を加ふるをいふ

吐握―吐哺握髪の略

利根にて、利害の分別毛頭なきによつて、かけひなたの目利なく、ひたすらに義理を立る故に、苟且にもにかたなる事なし。然れども、鄕原は世間に多く、君子は稀なれば、鄕原 利根ばかりを見なれて、かくいひ習はすもまた宜なりともいふべきにや。此鄕原機轉利根にして、迹になづまず物に滯らず、その上面のふり、聊中行の君子の光景に似て、道德のそこなひとなる故に、孔子殊の外憎みたまひて、鄕原は德の賊なりと斥けたまふ。今の世に此鄕原のなりそこなひ澤山なりと見えたり。志あらん士は、よく辨へて親しみ伴ふまじき事なり。

體充問曰、つねの禮法に違ひて、道に叶ふは權の道なりと承り及び候。さやうにて御座候や。

師翁曰、權は聖人の妙用、神道の惣名なり。大にしては堯舜の禪授、湯武の放伐。小にしては周公の吐握、孔子の恂々便々、一言一動の微に至るまで皆權の道なり。しかるを、經に反して道にかなふを權といへるは大なる誤なり。程子すでにその誤を正しめ

陽貨篇に、鄉原は德の賊なり

蔭日向云々―他人の知る所と知らざる所との差別を見分

師翁曰、世俗のめくちかはきといへる人を鄉原といふ。此鄉原は機轉利根にして才覺人にすぐれ、何事を裁判しても疎からず、孝悌忠信をつとめ、行廉直無欲をたしなみ、殘所なき樣に見ゆれども、其志唯當世の人のほむる所の名と、其主君に獲られて立身する利とを求むる事を專として、義理をも法をもかへりみず、名利の欲泥にきたなく穢れたる心根なるによつて、孝悌忠信の行、廉直無欲のたしなみ、輕薄にして根にいらず、ひよりを見てわるければ、孝悌に似て眞實の孝悌にあらず、廉直無欲に似て眞實の廉直無欲にあらず、心に義理を守らずして、利害の分別利根なるによつて、多分武道にぶきものなり。利根なる者は必ず臆病なるなどと世俗のいへるは、此鄉原のにかたなるを見ていひ習はしたるものなり。鄉原は名利の欲心を本として、利害の分別利根なるによつて、蔭日向の目利上手にて、義理を缺く事を恥ぢざるゆゑに、たとひその生附けなげなるも、所によつて必ずにかたなり。君子はもとより利根なれ共、鄉原の利根とは利根の品かはり。鄉原の利根なる、名利の欲には鈍にして、義理の是非に

翁問答　卷之五

體充問曰、佞人とは如何やうなる者を申し候や。

師翁曰、心ねぢけて術の上手なる者を佞人といふ。才智たくましく、藝能文學人にすぐれ、辯舌達し邪欲ふかく義理をまもらず、人をばかす事野狐の如く、人をそこなふ事虎狼の如くなる心根ある者が佞人の棟梁なり。その虎狼野狐の如くなる邪心をよく隱して、才智藝能文學辯舌を以て君子のふりに化なし、人をばかす事、狐の及ぶきはにあらず。然るによつて、凡夫皆ばかされて君子なりと持はやすなり。古來此佞人狐にばかされて、天下を亡し國を失ふ人多し。世間にもてはやす名高き出家諸士、其外藝にて身を立つるさぶらひ物讀坊主衆の中より、此佞人狐多くばけ出ると見えたり。天子諸侯の御用心ましますべき事にて候。

體充問曰、鄕原とはいか樣なる人を申候や。

よつて、死法となりて、受用する者皆其法に繋縛せられて、無下に淺まし。

自古云々—論語顏淵篇、子貢に答へたる孔子の語

不レ及レ亂—論語郷黨篇に、惟酒は量無し亂に及ばず

間眞實無妄の神理、五常百行の根本にして、自レ古皆有レ死。民無レ信不レ立、と宣ふほど廣大親切無類なる天性に、不妄語一色をおしあつるは、九牛の一毛を全牛に當るに異ならず。飲酒戒を智なりといへるは心得がたき事なり。定めて凡夫の酒に酣醉して、心昏く威儀亂れたるを見て、戒めたるにて候はんか。それは飲者の誤にして酒のとがにはあらず。たとへば食にむせたる人の食を忌むに異ならず。不レ及レ亂の儒法によつて酒を用ひなば、賓主の歡を合せ、肌膚をうるほし氣血を活し、百藥の長ともいふべし。その上祭祀必用のものなれば、偏に禁制すべきものにあらず。事の是非をよくわきまへ知るを智とす。かやうに偏にひがみたる戒をたもちて智者といふべけんや。その上智は天德の貞にして、人間是非の靈明衆理を妙にして、萬物を宰する神理なれば、飲酒戒を智なりといふは、石を玉なりといふに等し。斯の如く似て似ぬ事を、同じものなりといひて眞妄を亂るは、愚痴なりといはんや、我慢深きとやいはん。惣じて佛者の法は大かた邪僻なり。間に道理に叶ひたるもあれど、固くとり滯ほりて泥むに

世婦、庶人に妻と謂ふ

大便道云々—男色の事を指す

文珠—釋尊の左側に在りて智慧を掌る佛

時に交るをば邪淫と戒むるなり。時に相應したる義理に從ふを法の眼とするなり、これを活法といふなり。さてまた出家は不婬と戒めたり。是はすぢもなき妄法といふものにて候。飢渇の人に飲食を戒むるに異ならず。然る故に、末流の比丘婬欲こらへ難きによつて、男女和合のとなりなればにや、大便道をほり出して、無陰陽の地、不和合の處にて、執著の煩惱なしと例の家のへり言を巧にし、旦那を悶して色欲のかはりとし、幼なき人を女の形に似せて、兒、喝食などいひて和尚上人の妻となせり。眞に淺ましともなか〳〵言語道斷なり。元來不婬戒の法天理に背きたるによつて、末流かくの如く畜生にもおとりたる作法となるなり。文珠の始めて此道を開闢めされたるなど、佛者の言ならはす事なれども、文珠はすでに菩薩の果を得たる人なれば、かく淺間しき欲心はあるまじき事分明なり。例の家の造言なるべし。夫婦の別は本來智に屬したるものなり、然るを禮なりといへるは、儒道無案內なる故か、または飲酒戒のあて所なき故かなるべし。妄語戒を信なりといへるは可也。然れども、信は天德の至誠、人

三上山―近江富士の稱ある山

后夫人云々―天子に后、諸侯に夫人、士に

といふなり。箇様の贋者を以て正眞の神道に比べられ候はんや。偸盗戒を義なりといへるは可なり。然れども義は天徳の利にして、人間果斷の神理天下の故に感通して、天下の務をなす本なれば、不盗の粗迹一色を以て高明廣大の義なりといふは、三上山を富士山なりといふに異ならず。邪淫戒を禮なりといふは似たり。然れども、禮は天徳の亨にして、人間恭敬撙節の神理天下の故に通じて、上宗廟朝廷より下民間に至るまで、人倫の交り冠婚喪祭飲食軍陣等、萬事の天理儀則を履み行ふ主宰なれば、不邪淫一色を禮なりといふは、一勺の水を大海なりといふが如し。その上戒むる所の邪淫、天理の眞に叶ひ難し。子細は、その妻一人の外をばおしなべて邪淫とするは、死法といひてかたつまりたる事なり。儒道の法には、庶人ばかり妻一人の定なり。天子より士までは、その位々分々相應によつて、后夫人世婦妻妾の員數自然の天則ありて、妻一人の定にあらず。子細は、根本子孫相續の道なれば、婦人に子のなき者ある故なり。固よりその位々の員數の外は邪淫なり。その員數に定りたる妻妾にても、交るまじき

らぬ京の話を、聞かぢりて高慢らしく語りあるく事

るを一事に泥みて、偏にひがみたる五戒の法と同じ事といふは、金と鉛は名は違ひたれども、同じ金なりと爭ふ如くなれば、その分辨は論ずるには及ばぬ事なれども、心學をよく知らぬ人は迷へる事もあるべし。仁者の人を殺す事を嗜ざるを見て、天理眞妄の差別を辨へず、不殺を仁の全體なりと心得て、殺生戒を仁なりといふなり。是に似たる非といふものにて候。夫仁は天神地祇の人物を發育したまふ神道にして、人間慈愛の神理なり。もとより親〻親仁〻民愛〻物、生理の時にそむきては、一草一木をも切らざるは仁者の常なれども、天道を畏れず惡逆をして、生理をそこなふ人をば、殺すを以て仁とするなり。殺すと不〻殺との事になづみて仁不仁を論ずるは、愚痴なる凡夫の心得なり。殺すべき罪科なくて殺すは本より不仁なり。殺すべき罪科ありて殺さゞれば、神道の生理をそこなふによつて、科なき者を殺すとひとしき不仁なり。しかるにいま佛氏の殺生戒は、蚤虱も殺さゞる法なれば、まして人間をば、主親をころせる惡人にても宥めて不〻殺を本とす。これを仁に似たる不仁、善に似たる惡、是に似たる非

意馬―心中の静定せざるを、馬に喩へたり

きれど―切れ所の義

五戒―不偸盗、不邪淫、不妄語、不殺生、不飲酒

知らぬ京物語―見も知

師翁曰、その心の位意馬の奔走は、初學の間は同じけれ共、その修行の道は眞妄各別なり。たとへば山に登るが如し。儒門の學者の力行する道は、峯までよく通じぬる定りたる道を登るが如し。平常不易の道なる故に、是を天眞といふなり。佛家の學者の修行する道は、山八分にきれどありて、峯頭まで通ぜざるすぢの、登るべき道なき所を木萱を分けて登るが如し。嶮岨にして道なく、人間の通らざる所なる故に、これを妄行といふなり。初學の間心の位の違はざるは、山を登る道のほど同じければ、その高下のろくなるが如し。しかれ共足下の道眞にして登りやすきと、妄にして登りがたきとは各別なり。よく〳〵體認あるべし。

體充曰、五戒と五常と、名は違ひたれ共心は同じものなりと、佛者のいへるは、聞えたる樣に存じ候はいかゞ。

師翁曰、それは知らぬ京物語といふものにて候。それ五常は天神地祇の大德人生の天性にて、佛氏の極上と尊ぶ妙覺の佛性よりも、一位ましたる無上無外の天德なり。然

に設く

通一｜原本、道一に作る

ける沙門を敎化して、儒門艮背敵應の學者となすべき事、仁民の一端なるべし。

體充曰、元神元氣通一不二の端的にて候はゞ、狂者もすでに無碍淸淨の位に至りたる心なれば、元神の端的をも悟りめさるべき事と存じ候はいかゞ。

師翁曰、聖人は生知安行天と同體なる故に、おのづから元神元氣一貫の妙用活潑々地なり。大賢より下の人は、學問修行を以て悟を開くものなれば、その見性成道の段々、階級の如く次第あるによつて、中行の悟る所をば、狂者は未だ悟り得ず。狂者の悟る所をば、狷者は未だ悟得ざるものなり。たとへば山へ登るが如し。麓より山頭まで皆山の一體なれ共、其巓へのぼり得ざれば、峯頭の草木を明細に見分る事あたはず。その如く元神元氣皆同じく一心なれども、兼て山の頂上に止得せざれば、元神の靈覺を悟り得る事あたはず候。

體充曰、左樣に候はゞ、中行に至らざるうちは、儒門の學者も佛家の學者も同じ事にて御座候や。

祖とす

原壤—即ち孔子の出づるを夷して待ちし人

洙泗—史記に孔子は教を洙泗の上

色々さまぐに、ことばを巧にし寓言を作りて、人心を惑はし禽域へひき入れ、世教のさまたげとなる事擧てかぞへがたし。かくの如くなるは、よく學ばざるの過、末流の比丘の罪なりといへども、根本は釋尊無欲の妄行より起りたるものなり。釋尊の心化無碍清淨の德はよしといへども、其妄行の天眞のさはりとなる法をば斥けひらかで叶はぬ事なり。むかし原壤といへる狂者は孔子の舊友なり。後に原壤狂見逞しくて斥くべき妄行あり。孔門の諸賢絶交ましますべき事なりと疑ありけれども、孔子、故者毋レ失ニ其爲一レ故也と宣ひて、終に交を絶給はず。交をば絶たまはざれとも、原壤夷俟つときは、爲レ賊と宣ひて、つきたまへる杖にて原壤の脛を叩きて戒しめ責めたまふ。此聖行の御本意を愼んで考へ見るに、交を絶たまはざるは、吾不レ得ニ中行一而與レ之。必也狂狷乎と、宣ふ意なるべし。脛を叩きたまふは、妄行の誤りをさとらしめ中行の位へ誘掖なされんとの不屑の敎誨なるべし。されば洙泗の流を汲める眞儒は、此聖謨を憲章して釋尊の心をば好し、其妄行をば斥け開きて、靈山の糟粕に醉ひて、たは言つ

心地—原本心化とあり

黄蘗—臨濟禪より分れたる禪の一派、我國にては隱元を

三十成道の後、人間本分の生理をいとなまず、或時は乞食し、人倫を外にし、人事を厭ひすて、種々の權教方便說をときて、愚民を誑誘めされたる事、皆これ無欲無爲自然淸淨の位を極上と定む。元氣の靈覺に任せたる、毫髮の差より起りたり、無欲の妄行の誤なり。其流をくめる末代の比丘、釋尊妙覺の眞性無碍淸淨の位をその心地に悟り得る事をば務めずして、徒に釋尊無欲妄行の迹を似せたるばかりなれば、我慢の邪心凡夫よりも深くて、高言を巧にし辯舌を逞しくして、かりそめにも勝たむ事を好み、愚民を誑し勸むるを以て務とし、同じながれを汲みながら、我慢の偏執を立て、互にそしり爭ふ事、貪夫の畔を爭ふよりも淺まし。しかる故に、佛者は太虛を超本すれば貴き事ならびなきによつて、父母兄長をも崇恭する理なしなどといひて、其父母を拜せず父兄を敬はず、黄蘗禪師の母を殺せるを眞實の大孝なりとほめ、或は三綱五常の道は、今生幻の間の營みにして、菩提の種とならずなどと誑誘し、或は主親を殺したる極重の惡人にても、念佛の功力にては必極樂淨土へ往生するなどゝ教誨せり。其外

樂軒―未詳

ども、無欲無爲清淨自然の心なるによつて、惡といふべきにも惡にあらず。されども天理に叶はざれば天眞にもあらず。無欲の妄行といふものなり。聖人これを狂者と名づけたまふ。狂の字に眼をつけて觀察すれば、無欲の妄行の義いはずして分明なり。つら〳〵體察するに、佛者は元氣の靈覺をさとりて至極と思ひ、元神の靈覺をさとらず。唯無欲無爲自然を心法として、元氣の靈覺に住する故に、其心粗濶にしてその行迹狂妄なり。儒者は理を窮め性を盡し、命に至るを心法とすれば、無欲清淨無爲自然無碍の事はいふに及ばず、專元神の靈覺に率ふ故に、其心精妙にしてその行迹中正なり。儒者悟ㇾ道。則其心愈細。禪家悟ㇾ道。則其心愈粗と、樂軒の發明されたるも此意なり。元神元氣は不二の二、不一の一にして、實に毫釐の違ひなれども、其議論行迹の誤は千里よりも遠し。然るによつて、其教法勸善懲惡の爲なれども、其勸むるところの善、皇極の至善にあらず。懲らし戒しむる所の惡と名くる惡のうちに、眞實の惡にあらざるあり。不婬の類これなり。釋尊十九にて天子の位をすて山に入り、

の煩惱なもいふ公案―禪家にて求道者に示して、推考せしむ問題

悟たる心の無欲無爲自然の靈覺を、眞心と定め眞性と定め靈性と定め佛心と定め佛性と定む。これ卽ち釋尊、達磨の心法の端的なり。三大乘の觀念、千七百則の公案、皆この端的に約れり。此無礙淸淨位、無心無念の本佛は、不思議の體にして毫髮の按排を容れざる處なれども、儒敎には此無碍淸淨の位の上に、不思議神通の力を以て、神理の靈氣不二の二、不一の一を明辨して、一段向上精一の神化あり。此の神化の後を聖人と名く。至妙、天眞、艮背、敵應の位なり。此神化の結胎純熟半なるを亞聖の大賢と名く。中行の位なり。中行は無欲無爲、自然の眞心無碍淸淨の上にて、至妙、天眞、艮背、敵應の聖胎を結ぶによつて、その議論行迹聖人にたがはず。是を大一天眞の神道と名く。許由、巢父、曾晳、莊子、釋迦、達磨などは、無欲無爲自然の眞心をあきらかにし、無碍淸淨の位に至りて、これを至極の中道山頂なりと定む。至妙天眞艮背敵應の聖胎をむすばざるに依つて、その心無欲無爲淸淨自然なれ共、その應事接物の議論行跡、猖狂妄行にして、聖人艮背敵應の天眞にそむきたり。天眞に背くといへ

禽域—禽獸の域の略

差之云々—禮記に見えたり

無明—すべて事理に暗き精神作用の稱、一切

りたる人なれば、其教の法さほどに世を惑はし人を誑し、禽域に陥るゝ事は有るまじきと存じ候はいかゞ。

師翁曰、不審尤にて候。易學を究めざれば、合點成りがたき處にて候へども、その皮膚の大意をかたり可申候。子曰。差之毫釐。謬以千里。この聖謨の意は、心法の立やう毛頭違ひぬれば、その議論行跡のあやまり、千里の違ひとなるといふ義なり。しかる故に、先悟をひらく精粗生熟高下心法の立やうの差別を明に辨へざれば、儒佛眞妄のわかち知りがたし。夫人間は迷悟の二つにきはまれり。迷ふ時は凡夫なり。悟るときは聖賢君子佛菩薩なり。その迷と悟とは一心にあり。人欲ふかく無明の雲あつく、心月の光かすかにして、闇の夜の如くなるを迷の心といふなり。學問修行の功つもりて、人欲きよくつきて無明の雲はれ、心月の靈光あきらかに照すを悟の心といふ。此悟の心を佛經に、無心、無念、本佛、妙覺佛、化身佛などゝ名く。また無碍淸淨の位といふ。前かどに論ずる高明廣大の道體をさとる狂者の心の位是なり。かくの如く

惟狂云々―書經に出でたり

爲賊―論語憲問篇に見ゆ

師翁曰、巣父、許由、曾晳、原壤などは、堯舜、孔子の日の光强きによつて、その狂見の敎をひろめて世敎の妨げとならず。其上惟狂克念作聖の人なるによつて、斥けたまはざるなり。程子朱子の時分には、儒道くらくて佛法盛に廣まり、末流の比丘みだりに意見に任せ口にまかせて、釋尊の本意にも背きたる造言をなし、法を立てゝ世をまどはし人を誑し勸むるによつて、止む事を得ずしてかくの如く斥けひらきて、天下後世の迷を解明めされたり。すなはち孔子原壤の脛を叩いて、爲賊と責給ふ意を祖述して、攘退めされたれば、據所なきにあらず。佛氏の流を汲む者、許由、曾晳などの如く、我心にのみ狂者を守りて世敎をさまたげずば、程子朱子もさのみ斥け闢きめさるまじく候。君子は仁孝の心切なる故に、天下を汚濁におぼらし人倫を禽獸の域に引入れぬるを憫み歎きて、甚しく攘斥めされたり。佛者の勝たむ事を好む邪心にて、儒道をそねむ如くなるにはあらず。

體充曰、釋尊の敎の法を立めされたる本意は、勸善懲惡の爲めなり。其上道の大意を悟

楊墨—楊朱の自利説、墨翟の兼愛説

二家—老と佛と

道を聞めされたらば、必ず尊信受用有るべき事、孝順至道之法と說き。その父の棺を荷ひめされたるにて推量るべし。然るにその流を汲む末代の比丘、我慢の邪心逞しくて、その親をそしるよりも物體なき理をわきまへず、口に任せて儒道をそしりぬるは、無下にあさましき迷なるべし。

體充曰、巢父、許由は狂者なれ共、堯舜是を斥けたまはず。曾皙、原壤も狂者なれ共、孔子これを斥けたまはず候間、釋尊も狂者にて候はゞ、佛法を斥けひらくべき理なし。然るに程子曰。老佛皆是正路之蓁蕪。聖門之蔽塞。闢之而後可以入道。又曰。佛氏之言。比之楊墨。尤爲近理。所以其害爲尤甚。學者當如淫聲美色以遠之。不爾則駸々然入於其中矣。朱子曰。異端虛無寂滅之教。其高過於大學。而無實。又曰。至於老佛之徒出。則彌近理。而大亂眞。又曰。程夫子兄弟者出。得有所考。以續夫千載不傳之緒。得有所據。以斥夫二家似是之非。かくの如く甚しく斥け闢きめされたるは、何たる故にて御座候や。

假也、方便也、實は眞實

欽崇—崇敬の義

淨飯—カピラバスツの王、淨飯王也

知らず。これ皆他人を貴び愛して、その親を賤しみ惡むにひとしき凡心の迷ひにて、天に唾を吐くよりも愚に淺ましき事なり。その子細は、天神地祇は萬物の父母なれば、太虛の皇上帝は人倫の太祖にてまします。此神理にて觀れば、聖人も賢人も釋迦も達磨も儒者も佛者も我も人も、世界の中に有るとあらゆる程の人の形有るものは、皇上帝天神地祇の子孫なり。さて又儒道はすなはち皇上帝天神地祇の神道なれば、人間の形有りて儒道をそしり背くは、其先祖父母の道をそしりて其命を背くなり。前にも論ずる如く、我人、人間の大始祖の皇上帝、大父母の天神地祇の命を畏れうやまひ、其神道を欽崇して受用するを孝行と名づけ、又至德要道と名づけ又儒道と名く。是を敎ふるを儒敎といひ、是を學ぶを儒學といひ、是をよく學びて心に守り身に行ふを儒者といふなり。もとより釋尊は道の大意をさとりたる狂者にて、既にみづから其父淨飯の棺をになひ、梵網經には孝順至道之法と說めされて、孝行に暗き人にあらざれ共、孝德の全體精微の密には悟入なきによつて、中行の位に登りめさるゝ事能はず。もし儒

—寃罪を被りたる者をいふ諺

他人放屁を身に負はせられたる僧の義

妙覺—無明を斷じて、佛果に到達したる位

權實—權は

ぢなき子細は、人間の生れ出る事父母の業の如くなれども、父母の業になる事にあらず。太虛皇上帝の命をうけて、天神地祇の化育したまふ所なり。然るに此神理をわきまへずして、釋尊の佛力を以て佛弟子を大唐へ遣し、孔子を化身させめされたる等といへるは、片腹いたき作り事なるべし。佛者のうちに佛像をつくる細工の巧みなる人古來多く候へば、釋尊の御作の木像ありなどいふは、さも有りなんともいふべきことなり。釋尊の佛力にて生身の人を生み出せるなどいへるは、水にて物を燒くといふに異ならず。その上釋尊妙覺の位は、大唐の狂者の位にて、孔子より遙に劣りたる見性成道なれば、釋迦の弟子の化身とはいひがたし。惣じて佛書は皆寓言にて書きたるものなり。その愚民をたぶらかす寓言の筆法をならひて、儒道を斥けんと思へる沙門の心根、愚に淺まし。是のみにあらず、我慢の邪心ふかくて種々の作り事をなし、或は儒書の文義の皮膚ばかりを學び、骨髓の理味をば露もさとらずして、妄に儒佛の淺深高下、權實內外の差別を立て、佛を尊信し儒をそしりいやしむ沙門、古來その數を

沙門ー僧に同じ、善法を勤修し惡法を止息する義

へおひ比丘

體充曰、先生の敎を承り候へば、佛は聖人より二位ほど下なる見性成道なり。然るに佛者曰。我遣三聖、化彼眞丹といふ經文あり。此文の意は、釋尊の佛力を以て、佛弟子三人を大唐へつかはし、老子、孔子、顏子三聖人を化身させて、大唐の衆生を化度したまふといふ義なり。此經文にて見れば、孔子、顏子も皆釋尊の御弟子なり。箇樣の因緣をわきまへずして、孔門の儒者みだりに佛法を斥くるは、沙汰のかぎりなりと高ぶりて嘲けり申候。何卒箇樣なる因緣もある事にて御座候や。

師翁曰、夫は片意地にひがみたる沙門、佛學ばかりをきはめて、井のうちの蛙大海を知らずといへる諺の如く、佛道より上なる道なしと自慢十分なるによつて、儒者の佛法を斥くるを怒りて我慢の邪心甚しけれ共、道理の沙汰にてはいひ勝つべき覺悟なきによつて、作り事をして、釋尊におふせて儒者の斥くるを防ぐものなり。釋迦は勝れたる狂者なれば、箇樣にきたなびれて爭ひそねむ心は中々あるまじきに、淺ましき作り事をして、釋尊をへおひ比丘とする事、誠に釋尊の罪人なるべし。さて其作り事のす

わが堂の佛尊し—自家所依の教法のみを尊しとして他を侮蔑する也
盲目蛇—己が不明に任せて物事に頓着せず、亂暴に立働く事
理味—意味

その巓を仰ぎ見るが如くなり。しかる故に、釋尊の流をくむ人に、隨分聰明なる人あまたあれ共、偏に我堂の佛尊しと迷ひて、或は佛法小乘のあさき敎が、儒道の極上のふかき說に越えましたるといひ、或は釋尊は大聖、孔子は小賢なりといひ、或は佛敎は内典聖敎なり、儒敎は外典俗書なりといひ、或は儒敎は外道なりなどいひて、世を惑はし人をたぶらかしぬ。實に盲目蛇に怖ぢざる迷ひ深き心にて、あたまに口のあきたるまゝに、世に人もなげに議論するは、その道の元祖釋迦、達磨の心にも背きたる理を知らず、いとあさましく我慢邪慢なるたは言、片腹いたきといひながら、あはれに歎かはしき事なるべし。歴々聰明なる人の斯く道をとりまがふ事は、敎の法中庸に背きたるによりて、其立法の心根はよしといへども、末流を汲める學者理味をかみ違へて、皆峯へ登るとて谷へ入る如くなる故なり。物我を爭ひ勝たんとおもふ我慢の魔心をはらひ、すでに儒といひ佛といふ名を忘れて、本來至誠無息、不貳一貫の心學をつとめて、太虛廖廓の神道をさとりぬれば、何の疑ひもなく候。

難波云々―物の名も所によりて變るなり、難波の蘆は伊勢の濱荻

如來とあがめ尊ぶ人の心の位は、大唐にて狂者と名附くる中行より下の心の位なり。

難波のあしは伊勢のはまをぎといへる諺の意なりと得心あるべし。

體充曰、見性成道の心の位を觀察する事、中々凡夫の及びがたき所なり。いか樣なる學問にてわきまへ知るべく候や。

師翁曰、目にて物を見るに、高き所より下を見おろす事は、見易くして分明なり。ひきく所より上を見あぐる事は、見えがたくして分明ならざるものなり。心にて心を觀察するも斯の如し。聖賢の心より狂者、猖者、凡夫の心を見たまふは、日月の萬物を照したまふ如くなり。狂者、猖者、凡夫の心にて聖賢の心をうかゞひ見るは、谷にとぼせる松明にて峯を見るに異ならず。しかる故に、眞儒の心學の外の學問にては、中々わきまへ知る事なるまじく候。唯眞儒の心學をよく切瑳琢磨して、大覺明悟の位に至り候へば、莊子、釋迦、達磨などの心を觀察する事、白晝に黑白をわかつ如くなるべし。莊佛の學問をきはめたる分にては、聖賢の心をわきまへ知ること、富士の麓より

十方世界—東北南北、及東南東北、西南西北に、上下を加へたる各世界

師翁曰、ことばと作法とにて吟味評判するは、心盲の凡夫のわざにて、いと淺間しき迷ひにて候。國のちがひ作法ことばに泥む心のくらさにては、中々道の得心、儒道佛道の差別を辨へらるゝ事は成るまじく候。先あとに泥まずして、心をよく觀察する理を明めらるべし。國所世界の差別いろ〳〵樣々ありといへ共、本來みな太虚神道のうちに開闢したる國土にて候へば、十方世界皆ひとつにて候。然るによりて、國隔りぬればことば風俗はかはるといへども、その心の位は本來同一體の神道なるによりて、唐土も天竺も我朝も、又その外あるとあらゆる國土のうち、毛頭ちがふ事なし。かく有る故に、本心の眼あきらかなる哲人は、所によりて品かはる迹をすてゝ、何れの國もかはらず同一體なる心を以て評判するなり。惣じて聖人も賢人も狂者も狷者も、一心にての見性成道なれば、その心をよく觀察してその位を定むるなり。莊子と釋迦、達磨と、ことば作法は違ひたれ共、その心の見性成道は同じ位なるによつて、狂者といひ佛といふ。名は違ひ候へども、見性成道の心の位は一つにて候。天竺にて佛

比丘―僧の稱、比丘尼に對す

に聖人一人も出たまはず。開闢より釋尊の時分まで、闇の夜の戎國なれば、釋尊狂見の教を衆生信仰する事多し。聖人中庸の法さへ、迹になづみぬれば人極のさはりとなる者なれば、まして狂者偏僻の法を、迹ばかりを專らと行ふによつて、元來釋迦、達磨の心根は、勸善懲惡の爲なるべけれども、末流には善をやぶり惡をすゝめ、人の心を迷はしたる事淫走美色の如し。これみな末代その流をくむ比丘のあやまりといひながら、本來狂者の見所純熟せざるによつて、その教法粗糲迂濶なる故なり。釋迦も達磨も勝れたる狂者にて候間、聖人に逢ひめされたらば、必ず中庸精微の密に悟入して、中行の位に至りめさるべし。たとひ中行に至りめされずとも、許由、曾晳などの如くにありて、かく世を惑はす教の法をば立めさるまじく候。聖人出世ましまさぬ戎國に生出て、その法のひろまりたる事、幸に似たる不幸にて候。

體充曰、大唐と天竺とは、十萬里隔たり候と承り候。其上釋尊の作法と大唐の狂者の作法とは、ちがひたる所多く御座候へば、同じく狂者とは申しがたく存じ候。いかゞ。

狂偏僻なる事ばかりなり。その上勸むるところの善、眞實無妄の至善にあらず。三才一貫、中庸精微の至道に背きて、人極の妨げとなる理なり。狂者は星の如し。晝は日の光つよきによつて、星ありといへどもその光見えず。夜に入つて日光照したまはねば、星の光あきらかなり。その如く、許由、曾晳などの時代には、堯舜、孔子の日の光、午の時と輝く故に、狂者の敎ありても白晝の星の如くなれば、信仰して受用する人なきによつて、狂者も敎をひろめんと思ふ意なくて敎の法をたてず。然る故に末代へ傳ふべき法なし。すでに聖人の日の光かくれたまひ、闇の夜となりたる戰國に出られたる莊子は、その狂見を逞ましくふるまひ、人に敎へ書をあらはして、大唐の狂者の敎の始となれり。然れども、聖人の日の光かくれたまひて未だ程遠からぬ故に、その星の光甚しからず。是にて聖人の日の光なき闇の夜には、狂者の星の光輝く事を考へ知るべし。大唐には聖人あまた出でたまひて、三才一貫中庸精微の敎さかんに行はれたるさへ、その日の光隱れたまひたる後は、莊子の如くなり。まして天竺には、終

曾晳―曾參の父、浴沂風舞雩の風流を好みし人

午の時云々―正午頃の如き光輝

座候や。

師翁曰、よき不審にて候。古來此ことわりを分明にとき明めたる人稀なり。たとへば聖人は日の光透徹する如し。天竺に聖人の至教なきによつて、三才一貫、中庸精微の密に悟入することあたはず。只その廣大高明一偏の悟を、大覺明悟なりと思ひ定め、天竺戎の風俗によつて敎の法を立て、衆生を敎化めされたり。さてまた大唐も戰國の後は、氣運否塞によつて、聖人大賢出給はず、常闇の夜と迷ひたる時節に、天竺の狂者釋迦の法、始めて大唐へ入りてひろまりたり。聖人の日の光午の時に輝き、時節ならば中々弘まるまじく候。その證據は許由、曾晳にて考へ知るべし。さて又日本より大唐へ通路初りたる時分、大唐に佛法ひろまりたる最中なれば、受け來りて日本にも流布したり。元來釋迦、達磨の法をしめされたり、心根は衆生の迷ひてあさましき體をあはれみ哀しび、色々さまぐ\の寓言を立て、勸善懲惡のためなれば、一段殊勝に候へども、その德狂者なる上に、天竺戎の風俗を本として立たる敎の法なるによつて、逸

異相—原本、靈相とあり、従ふべからざるに似たり

巣父—許由と共に堯の時の隠者也

翁問答　巻之四

體充曰、狂者と申すはいかやうなる人にて御座候や。

師翁曰、狂者は體の廣大高明なる所をば悟るといへども、いまだ精微中庸の密に悟入せざるによりて、見性成道の心術粗厲迂濶にして、修行異相に逸狂なる者なり。大唐にては許由、巣父、牧皮、曾皙、子桑戸、莊子。天竺にては釋迦、達磨など、勝れたる狂者なり。人の生附品かはるによりて、道學して見性成道する位に、上中下の三段あり。中行は聖人の下、亞聖の大賢なり。是は三段のうちにて第一段上の位也。狂者は中行の下、第二段の位なり。第三段下の位は狷者なり。學問しても此三段の位に至らざるは俗學といふものなり。よく〳〵體認すべし。

體充曰、同じくは狂者にても巣父、許由、曾皙などは、その教の法世に傳はらざるに、釋迦、達磨の教は、その生國のみならず、大唐、日本まで流布仕るは、何たる故にて御

に對へたる一節を錄せり

軍鑑—甲陽軍鑑を指す、武田氏の戰記

認あるべし。

まめかし—一本、今めかしくとあり

儒の心學—一本、本節の初に、孟子が齊の塾

師翁曰、心學をよく極めたる士は、義理深くして邪欲なきによつて、世間の作法にあやかる心なし。心學のみがきなき士は、邪なる名利に耽る者なり。今時のさぶらひ、心學のみがきなき者ばかりなれば、商立身の上手なる士の時めくを見きゝて、羨みあやかりて、我も〳〵と眞似をするにより、次第に風汚なく穢れて、士道の吟味をば古風にて時に合ずといひて心がけず、あさましき作法と成り行く事、むざとしたる手ぐろ士を、大名衆の崇敬したまふ故なり。主君の政だに良く候へば、その國の諸士、人毎に皆義士勇士となる事、倭漢共にそのためし多し。然るに、久功の諸士をば疎略にもてなし、故なき衒士をまめかしく崇敬したまふは、物體なき事なるべし。

體充曰、士道の吟味は、いかゞ仕りたるがよく御座候や。

師翁曰、儒の心學にて吟味したるがよく候。さなくては吟味正眞の義理に當らぬものにて候。第一甲斐の信玄は、文學をもめされ武勇も勝れよき大將にて候へども、眞儒の心は得給はず。仍て甲陽にて軍鑑の吟味、正眞の義理に當るは少なし。よく〳〵體

るゝいふ

先主云々ー先主は劉備也、孔明を隆中の草廬に尋れし故事

りつくるに譬へたり。士道を少しにても心得たる人は恥ぢ憎むべき事なれば、手柄とはいひ難し。立身の心がけ商人の利心の如く、貪りて汚なく士道を守らざる心にては、何の用にも立ち申すべく候や。かやうの士を崇敬ありて用にたてたるためし、大唐にても我朝にても古來なきことなり。然るに諸大名衆、この商立身のてだて上手なる人をよき士と心得て、過分の知行にて抱へたまふ。定めて國をさめ軍を行ふ助とせんとの思ひ入にても候はんか。左樣の御こゝろ入にて候へば、諸葛孔明の草ふかき陋巷へ、蜀の先主の自身三たびまで幸なりて喚び出し給ふに似て、その心根は一段殊勝に候へども、人品の吟味おろかにして、過分の知行を棄てたまふのみならず、士道のさまたげとなる、諸士の風これによつて日々汚なく成ること、あさましき事なるべし。

體充曰、諸大名衆、わたり奉公人を崇敬ましますにより、士の風のきたなく成り申し候子細はいかゞ。

主數を數ふ—數人の主人に歷仕す

くめり。さて一沐三握髮。一飯三吐哺。此二句は假説の辭とて、假に喩へまふくる語なり。謙德はなはだしく至極して、おごりの心毛頭なき意を明めんためなり。眞實にいづれも一沐にみたび髮をにぎり、御膳をあがりたまふ毎に哺を吐きたまふには非ず。大舜、周公、その才德は聖人、その位は天子冢宰にして、かくの如くましませば、末代の天子諸侯、守り行ひたまふ所、謙の一字に極まりたる事、よく〳〵體認すべし。

體充問曰、今時の諸士は、主君を數多とりて知行をとりあぐるを、立身といひて手柄に仕り候はいかゞ。

師翁曰、それは士道の吟味無案内なるあやまりにて候。才德ありて忠節をつくし、軍功を勵みて位をあがり、知行をとりあぐるが眞實の立身にて、士のてがらにて候。才德もなく忠節もなく軍功もなくて、よき贔負をかさにきて、術を上手にもてなし、主かずをかぞへて身上をしあぐるは、商立身といひて、あき人の門をかぞへて直を高く賣

冢宰—今の總理大臣の如き官職也、周代の最高官

矣。然我一沐三握レ髮、一飯三吐レ哺、起以待レ士。猶恐レ失二天下之賢人一。子之レ魯。愼無下以レ國驕上レ人。この聖戒の心は、我親は文王なり我兄は武王なり。當今の天子はわが甥なり、我位は攝政冢宰なり、天下に我をこすべき者なく、類なき尊位なり、然れども一たび髮を洗ふうちには三度洗ひさして、髮をにぎりて目見えに來る諸士をあひしらひ、一たび飯を食するうちには、三度口にくゝみたる食物を吐き出して諸士をあひしらひぬれども、なほ天下の諸士おごりたる無禮のあひしらひありて、賢人の恨有らん事を恐れ愼しむばかりなり、なんぢ魯國へ行きて、國を鼻にあてゝおごり、無禮にして人を侮どり輕しむる事なかれ、我如く愼むべしと敎へ戒めたまふなり。始に文王、武王、成王をあげて、位の貴き事をのたまふは、凡夫のおごりて謙德を失ふは、その位貴き故なり。然る故に位の至極貴き事をあげて、おごるべき所をあらはしたまふ。斯程たぐひなき貴位にても、謙德いよ〳〵ふかく、驕る事少しもましまさねば、まして是より下なる位に居る者はいふに及ばず、と戒め給ふ意をふ

謙—退讓恭敬の義也

法軍法皆亂れて、終にその國亡ろものなり。かりそめにも氣隨の念、心に起る時は、我身を失ひ國を亡し、家をやぶる魔心なりと恐れ愼しむべし。

體充曰、諸侯卿大夫の、第一に守り行ひてよき事はいかゞ。

師翁曰、謙の一字にて候。我位高きにおごり、我身に自慢する魔心の心根をたちすて、義理の本心をあきらかにし、苟且にも人を侮り輕しめず、慈悲ふかく万民をあはれみ、諸侯に無禮をなさず、家老出頭のいましめをよく聞入、わが智恵をたてず、善をこのむ事は好色をこのむ如く、惡をにくむ事は惡臭をにくむが如くなるを、謙といふなり。大舜は大聖人なれども、かりそめのことをも人に尋ね、賤き者のいふことをも聞きいれて吟味ましまして、中庸に叶はぬをば隱して用ひたまはず、中庸に叶ひぬるをば取り上げて行ひたまふ。孔子この事を擧げて、かくの如くなるによりて大舜を聖神と尊崇し奉ると贊美したまふ。又周公旦は、その御子魯國の主となりて、はじめて國入したまふ時、周公旦戒㆓伯禽㆒曰。我文王之子。武王之弟。成王之叔父。我於㆓天下㆒亦不㆑賤

本、不倚とあり

相口—話の好く一致するやうなる對手

心法をまもりて財寶を用ゆれば、私欲のけがれ少しも無きにより、淸白廉直にして私用も公用と變じ、同一天理となれり。中庸不測の心法を知らず、凡夫の心まかせに財寶を用ふれば、或はきよう或はしわく、私欲のけがれいと深きにより、公用も私用も皆妄費と變じて、同一人欲となれり。よく〳〵體認あるべき事なり。

體充問曰、國大名或はその家老たる人の、第一にあしき疵は、いづれにて御座候や。

師翁曰、私の一字にて候。私なる人は必ず氣隨なり。氣隨なる人は、必ず人の異見を聞入れず、世のそしりをかへりみず、偏に我心まかせにして、過ぎたる事をば、あしき事をも善ととりなし、夜も日もあけざる樣に好み耽り、わが好かざる事なれば、よき事をもそしりおどしめて取あげず、相口なる者をば、小人佞人をも近づけ親しみ、功なきに知行を加恩し、罪あるに刑をほどこさず、相口ならざれば、久功忠節の者をも疎み近づけず、功ありても賞をあたへず、罪なきに刑を加ふる如きの不義無道の作法しおき、みな私の心根より生へ起り出でたる枝葉花實なり。かくの如くにあれば、作

にして粉飾せざる事

不測ー一

生學問したる人、見まがひて善しとゆるすものなり。しわきも器用なるも、皆明德の昧き所よりおこりたる病にて、天下を失ひ國を亡し、家をやぶる根本なり。よく愼しみて工夫分別あるべき事にて候。

體充曰、しわくもなく器用にもなき樣には、いかゞ工夫つかまつり候はんや。

師翁曰、時と處と位とによくかなひて、相應したる義理を中庸となづけたり。此中庸不測のみちを目あて繩規として財寶を用ひ候へば、大過不及の私なきによりて、きようともしわきとも名づけいふべきやうなく候。さて工夫の仕樣は、まづ私欲の汚を棄てて天道の義理を鑑とし、時と處と位とによく叶ひて相應する所を分別して、財用の節を考へ知るなり。さてまた財寶をつかふに、公用、私用、妄費の三事あり。公用は天下のため國のためになる道ある、軍役公役の造用なり。私用は飯食、衣服、宮室、妻妾、てまはりにさしつかふ臣僕などの雜用なり。妄費は何の用にも立たぬなぐさみ一偏の造用なり。此妄費は凡夫ばかりの業にて、君子の上にはなき事なり。中庸不測の

きよう—金使ひの奇麗なるをいへり、今假に器用の字を當つ

朴素—質素

て候。もし大國を與へ權柄をあづけぬれば、必ず禍をおこすものなり。天子諸侯よく御用心ましますべき事なり。

體充問曰、器用なるとしわきとは、いづれがよく御座候や。

師翁曰、きようとしわきとは、財寶を用ふる大過不及のあやまりにて、いづれも惡しく候。たゞ器用にもなくしわくもなく、中庸不測の用に當るをよしとす。上天子より下庶人に至るまで、財用の工夫一大事にて候。使ふべき義理なきにもむざと使ひ、費し與ふべき道なきにも猥に與へ、少しの褒美あるべき忠功に、過分の知行を加恩し、家作諸道具以下、何につきても分過をこのみ、財寶を惜みたくはへざるを世俗きようといへり。君子淸白廉直の行跡に似たるによりて、凡夫は見まがひて善しとほむるなり。又使ふべき道あるにも惜みて使はず、與ふべき義理ありても與へず。過分に知行加增あるべき忠功には、少しの褒美をとらせ、家作諸道具以下、分際より見苦しく物たらはず、むざと使ひ費さゞるを世俗しわきといふ。君子儉約朴素の行跡に似たるによりて、

目の鞘―目を拭うての義
砒霜―銀鑛鉛鑛等に伴生する劇毒鑛物砒霜石
巴豆―大戟科に屬する大毒草

せぬれば、國をみだり亂を起すものなり。聖人は大唐にならでは生れたまはず。賢人英雄もまた世に稀なれば、世俗の心くらく奸雄の才にまよひ、心の奸賊を察する事あたはず。英雄なりと持てはやし、國をぬすまれ天下を奪はれたまふ天子諸侯、古來多し。よく〱目の鞘をはづして御用心あるべき事なり。かくいへばとて、奸雄を棄つるは僻事なり。使ひやうが大事と申す事にて候。奸雄はたとへば砒霜巴豆などの毒藥の如し。毒藥にてせむべき實症痼疾に用ふれば、其病をいやすしるし速なり、そのしるしの速かなるを見て、よき藥味なりと心得て、虛症の病者に與ふれば、即時に死するものなり。その如く此奸雄も、敵をやぶり賊を擒にする才のたくましきを見て、よき臣下なりと心得て、大官大國をあたへ、或は國天下をあづけなどするによりて、國を盜まれ天下を奪はれ給ふなり。明醫の砒霜巴豆の能毒をよくしりて、卒爾に用ひざるが如く、奸雄をもその才と心とをよく勘辨して、金銀たから物其外其の者の好きこのむ物をとらせ、情ふかく禮義正しくして、奸雄の心を遂げざる様にをさむる事簡要に

樊噲―一本、樊噲以下を加へず

將門云々―一本に、此の一節なし

劣りたるを賢人といふ。伊尹、傅說、太公、召公、顏子、曾子、子思、孟子、孔明、王陽明など是なり。德と餘の才は、賢人に一等劣りぬれども、大將の才は賢人と牛角なるを英雄といふ。管仲、樂毅、孫子、范蠡、張良、樊噲、張巡、岳飛など是なり。大將の才ばかり逞しく、よの才はみじかく、明德のくらきを奸雄といふ。項羽、韓信など是なり。義經公、正成などは日本にての英雄なるべし。將門などは日本にての奸雄なり。賢人の才德も、大かた聖人の體段そなはりぬれども、神妙不測の位に至らず。英雄は、大將の才は賢人と同じことなれども、餘の才と德と賢人より一位おとりて英氣の稜あるなり。聖人、賢人、英雄、この三人は才德の高下大小ありといへども、いづれも君子なれば、治れる世にも亂れたる世にも、天下無双の重寶なる人なり。奸雄は敵を退治する一過の用にたつ事は、賢人英雄にも劣らねども、明德くらく邪欲ふかき故、むほん逆心のうたがひありて、味方のたのみ危し。さて國治りて仕置などまか

慓悍猾賊—寛仁大度と共に史記の評語也

韓信といふ人、項羽と牛角なる才なる故、才も牛角なり。力は初の間項羽の方つよし。然る故に、はじめは度々の合戰皆項羽のかちなり。然れども項羽は慓悍猾賊にして德なく、高祖は寛仁大度の德ある上に、張良といふ才德兼備りたる名將ある故に、項羽の力次第に衰へ、終に項羽垓下に敗軍して烏江にして自害し、終に高祖の天下となりたり。かくの如くのためしを以て、德才勢力運命の勝負差別を、よく〳〵鍛錬工夫あるべし。

體充曰、才德勢力運命みな牛角に候はゞ、勝負いかゞ有るべく候や。

師翁曰、それは相碁の勝負の如し。かくの如く成る合戰には、天時地利の勝負あり。嘿識心通言語道斷の處なり。

體充問曰、聖人賢人英雄奸雄の差別、くはしく承り度存じ候。

師翁曰、文武合一の明德十分にあきらかにして、才德千万人にすぐれ、神明不測の妙用あるを聖人といふ。三皇、五帝、禹、湯、文、武、周公、孔子これなり。聖人に一等

仲達―司馬懿の字也

は、德は才にかち、才は力にかち、力は運に勝なり。才德牛角なれば、運の强きかた勝つ。合戰のかちは、才德勢力のつよきが運に勝ち候へども、後途のつまりの國を取る事は、運の强き方へかたつき候。むかし大唐に、蜀の國と魏の國と天下を爭ふ事あり。蜀の國は後漢の末にて、運命は弱く候へども、諸葛孔明といふ才德兼備りたる名大將あり。魏の國は運命は强く候へども、孔明に楯つく程なる大將なし。然るにより て、度々のかつせん皆蜀の國方勝利を得て、天下に威勢をふるふといへども、元來蜀の運よわき故、孔明の天年數つきて、魏の大將仲達と對陣のうちに、孔明病死めされたり。孔明の病死を隱し、蜀の國方より合戰をしかけたれば、魏の國方、孔明存生なりと思ひ、一支も支へず敗軍したり。死せる孔明生ける仲達を走らしむるといふは此事なり。孔明の死後には、仲達に楯つく程なる大將蜀の國方になく、その上魏の國の運命つよき故、終に蜀をほろぼして魏の天下となりたり。又項羽高祖の合戰のこと、あまねく人の知たる事なり。項羽高祖の運命は牛角なり。才は高祖劣り給へども、高祖の大將

倉公—前漢の名醫

上、下—原本、いづれもうちとあり

溪など如きの名醫の如し、軍法學びても變通の機轉なく、武用鈍き大將は、醫書を廣く學びても變通の醫按にぶく、療治はたらかざる醫者の如し。昔より今にいたるまで、扁鵲ほど醫學して療治はたらかざるは有るべし。やぶくすしの療治の、扁鵲の如く起死囘生のはたらき有るは一人もあるまじく候。太公望の書を學びて武功鈍きはあるべし。軍法學ばざる大將の、軍をして太公望の如く百戰百勝の功を立てたるは、一人もあるまじく候。よく〳〵體認して迷を御晴らしあるべく候。

體充曰、運命だにつよく候へば、いづれの敵にも勝ち申し候や。

師翁曰、合戰の勝負に、德のかち才のかち力のかち運のかちとて、四いろの差別あり。德といふは文武合一の明德の事なり。才といふは、武略賢く人數を自由自在にとりまはし、敵の情をよくさとり、九天の上にうごき九地の下にかくれて、百戰百勝の功をたつる才覺の事なり。力といふは人數の勢力の事なり。運といふは、主將のうまれつきたる運命の事なり。あいてむかひのきりあひは、運の強き方勝ものなり。大軍の合戰

覘覽用間—敵の隙を覘ひ、又間牒を使用する事

病功云々—經驗により て、醫法の大略を得たる醫師也

扁鵲—戰國

殿または平家の一族と度々の合戰みな勝利を得、日本にての比類なき名大將なり。かくの如くなる倭漢古きためしをよく〳〵考へて、誠の道理を明むべし。また一つのたとへあり、大將はくすしなり、敵は病なり、士卒は藥味なり、覘覽川間の武略は四診の醫術なり、奇正のそなへ敵によつて轉化するは、攻補の藥方やまひによつて施すが如し。軍法を少しも知らざる大將は、醫道を少しも知らぬものが療治するが如し。危き事なるべし。陣かずの功にて、備のたてやう合戰の手だてを少し見習ひたる大將は、藥方すこしならひ覺え、病功のいりたるやぶぐすしの如し。軍法の學問なき大將、運命の勢つよく、よわき敵ばかりにあひて勝利を得、國をとり威をふるふは、仕合よきやぶぐすし、見かけは甚しくて癒りやすき病人に取かゝり、手柄をして藥代過分にとり、その名高きが如し。太公望、張良、韓信、項羽、諸葛孔明、義經などの如く、學問をきはめ軍法の妙理をよく得心して、百戰百勝の功を立つるは、醫學よくきはめ四診の妙術を鍛錬して、百病を療治し起死回生の功をたてたる、扁鵲、倉公、東垣、丹

灯なくして、馴れぬ道を行くの喩あり

紙の上一書物を讀みて得たる也

何の吟味もなく、軍法は知らでも苦しからずなど思へるは、株を守る賤男に等しきものなるべし。運命の力つよければ、わけもなき暗將にても威勢をふるふは、たとへば矢は、枯れたる竹にて飛ぶ者にてはなけれども、射手の力にて三町も四町もとび、玉は鉛にて、人を殺す物にてはなけれども、火と藥との力にて、楯をも介をも打拔きて人を殺すが如し。また敵のさせる高名は、碁象棋の勝負にて考へ知るべし。下手にあひては勝手際一だん見事なれども、上手にあひては見苦しくまくるが如し。大かた合戰の勝負かくの如し。大唐の名大將は、數ふるに遑なきほど數多候へども、あまねく人の知りて取沙汰するは、太公望、張良、韓信、項羽、諸葛孔明などなり。此五人の衆、皆若き時仕合あしく、賤しきすぎはひをいとなみ、紙の上にて學問めされたる儘にて、陣かずの功なく候へども、時に逢ひてのち、陣はじめより勝利を得て、後世に手本とする比類なき名大將衆なり。大唐の名將は皆かくの如し。日本にても源義經公は、幼少のとき鞍馬にて軍法を習ひたまひたるまゝにして、陣かずの功なく候へども、木曾

本、機轉とあり

金撮捧―太き鐵棒に刺を設けたる兵器

知らずして―一本、其下に闇夜に

びても習はぬ人に同じかるべし。學びてさへ不手際ならば、習はぬ時は猶以つてなるべし。たとへば手習をするが如し。十人に九人までは、手習して文のよみかき自由にせざるはなし。間に一人無器用にて無達者なるあり。その如く軍法を習ひ、かねて筋よく極意をきはめたる師匠によく習ひて、得心熟し手に入るならば、十人に九人は軍のまはし達者なるべし。間に一人其器に當らぬ者は、習ひても益なかるべし。九人をすて一人を證據とする評判者は、すなはち習ひても益なき人と一對の人なり。軍法を習はずしても、本心の武徳感通して、暗にしあつる人あり。まして其上に軍法を學び用ひ、武の神妙を得心あらば、鬼に金撮枠といへる諺の如し。大唐にても日本にても、名將とひしめく程の人に、軍法學ばざるはなし。陣かずの功ばかりにては、大軍を自由自在にとりまはし、武畧を廻し、大敵強敵にあひて百戰百勝の功をたつる事、なか〱及ばぬ事にて候。大將の軍法を知らずしても、仕合よくて敵にかち、國をとり威をふるふ人あひだにあり。是は運命の力と敵のさせる功名なり。かくの如くなる人を見て

夾谷の師—孔子魯君を相けて齊の師に會せし事、雜書に見えたり
鞍懸云々—疊水練の義
勘辨—一

ば學びたるが軍法は知らぬと答へ給ふなり。眞實知りたまはざるには非ず。靈公この聖言をきゝ知りて、禮を聞き道をまなび、邪心をひるがへし明徳を明かにして、のち軍法を問はれ候はゞ、必定千聖心傳の軍法の秘妙をつたへ給ふべけれども、聞知らざるによりて、その翌くる日其儘行りたまふなり。明徳十分にあきらかにして、天地とその徳をあはせ日月と其時をあはせ、文武兼ね備はりたる人を聖人といふ。孔子は固より聖人にてましませば、文武兼備はり給ふ事、いふに及ばざるなり。武書大全、將鑑篇曰。孔子用レ兵萬世之師也。又曰。孔子夾谷之師堂々依然。五帝三王之風。かくの如くの格言をよく玩味して、孔子の神武軍法の秘妙を考へ知るべし。

體充問曰、紙の上にて軍法を習ひたる分にては、鞍懸の稽古とやらん、用にたち申すまじく候。たゞさい〳〵軍になれたる、功者に益したる事は有るまじきと存じ候はいかが。

師翁曰、夫もかたむきなる評判にて候。もとより變通の勘辨なく、法に泥むものは、學

先生也

貪戾―一本、强剛暴逆とあり

生れつきけなげにても主君の用に立がたし。却て身方のわざはひにもなる者なり。然るによりて孝經を敎へ、恩にむくい義理をたつる本心を明かにさせ、血氣の勇を化して仁義の勇となすべきためなり。よく〳〵體認して、孝行の端的を得心あるべし。

體充問曰、衞靈公問㆓陣於孔子㆒。孔子對曰。俎豆之事則嘗聞㆑之矣。軍旅之事未㆓之學㆒也。明日遂行と、論語に御座候へば、孔子は軍法をば知ろしめさずと存じ候はいかゞ。

師翁曰、それは以ての外大なる心得そこなひにて候。何もといひながら、就㆑中軍をおこし武を用ふるには、心根と時が大事にて候。仁義の心を本として、順應の時にかなひて用ふるを、仁義の師といひて、正眞の軍法武篇なり。邪心欲心を本として、順應の時に背きてもちふる武篇は、貪戾の師といひて、盗賊おひはぎの類なり。しかるに靈公無道にして戰伐をこのみ、貪戾のいくさを逞しくせんために、陣を問はれたり。かくの如くの人に軍法を敎へたまふは、たとへば盗人に道を敎ふるが如し。君子は人の惡をば成し給はぬによりて、其惡心をばいましめ本心をとりたてたく思召して、禮を

賢範―賢人の殘せる規範の義、聖人の說を聖謨といへるに同じ

程子―程頤、字正叔、宋の人、伊川

盜と申すものにて候。此ことわりは知り易き事なれども、辨へたる人稀なるにや。謀叛人をも武篇者なりと褒むる風俗、あさましく歎かし。箇樣に迷ひたる風俗に染り汚れて、孝行忠節の外に武篇の敎へあるべきとの疑なり。孝經曰。夫孝始於事親。中於事君。終於立身。又曰。君子之事上也。進思盡忠。退思補過。獎順其美。匡救其惡。故上下能相親也。詩曰。心乎愛矣。避不謂矣。中心藏之。何日忘之。かくの如く忠節を敎へたまふが、則ち武篇の敎にて候。忠節の外に武篇を求むるは、形の外に手足を求むるに均しき事なり。曾子曰、戰陣無勇。非孝也。この賢範の意は、恩にむくい義理をたつるが孝德の感通なり。君の恩は親の恩にひとしき廣大なる恩德なり。忠臣は必ず孝子の門より出づる者なれば、孝德の明かなる者は、必ず戰陣において武篇をはげみ、武功を立つる者なり。若しつね〴〵孝行忠節のふりありても、戰陣に於て武篇の勵みなきは、眞實の孝行にあらずと戒めはげます義なり。程子、武學制に孝經を添入めされたり。此意は恩を報い義理をたつる事を知らざる者は、

四書―學、庸、論、孟也、舊板本には、孝經に代ふるに孝經大學中庸の三書を以てし、四書の代りに論孟を指せり

孝經―一本には、學、庸、孝經の三書とせり

ば、大綱の得心なり易く候。孝經を學びて餘力ある者は、其力とひまにしたがひて四書を學び、猪又餘力ある者は、十三經を皆學びたるがよく候。十三經を皆學び候はねばならぬと思へば、退屈して却つて怠るものなり。又孝經一卷にて、餘の書はいらぬ物なりと思へば、狹くかたつまりて、明德生々活潑々地の妙用、却つて枯滯のわづらひあるものなり。たゞ孝經一卷を眼と定め、其餘の書は面々の力次第に學ばんと得心して、いかにも志を堅く立て、心學をわが所作と思ひ定め、孝悌忠信の道を行住坐臥の時に習ひ、そのしるしを求め急がず、心もちを廣くゆるやかに守りて懈怠なければ、必ずさとりを開くものなり。その晩きと早きは、生れつきの明暗により申し候。

體充曰、孝經には、孝行の事ばかりにて、武篇の敎なく候へば、士たる者が孝經一卷を專に學ぶ事は、如何と存じ候。

師翁曰、それは大なる誤にて候。武篇は孝行の一色にて候故、孝行忠節の爲にかせぎはたらく健氣を、武篇とは申し候。孝行忠節に背きたるはたらきの健氣は、むほん人又は

師翁曰、夫は大きなる心得ぞこなひにて候。我等が讀まで叶はぬと申す書物は、十三經の事にて候。十三經の取入のはしごになるべき名儒の書、或は七書史書など、其外の書物をつとめよむは、目だるく心疲るゝあだ事なりと思ふべし。史書は古今の事變を考へ知るべきためばかりなれば、餘力のなぐさみに讀むものなりと知るべし。

體充曰、十三經はなに〳〵にて御座候や。

師翁曰、孝經、論語、孟子、周易、尙書、周禮、儀禮、詩經、禮記、左傳、穀梁傳、公羊傳、爾雅、以上十三部を十三經と定めたり。

體充曰、十三經も書かず多く候て、凡夫の分にて皆まで學び申す事、及び難く存じ候。そのうちにて一二巻まなび候て、大綱の得心なりやすき書は御座なく候や。

師翁曰、本來易經一部を敎へ廣めたる十三經なれば、易經をよく學びたるがよく候。然れども易經は簡奥玄妙にして、凡夫の取入成りがたきによつて、孔子孝經を作り給ひて、聖賢凡夫通學の眼と定めたまふ故に、孝經一巻を心にて心をよみ、よく學び候へ

す、巷は往來の小路

かたはしに一逐一に

宵の賤男賤女に至るまで、書物の本意をよく得心するなり。文字を眼に見知る事はならざれども、心に書物の本意を合點して、身の行ひ心持の鏡となす事は、なかく時の物讀坊主衆の及ばぬ所御座候。文字を目に見覺ゆる事はならざれども、聖人の本意をよく得心して、わが心の鏡とするを、心にて心を讀むと申し候て、眞實の讀書なり。心の會得なく、只目にて文字を見覺ゆるばかりなるをば、眼にて文字をよむと申して、眞實の讀書にはあらず。我まなこにて書物をよむ事ならざれども、聖經賢傳をふかく信仰して、讀み覺えたる人に講釋させ、その本意をよく得心して、我心もち身の行ひの鏡とする故、俗學の書物をよみ申すより、一きは勝りたる書物よみにて候へば、賤男賤女も、書物を讀まずして讀むにて候。今時はやる俗學は、書物を讀みて讀まざるにて候。かやうの極意よくく體認すべし。

體充曰、大唐より渡りたる書物、際限なき事なり。かたはしに皆讀まで叶はぬ事にて候や。

四つ—論語に、子四を以て教ふ文行忠信とあり

閭巷—周代に、二十五家を閭と

は六經皆そなはり申し候。孔門のをしへ、文と行と忠と信との四つなり。文は六經の文なり、行は性に從がふ道のをしへなり。忠信は自慢の心根をたちすてゝ誠の道を求め、明德をあきらかにする工夫なり。此四に本末行鑑の差別あり。忠信は根本なり。行は幹梢なり。文は忠信と行との鑑なり。六經の文をよみ、その本意を講明してかゞみとさだめ、根本幹梢の工夫をよくつとめて、明德の寶珠をみがき申し候。聖人のましまして、直に敎へたまふさへかくの如し。まして末代聖賢のましまさぬ時に、鑑と定むる聖經賢傳をすてゝ講ぜず、暗く迷ひたる心任せにて、學問したるがよきなどいへるは、燈をすてゝ暗室に物をたづぬるが如し。

體充曰。上天子より下庶人に至るまで、皆學問せいでは叶はぬと承り候。愚痴不肖の賤男賤女の、書をよみ申す事のならざる者は、いかゞ仕り候はんや。

師翁曰、昔聖人の御代には、閭巷とて、家二十五間ある小里にも學校ありて、其里の奉行代官すなはち師匠となりて、耕作のひまに書物を講じ道を敎ふるによりて、愚痴不

怯弱の人此の病ありて、多分此畜生道に落ち入ると見えたり。

體充曰、贋の學問をする人に、世間の交りをむづかしがり、閑居をこのみ、或は心氣やみなどの如く、引籠りなどする者あるは、何としたる事にて御座候や。

師翁曰、夫がすなはち魔境におち入たるにて候。高慢の魔心深き故本來非もなき世間を非に見て、親のする事も兄弟のする事も、主君のあてがひも朋友のなす業も、皆わけもなき妄作なりと得心する故によりて、右を見るも左を見るも、皆己が心に叶はぬ事ばかりなる故に、世間の交をいとひ、獨り居る事を好み候。

體充問曰、正眞の學問は、書物を讀まずしてもなり申すと承り候へば、覺えにくき書物をよみ、講釋を聞き申す事はむつかしきに、要らぬ事かと存じ候はいかゞ。

師翁曰、大昔の文字なき代には、書物なきによりて、只聖人の言行を手本として學問をつとめ申候。伏犧易書を作りたまひ、文字はじまりてより後は、書物を讀みその本意を講明し、わが心の鏡として學問を務め申し候。次第に書物多くなりて、孔子の時に

心氣やみ――悒鬱病者の如きをいふ

鼻にあて—鼻に掛けといふに同じ

師翁曰、邪なる鬼神を魔と名附たり。春夏秋冬温熱冷寒、沖和の氣をめぐらし、時に従ひて八方の風を吹かせ、雨を降らし、萬物を造化し給ふ主君を神明と申し候。四時不正の氣を廻らし、屋を破り草木を損ふ大風を吹かせ、山を崩し家を流す大雨を降らし、或は人を迷はしなどして、生化の妨をなせるを魔と申し候。正眞の學問をして自慢の心根を絶ちすてゝ、孝悌忠信の道をよく行ひぬれば、神明に相通じ鬼神と吉凶を合するを聖神と名づけ、神に入り命に至ると申し候。或は贋の學問に耽り、或は學問せざれども、暗き所に魔を來しぬれば、自慢の心根固くなり、枝葉茂りて異風になり、人をば生ける虫とも思はず、天下に我を越すべき者なしと、人も許さぬ高慢を鼻にあて、親々方の愚痴なるをさげすみ可笑しく思ひ、主君をそしり朋友を嘲りて、孝悌忠信の生道を妨げ邪魔に相通じ悪魔と作法を合するを、魔境に陥るといふなり。生附利根無欲けなげなる人に此病あり。本心を失ひ邪欲いと深く、義理を忘れ、人の人たる道に背き、貧りきたなひれ、犬畜生の如く淺間しきを、畜生道と名附たり。生附愚痴貪欲

よく取り入るほど―修得する事の多き程

異相―身心共に通常ならぬをいふ

畜生道―佛教にていふ三惡道の一

師翁曰、正眞の學問は、私をすてて義理を專とし、自慢の心なきやうに嗜むを工夫の眼として、親には孝行をつくし、主君には忠節をいたし、兄弟の間悌惠をきはめ、友だちの交りを僞なく賴母しく、五典を第一のつとめとする故に、多く學びてよくとり入るほど、心だて行儀よくなり申し候。上の空に少し學びて取入なければ用に立ち難し。贋の學問は、博學のほまれを專とし、勝れる人をねたみ、己が名を高くせんとのみ、高慢の心を眼とし、孝行にも忠節にも心がけず、只ひたすらに記誦詞章の稽古ばかりを務むる故に、多くする程心だて行儀あしくなり申し候。聖賢より下の生れつきに、高慢の邪心なき人はなし。天下の惡逆無道をなし、或はきちがひ或は異相になる人、みな此慢心を棄てざるによつてなり。この自慢の邪心が、魔境畜生道へ陷る道筋なりと戒しめ恐るべき事なり。然るを贋の學問には、此慢心をかさむ便り多く、棄つる工夫は心がけざれば、覺えず邪路にいる事、あきらめやすし。

體充曰、魔境畜生道とは、いづれの所を申し候や。

聞えたる—道理に叶ひたる
むざとなる—放埒になる

もてなす風俗なり。かくの如くなる風俗を見習ふばかりにて、大唐の事を知らざれば、無藝文盲が武篇すると、株を守るとりさた、宜なりともいふべきにや。

體充問曰、學問はよきものなり。然れども多くはいらざる事なりといふ人多し。是は聞えたるやうに存じ候はいかゞ。

師翁曰、夫は贋の學問をすきて、心だて行儀むざとなる人有るを見て、然樣のあやまりたる取沙汰をなせり。夫はたとへば家の燒けたるを見て、火はよき物なれども、少し用ひたるがよし、多くはいらざる物なりといふが如し。正眞の學問は、食物を煮る火、燈の如くなれば、少しにては用に立がたし。贋の學問は、家を燒く火の如くなれば、少しにてもわざはひになるものにて候。贋の學問をして惡しくなる人を見て、正眞の學問を嫌ふは、家を燒く火を見て、食物を煮る火、ともしびを嫌ふに異ならず。此譬にてよく〳〵得心あるべし、

體充曰、學問の名は一つにて、然樣に大違の御座候子細はいかゞ。

歴々―身分高く格式勝れたれる家柄

素より天道の過り給ふ所にもあらず。また藝あるも藝なきも、緩き見掛なるも急なる見かけも、武篇する者にては無く、只心のけなげが武篇するにて候へども　心迷ひて闇き故に、藝ある者が武篇をすれば、藝が武篇すると思ひ、藝なき者が武篇をすれば、無藝文盲が武篇すると思ひ、見かけぬるきが武篇すれば、ぬるきが武篇すると思ひ、見かけいかつなる者が武篇すれば、いかつなる者が武篇すると思ひて、取沙汰さまぐ〵なり。株の兎を取らざる事は、知り易きことわりなれば誰も知りて迷はず。富貴貧賤勇怯の道理は、辨へがたきことわりなるにより、隨分の歴々迷ふばかりなり。しかる故に知りやすき事を寓言にして、辨へがたき迷を戒め明めたり。大唐の諸士には、無藝文盲なるもの百人に一人も稀なり。しかる故に、大功をたつる大將軍、武篇強きさぶらひ、みな藝能あり。日本の諸士には無藝文盲なる者ばかりなり。然る故に武篇強き士大方は文學藝能なし。また藝能にて身を立つる人は、武篇の言ひ立てなきによつて、藝をいひたてとし、物よみ坊主衆は出家長袖のまねをして、武道はその所作に非ずと

株を守る—韓非子に見ゆ、徒に舊習に拘泥するを喩ふ

となん—原本、なりとのみあり

體充曰、株を守るとのたまふは、何としたる事にて御座候や。

師翁曰、道理の正眞を知らず、上つら鼻の先ばかりの目論、愚にあさましき思入を、株を守ると寓言のたとへなり。昔山賤の山田をうちて居たる所へ、峯より兎一つ走りくだり、かの山賤の居たるあたりの木の株に、鼻をつきて死したり。彼山賤これを見て思ふやうは、さても稀代不思議なる事かな、此木の株は兎とりの逸物なりと心得て、かの兎をとりて歸り、それより隙のすき〱には、彼の木の株のもとに往きて、木の株のとりたる兎を拾はんと、終日守り居たるとなん。此山賤の迷に似たる事、世間に多きによりて、寓言して凡夫の迷をわらひ恥ぢしめたり。就中是に似たる大なる迷は、仕合よく富貴になりぬれば、我智惠才覺にてかくの如しと思ひ、又仕合あしく貧賤になりては、我が業とは思はずして、親をかこち人をとがめ天をうらむる事、人ごとの迷なり。仕合よく富貴になるも、運命の生れつきにして、我力のなす所に非ず。仕合あしく貧賤になるも、運命の生附にして親の咎にもあらず、人の爲す業にもあらず。

勇を明に—
原本、明か
の文字無し

魔、或は虎狼などに遭ひても、常の人の狗猫などに逢たる如くに、心に驚き恐るゝ事いさゝかなし。もとより百萬人の敵にあひ、劍の中或は猛火のうちへ飛び入るとても、平生の心もちに少しも違ふ事なく、毛頭驚き恐るゝ心なく、必ず十分無類のけなげあり、明德明かになけれども、生れつきて健氣なるを勇者といふ。この勇者も素より死をおそれず、物におびえ驚かざる事は、仁者の勇に似たれども、人欲の迷深き故、明德の良知くらければ不義無道のはたらき、畜生道に陷りて天德の仁なし。うまれつき勇ある者は、正眞の儒學をつとめて、其勇を仁義の勇となし、生れつき勇なき者も、又正眞の儒學をつとめて、本心に具有したる仁義の勇を明かにせよと敎へたまふ義なり。此等の聖謨をよく〳〵體察して、武篇をたしなまん士は、志し有るべき事なり。本來軍法軍禮武篇のたしなみ、諸士の作法のおきて、みな儒道の一色にして、聖人のさだめたまふ天理なれば、士たる者が儒道をそじり、儒學をするは士の業ならずなどいへるは、まことに無下に無案内なる事なれば、其はぢと知るべし。

にかた—鈍き方の義か

りおこる迷なり。文藝ある人に、義經公辨慶などの如く武篇よきもあり、又臆病なるも有るべし。文盲なる人に臆病なるも有るべし、また健氣なるも有るべし。只健氣なる者が武篇よきと知るべし。昔今のためしをよく考へて、學問が武篇の妨げになるといへる、きたなき心根を察すべし。前かどにも申す如く、正眞の學問をよくつとめて悟りぬれば、仁義の勇あきらかになりて、必ず武篇よく成り候と承り及び候。それも師匠と學問の仕樣とに、よく〳〵吟味あるべき事なり。中庸曰。人一能之。己百之。人十能之。己千之。果能此道矣。雖愚必明。雖柔必強。この聖謨の意は、篤く天地の神道に志し、明德をあきらかにする工夫をはげまし力め行へば、必ずさとりを開き、うまれつき愚痴にして迷ひ深き者も、本心の良知あきらかになれり。生れつき緩くにかたなる人も、必ず本心仁義の勇あきらかにして、剛強になりて、武篇よきとの義なり。論語曰。仁者必有勇。勇者不必有仁と、この聖謨のこゝろは、儒道をよく學びて仁者の位に至りぬれば、人欲淸く盡きて天理流行し、何程すさまじき妖

衒ざた―ごまかし手段

險し―過激にの義、極端に

學問する人は、ぬるくて武用の役に立ち難かるべきなどいへるは、文盲なる諸士、他人の文藝あるをそねみ、己が文盲なる恥を隱さんとの衒ざたなるべし。誠に分もなき僻事にて候。その子細は、源義經公、辨慶、君臣ともに文藝その時分の諸士に勝れたまひぬれども、終に一度もおくれを取りたまはず、末代に至るまで、犬うつ童も、武篇のためしには、義經公、辨慶と聞つたへて申しならはし候。文盲に御自慢のさぶらひ衆、せめて義經公辨慶などの、爪の先程なりとも眞似をめされ候はゞ譽あるべし。たゞ文盲一偏の御自慢にては、よき士とはいひがたし。文盲なる者が必ず武篇よく候はゞ、田をうち草かる田夫野人、薪とる山がつ、路頭にさすらふ乞食など、文盲第一の者どもなり。かやうの者ども皆よき武篇者にて候はんや。かやうの譬喩あまり險しく聞え候へども、今時分此まよひ深く、大形のたとへにては、心盲のねぶり醒めがたく候故に、聲を勵ましてよびさまし申し候。前かども申す如く、いか樣なる者が武篇よき、いかやうなる者が武篇あしきといへるは、皆得がたのひが事、あるひは株を守る愚痴よ

へし口―他を輕侮する時の口つき

る人のするを見習ひぬるが卽ち學問なり。書を讀むばかりが學問には非ず。赤子にて物をいひ習ふより、成人して道を學び、藝を習ふに至るまで皆學問なり。此學問の作法、天道の妙理に叶ひぬるを、正眞の學問といひ、儒學といふ。天道の妙理に背きたるを、贋の學問といひ異端といふ。人間の形を受けて世間の住居をする者が、學問するる人をそしるは、譬へば小風呂の內にて人の裸身をそしるが如し。世界の人間に、五倫に外れたる者は一人も無し、五倫に交はるには、必ず五敎の片はしを學び行はざるはなし。五敎は前にも論ずる如く、天道の神理儒道の本實なれば、天子より庶人に至るまで、書を讀むも讀まざるも、五敎のかたはしにても學び行ふ人は、皆儒道を學問する人なり。其上天地は人間の大父母なり、儒道は天地の神道なれば、則ち我人の父母の道なり。然るを自慢臭き顏もとへし口をして、學問はせぬがよき、したるがよき等との評判は、天に唾を吐き我親を譏るに同じく、愚に淺間しき事なれども、心暗くて義理を知らぬ人は、盲目蛇に恐ぢずと申す諺の如くなれば、聞えずながらも又尤とも可レ申か。偖又

物讀坊主―徳川氏初世の學者は皆剃髪したれば也

翁問答　卷之三

體充問曰、世俗のとりさたに、學問は物よみ坊主衆、或は出家などの業にして、士の仕業にあらず、學問すぎたる人は、ぬるくて武用の役に立ちがたしなどいひて、士の中に學問する人あれば、却てそしり申し候。かやうの誤は、いづれの迷より起りたる事にて御座候や。

師翁曰、それは贋物の學問ばかり時めきて、風俗あしく衆生の心汚濁にそまりて、明德暗きによりて起る迷ひにて候。凡夫の心得には、書物を讀むばかりを學問と思ひて、人間の形ある程の者は、書を讀むも讀まざるも、おしなべて皆儒道の學者なる理を知らず。學の字に效と覺との二字の意を含めり。聖人は生知安行なりと雖も、天地を師匠として習ひ覺りたまふ。賢人より以下の者は、聖人を師匠として習ひ、覺りを求むるなり。人のものを言ふも、立つも行くも衣服を着るも、皆我より先に生れて年よりた

思曾子孟子人衆勝天―史記傳に、出でたる語也

なれども、畢竟眞實の端的、終には天命本然のつねに立ち返るものなり。是を人衆則勝ㇾ天、天定亦能勝ㇾ人といふなり。其上五福のうちの攸好徳だに享けぬれば、殘の四つは其うちにそなはり。明徳既に明かなれば、至誠無息長在不滅なり。これ無上の長生なり。大富貴を得て小富貴を忘れぬれば、是又無上の富貴なり。一朝の憂、心の苦みとならざれば、心上の康寧は事上の康寧にまさりたり。考終命の事は、徳ある上はいふに及ばず。是にて福善の極意を得心すべし。六極のうちにて、惡弱の凶徳を受けぬれば、殘り四は皆其中にそなはれり。至誠無息の神理を失ひぬれば、たとひ幸にして免がれ長生しても、凶短折に等しき事なり。欲にいたゞきなく、只貪り惜しむばかりなれば、財寶ありても心は貧者なり。心暗く迷ひぬれば、目にふれ耳にきく事皆苦みとなれば、無病にても形安からず。欲心の苦み常に足らざれば、憂なくても心やすからず。是にて禍淫の極意を得心すべし。五福の第四に攸好徳をのせ、六極の終に惡弱をのせたまふ極意、よく〳〵默識心通すべし。

顔子—顔回

四配—孔子廟に副祀せる顔子、子

僞なりといひ、極月の大寒に、肌ぬぎても暑がる病人を見て、冬の寒きといふも實ならずといふが如し。いと淺間しき迷なり。この寒暑の道理はあさくて知り易き故に、迷ふ者なし。少しも違はぬことわりなれども、福善禍淫の道理は、深くして知り難きにより迷ふなり。知り易き所にてよく〳〵體認觀念して、ふかき神理を悟るべし。かの病人惡寒發熱の勢おとろへ、本復しぬれば、常の人の如くに暑さ寒さも覺ゆるものなり。その如く運命の勢おとろへて、其數きはまりぬれば、必ず惡人は六極遁れがたく、善人は五福を受くるものなり。然る故に盜跖は無病息災に難なく、長生して暮しぬるやうなれども、おのれと六極の剛惡におちいりて、至誠無息の神理を失ひ、萬世不朽の惡名を流しぬれば、六極の報應さだかならずや。また顔子は簞瓢陋巷不幸なれども、五福の攸好德をうけ、眞樂の介福めでたくして、長在不滅の神理あきらかに、帝の左右に在しつゝ、四配の位に登り、萬世諸侯の祭祀をうけたまひぬれば、五福の嚮命明かならずや。運命のいきほひによりて、一旦見かけは福善禍淫の常にたがふやう

虚なる福極
―虚なる福
實なる極に
とあるべき
に似たり

虚なる福極かたずして一旦かく有るなり。たとへば六月の土用はきはめて熱く、かたびらさへ身に掛らねども、惡寒の病ある人は、綿入を重ねきても猶寒し。又極月の大寒には、きる物を重ねきて、火にあたりても暑からぬに、大發熱の病人は、肌脱ぎてもなほ熱し。常の人にあたる暑さ寒さも、かの病人にあたる暑さ寒さも同じものなれども、暑寒は氣に屬して虚なり、惡寒發熱のやまひは形につきて實なり。虚なる暑寒の氣、實なる病邪に勝たざる故に斯の如し。此たとへにてよく〳〵體認あるべし。昔大唐に、盗跖とて大唐一番の盗賊あり。あまり惡逆無道が篙じて、人の鱠を喰ひぬれども、無病息災に長生して難なく暮したり。またそのころ孔子の御弟子に顏子と申す人あり。三千人の御弟子のうちにて、拔群無類なる大賢人なれども、簞瓢陋巷不幸短命なり。此二つの疑に迷ひて、古來色々の臆說ども多く候。運命の勢によつて、間にかくの如く大違あるを見て、萬古不易の天道に疑を立て、福善禍淫のさたも信仰しがたしなどいへるは、たとへば六月の土用に重着する病人を見て、夏の暑といふは

なじり——一本、罔しとあり

するをいふ。以上この五つを五福といふなり。偖又禍淫のわざはひを六極といひて六つあり。天道この六極を以て悪人をこらしめ給ふ。一曰凶短折、凶は悪逆無道にして、聊も善の心なし。短折は天道の定めたまふ壽の數より、まへかどに死するをいふ。二曰疾、三曰憂、四曰貧、五曰悪、これは自暴とて、うまれつき剛強にして欲ふかく、仁孝の儒道をそしりなじり、又は悪逆を好みおこなふをいふ。六曰弱、これは自棄とて、うまれつき柔弱にして、仁孝の儒道をよしとはおもへども、行ふ事能はず、又は臆病にて欲ふかく。不義無道の擧動のみ、畜生にも劣れる有様ある柔悪をいふ。以上此六つを六極といふなり。この五福六極のさたは、書經の洪範に見えたり。天道この五福六極を以て善悪を正し給ふ事、春は温に夏は熱く、秋は涼しく冬は寒きが如く、昔も今も末代も、いつも變らぬ妙理なり。然れども善人も五福をうけず、悪人も六極を逃るゝ事あるは、天の時は地の利に如かずといひて、虚は實に勝たぬものなり。五福六極の命は氣に屬して虚なり。胎育の始に享けたる運命は、形に屬して實する故に、

もあり、貴位に生れて、いやしく成さがる者もあり、貧賤にして壽ながきもあり、富貴にして壽みじかきもあり、まことに色々さま〴〵の有樣、中々盡しがたし。是皆六つの命を受くる時、陰陽五行の生長化、收藏、王相、死囚老の氣運入り交り、過不及あるによりて斯くあるなり。形の善惡長短大小等は、形に凝り定により、少しも變ずる事ならず。其外の命は無形の氣の內に集り定まりたるものなるによりて、變ずる事あり。就中明德には運命の障なき故に、一層變じ易く候。此運命の勢にて生附たる人身が、五福六極の本質なれば、此理をよく知らざれば、福善禍淫の妙理明らめ難し。よくよく體認あるべし。福善のさいはひを五福といひて五つあり。天道この五福を以て善人にあたへたまふ。一曰壽、是は命のながきをいふ。二曰富、是は財寶澤山なるをいふ。三曰康寧、これは禍もなく患もなくやすらかなるをいふ。四曰攸好德、是は明德あきらかにして、天理の眞樂つねに泰然とあるをいふ。すなはち孔子顏子の樂なり。五曰考終命、是は天道の定めたまふ壽の數を皆つくして、正理にしたがひて死

五行―木火土金水

そろへて―原本、添へてとあり

用、徳の賢智愚不肖二つなり。男女の分ち貧富貴賤の定め三なり。父母子孫君臣夫婦兄弟朋友、五倫の緣の吉凶の定め、又は一生涯の内經渡る所の境界の善し悪し、禍福の定め四なり。形の美悪長短力の強弱、無病病者の定め五なり。天道鬼神の嚮感し給ふ、善悪の報應を受くる難易の定め六なり。此六つの天命を、十ヶ月胎育の間に受け定めて生れたる人間の身なれば、一生涯の有樣、悉く此根より發り出でたる枝葉花實なりと得心すべし。偖十ヶ月の二百七十日の間の胎育に、歲の陰陽五行と、月の陰陽五行と、日の陰陽五行と、時の陰陽五行との、生長化收藏、王相、死囚老の氣、絪縕雜揉して造化するによりて、運命等しからず。其上に又、善悪報應の感化まで差し添へ交る故に、六つの命を皆よき所ばかりそろへて、生れつく事はならぬ勢にて候。然るによりて、人間世のありさま、徳ありて才なきもあり、才ありて徳なきもあり、才徳ありて貧賤なるもあり、富貴にて憂多きもあり。若き時仕合よくて、老いて衰ふる者もあり、若き時不幸にして、老て富貴になるもあり、賤しき位にむまれて、貴人の位に經あがる者

家を比べたる人民總て封侯の賞を受くべき善人のみとの義

時は愚痴不肖の人をも、惡人といふべき理なし。本來人間は、聖賢も愚不肖もみな善人なりとなり。その善人のうちに精粗大小貴賤の差別あり。聖賢は善のうちの精にして貴とく、愚不肖は善のうちの粗にして賤しき者なり。たとへば金も銀も銅もくろがねも、本來皆金にして、其うちに精粗貴賤の差別あり。金銀は金のうちの精にして貴とく、銅鐵は金のうちの粗にして賤しきが如し。箇樣のたとへをよく〳〵體認して、本來人間は善ばかりにして惡なき面目を、觀念すべし。

體充問曰、天道は福善禍淫とて、善をなす人には福をあたへ、惡をなす人には禍を與へたまふと承り及び候に、善人も仕合あしく、或はわざはひに遭ふ事あり、惡を爲す人も或は仕合よく、福を得る者多く候は、何たる道理にて候や。

師翁曰、よき疑にて候。是も易學を究め候はでは、埒明き兼ぬる所にて候へども、大方語り申すべく候。人間一生涯の有樣、色々樣々なりと雖も、畢竟其賦命六つに約まれり。壽の長き短き、父母の賢智愚不肖、貴賤貧富の定め一なり。其身の才智藝能の器用無器

粗はその精に隨ふものなり。然るによりて、人間の精を受けたる聖賢君子は、愚不肖の主君とし、愚不肖は臣下として聖賢の下知にしたがふ。天命の本然なり。本來君は少なく、臣下は多きものなれば、主君となる聖賢少なく、臣下となる愚不肖多きことわり、わきまへずして分明なり。精受けたる聖賢君子は、氣清く質正しき故に、おのづから根本の善を失はず。粗をうけたる愚不肖は、氣濁り質偏なるによりて、國のしおき道あれば根本の善を失はず、しおき無道なれば、夫にあやかりて根本の善を失ひ惡をなす者なり。たとへば癖なき馬をも、下手が乘り候へば色々の曲の出來るが如し。昔堯舜の御代には、聖人は天子の位にのぼり、其つぎの大賢人は宰相となり、その次の賢人は諸侯となり。その次の君子は卿大夫士となり、愚癡不肖なる者は農工商の庶人となる。上天子より下庶人に至るまで、分々相應の位に居て、それぐの所作をつとめ、孝悌忠信五倫の道に只管力を盡し、毛頭も邪欲の惡念なく、少しの不義をも行ふ事なくて、天下に一人も惡人なし。堯舜の民は比屋可封といへるは此事なり。然る

あやかり―所緣として似る也

比屋可封―

日と月―一本、月字の下に星字あり

柱―一本、眼と髪との譬を採れり

ぬといへる諺の如し。然れども、其善にして悪なき枝葉のうちに、精粗の差別あり。其うちのすぐれたる極上を精といひ、その中の屑を粗といふ。精粗の二字にて、君子小人鳳凰鳶鴉などの形の高下を定め、さて精粗の人物の行ふ所を、天命の本然、神理の鏡にうつして、善悪の沙汰を究むるなり。本來悪といふものは無き者なれども、粗なる形の用ひ様によりて出來るものなり。然る故に、悪を諸木の寄生にたとへたり。太虚のうち形有る程の物は、精粗のわかちなき物はなし。日と月とは天の精なり。辰は天の粗なり。物を生ずる山と田畠は地の精なり、はげ山と不毛の野原は地の粗なり。鸞鳳は鳥の精なり、鳶鴉は鳥の粗なり。麒麟は獸の精なり、狐狸は獸の粗なり。芝蘭は草の精なり、名もなき野草は草の粗なり。沈香栴檀は木の精なり、雜木は木の粗なり。惣じて天地萬物何たる物にも、精は少なく粗は多き筈にて候。譬へば柱を拵ゆるに、杣取より削り立つる迄の木口、其數を知らざる程澤山なれども、柱は一本ならでは成就せざるが如し。偖いづれの物も、その物の中にて精なる物は、その物の要となり主たり。

顔回が如き夭死をいふ也

をば、いづれの代にも探し求めて殺せども絶えず。鳥には鳳凰稀にして、鳶鴉は雲霞の如し。獸には麒麟は世に稀にして、狐狸は其數を知らず、草木には靈草名木は稀にして、名もなき雜木野草は山野に滿てり。天道は純粹至善なりと承り及び候へば、善き者は多く、惡しき者は少なき筈にてこそ候へ。卻つて惡しき者のたくさんなるは、何たる道理にて御座候や。

師翁曰、よき不審にて候。それは易學をきはめざれば、合點行き兼ぬる所にて候へども、大かたを語り申すべく候。賢人君子鳳凰麒麟などを善と定め、小人惡人鳶鴉狐狸を惡とさだめ、善惡の二字にてさたして、それを其まゝ天道におしあてがふによりて、一しほ疑ひ益し申し候。先根本をよく考へ見て、さて枝葉を吟味したるがよく候。天道を根本として生れ出でたる萬物なれば、天道は人物の大父母にして根本なり。人物は天道の子孫にして枝葉なり。根本の天道純粹至善にして、毛頭の惡なき神理にましませば、その枝葉の人物もみな善にして惡なしと得心すべし。瓜のつるに茄はなら

人の譽むるをもよろこばずそしるをも憂へず—毀譽得喪以外に超然たるをいふ

悟の人は、現世の事は申すに及ばず、生前死後のことわり、天地の外の道理まで、黑白の色を分つ如く明に知りたまふ故に、孝悌忠信の神道を行ひたまふ事、飢て食し渴して飲む如くにて、人の譽むるをもよろこばずそしるをも憂ず、富貴になりても奢らず、貧賤に成りても諛はず、わざはひをも避けず福をも求めず、生をも好まず死をもにくまず、只ひたすらに仁義五常三才一貫の神道を好み行ふ事、磁石の鐵を吸ひ盤針の南北を指すがごとし。かくの如く位にいたりたる人は、天地と其德を合せ、日月と其明をあはせ、鬼神とその吉凶を合せて、至誠無息長在不滅なり。人間に生れて盲目にて暮さん事、最あさましく口惜しき事なり。願はしき事の願はしきは、此大覺明悟に極まれりと志を勵ますのみ。

不幸短命—

體充問曰、つら〳〵人物の有樣を考へ見るに、善き者はすくなく惡しき者はおほし。よき者は育ちがたく惡しき者は育ち易し。人間には賢人君子はまれなり。たま〳〵有れども或は不幸短命にして育ちがたし。小人惡人は世界にみち〳〵澤山なり。盜賊等

目くすし―
眼の醫者

もやうを少しばかり譬にて申すべく候。各我等如きの暗く迷ひたる者の心に、仁義の神理を知り辨へざるは、盲目の色かたちを見分けざるが如し。然る故に、迷ひて理暗き者を心盲と名づけたり。盲目は青黄赤白黑の五色、草木鳥獸のかたちなど、耳には聞くといへども、其のさだかなる色形を見分けざる故に、疑の晴るゝ事なし。その如く彼の迷ひたる心盲は、仁義禮智信の五常、天道神道運命生死などのことわり、ほぼ耳には聞くといへども、心はその道理を知り明むる事ならざる故に、いづれの神理にも疑ひ迷ふのみなり。盲目稀代の目くすしにあひ、療治して兩眼常の如く見開きぬれば、今まで疑ひありつる色かたち、一々に見あきらめて、兎角の疑ひを立つべき所なし。その如く彼の心盲も稀代の明師にあひ、學問の功を積みて、本心の眼開きぬれば、今まで疑ひ迷ひたる五常天道神道運命生死のことわり、悉く見ひらきて、白晝に黑白を分つ如くなるを、悟と名づけたり、悟のことわり言語道斷、凡夫の及びがたき所なれば、まづ盲の眼を開きたる所にたとへて、よく／＼體認すべし。大學明

よこめ―士人の行動等を監察する横目附の略

はいくしし―便佞にして穿鑿だてするをいふ歟

いて至德と號するなり。至の字に極善大達四字の意をふくめり、

體充曰、よこめといふ者、今時のはやり物にて候。無くて叶はぬ者にて候や。

師翁曰、よく治りたる代には、さのみ要らざるものなり。風俗あしく人の心みだれたる代には有るがよく候。その子細は、よこめ有れば人毎に法度を恐れ戒むる心ありて、治道のたすけとなりぬべし。然れども、よこめのいふ事を聞入れてむざとせはしなく有らば無きに劣るべし。よこめは下々の心を戒むる道具なりと得心して、むざとよこめのいふ事を承引すべからず。惣じて君たる人は、大惡逆の外は、何事を聞かぬふり知らぬふりにて大樣なるを本とす。利根だてにてはいくしきは、國を失ふ基と知るべし。

體充問曰、學問は悟らんためなり、悟らねば學問といふに足らざるよし承り及び候。悟とは何如樣なる事にて御座候や。

師翁曰、悟のさたは言語道斷のことわりなれば、中々言葉に述べがたく候。その皮膚の

有形云々—道は天地有形の外に通じ、思は風雲變態の中に入る、といふ古語に依る。

師翁曰、惣じて世間に、學問に外れたるものは一つもなく候。正眞の學問あきらかならざる故に、色々に迷ひたる行ひある事にて候。學問は明德をあきらかにするを、全體根本とす。明德は天地有形の外へ通じ、上もなく外もなく、神明不測なる者なれば、天下國家を治むる政は、明德神通妙用第一の本にて候。然る故に、政は明德をあきらかにするを本とす、學問は天下國家を治むる政なり。元來一にして二、二にして一なる者と心得べし。其上法度の箇條ばかりが政にてはなく候。天子諸侯の身に行ひたまふ一事、口にのたまふ一言、皆仕置の根本なれば、政と學問と、本來同一理なる事をあきらかに得心すべし。

體充曰、至德と明德とは一つにて御座候や。但し又各別なるものにて御座候や。

師翁曰、一體にて名の變りたるものにて候。たとへば大きなる鏡を名づくるに、其明かなる所を以ていへば明鏡といひ、大きなる所を以ていへば大鏡といふが如し、德性のあきらかなる所について明德と號し、德性の外もなく上もなく、廣大無邊なる所につ

端的—正なり、誠なるをいふ

事のつとめをよく勵ましても、大旱にやけ長雨にくさり、大風にそこね虫つきて枯れて、秋のとりみなき事あるを天災といひて、運命のなす所なり。時處位のよくかなふやうに分別し、人事の勤を勵ますは、皆人間の力にてなす業なるによりて、おしなべて人事といふ。人事をよく勤めて禍にあふは、運命にして人力の及ぶ際にあらざれば、天災といふなり。人事を勤めずして禍にあふ事は、天災とは言はず。人爲の孽といふものなり。耕作をあしくして取實なきが如し。人事のつとめに怠りて、天道次第よ、など言へるは、以ての外なる僻言なり。是にて或は家をおこし國をひらき、或は家をうしなひ國をほろぼす、運命の端的をよく體認すべし。かやうに論ずれば品多くむづかしきやうに候へども、よく悟りぬれば、明德をあきらかにする一つに極れり、明德だにあきらかに候へば、時處位のふんべつ人事のつとめ、運命のさだめ、皆鏡のかげを映すが如し。

體充曰、學問と政とは各別なるものかと存候へば、一つものにて御座候や。

修理—手入ないへり

用に立たぬにて候。是にて學問も仕置も、水土の地理を知るが簡要なる事を體認すべし。耕作の時いたり、田に稻をうゑ畠に菽をうゑて、天時地利みなよく叶ひ候へども、他人の田畠にうゑつけぬれば、我用にたゝぬ上に、却つて盜人のとがめあるべし。是は時も處もよけれども、我位の分限になき事をする故なり。これにて學問も政も、人位の分を知るが大事なることを體認すべし。耕作の時いたり、我田に稻をうゑ、我畠に菽をうゑ、處も時も位もよくかなひても、枯れたる苗をうゑ碎けたる菽種をうゑては、生育たぬものなり。是は天時地利人位皆よく叶ひても、苗と種に生理なき故なり。是にて學問も政も、苗と成り種となる、明德の生理明かならざれば、時と處と位とにかなひて、聖人の法を用ひても、益なき事を體認すべし。時も處も位もよくかなひ、苗も種もよく候ても、肥をし草をとる修理のしやう惡ければ、秋の取實なきものなり。時處位苗いづれも善くても、人事の勤足らざる故なり。是にて學問も政も、人事のつとめを勵ますか簡要なる事を體認すべし。時も處も位もよくかなひ、苗も種もよく、人

膠柱—一定の規則に拘泥して、變通を知らざる事史記に出でたり

否泰—安らかなると然らざると

て、事の迹ばかりを手本として眞似をするを、膠柱の死法と名附て、愚にして用にたたぬものなり。仕置法度をする大體は、主君の明德をあきらかにして根本を定めて、周禮などに記し置きたる聖人の成法を考へて、その本意をさとり、政のかゞみとし、時と處と位と三才相應の至善をよく分別して、萬古不易の中庸を行ふが簡要にて候。義理にて論じては合點ゆき難きものなり。目の前なる事にたとへて體認したるがよく候。然る故に、禮記に仕置の仕樣を、耕作の事をかりて議論發明あれば、耕作にたとへて見たるがよく候。時とは天の時、春夏秋冬運命の否泰をいふなり。たとへば冬田をうち種をふせ、耕作の作法よくつとめ候ても、用に立たぬものにて候。これは耕作の仕樣あしきによりて用にたゝぬにてはなく候、たゞ時違ひたるによりて、勞して功なく候。これにて學問も政も、運命氣數の時の宜を知るが、第一なる事を體認すべし。耕作の時いたりても、畠に稻をうゑ田に豆を植ては、何程精にいれ肥をし修理をしても、育たぬものにて候。これは時もよく耕作の仕樣もよけれども、所の違ひたるによりて

周禮—周の官制を記せるもの、六篇三百六十官周公旦の作と傳ふ

治は我心は正しからずして、人の心を正しくせんとするものなり。たとへば諺にいへる、しやくしの繩規なるべし。君の心明かなれば、吟味正しく法度道ある故に、末ながく變らず。君の心暗ければ、萬事無吟味なるによりて、色々樣々、むざとしたる法度を定め、又程もなく改め替へぬるは、淺間しく恥かしき事なるべし。

體充問曰、仕置の學問は、如何樣にしたるがよく御座候や。又仕置に定まりたるよき法度御座候や。

師翁曰、仕置の學問はすなはち儒學なり。眞儒に隨ひて學びたるがよく候。よき法度は活法とて、事をさして定めぬものにて候。一偏に定まりたるをば死法といひて、用に立たぬものなり。法度にも心迹の差別御入候。周禮などに記し定めたる事は、聖人天時地利人情の至善をはかりて、定め給ふ法度の迹なり。其掟を定めたまふ所の本意を心といふ。その迹によりて立法の本意をよく悟りて、當代の法度を定て師匠鏡となし、その事の迹に泥まず、聖人の心によく叶ふを至善の活法といふなり。其心をば知らずし

ふに同じ

秦の始皇―名は政、戰國を統一したる皇帝

いろふ―手をかける

に隨ひたるがよく候。しおき法度にも本末あり。君の心明かにして道を行ひ、國中の手本かゞみとするは政の根本なり。法度の箇條は政の枝葉なり。君の好む事をば、その下々皆眞似をするものなれば、君の心あきらかに道を行ひぬれば、法度は無くても自から人の心よくなるものなり。まして法度をよく定め、背く者をば刑罰にてこらし、本・末も正しく行ひぬれば、國富榮え長久にあるなり。本をすてゝ末ばかりにて治むるを、法治といひて、かならず政數多く嚴しきものなり。秦の始皇のしおきが法治の至極したるものなり。法治は嚴しき程亂るゝ者なり。始皇の御代を鏡として見るべし。本來政は數すくなく、時相應の至善にかなひ、おほやうなるを本とす。今時のやうに暗く迷ひたる人心を治むるを、濁り水を清ますに喩へたり。なにかといろふ程濁をますものなり。いろはずに靜めて置けば、ごみが沈みて上から清むものなり。是にて心得べし。徳治法治の分別よく〳〵心得あるべし。徳治は先我心を正して、人の心を正するものなり。たとへば大工のすみかね、その體ろくにして物の歪を直すが如し。法

君の心にひとし｜君の心愚昧なるに似たる愚臣を召集むる也

嚴緩｜一張一弛は文武の道也とい

様のあやまり、皆主君の心くらき迷より起れり。主君の臣下をさし使ふを磁石の鐵を吸ふに喩へたり。色々の物を集め置きて磁石をさしつくるに、鐵より外は吸はぬものなり。其如く主君の心くらければ、何程よき士を集め置きても、それをば用ひず、只君の心にひとしく闇き曲者ならでは、さし使ひたまはぬものなり。然る故に、よき士その家中にありても無きに同じ事なり。主君の心明かなれば、主君の心に叶ひたるよき士ならではさし使はぬ故に、曲者も欲にふけり惡をはぢて、いつとなく善くなるものなり。然る故にあしき曲者、其家中に有りても無きにひとし。臣下の善きも惡しきも、國の亂るゝも治まるも、皆主君の心一つに極まれり。まことに志あるべき事なり。

體充問曰、法度は數々多く、嚴しくしたるがよく御座候や。

師翁曰、しおき法度の箇條は、處により時によりて定むるものなれば、多きがよき少なきがよきとも定めなし。嚴しくしてよき事もあり、緩くしてよき事もあれば、嚴しきがよきとも緩きがよきとも定むべからず。たゞ時と處と位とに、相應したる道理

なき―原本、二字なし

出頭人―他に勝れて時めき榮ふる人

る事は、大海の清濁を擇ばざる如くと喩へたり。人を擇び棄てずして許容し、さて賢智愚不肖の差別をよく分別して、道德才智ある賢人をば高位にあげ、しおき萬事の談合柱とすべし。才德なき愚不肖にも、必ず得たる事あるものなり。その得たる所をよく見知り、分別して相應の位におきて差使ひぬれば、人間に用に立たぬ者はなきものにて候。使ひ樣惡しきに依りて、善き者も用に立たぬと心得べし。大工の家をたつる、材木のつかひ用にて合點あるべし。また才智拔群の人に、無得てなる事必ずあるものなり、それもよく見分て、得ぬ事にはさし使はぬが簡要にて候。世間を見るに、氣に入たる出頭人なれば、得たる事得ざる事の吟味もなく、又人もなきやうにさし使ひ、あひくちに非ざれば、其人の得たる事にもさし使はぬばかりなり。是皆僻事にて候。君の前近くさし使ふべき位の士をば、いづれも直にさし使ひてこそ、其人柄も心だてをも見知るべけれ。たゞ人傳にいひつぎて、さし使ひたる分にては、善きも惡しきも知るべきやうなし。然る故に、出頭の者のとりなしにのみ聞あやかるばかりなり。箇

體充曰、いま時の功と才との吟味は、昔の掟によくかなひ申候や。

師翁曰、功と才との名は昔と一つにて候へども、吟味のしやう悪しき故に、人のてぐろ上手になりたる故か、昔の掟にかなふ事は少なく候。

體充曰、昔の掟はいかゞ御座候や。

師翁曰、君たる人の心が掟の鏡にて候。此鏡くもり候ては、何の吟味もあやまるばかりにて候。然る故に人君の心を明かにして掟の鏡と定め、才と功と德の正眞贋、上中下の品さだめ、鏡のかげを照す如く、毛頭のあやまりなければ、諸侍のてぐろ自からならざるなり。眞實の德と才と功に力を勵まし、正眞の忠節を盡すものなり。是昔のおきての眼なり。何程よき法度ありても、主君の心くらければ、其掟が用にたゝぬ物にて候へば、君たる人は恥ぢ恐るべき事なり。

體充問曰、臣下をば如何やうに使ひたるがよく御座候や。

師翁曰、主君の心持を山立海受とて、何事にも動ぜざる事は山の如く、人を選び捨てざ

身にかへて—命を懸けてといふに同じ

柱—標準と定むる也

下の三だん御入候、明徳十分にあきらかに、名利私欲のわづらひなく、仁義の大勇ありて、文武兼備りたるを上とす。十分に明徳は明かならねども、財寶利欲の迷なく、功名節義を身にかへて守りぬるを中とす。表向ばかり義理だてをして、心には財寶利欲立身をのみ貪りぬるを下とす。此下品のくせもの澤山にときめくと見えたり。君たる人の用心あるべき事にて候。さて又諸士を吟味するかなめ三つあり。德と才能と功となり。此三つのうち、何れにも上中下あり。德は文武合一の明德なり。才能は天下國家の萬事執行ふ、文藝武藝の才智藝能なり。功は或は天下國家のしおきの功をつみ、或は奉公奔走の久功をなし、或は天下國家の難をはらひ、或は天下國家の爲になる事を始めて作り出し、或は大敵をほろぼし武功を立つるなど、皆功なり。德と才と功との三つを吟味の柱とさだめ、上中下の品によりて、その分際相應の知行をあたへ官職をさづくるが、古來士の吟味をする掟にて候、今も才と功とのとりさたは候へども、德のさたは知る者稀なりと見えたり。

傳手—手蔓の義

成り、合戰し、大いに敗軍して天下の笑種となれり。根本の文武合一の明徳明かならずして、徒に枝葉の藝ばかりを務め學ぶ故なり。軍法を學ばんと思ふ人は、先眞儒の門に入りて、文武合一の明徳をあきらかにし、根本を立ての後に、軍法の本書をまなび、古人立法の本意を悟り、臨機應變の助となすべし。是はまことに武家第一の急務にて候。

體充問曰、士の吟味は、いかやうに仕る者にて御座候や。世間の大名衆、諸士を抱へたまふを見るに、吟味ある様には候へども、吟味の作法さだまりたる事ありとは見え申さず候。我々の見及び候は、只よき贔負傳手のある者が、よき士ともてなされ、高知行をとり候かと存じ候は如何。

師翁曰、それは悪口といふものにて、道の議論にてはなく候。君たる程の人は、よく〳〵吟味して、よき士を抱へたくは思ひ給ひ候へども、世間の風俗あしく、吟味の作法あきらかならざる故に、心ならず不吟味になり行き候と見えたり。根本士の品上中

太公諸葛ー太公望、諸葛孔明

名大將ー趙括の父趙奢を指せるか

師翁曰、大勇は用ひて悪しきところなく、又用ひて悪しき時なし。行住坐臥五倫のまじはり、大勇なくては道を行ふ事あたはず。軍陣にては、大將にしても葉武者にしても宜しく候。小勇の人は、武用ばかりの役に立つまでにて、葉武者にはよく候へども、大將には悪しく候。昔より倭漢ともに、小勇の大將勝利を失ふ事、擧て數ふべからず。愼しむべき事にて候。

體充問曰、軍法陣圖は古より有る事にて候や、偖又如何やうに學びたるがよく御座候や。

師翁曰、軍法陣圖は本來易よりおこり、黄帝の御代に全くそなはり、太公諸葛など、代代の諸賢傳授し來れり。日本にて假名書になほしたるには誤多し。たゞ本書をよく學びたるが善く候。軍法陣圖を有の儘に心得たるぶんにては、馬のめきゝを段の繪圖にて習ひ覺えたると同じ事なり。物の間に合はぬ愚なる事を、按レ圖索レ驥とたとへたる如くなり。昔大唐に名大將あり。軍法陣圖の書を作りて、其子に教へ傳へたり。その子よく父の書を讀み習ひたれども、臨機應變の覺悟なきによりて、親死して後大將と

三才ー天地人

前に論ずる眞實の武がすなはち此大勇なり。血氣の勇は道理無理義不義のわきまへなく、只かたむきに猛くして、人に勝ち物に恐れざるばかりなれば、虎狼のけなげにひとしく、却つて人道の碍となれり。けなげにして死を恐れざる所は、仁義の勇に似たれども、道理義不義のわきまへなく、たゞ血氣に任せてかたむきなれば、虎狼の擧動いとあさましく、位ある者は亂をおこし、貧き者は盜をなす。さて又欲心の深き故に、欲のために恐るゝ心、臆病なる者の死を恐るゝに異ならず。血氣の勇者は畢竟欲を本とする故に、勝軍には武勇をはげみ、忠節のふり一段見事なれども、敗軍の時には其主君をすてゝ、あさましき擧動ある武篇者古來多し。かくの如くなれば、たゞ血氣ばかりの勇にして、義理の用に立たぬ故に、血氣の勇といふ。血氣の猛きばかりにて、欲の恐れ深ければ、三才一貫の大道を行ふ用には立たずして、小體血氣の役ばかりに立つ故に、また小勇とも名づけたり。

體充曰、大勇小勇に、用ひやう御座候や。

千萬人―孟子公孫丑上篇に、自ら反して縮ければ、千萬人と雖も吾往かん

詮なし。學問して明德を明にし、數多人の數を見たて、功を積みて自ら獨り知るべき事なるべし。

體充問曰、けなげに仁義の勇血氣の勇とて二つありと承り候。いかやうなる差別にて御座候や。

師翁曰、明德のあきらかなる君子は、義理をまもり道を行ふほかには毛頭ねがふ事なく、欲心のまよひ、少しもなき故に、義理をたて道をおこなひ、主親のために命を棄つる、飢ゑたる者の食を求むる如くにして、死を恐れず生を貪る事なし。臆病の根を尋ぬるに、命を惜むに極まれり。君子は道を行ひて命を棄つる事、かつゑたる者の食を求むるが如くなる故に、天地の間に何にても恐るべきものなし。千萬人の敵にあひても、虎狼の狐狸に向へるが如く、毛頭おそるゝ心なし。恐るゝ事なきがけなげの至極にて候。明德の仁義あきらかなれば、この勇仁義のうちに自ら備りて有る者なるによりて、仁義の勇といふなり。天下に敵なき至大なる勇なる故に、また大勇とも名附たり。

に、鄙事に多能とあり簡要—原本に、管要とあり、簡要の誤寫と認めて改む

の君子にて候。世俗の諺にいへる花も實もある人なり。本立つての上には、文藝武藝殊の外なる重寶にて候。本末先後の心得簡要にて候。

體充曰、本末兼備はる事ならざる者は、いかゞ仕り候はんや。

師翁曰、末をすてゝ本を學びたるがよく候。文藝を知らずして文道をよく行ひ、武藝を知らずして武功を立てたる人、古來多し。是皆本を第一につとめたる故にて候。よく〳〵心得べき事なり。

體充曰、沈勇が世間に多しと仰せられ候へば、見かけのぬるき者を、武用にかひ〴〵しかるべきと見立て候はんや。

師翁曰、夫も鼻の先なる心得にて候。沈勇が世間に多しと申候は、見かけ鼻の先の目論にては知れぬものなりといふ事にて候。見かけのぬるき者に臆病なるもあるべし 又健氣なるもあるべし。みかけの猛きに臆病なるも有るべし、又かひ〴〵しきも有るべし。目明の仕樣を口にて兎角のと言ふは、馬のたんの繪圖に等しき事なれば、語りても

事能はざるが如し。氣だてやはらかに立ちふるまひ花車なるを文といひ、猛くいかつなるを、武用にかひぐしかるべき等いへるは、あさましき鼻の先なる目論にて候。見かけは柔かにうはだるみし、ぬかりたる者に、拔群人にすぐれて武用かひぐしき人あり、これを沈勇となづけたり。世間の武功ある人を見るに、大概この沈勇多し。見かけは鬼神のやうに猛くいかつにして、拔群に臆病なる人あり。これを羊質虎皮とたとへたり。羊は蟲もふみ殺さゞるやはらかなる獸なり、虎は人をも獸をも喰い殺す猛獸なり。羊に虎の皮をきせて、見かけは猛く凄じけれども、うちが羊なるによりて、見かけに違ひていと淺間しき振舞なりといふ心なり。かくの如くのためしは眼前に澤山なれども、目明する人世に稀なりと見えたり。

體充曰、左候はゞ、武藝文藝はいらぬものにて候や。

師翁曰、それは惡しき心得にて候。本を捨てゝ末ばかりを求め學ぶが、僻事なりといふ事にて候。根本の仁義を立てゝの上に、文藝武藝に長じぬるは、本末兼備へたる多能

羊質虎皮—其の名ありて實なきを識る譬喩、揚子法言等に見ゆ

多能—論語

沙汰―道といふ程の義、本義には非ず

第二―原本第一とあり一本によりて訂す

氣の流行なる如く、本來同一明德なれば、武ばかりにて文なきは、秋冬の陰のみにして春夏の陽なきが如し。文ばかりにて武なきは、春夏の陽ばかりにて秋冬の陰なきが如し。文は仁道の異名、武は義道の異名なり。仁と義は同じく人性の一德なるにより、文武も同じく一德にして各別なるものにあらず。仁義の德をよくさとりて文武の沙汰をあきらむべし。仁にそむきたる文は、名は文なれども實は文にあらず。義にそむきたる武は、名は武なれども實は武にあらず。文武の正味をよくかみわけざれば、心の闇いとくらく、萬事のさはり多かるべし。さて又文武に德と藝との本末あり。仁は文の德にして文藝の根本なり。文學禮樂書數は藝にして文德の枝末なり。義は武の德にして武藝の根本なり。軍法射御兵法などは藝にして武德の枝末なり。根本の德を第一にしてつとめ學び、枝葉の藝を第二にして習ひ、本末かねそなはり、文武合一なるを眞實の文武といひ、眞實の儒者といふなり。文藝ありて文德なきは、文道の役にたたず。武藝ありて武德なきは、武道の役にたゝず。たとへば根なき草木の實をむすぶ

る事

威—原本、感に作る

萬事に—此三字一本によりて補ふ

一德にして、各別なるものにては無く候。天地の造化一氣にして、陰陽の差別ある如く、人性の感通一德にして文武の差別ある故に、武なき文は眞實の文にあらず、文なき武は眞實の武にあらず。陰は陽の根となり陽は陰の根となる如く、文は武の根となり武は文の根と成るなり。天を經とし地を緯として、天下國家をよく治めて、國富み民榮え、五倫の道を正しくするを文といふ。天命を畏れざる惡逆無道のものありて、文道を妨ぐる時は、あるひは刑の罰にて懲し、あるひは軍をおこし征伐して、天下一統の治をなすを武といふ。然る故に戈を止るといふ二字を合せて、武の字をつくりたり。文道を行はんための武道なれば、武道の根は文なり。武道の威を用ひて治むる文道なれば、文道の根は武なり。其外に萬事に文武の二は離れざるものなり。孝悌忠信の道を正しく行ふは文なり。孝悌忠信の障となるものを退治して、つとめ行ふは武なり。たとへば春夏の陽ばかりにて秋冬の陰なく、秋冬の陰ばかりにて春夏の陽なければ、萬物を生成する造化の功成就する事なし。陰陽二氣の差別あるといへども、本來同一元

司徒—周代に教育を掌りし官名

花車—華奢に同じ、奢り花やかな

同じものなり。然る故に君子は富貴をも願はず貧賤をも厭はず、唯天理の眞樂を樂む外は他事なく候。

體充曰、俗儒の文學を教へてすぎはひにするは、ひが事にて御座候や。

師翁曰、教を產業とするは、司徒教官の屬にて候へば、僻事にてはなく候。只教へやうが大事にて候。教へやうだによく候へば、有難き眞儒にて候。教やうあしきによりて俗儒のそしりあるなれば、產業にするはよく候へども、教やうに僻事ありと心得給ふべし。

體充曰、文武は車の兩輪、鳥の兩翼の如しと申ならはし候。文と武とは二色にて候や。さて又いかやうなるものを文武とは申候や。

師翁曰、文と武に世俗大きなる心得そこなひ御入候。世俗は歌をよみ、詩をつくり、文筆に達し、氣だてものやはらかに花車なるを文といひ、弓馬兵法をならひ知り、氣だて猛くいかつなるを武といひならはせり。みな似たる事の似ぬ事にて候。元來文武は

て眠る、樂亦其中に在り、

彭祖—殷代の人、壽七百歳と傳へらる

無逸のつとめ—安樂を願はずして勤勞すること

人の明德は、至誠無息長在不滅にして、かたち死しても亡びず、天地終つて壽竟らざる者なれば、彭祖が八百歳も誠に夭死に異ならず。これ思のまゝなる長生にあらずや。凡夫は迹ばかりを見て、あとに泥みて論ずるによりて、蟻の磨を廻る如くに、迷ひたる疑ばかりなり。明德の上にて論ずれば、何の不審もなきものにて候。

體充曰、眞儒のすぎはひには、何たる所作を仕ものに御座候や。

師翁曰、儒道をおこなふ人は、天子諸侯卿太夫士庶人なり。此五等の人、よく至德要道を保合するを眞儒といふなり。然るゆゑに、天子諸侯卿太夫士庶人の所作が、眞儒のすぎはひにて候。五等の所作の外のすぎはひは、天命の生理にあらず。至德要道を保合する眞儒は、五等のうちにて貴賤貧富をえらばず、運命の種にまかせて無逸のつとめを勵ます外他念なし。元來産業は形の養なり、此形あれば必ず此養ある道理にて候。形を受くる初、氣化の運命に厚薄高下あるに依りて、人間の産業に貧富貴賤の差別ありて、人力の及ぶべきに非ず。其上貧富貴賤の外の飾は有りと雖も、養の正味は

論語に、子の曰く、賢なる哉回や、一簞の食一瓢の飲陋巷に在り、人は其の憂に堪へず、回や其樂を改めず

疏食飯水―論語に、疏食を食ひ、水を飲み、肱を枕にし

幸短命なりと承り及び候へば、古來聖賢、人間の願を思ふまゝに得たまはず候事、分明に候間、仰せ候所信をとりがたく候。

師翁曰、これにも心迹の差別御入候。迹にて御覧候ては御不審尤にて候。心にて見候へば、不審は少しもなく候。聖人の心は富貴をねがはず貧賤をいとはず、生を好まず死をにくまず、福をもとめず禍をさけず、唯身をたて道を行ひたまふばかりにて、凡夫のねがひは毛頭無き故に、自から願のまゝにて、凡夫のねがひを思ふまゝに求め得たるよりは、一くらゐ心の樂みはましにて候。その上凡夫のねがふ富貴は、小富貴といひてちひさき富貴なり。小富貴のほかに至富至貴といひて、廣大無類なる富貴あり。此大富貴は、凡夫の目には見えぬ故に、求め願ふ事なし。聖賢は此大富貴を思のまゝに得たまふによりて、小富貴をば忘れたまひて、求め願ひたまはぬ故に、疏食飯水簞瓢陋巷の貧賤に居たまひても、無上の眞樂つねに泰然とありて、凡夫の小富貴を得たるたのしみと、同じ日にも語るべき事にあらず。これ思ひのまゝなる富貴にあらずや。聖

いふなり。口耳の學にては、何程博學多才にても、心だて身持は本の生附に、自慢の魔心かさみたるものにて、聖人の位に至る事ならざる故に、また俗學ともいふなり。四書六經に心迹訓詁の差別ある事を發明しては、聖賢經學の書物を讀みて、正眞贋のかはりある事、言はずして分明に候。

體充曰、正眞の學問をしては、いかやうなる益御座候や。委しく承はりたく存じ候。

師翁曰、正眞の學問をして成就仕り候へば、心あきらかに身修りて、人間の願ふ程の事に叶はぬ事はなく候。是程の益のある事は、又と世に有るべしとも不レ存候。すこし學び候ても、それ程の益あるものにて候。

體充曰、仰せ候ところ眞しからず存じ候。人間のねがひ、品あまた御座候へども、つゞまる所は才德功業人にすぐれ、富貴長生の心のまゝならん事を願ふより外はなし。學問にて才德功業の人にすぐれ候はん事は、實にもにて御座候。富貴長生を願のまゝに得候はん事は、成り申すまじくと存じ候。孔子は位を得たまはず。顏子は簞瓢陋巷、不

六經—以上各所とも、一本にはすべて五經とあり

顏子云々—

至善に止る―一本聖賢時中の言行とあり

木椀―元の木阿彌といふ借字也

りたる心を、四書六經の心といふなり。その迹を書きのせたる四書六經の文字のことわりを、訓詁といふなり。其訓詁をまなび、其迹をよくわきまへ其心をよく採り用ひて、わが心の師範となし、意を誠にし心を正すれば、聖賢の心卽ちわが心となり、我が心卽ち聖賢の心に違はず。心だに聖賢の心にたがはず候へば、言行自から至善に止まるものにて候。斯の如くに學ぶを正眞の學問といふなり。聖賢四書六經の心を師として、我心を正しうする故に、心學とも申し候。學は平人より聖人の位に至るものにて候故、また聖學とも申し候。俗儒は訓詁ばかり耳に聞覺え、口にいふまでにて、迹の精義をさへ辨へざれば、まして心をとり用ひて師とする事は、夢にも見ざる故に、四書六經を讀むといへども、訓詁を記誦して口耳のかざりとなすばかりにて、心はもとの木椀に、驕泰の垢の染みつきたる者なれば、益はなくして却つてあしくなり候事尤にて候。聖賢四書六經の心を師として、我心を正しうする事をば、いさゝか心がけずして、只口耳の飾り博學に誇るをのみ務とする故に、心學とは言はずして口耳の學と

伊尹―殷初の人、湯王を輔けて天下を救ひし名臣

行ひ、太和を保合して利貞なる故に、時に逢うて用ひらるゝ時は、四海を正し天下を治め、伊尹太公の事業をなし、時にあはずして窮する時は、獨りその身をよくし、性を盡し命に至りて、孔孟の教化をなすを、正眞の學問といふなり。

體充曰、俗儒の讀む書も四書六經、眞儒のよむ書も四書六經にて候はゞ、學問にさのみ違ひはあるまじき事にて候。讀む書物が同じものにて候あひだ、俗儒の學問にても益なく、却つて悪しく成り候はゞ、眞儒の學問にても益なく、却つて悪しく成り可申と存じ候はいかゞ。

師翁曰、神理の精微をきはめずしては、心迹の差別知りわけがたく候へば御不審尤にて候。四書六經に、心と迹と訓詁と三つの差別御入候。聖賢の口に述べたまふ辭と、身に行ひたまふ事との二つを迹と云。その口にのべ身に行ひたまふ所の、本意の至善を心といふなり。心は無方無體無聲無臭にして、書附る事あたはざる故に、只迹ばかりを書きつけて、その迹のうちに含蓄して、後世の教となせり。その迹のうちに備

四書六經―大學中庸論語孟子を四書とし、易經詩經書經禮記春秋樂經を六經とす

よくしたる贋にて候。此外に道家者流、陰陽家、法家者流、墨家者流、縱横家者流、農家者流、小說者流、揚氏者流、大方此分なり。此の內日本へ流傳して廣まりたるは、記誦詞章と佛氏と二色なり。二つの內、世俗の專學問といへるは、記誦詞章なり。記誦詞章は、正眞の學問に殊の外近く候へども、志しの立やうと學問の仕樣にて、千万里の誤となれり。愼しみえらぶべき事にて候。

體充曰、記誦詞章の學問とは、いかやうなる學問にて候や。

師翁曰、世間にはやる、物よみ坊主衆の敎へらるゝ學問の事にて候。四書六經、その外諸子百家の書を殘さず讀み覺え、文をかき詩をつくり、口耳のかざり、利祿の需とのみして、心の驕慢いと深きを、俗儒の記誦詞章の學問といふなり。

體充曰、正眞の學問は、いかやうなる學問にて候や。

師翁曰、まづ明德を明かにするを、志の根本に立て定め、四書六經の心を師として、應事接物の境界を礪石と定め、明德の寶珠をみがき、五等の孝行五倫の道の至善をよく

伏犠—支那上世の帝王、太皇伏犠氏

て教ゆる人稀なれば學ぶ人もすくなし。世間にとりはやす學問は多分贋にて候。贋の學問をすれば何の益もなく、却つてかたぎあしく異風になるものにて候。正眞と贋のわかちを御存じなく候へば、御不審御尤もにて候。

體充曰、學問は皆一つなりと存候。然るに正眞と贋と二色ありと仰せられ候は、いか樣なる差別にて御座候や。

師翁曰、正眞の學問は、伏犠のをしへはじめ給ふ儒道なり。昔は教も學問も、此正眞の外はなかりしに、世の末になりて、何時となく大唐にも又夷國にも、學問の贋あまた出來てより、贋がちになりて正眞は衰微するなり。唐土にも一度は贋物ばかり時めきて、正眞をば取り失ひたる事あり。其贋ものは皆正眞を學び損うて、傍道へ行きたる者にて候故に贋の學問にて、心だて作法惡しくなる筈にて候。

體充曰、贋の學問は、何々にて御座候や、承りたく存じ候。

師翁曰、贋の學問さま〲品數多候へども、先記誦詞章の學問と名家者流との二つが、

翁問答　巻之二

體充問曰、世間の學問する人を見るに、さして學問のしるしといふべき益なし。却つて形氣あしく異風になる人有りと見えたり。所詮學問はせぬがましかと存じ候はいかゞ。

師翁曰、人間の生れつきさまぐ〜品多く候へども、大體の大わけは五等にきはまれり。聖人一等、賢人一等、智者一等、愚者一等、不肖者一等、凡そ五等なり。此の五等のうち、聖人は生知安行とて、學問せずして德を知りみちを行ひたまふ人なり。聖人より下は、學問せざれば德を知り道を行ふ事あたはず。人間に生れて德を知り道を行はざれば、人面獸心とて、形は人間なれども心は獸と同じ事にて、至誠無息の神理をとり失ひ、世俗の諺に、人の皮をかぶりたる犬といへる如くなれば、いと淺間しき事なるまゝ、學問は人間第一の急務にして、飢渇の飲食を求むるにひとし。誠に學問は爲いで叶はぬ事にて候へども、學問に正眞と贋と二色御座候。正眞の學問は、よく知

生知安行―生れながらにして知り安んじて行ふ也

向上の一路 ―此一節一本と文面非常に相違あり

師翁曰、それは、狂者の議論を聞き習ひて起る疑ひにて候。狂者は道の全體をよく見とどけざる故に、生死有無の差別を色々にわけて議論をなし、教を立てたり。その破裂の見を聖人は異端と名づけたまひて、是に似たる非といふものにて候。凡夫の見所にくらべては、まことに深く高きやうに候へども、聖人の見所に比べては、かくあさましき事にて候。本來太虛三才の道一貫にして、生死有無の差別なきものなり。聖人の儒道は、生死有無の差別なき、三才一貫の道を其まゝ教となし、學となす故に五倫の道、卽ち向上の道、向上の道が卽ち五倫の道と立て定めて、素其位而行、不願其外、下學而上達する一貫の神道、不二の妙理なり。五典の外に別に向上の一路を求むるは、たとへば飯と湯を捨てゝ、別に飢渴を止むる、飲食を求むるに異ならず。眞實神妙の天道を知らざる故に、種々樣々に迷ひたる取沙汰をする也。儒門に入りて迷を晴らし給ふべき事、人間第一の急務にて候。

曾子云々―論語に、曾子の曰く、君子は文を以て友を會し友を以て仁を輔く

今生は云々―佛敎出世間說より來れり

しへ給ふ。夫婦は人倫相續の始、生理の寓する所なるによつて、第三番に夫婦有」別とをしへたまふ。兄弟は天倫のしたしみ、骨肉同胞の愛おもき故に、第四番に長幼有」序とをしへたまふ。朋友は異親同氣の兄弟にて、天倫同胞の親よりは輕きによつて、第五番に朋友有」信とをしへたまふ。さて又父子の親を源にして、五典みな孝行なる事を示さんために、父子の親をはじめに敎へ給ふ。さて孝德を明かにするには、朋友の善を責むるを肝要とする事を示さんために、朋友の信を終にをしへ終ふ。曾子の以」友輔」仁といへるも此意なり。畢竟五經皆孝行のをしへなりと知るべし。味者のために五典十義をわけて示したまふものなり。至德要道三才一貫の心法、よく〳〵受用すべき事なり。

體充曰、今生は假の住居にて、五倫のまじはり幻の如くなれば、五典をよく行ふも、夢の中のいとなみにて候へば、さして至德要道といふべきにあらず。五典の外に別に向上の道あるべしと存じ候はいかゞ。

父子—木版本、父母とあり

れも人もみな眞實無妄の天道を、大父母として生れたる者なれば、形をもつて見れば他人なれども、道より見れば同胞のことわり有る故に、眞實無妄の信の道を守りて骨肉の思ひをなせり。是卽ち天命の本然、おのづからある道理なれば、五教の第五に朋友有レ信と說たまへり。

體充問曰、聖人五教を論じたまふ次第にも、心もち御座候や。

師翁曰、ふかき心御入候。父子の親は萬化のみなもと天叙の本なり。君臣の義は極を建つるの大義、人倫の綱要なり。夫婦の別は生々のもと、人倫相續のはじめなり。此三つのものは、五倫のうちにて綱要なる故に、三綱と名づけたり。しかる故に、三綱を先はじめに論じたまふ。さて三綱のうちにて、父子のみちは天性にて、君臣の義を兼ねたり。其上五倫の道孝行の條目にして、孝は人極の第一義なるによつて、一番に父子有レ親とをしへ給ふ。君は父の恩にひとしき故に、親に事ふる孝をうつして、君に仕ふまつる忠節となす。其うへ極を立つる本なるによつて、第二番に君臣有レ義とを

さい〱―屢々

信―論語に、人信なくんば立たず

なり。友達のまじはりに心友面友の差別、情義の親疎、さま〲ありといへども、畢竟皆信のみちを本とす。たがひの志同じく交り親しむを心友といふ。志は違ひぬれども、筋目あるか、或は同郷隣家、あるひは同官同職などにて、さい〲相交りて親しきを面友といふ。一目知る人も面友のうちなり。心友面友ともに情義の親疎同じからず。その程々の義理にしたがひて、威儀うや〱しく挨拶和原にして偽なく、勿論約束などの少しも違變なきが、信の道の大體なり。世俗は我心に眞實に思入れたる事をば、是非善惡をわかたず信なりと思へり、大きなる心得そこなひなり。たとひ眞實に思ひいれざる事にても、義理にかなふを信といふ。眞實に思ひいれたる事にても、道に背きたる事をば、人欲の僞りといふなり。世上の人の交りを見るに、信の道に叶ひたるは稀なり。信の道にだにも叶ひぬれば、互に命の用にもたつものなり。まして通財の義あれば、財寶の用にたつこと勿論なり。然る故に、友達のかたきをも討つ法あり。さて心友の交りは、善を責めて互に至德の靈寶をみがき明むるが肝要なり。朋友たる者、わ

切磋琢磨―詩經に、斐たる君子あり、切るが如く磋くが如く琢つが如く磨くが如し

論のことわりなり。兄は惠をもつて弟をひきゆる道とす。惠は友愛の二義を兼ねたり。愛は親の子を愛するが如くに、懇に親しむをいふ。友は友達のたがひに切磋琢磨するが如く、道を教へあやまちを匡し、至徳を明かにする樣に善を責むるをいふ。他人のとし若く位賤しきに交るも同じ理なり。他人にても幼に惠をほどこし、賤になさけ深くするは道理の當然なり。まして弟は親の身をわけて分形連氣の人なれば、友愛の惠を施すべき事勿論の義なり。この道理明かにして行ひがたき事ならねども、世上の迷へる人々を見れば、多分兄弟のあひだ他人よりもおろそかなり。僅の欲のあらそひにて、互にかたきの思ひを結ぶもあり。分形連氣の理を知らず、わが身にて我身を害ふありさま、愚痴の至極あさましき事なるべし。同じく親の身を分て生れたる者なれども、前後の序によりて、兄は貴く弟は賤しき次第ありて、惠悌の道序を本として行ふ所なり。天のさだめ給ふ次第にて、自から有る道なる故に、五教の第四に長幼有ㇾ序と說き給へり。朋友はたがひに信を以て相まじはる道とす。信は僞なく義理にかなふ德

は、妾婦の道也

三德―婦言婦容婦功の三か、又は三從の德なるべし

ふ德なり。正は義理作法を正しく守る德なり。妻は夫を天とたのみ、夫の家を妻の家となし、夫婦一體のことわりなる故に、わが本生の父母をば父母とせずして、夫の父母を父母とするは、聖人の定むるところにして、不易の天則なり。然る故に、先舅姑に孝行なるを、順正の第一とす。さて女の三德を守る、女事をよくつとめ、作法正しく夫の下知にしたがひ、家を齊へ子孫をそだて、宗族を和睦し、家人に恩を施すは婦德の大概なり。夫は陽德にしたがひ外を治て、和義の德を明かにして妻を倡ひ、妻は陰德にしたがひ内をさめて、順正の德をあきらかにして夫に從がひ、男女陰陽内外の差別、かくの如く正して家治まり、父母兄弟子孫臣妾、みな相親睦して、和氣合同する故に、夫婦の道別を本とす。此道理天命の本然おのづから有る故に、五教の第三に夫婦有ㇾ別と說き給へり。弟は悌を以て兄に仕ふる道とす。悌は敬ひしたがふ德なり。他人の年老い、位高きに事ふるも同じことわりなり。他人にても、老たるを敬ふは、道理の當然なり。まして親の身をわけて、我に先立ちて、うまれたる兄を敬ひ從ふこと勿

うとみを結ぶ―疎遠になる

順正―禮記に、順を以て正と爲す

ひ、臣下は忠敬の道を守りて、君につかふまつりて、君臣交泰する道理、天命の本然おのづから有る義なる故に、五教の第二に君臣有ㇾ義と說きたまへり。夫は和義を以て妻をいざなふ道とす。和はしたしみ和合する德なり。義は道理にしたがつて裁判し、非道をえらび捨つる德なり。大抵夫婦の間は、愛欲の私に溺れて義理の裁判なく、妻にまかれて、親子兄弟骨肉の親をもいひへだてられて、うとみを結ぶ事甚しければ、家をやぶり國を失ふもの、古來その數を知らず。また間に夫婦の交りそむき〳〵にして、非法見苦しきもあり。是皆人心の迷ひなり。夫婦のちなみ、人間の結び合ふたる如くなれども、根本は形を受くる初より、氣合の緣、天の定むる所にして、親の結べる所に非ず。その上妻は祭祀のたすけ、子孫相續の本始なれば、したしみ和合すべき事勿論なり。しかれども義理の裁判なければ、愛欲の私におぼれ、家道みだれ別道の常を失ふ故に、和と義との二つをあはせて、夫の妻をいざなふ道とす。妻は順正の二德を以て夫につかふる本とす。順は心だて柔軟に、ものいひ顏ぶり起居振舞までも、柔かにしたが

龍逢比干―殷末の忠臣

棘草―一本、刺草に作る

身もち道にかなひ、萬化の本を正し、國もゆたかに末長く、榮え給ふやうにと一心に思入り、わが身の爲はすこしもかへりみず、龍逢比干の諫めて死したる心をまもり、身をすてゝ主君の爲を、第一にするを大忠といふ。是は家老出頭の忠節なり。是非善惡をえらばず、主君の下知に從つて、一心に君をうやまひ、身を捨てゝ其位々に職分を勤仕するを小忠といふ。これは小身なる臣下の忠節なり。軍忠をもつて論ずれば、二心なく身をすてゝ、禮義正しく情ふかく、英雄の心をとり軍兵をなつけ、謀を帷幄のうちに運らし、勝つ事を千里の外に決し、百戰百勝の功をたつるを大忠といふ。是は軍の大將の忠節なり。ふた心なく身を捨て、さきがけをして鑓をつき、首をとるを小忠といふ。これは葉武者の忠節なり。さてまた庶人をば棘草の臣といふ。その國に産業をつとめ生理をとぐるは、主君の恩德なる故に、扶持をかうぶらざれども臣下といふなり。その國の仕置法度をよく守り、その職分をよくつとめて、年貢公役を懈怠せず、一心に國君を恐れ敬ふは庶人の忠節なり。君は仁禮の德にしたがつて、臣下をつか

幹—家の柱たるべき主要の部分の義

臣のつとめとす。上は國の幹、君の爪牙なれば、その心を失ふべからざる事勿論なり。さて農工商は國の寶なれば、一入あはれみ育くみて、其利を利としてその樂をたのしむ如く政をなすは、君の仁禮を行ふ大概なり。臣下は忠節をもつて、君に仕ふまつるを根本とす。忠は二心なく一筋に君のためのみ思入り、それ〴〵の職分をよく勤めて、わが身をすてゝ奉公する德なり。それ〴〵の位によりて、大小の差別はあれども、忠の心法はおなじものなり。君の恩は親の恩にひとしく重き厚恩なれば、親に事ふる如く心を盡して仕ふまつる也。親は此形をうみ育てたる恩なり。君はこの身を養ひたまふ恩なり。親なければ此身なし、君なければこの身の養ひなし。みな命を保つ恩なる故に、親にも君にも命をすてゝ奉公する道理なり。大臣の忠節は其事大なる故に、大忠といひ、小臣の忠節は其事小なる故に小忠といふ。主君の嫌ふ事にても、君のため國のため家中のためによき事なれば、主君の必ず行ひ給ふやうによく諫をなし、主君のすき好む事にても、あしき事なれば必ず止めたまふやうによく諫めて、主君の心だて

禀賦—先天的の性質

おもせ—おもし

下に貴賤大小の位さま〳〵ありて、さしつかふ道理きはまりなしといへども、畢竟は仁禮の二徳より外はなし。全孝の心法にて、天地を萬民の大父母となして見れば、われも人も、人間の形ある程の者は皆兄弟なり。しかる故に聖人は、四海を一家中、國を一人と思しめすとなり。我と人との隔をたてゝ、けはしく疎みあなどりぬるは、迷へる凡夫の心なり。禀賦厚薄の高下によりて、君となり臣下とはなれ、元來骨肉同胞のことわりあれば、たとへわが扶持せぬ者なりとも、憎み侮るべき事にあらず。ましてわが扶持する者をば、いかにも情ふかく禮義正しうして、侮り輕しむべからざる道理明かなり。大臣は家のおもせ君の腹心なれば、高位大祿をあたへ、大方の事うち任せてはからはせ、禮義正しく敬ひて情深くあるべし。位刑賞威恵の權柄をば、苟且にも貸しあづけぬものなり。大臣より下の諸士は、其位々分々相應の、程々をよく分別して、眞實に情深くあなどり輕しめず、それ〳〵の器量をよく見わけてさしつかひ、忠節あるにはその大小輕重にしたがひて、褒美をあたへ位をあげ、知行を加増して群

孝經云々ー一本、孝經の大意を說き、道を悟るの素となし、六藝のうち急用なる云々とあり

母などの心だて身持を、見あやかり聞あやかるによりて、父母乳母の德敎を、子孫に敎ゆる根本とする故に、乳母の人がらを選び、父母の身を修め心正しくして、全孝の道を口にかたり身に行ひて、をしへの根本を培養すべし。八つ九つにもなりぬる時は、むまれつき利根なる者には孝經をよませ、をり〳〵孝經のうち急用なる藝よりそろ〳〵と習はし、才德成就のをしへを專とすべし。生れつき愚鈍にして、才德成就の望なりがたきには、孝經の義理をいつとなく語りきかせて、孝德の本心を失はずして、好人となる敎を專とすべし、成童の時よりの敎は、師匠と友をえらぶを敎の肝要とす。さてすぎはひは、それ〴〵の器用にしたがひ、それ〴〵の運命を考へて、本分の生理、士農工商のうちを謀りさだむべし。これ子に敎ゆるの大方なり。親と子は元來一體分身なれば、親の慈も子の孝も、本然自有の親愛なる故に、聖人五敎のはじめに、父子有レ親と說き給へり。君は仁と禮とをもつて、臣下をさしつかふを根本とす。仁は義理にしたがひて人を愛する德なり。禮は位々の道理にしたがひて、人を敬ひ侮らざる德なり。臣

鶺鴒—斥鷃の誤なるべし、荘子逍遙遊に、斥鷃大鵬を笑ふ事あり

ざれば子なきにひとし。迷へる人は、眼前一旦の富貴はまれをのみ、無上のものなりと思ひ入りて、無始無終至極の靈寶をば、夢にも知らざる故に、當座の仕合だによければ、其外は何もいらぬものなりと思ひ、本末是非をいひみだり、鶺鴒の大鵬を笑ふに異ならず。子孫にをしゆるには、幼少のときを根本とす。むかしは胎教とて、胎内にあるうちにも母德の教化あり。いま時の人は至理を知らざる故に、幼なきうちには教は無きものなりと思へり。教化の眞實を知らずして、たゞ口にていひ教へぬるばかりを、教と思ふより起りたる迷なり。根本眞實の教化は德教なり。口にては教へずして、我身を立て道を行ひて、人の自から變化するを德教といふ。たとへば水の物をうるほし、火の物をかわかすが如し。國土の方角水土の風氣によりて、人間の氣質すこしづゝかはりありといへども、詞つきには元來京田舎の差別なき故に、赤子の時より京にて育てぬれば、關東にて生れたる者も、京言葉になるものなり。關東にて育てぬれは、京にて生れたる者も、關東言葉になるものなり。しかるごとく、稚き者の心だて身持も、父母乳

姑息は我子を愛するの謙辭なり、轉じて慈に失するをいふ

とへたり。姑息の愛とは、さしあたりては慈愛に似たれども、その子氣隨になりて、才もなく徳もなく、禽獸に近くなりぬれば、畢竟は子を憎みて、惡しき道へひき入るゝに同じき故、我身は親の身をわけて受けたれば、すなはち親の身なり。親にうけたるわが身をわけて、子の身となしたる者なれば、子の身も根本は親の身なり。子をむざと育てゝ、あしき道へひきいるゝは、親の身を惡道へおとすに異ならざるゆゑに、子によく敎へざるは大不孝の第一なり。さて又家をおこすも子孫なり、家をやぶるも子孫なり。子孫に道ををしへずして、子孫の繁昌をもとむるは、足なくして行く事を願ふにひとし。子孫の生附さま〴〵ありて、一概に敎の法を論じがたしといへども、まづ道を敎へて、本心の孝徳を明かにするを敎の根本とす。才藝人にすぐれ仕合無類にして、人間の譽ありといへども、心ねじけて本心の孝徳なき者は、天地鬼神のにくみ棄てたまふ所なれば、一旦榮花にほこれども、必ず一代二代のうちに子孫絶滅する者なり。たとひ絶滅せざれども、あるに甲斐なき人がらにて、先祖の生性この人に至りて、相續せ

愉色—孝子の深愛ある者は必ず愉色あり、といへる語に取れり

舐犢の愛—

苦勞をかへりみず、我身と妻子の私用を第二にして、一家の内にての食物の滋味をそなへ、衣服の輕煖をさゝげ、いかにも愉色をつくし、父母のうけ悅ばるゝやうにとりなし、若又やまひある時は、良醫の療治をもとめ、看病の勞をつくしぬるは、よく養ふの大槪なり。もしまた父母不義あらば、何となく父母の感悟ある樣にいさむべし。もし又父母よろこばずして怒をなさば、別して色をよろこばしめ、孝をおこし敬を起して、親の怒にさからふべからず。かくの如く幾度もいさめ、或は親の相口の友をたのみて諫むべし。親には道を悟らしむるやうにするが孝の第一なり。父母旣に天年かぎりありて、永き別のうれひにあたる時は、かなしび誠をつくし、禮法をもつて葬をなし、喪にゐて哀戚をつくし、宗廟祠堂をたてゝ鬼神につかへ、四時俗節忌日の祭に誠敬をつくして、合奠の孝をおしきはむるを、子の孝といふなり。親の子を慈愛するには、道藝を敎へて子の才德を成就するを本とす。當座の苦勞をいたはりて、子の願のまゝに育てぬるを姑息の愛といふ。姑息の愛をは舐犢の愛とて、牛の子を育つるにた

昊天罔極—詩經蓼莪篇に、之が德に報いんと欲すれば昊天極り罔し

なるは、行ひやすき境界なれば、さして孝行といふべき事にあらず。親の慈ふかく、あてがひ無道なるに孝行なるこそ、まことに有りがたき孝子なれ。大舜の行ひ給ふ孝行にてよく體認すべし。「昊天罔」極の恩深き親と、毛頭恩なき道行づれの人と、同じく思ひなすはあさましき迷ひなり。此迷ひ深き人は、生死ともに天刑を受くるもの也。おそれつゝしむべき事なり。孝行の條目あまたありといへども、畢竟は二ケ條につゞまれり。第一には父母の心の安穩なるやうにするなり。第二には、父母の身をよく敬ひ養ふなり。父母の心の安穩なるやうにするには、先わが身を修め心を正しくして、好人となり、それぐ〵のすぎはひの所作をよくつとめ、財用を節すれば、父母の心に、子のわざはひに遭ひ貧窮に及ぶべき恐れなし。さて妻子臣妾をよく教化し、家内の者へみな聲をやはらげ、氣を下して父母を愛敬し、かりそめの下知もそむき怠らず、兄弟一族和睦するやうにすれば、父母の目にふれ耳に入る事、みな父母の心にかなひ、おのづから父母安樂になるものなり。さて又面々の力にしたがひて、十分に心力をつくし、

悖德—德に戻りて犯し背く也

なれ。此身を生みたる人は父母なり。父母この身を生みたる故に、富貴の外飾をもうけ、妻妾のたのしみをもなし、子を育てゝ老後のたすけ共するなり。然れば富貴をさづくる人の恩も、根本父母の恩なり。妻妾のたのしみをなすも、根本父母の恩なり。子の養をうくるも、根本父母の恩なり。何ごともみな父母の恩ならざるはなし。父母の恩は廣大無類にして恩の大根本なり、然るゆゑに父母を愛敬するを本として、おしひろめて餘の人倫を愛敬し、道を行ふを孝といひ順德といふ。大根本の恩を忘れて、父母をば愛敬せずして、枝葉のちひさき恩を報いんと、他人を愛敬するを不孝といひ悖德といふ。悖德の人は、たとひ才能人に勝れたりとも眞實の人にあらず。かならず終には神明の罰にあたるものなり。親の慈悲淺く、不義無道のあてがひ有るによりて、不孝なるをば、迷へる凡夫は實にもと思ひ許すと見えたり。一人まよひのうちの迷ひなり。その子細は、禮義正しく情深くあらば、一日も知らぬ道行づれなりとも、骨肉の恩ひをなし、我もまた恩をもつて報ゆべし。然る時は、親の慈深くあてがひ道あるに孝行

規範の義
跪乳の敬—羊の子は母の乳を飲むに跪きて飲むといふ

といふ。この迷ひ深きは、鳥獸にも劣れり。烏は反哺の孝をおこなひ、羊は跪乳のうやまひをなせり。人間の形をうけたる者、恥おそるべき事なり。心の闇にまよひて、孝徳の昧きありさまを、あらまし語りて、われ人のいましめとすべし。迷へる人のならひにて、富貴を無上のものと思入り、第一の願とすれば、富貴を求むるたすけとなる人を、限なくうやまひ追從し、惡言の怒をうけて、堪忍して辱とせず、父母をば有るが無しにあひしらひ、一言の惡口を受けても、甚怒り罵りてあさまし。あるひは父母にそむきて妻妾を愛し、あるひは父母を捨てゝわが子を養ふもあり。もしまた親の慈悲あさく、不義無道のあてがひあれば、恨を含み仇敵の思ひをなせり。富貴を求むるたよりとなれる人を、うやまひ大切に思ふは、我身をかざる恩あるによつてなり。妻妾を寵愛するは、わが身の欲を遂げてたのしむ故なり。子を愛するは、わが身を分けたる故なり。この身なければ、富貴の外飾をかざるべき下地なし。また妻妾をたのしむべき者なし。また子にわけ與ふべき身なし。富貴も妻妾も子も、此身ありてこそ用に立つもの

一飯の恩—史記范蔡傳に、一飯の德も必ず償ふ

聖謨—謨は謀也、極めて勝れたる

歎きとなせり。父母かくの如くの慈愛、かくの如くの苦勞をつみて、子の身を養ひ育てぬれば、人の子の一身、毛一すぢに至るまで、父母千辛萬苦の厚恩ならざるはなし。父母の恩德は、天よりも高く海よりも深し。あまりに廣大無類の恩なる故に、本心のくらき凡夫はむくいん事を忘れて、却つて恩ありとも恩なき共思はざると見えたり。人間の形有るほどの者は、いかなる愚痴不肖の賤男しづの女に至るまでも、一飯の恩をむくいんと思はざるは有るまじ。恩を報いんと思ふは、孝德の本心ある故に、そのはづれの少し現れたるものなり。本心の孝德ありて、父母の恩を報いん事を忘れぬるは、人欲の雲におほはれて、明德の日の光くらく、心の闇にまよふ故なり。九牛の一毛いひのぶる、父母の厚恩をよく體認して、一飯の恩にくらべて見れば、人欲の雲はれ明德の日のひかり明かにして、心の闇はれ、父母の厚恩を報いんと思ふ本心の孝念、かぎりなく開發すべし。この一念をもて孝行の根本となし、孝經の聖謨を鑑として、身をたて道を行ふの大孝を受用すべし。昊天罔極厚恩を忘れ、心の闇いとくらきを迷

ねじき—寢敷の義歟

有室—男子三十にして室あり、といふ語より出づ

には、まづ父母の恩德を觀念すべし。胎育のはじめより十ヶ月のあひだ、母は懷孕のくるしみをうけ、十病九死の身となり、父は孕子の保全、產育の安穩なるべき事をねがひ憂へて、千辛萬苦を心に忘れず。臨產の時至りては、母の身はきりさく程の惱をうけ、父の心は煩熱の苦しみをいだけり。幸にして母子安穩なれば、一命再續のよろこびをなし、母はぬれたるねじきに臥して、子をば乾ける裀にふさしめ、子よくねぶりぬれば、母の身屈伸をなさず、身垢つきけがれても、沐浴の暇なく、衣裳身のつくろひ等いと取り亂し、子の安穩を思ふよりほかは他念なし。若すこしにても病みぬれば、醫をもとめ神にいのり、身をもて代らん事をおもふ。乳哺三年のあひだ、父母の苦勞そのかずを知らず。入學のとしになりぬれば、師をもとめ道ををしへ藝をならはし、才德の人にすぐれん事をねがひ、旣に有室のとしに至りぬれば、伉儷をもとめ家業を立てゝ、富み榮えん事を謀り願ひ、その子才德人に勝り、仕合もよく榮えぬれば、限なくよろこびの眉をひらき、若又才德も人に劣り仕合も人に劣りぬれば、起臥たえず

心のうち一一本、心は身のうち云々とあり

しむを信のみちといふ。此親義別序信の五つを五典といふ。人間の心に仁義禮智信の五常の性そなはりて、一身生化の主本たり。五常の性感通して五典のみちとなる。父子の親は仁なり。君臣の義はすなはち義なり。夫婦の別は智也。長幼の序は禮なり。朋友の信はすなはち信なり。五倫は外にある故に、至理を知らざる人は、五倫の道といへば皆外にありて、わが心の中になきものなりと思へり。あさましき事也。天地萬物みな神明靈光のうちに、生化するものなる故によりて、わが心の孝德あきらかなれば、神明に通じ四海に明かなる故に、天地萬物皆わが本心孝德のうちにあるもの也。迷へる人は、心のうちにばかり有ると思へども、根本は心の内に生れ出たる身なり。然る故に、さとりたる眼には、内外幽明有無の差別なし。五倫のみちを外と見て厭ひすて、内外幽明有無の二見をたつるは、さとりに似たる迷ひなり。五倫の道をこまかに分けて論ずれば、五典十義となれり。先子の孝行といふは、人間百行の源、人倫第一の急務なる故に、聖人の五敎に父子有親と第一に説給へり。孝德をあきらかにせんと思ふ

交泰―緝睦して安平なるをいふ

る人は澤山に候へども、此本意をさとり得たる人は稀に候。

體充曰、五倫の道その名をば承はり候へども、くはしき理をば不レ存候。全孝の心法日用の急務にて候へば、つまびらかに承はりたく候。

師翁曰、倫は次第なり。人間の次第差別五つある故に、五倫となづけたり。五倫のみち常にありて、無レ始無レ終ものなれば五典といふ。典はつねとよむ字なり。五典を人に教化するを五教といふ。五典の心のうちに具りたるを五常の性といふ。親と子と一倫なり、君と臣と一倫なり、夫と妻と一倫なり、兄と弟と一倫なり、友だちの交り一倫也、これを五倫といふ。人間の次第差別この五つにきはまれり。世間に五倫にもれたる人間はなきもの也。親は慈に子は孝行にして、よく相愛敬するを親のみちといふ。君は仁に臣下は忠節をつくして、君臣よく交泰するを義のみちといふ。夫は義に妻は順にして、夫婦よく和合するを別の道といふ。兄は恵に弟は悌にして、兄弟よく和睦するを序のみちといふ。友だちの交り互にいつはりなく、たのもしくよく相親

とき給ふ。五等皆その位のうちにて、第一重きところを探りて說き給ふ。道理はみな相通ずるなり。よく〳〵體認すべし。

體充問曰、五等の孝の說を承はり候へば、親を愛敬するばかりは孝行にてはなく、その德を明かにして、夫々のすぎはひの所作を、精に入てつとむるが、孝行の本意にて候や。

師翁曰、さやうにて候。畢竟は人の明德を明かにするが孝行の本意にて候故に、心にむざとしたる一念をおこし、或は怒るまじき事に腹をたて、よろこぶまじき事をよろこび、ねがふまじき事を願ひ、悔むまじき事をくやみ、恐れまじき事を恐るゝも皆不孝なり。一言の僞も不孝なり。まして不義無道を身におこなひ、死すべき處にて死せず、死ぬまじき所にて犬死をなし、取るまじき物をむさぶり、取るべき物をとらずして、飢寒に及びなどするは、皆以ての外の大なる不孝なり。心にかけて愼しみ守るべき事なり。此道理を知りあきらめて、心に守り身に行ふを儒者の學問といふ也。世間に學問す

樊噲―漢の高祖の勇臣

庶人云々―孝經に、天の時に因り地の利に就き、身を謹み用を節して以て父母を養ふは、此れ庶人の孝也

ひ、肝要の禮法藝能など疎々しからず、軍陣にのぞむか、又は君長の難にあへる時は、樊噲をもあざむく程の武勇をいだし、武功をたてその祿位をたもち、祭祀をまもりぬるは、士の孝行の大概なり。

體充問曰、庶人の孝行はいかゞ。

師翁曰、農工商、いづれもその所作をよく務め怠らず、財穀をたくはへ、むざとつかひ費さず、身もち心だてよく愼しみ、公儀をおそれて法度にそむかず、我身、子の事をば第二とし、父母の衣服食物を第一におもひ入、心力を盡して及ばぬきはをも調へて、父母の受けよろこぶ樣にもてなしてよく養ふは、庶人の孝行なり。

體充問曰、五等の孝のうち、只庶人にばかり父母をやしなふと說たまふは、如何なる故にて候や。

師翁曰、士よりうへは財乏しからず、やしなふ事はいふにおよばず。庶人は財ともしくして、十分に心を苦しみ力を盡さゞれば、衣服食物たらざる故に、庶人にばかり養を

さかえ、永く社稷をまもりて、その先君につかへぬるは諸侯の孝の大概なり。

體充問曰、卿太夫の孝行はいかゞ。

師翁曰、其位の職分に、愛敬の孝德を明かにするが卿太夫の孝なり。心を正しくして身を修め、苟且の行跡にも人の手本となり、言葉一つもあだならぬ樣によく愼しみ、君のため天下のため國のためのみ思ひいれ、我私のいとなみ、利害のはかりごとをば露程も心にかけず、治まりたる時は、天下國家安穩のまつり事をなし、亂るゝ時は大將となりて軍兵をさしつかひ、軍法よく心得て謀をめぐらし、百戰百勝の功をたて、よく其の位をたもち、その宗廟を守りぬるは、卿太夫の孝の大概なり。

體充問曰、士の孝行はいかゞ。

師翁曰、かりそめにも二心なく、わが身を捨てゝ君を愛敬する心を失はず、それ〴〵の職分をよく守りつとめ、その長をうやまひ從ひ、傍輩にたのもしく、僞なく人あひ柔かにねんごろにして、たちゐ振舞言葉づきいやしからず、心だて身もち義理にかな

—孝經に、親を愛する者は敢て人を悪まず、親を敬する者は敢て人を慢らず、愛敬親に事ふるに盡して、然る後に徳教百姓に加はり四海に刑る、蓋し天子の孝也

—國持の作法

—國主諸侯としての禮儀作法也

萬化の大本をたてさだめ、賢人を愛敬して宰相となし、善人を愛敬して器量にしたがひて、それ〴〵の官職を授け、小國の臣下をもあなどり忘れず、禮樂刑政學校のをしへいと正しく、天下の人毎にその本心の孝徳をおこし、その利を利とし、その樂を樂むやうに、萬民を愛敬すれば、四海みなその徳教に化し徳澤にうるほひて、家毎に孝子、國みな忠臣となりて、天下一統に穏にして、萬國のよろこぶ心を得て、その先王につかへ給ふは、天子の孝の大概なり。

體充曰、諸侯の孝行は如何。

師翁曰、愛敬の孝徳を一國にあきらかにするが諸侯の孝行なり。先身もち心だて正しくして少しもおごる事なく、財用の節を制して國持の作法をよく守り、家老大臣をうやまひ、もろ〳〵の臣下を體にして情ふかく、かりそめにも無禮をなさず、臣下の心だて器量をよく試て、出頭諸奉行の職をさづけ、しおきを淳にして百姓をあはれみ、なかんづく鰥寡孤獨のたより無き者をとりたて、國中臣民のよろこぶ心を得て、國富み

發端云々ー夫孝は親に事ふるに始まり、君に事ふるに中し、身を立つるに終る、とあるに依れり

天子の孝行

を、後世昧者のために分辨を說き明め給ふ。たとへば孝德は大海の如し。五等の位は器の如し。器を海へ入れて水を汲むに、大小方圓のもやうはかはれども、水はおなじ水なるが如し。むかし聖人の御代には、人間のくらゐ五等の外はなき故に、五等の孝を發明し給ふ。

體充問曰、孝經發端の章に、餘の人倫は言はずして、中於事君と、忠の一典を說きたまふは、何たる故にて候や。

師翁曰、君父は恩ひとしき者なり。父生之君食之といひて、皆命をたもつ恩なり。親は始なる故に孝の根本とす。恩ひとしき故に、中於事君と第一に說きて、孝德萬事萬物に感通する例となして、兄弟夫婦朋友の道をそのうちに含み兼ねたり。孝經の篇末に、ひとり事君の一義を發明し給ふも此意なり。

體充問曰、天子の孝行はいかゞ。

師翁曰、愛敬の孝德を天下に明にするを天子の孝行とす。先みづから其德を明にして

私—私欲なり

五等云々—一本、人間尊卑位に五段あるに依る

そめにも偽をいはず、すこしの事も不義を働かず、視聽言動みな道にあたるを、孝行の條目とするなり。しかる故に一たび手をあげ、一たび足をはこぶにも孝行の道理あり。人間千々萬々のまよひ、みな私よりおこれり。私は我身をわが物と思ふより起れり。孝はその私を破りすつる主人公なる故に、孝徳の本然をさとり得ざる時は、博學多才なりとも、眞實の儒者にあらず、まして愚不肖は禽獸にちかき人なるべし。

體充曰、孝行に五等の差別あるは、いかなる故にて候や。

師翁曰、五等は人間五段の位なり。天子一等、諸侯一等、卿太夫一等、士一等、庶人一等、すべて五等なり、天子は天下をしろしめす御門の御位なり。諸侯は國ををさむる大名の位なり。卿太夫は天子諸侯の下知をうけて、國天下のまつりごとをする位なり。士は卿太夫につきそひて、政の諸役をつとむる侍の位なり。物作を農といひ、職人を工といひ、あき人を商といふ。この農工商の三つはおしなべて庶人の位なり。孝德は同一體なれども、位によりて事の大小高下ある故に、その位々の分際相應の道理

身を立て道を行ふ—孝經に、身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なり、身を立て道を行ひ名を後世に揚げて以て父母を顯はすは孝の終也

體みなそなはりたる故により、身を立て道をおこなふをもつて功夫の要とす。離レ身無レ孝、離レ孝無レ身故に、身を立て道をおこなふが孝の全體なり。親によく事ふるも、則身をたて道を行ふ一事なり。身を立つるといふは、我身は元來父母の身をわけて受けたるものなれば、わが身を父母の身と思ひさだめて、苟且にも不義無道をおこなはず、父母の身を我身と思ひさだめて、いかにも大切に愛敬して、物我のへだてなき大同一貫の身をたつる也。さて元來をよくおし極めて見れば、わが身は父母の身を分けて受け、父母の身は天地の氣をわけて受け、天地は太虛の氣をわけて受けたるものなれば、本來わが身は太虛神明の分身變化なる故に、太虛神明の本體をあきらかにして失はざるを以て、身を立つるといふなり。太虛神明の本體を明めたてたる身をもつて、人倫にまじはり萬事に應ずるを、道を行ふといふなり。かくの如く身をたて道を行ふを孝行の綱領とするなり。親に愛敬の誠をつくし、君に忠を盡し兄には悌を行ひ、弟には惠をほどこし、朋友には信にとゞまり、妻には義をほどこし夫には順をまもり、かり

卞和が璧―楚人卞和璧を得て是を王に獻ず、後趙氏の有となり連城璧と稱せらる

なく朋友を愛敬するを信となづく。一身を以ていへば、耳目の聰明、四肢の泰重、行住坐臥の法則、皆愛敬の感通なり。かくの如く親切なる道德なれば、いかなる愚痴不肖の賤男賤女、五六歳の幼童までも能く知りよく行ひ、さてまた至極の全體は、聖人といへども盡しがたきものなり。まことに不二の要道、無雙の重寶なれども、卞和が璧となりて世俗の闇をてらさゞる事、歎かはしき事なるべし。

體充曰、今までは親をよく養ふをのみ孝行なりと思へり。あまねく世俗さやうに心得たると見えたり。いま先生の敎へを聞けば、孝といへるものは、外もなく内もなき無上の妙理なり、守行ふべき術をくはしく承りたく候。

師翁曰、元來孝は太虛をもつて全體として、萬劫を經ても終りなくまた始なし、孝のなき時なく孝のなき者なし、全孝圖說には、太虛を孝の體段となして、天地萬物をそのうちの萠芳としたり。かくの如く廣大無邊なる至德なれば、萬事萬物のうちに孝の道理そなはらざるはなし。就中人は天地の德、萬物の靈なる故に、人の心と身に孝の全

五倫—君臣父子夫婦長幼朋友の間相交はるに道を以てするをいふ

思へり。孔子なげかはしくおぼしめして、萬世の盲聾を開かんために、孝德神妙不測廣大深遠にして、無始無終の神道を孝經に發明したまふ。孝德の感通をてぢかくなづけいへば、愛敬の二字にきはまれり。愛はねんごろに親しむ意なり、敬は上をうやまひ、下をかろしめ侮らざる義なり。孝はたとへば明なる鏡の加し。向ふ者の形と色とによりて、鏡のうちの影は品々かはれども、明にうつす鏡の體は同じものなり。その如く父子君臣の人倫にあひ交はる事は、千々萬々に品かはれども、愛敬の至德は通ぜざるところなし。あらまし大概を論ずるに、先五倫を以ていへば、親を愛敬するが感通の根本なる故に、本分の名號をあらためず、孝行と名づけて、さてそれより感通の光景によりて、名をたて敎を示したまふなり。二心なく君を愛敬するを忠となづく。禮儀たゞしく臣下を愛敬するを仁と名づく。よく敎へて子を愛敬するを慈となづく。和順にして兄を愛敬するを悌となづく。善をせめて弟を愛敬するを惠となづく。正しき節をまもりて夫を愛敬するを順となづく。義を守りて妻を愛敬するを和となづく。僞

り

地の道―一本、此下に人にありては人の道、の一句を挿めり

りて、天の織女を妻となし、吳二は此寶をまもりて、宿惡の天刑をまぬがれたり。古來靈驗かたり盡しがたし。よく〱信仰して受用すべき事なり。

體充曰、さやうの寶は、誠に求めまほしき事にて候へども、あまり廣大なる道なれば、われ〱が分にては及びがたく覺え候。

師翁曰、それはあしき心得にて候。廣大なる故に我人の及ぶことにて候。たとへば日月のひかりは廣大なるによりて、目ある程の者はあまねく用ゐ得るが如し。この寶も廣大なる故に、貴賤男女をえらばず、をさなきも老たるも、本心あるほどの人は、あまねく守り行ふみちにて候。この寶は、天にありては天の道となり、地にありては地の道となる。元來名はなきものなれども、衆生にをしへ示さんために、昔の聖人その光景をかたどりて孝となづけ給ふ。それより此かた、愚痴不肖の賤男賤女にいたるまでも、その名をば知るといへども、その眞實の道理をば、老師宿儒知見拔群の人さへさとり得る事稀なり。然る故に、世俗孝は親に事ふる一事となして、淺近の道理なりと

れば―程子曰く、之を放てば六合に弥り、之を巻けば密に藏せらる

能く知り能く守る―一本、此經をよく尊信表章するとあ

外にわたり、取りをさむれば我心の密にかくる。まことに神妙至極の靈寶也。しかる故に此寶をよく守れば、天子はながく四海の富をたもち、諸侯はながく一國の榮花をうけ、卿太夫はその家をおこし、士は名をあらはし位をあがり、庶人は財穀をつみたくはへて、其樂をたのしめり。此寶をすてゝは人間の道たゝず。人間の道立たざるのみならず、天地の道もたゝず。天地の道立たざるのみならず、太虚の神化もおこなはれず。太虚三才、宇宙鬼神、造化生死、悉く此たからにて包括する也。此寶を求めまなぶを儒者の學問といふなり。生れながらにして保合し給ふを聖人といふ。學問によりて保合して、よく守りおこなふを賢人といふなり。孔子萬世のやみを照さんために、此寶をもとめまなぶ鏡に、孝經をつくりたまふといへども、秦の代よりこのかた二千餘年のあひだ、十分によく學び得たる人まれなり。今大明の代にいたりて、能く知りよく守る人おほし。大舜は此たからを保合したまひて、庶人の中より天子のくらゐにのぼり給ふ。文王はこの寶を保合し給ひて、天帝の左右にまします。董永はこの寶をまも

翁問答

巻之一

體充問曰、人間の心だてさま〴〵ありて、行ふところその品おほし。其うちに、是非混亂していづれに從ふべしとも覺えず。人間一生涯のうち、いづれの道をか受用の業となすべく候や。

師翁曰、われ人の身のうちに、至德要道といへる天下無雙の靈寶あり。このたからを以て心にまもり身に行ふ要とする也。此たからを以て五倫の道を行へば、五倫の間みな和睦してうらみなし。此寶を以て神明につかふまつれば、神明納受したまふ。此寶を以て天下を治むれば天下平になり、國を治むれば國をさまり、家を齊へば家とのほり、身に行へば身をさまり、心にまもれば心明かなり。おしひろむれば天地の

おしひろむ

き蓄なければ、只山がつの花に向へるに異ならず。門下に體充とて俊秀なる人ありて、平日疑問論難やむときなし。傍にて聞くといへども、我心の及ばぬ際は記憶にあたはず、心の粗、通ずる事あればしりぞいて倭語にて書つけ、遺忘にそなへぬ。斯して年をつもりぬれば、箇條もあまたになり、心に守り身に行ふべき道理も、すこし開悟に似たる樣にあれば、もしまた我如きの愚者あらば、万一工夫の助けにもなるべきかと、改ためうつし、翁問答と題號して、巾笥にかくし置きける。言葉いやしく理きこえがたけれども、有道に就いて正すべきほどの事ならねば、只愚者のかきつけたる儘にして、翁の本意にたがふ所多くあるべし。若よむ人あらば、辭にて志をそこなはずば、吾人の大幸たるべきか。

翁問答序

志學の年より、心にまもり身に行ふべき道理を求め得まく思ひ立ち、禪門教門の釋敎を、年經て學ぶといへども、其言詖遁にして、其道偏僻なり、其法また人倫日用の受用にたよりあらざる故に、儒門に入りて、四書五經の眞敎をうけて、切磋琢磨をはげませども、三隅を反ぜざる程の下愚なれば、開悟の自得およびがたく、すでに道に立つべき歳をも空しくうちすぎぬ。愚者のあやまるならひなれば、性のつたなき事を忘れて、却て師範の其人にあらざるかと疑ひ、明哲の先學もがなと寤寐に忘れず。隣里に天君とて、逸民とおぼしき老翁ありけると、友のかたりしまゝ、訪たづねて杖をとりてまみえける。我眼力伯樂ならねば、騏驚のわかちは知らざれども、威儀いとけだかく、人あひ和原にして謙遜なれば、俗儒の意氣たくましく、口氣高ぶるにちがひ、心ならず慕はしくうやまはれて、暇の日はつねに傍に侍るといへども、心に問ふべ

中江藤樹文集目錄

れざるの襟懐を観るべく、書簡雜著は以て先生が諄々をしへて倦まざる懇到の態度を窺ふべし。

以上いづれも原本に據り、明かに誤謬と認むべきものの外は文字に改竄を加へず、難解の字句は欄外に標出して註釋を加へたり。此校訂につきては古賀友太氏を煩はしたる事尠なからず、特に記して謝意を表す。

大正三年一月　　校訂者　武笠三

藤樹先生書簡雜著これ也。蓋し先生の述作二十餘部の中に就きて、專門學者以外の人士にも興味あり裨益あるべきものを擇びたる也。翁問答は藤樹三十四歳、卽ち僅かに指を王學に染めたる時の作にして、其意專ら、文學なき者の爲に惑を辨へ德に入るの道を說くにあり。後屢改竄を施ししかば、諸本頗る異同ありしものの如し。本書收むる所は、「改正」と標記せる晩出の物にして、卷尾に、改訂の次第を細錄せり。鑑草は、明の顏茂猷の迪吉錄を抄譯して之に評語を加へたるもの、原書に牽かれて輪廻應報の佛說に捕はれたる所なきに非ざれども、當時にありては蓋し絕好の女訓たりしなるべし。藤樹先生精言、文武問答の二書は、後學の士の先生の言を記して以て學者修養の資と爲したるもの、遺稿は以 先生が造次顚沛も道と相離

緒言

近江聖人中江藤樹先生の、學德兼備の眞儒にして、其天下後世に及ぼせる感化の深大なること、我邦陽明學の鼻祖たること等は夙に人々の爛熟せる所、今特に絮說するを要せざるべし。藤樹幼にして始めて大學を讀み、「自天子以至於庶人、一是皆以修身爲本」に至り、嘆じて曰く、「幸なる哉此經の存せること。聖人豈學んで至る可らざらん乎」と。是より發憤勵精、四十年の短生涯を以て、終によく當初の志を成せり。藤樹もと程朱の學を奉じたりしが、三十三歲の時、偶王龍溪語錄を讀みて感發する所あり、遂に全く陽明を信奉して、我邦王學の開祖たるに至れりといふ。

本書收むる所都て六部、翁問答、鑑草、藤樹先生精言、文武問答、藤樹先生遺稿、

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

中江藤樹文集

全

